女子文壇

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

明治四十三年三月廿五日印刷納本（毎月一回廿五日印刷納本）



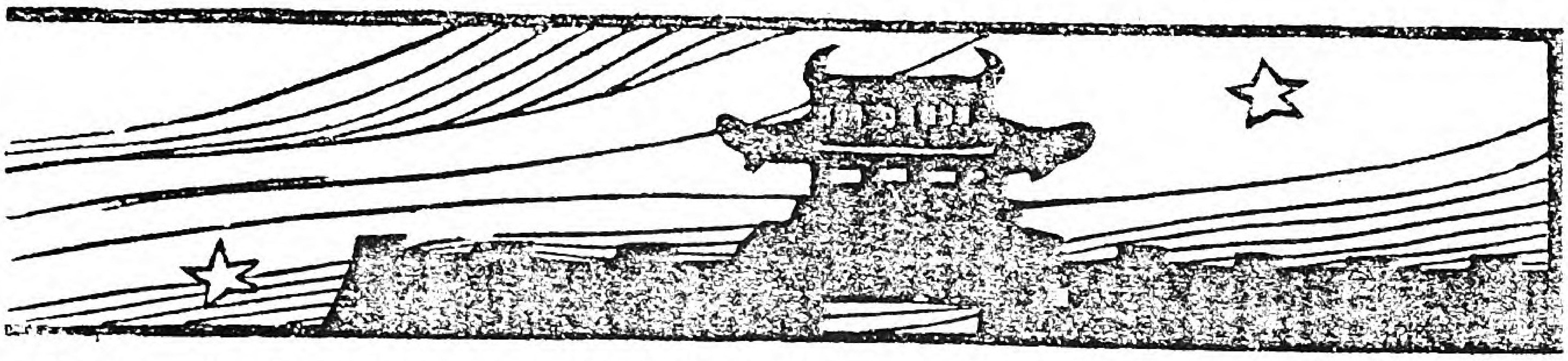
婦人一生中に最も心配なる事實

〔政治上實業上に外交の繁き良夫を持つ夫人と日々數多の嫖客に接する婦人は殊更注意せよ恐るべき難産と流産と不姙症は必ず來るべし〕

婦人は身體の構造上梅毒痳病に對し病毒の發源地となりて他に感染せしめ又病毒の蕃殖地となりて自己の腟子宮を害し血の道、癪に苦むは婦人の持病と諦め腰より脚部へ冷る如く感ぜば婦人は冷え込む天性と自覺して帶下、白帶下、赤帶下の悩むも冷込と速斷し他人の擧兒を羨むと共に我が子寶なきを嘆きながら之も例の冷込みと誤信して見當違の暖め藥等を內用する故遂に永引は畢竟誤療の結果と知るべし元來婦人の生殖器は天然的受身に構造せられ即ち人類の田畑なれば病菌の蕃殖するは當前にて結婚の機會に病毒侵入し其田畑を荒すゆゑ子宮血の道に悩み倍々荒せば荒す程其肉落ち身體の窶れるは實際悪き土地の田畑に滿足の農産なき道理なり婦人科學上婦人病の療法は局部の治癒を第一義とし局處の外用する藥劑の要求は益急を告るに至る余は藥劑師にて衛生の天職上豈に傍觀するに忍びず積年苦心慘憺研究の末方今婦人科學の泰斗として臨床上實地の練達一世を壓する獨逸伯林のブロインド博士の研究と其實驗に成る處方に則る藥液をして直接に婦人の局處に作用すると同時に吸收せられて其藥効を發揮すべく可要球(坐藥にて內用藥にあらず)を調劑し幾多の婦人科醫に之が實驗を請めたるに子宮內膜炎にて下腹痛み常に帶下ありて白帶下又赤帶下に苦み腰より下腹へ筋張り更に胸先きへ差込み。子宮糜爛して痛み。子宮出血して褌を汚染し。厭な處に悪臭ありて他に嫌れ又は燃え立つ搔痒を起し搔ば痛む症。月經時の疼痛と月經過多に悩み或は痳毒性子宮病等の諸症に用ゆれば何れも其効力神速にして驚ろくべき顯著なりとの賞賛を受たり『可要球』は最新の學理に適合し最も親切なる良劑にて恰も田畑に完全の肥料を與ふる如き直接に其藥効を顯すを以て婦人の姙娠すべき局所と田畑の道理を思ひ彼是と迷ふ事なく殊に婦人病には必ず「可要球」を外用して速に根治し給ふべし尚病毒の疑ある婦人は速に唯一丸を內用せば拭ふが如く其病毒を去り面白き程治癒す故に良夫あれば相互に其病毒を驅除する事を忘るべからず

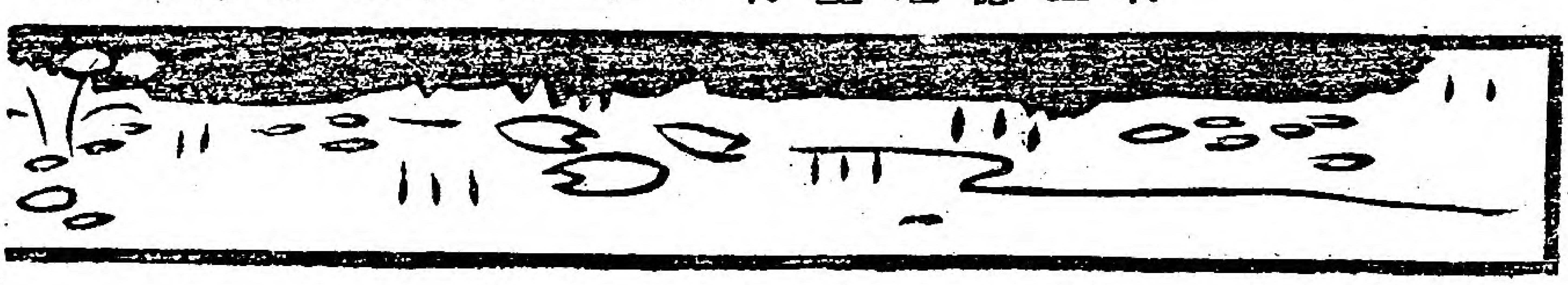
「可要球」定價三球入貳拾錢、八球入五拾錢、十八球入壹圓、四十球入貳圓。「唯一丸」定價三日分四拾錢、七日分八拾錢、十四日分壹圓五拾錢、三十日分參圓(いづれも內地遞送無料)

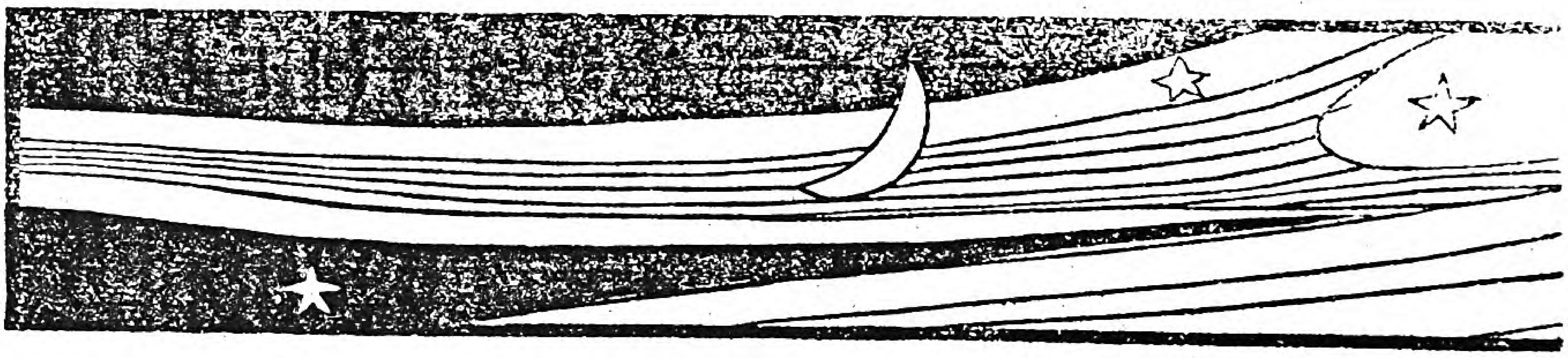
東京市本郷區湯島天神表門中坂上
發行所 藥劑師 中西莊吉
振替貯金東京口座(千五百番)

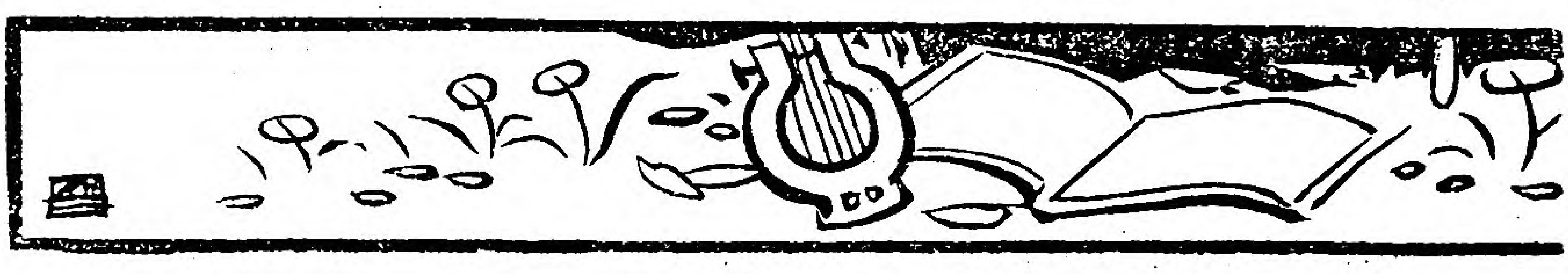


女子文壇 四月號（六年五號）目次

【本欄】（一―四四）







森



（大江原色版製版印刷）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



江戸川の櫻



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

肉體色白新劑

本劑は近世佛國ハリス氏が紳淑女間に最新流行の發明に
して如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體に**純白色**に
變化し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚
くべき效果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏效なき人は
速に本劑を試よ眼前に峻烈なる特效を覺ゆ眞に奇效顯著の美容新劑價並
製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる慢性梅毒瘀毒リウマチス皮膚病、猛惡等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇效顯著の內服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無效に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏效頗る迅速確實なり(今回英國より輸入一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏效頗る迅速確實なり

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

色白特效 ペーアス石鹼

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特效の一二を揭げんに**皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹼獨特の靈效なり且つ此石鹼は香氣を頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉石混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を乞ふ)

以上六種 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

有效保險 前代未發 秘傳奇術

全壹册正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(日錄汲要)神經衰弱の新療法●陰萎病を必治する新法●陰〇の爛れを治
大る●●消渇を必治する法●頑癬ノ必治法●人造麝香の製法●上等香水
す法法香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治
製製法●髪の脱落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髪
薬生●●臭汗治法●白髪を染る法●髪毛の光澤を美にする新薬●齒磨粉
必法●西洋梳油製造新法●にきび即治法●ほくろを落す法●ビットル酒
製法を夏日室内を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●
製瓜長一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●
白年海壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中
百り答の底を見る法●百日眠らず體疲へざる法●拔毛劑新法●寢入たる
よにずへしむる法●禿頭病必治法●寢入りたる男女の心中を知る法●白
者まを即治法●五十の鬚婆を二八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪
な化す見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見
變はか神術●女に〇れらるゝ薬法●硬き毛髪を柔軟にする法●思ふ女を
顯〇必す薬法●堅き女の氣を〇〇す薬法●除〇を長大にする薬法●そば
〇す〇治法●女を〇しにて泣す神薬●夢に戀人と語る秘術●見染し女を
かに薬れる神法●待人来る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を
手する●法●閨中の秘薬●即座に男精を増す法●毒蟲に蟄れたる時歷ぬ
治効薬催避食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘
特即ち制眠術●顏亦く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多
法を抑孕する秘法●色慾なき女に情を〇せしむる法●記臆力を増進する
情●女術みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黒字夜
法の奇●●老人終身鬚取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする内服
光新法脹贅丹の薬法●腹痛速治法●痳癬病の薬法●生たる鯉を遠國へ送
劑法●直瞞を治する法●黄疽を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じ
るるをるす法●痳病の治法●月經の不順を治する法●痳氣の妙劑●齒痛
た治す●法●陰部の臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る
を新法法頭髪を長くする法●毛生薬の最新法●梅毒必治の新法●便毒必
最の新中●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の
治薬●●風豫防の新法●凍瘡ノ妙法●衣服に酒のしみたるを洗はずして
新す法●火傷即治の秘法●シャクリ即治法●聲を能くする新術●白髪を豫
落新法法土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●寢小便を治する秘法●頭瘡を
防する●●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳の出
治妙薬目陰部の諸疥治する法●疣列拉病瘰治脇易法●梅毒豫防の奇法●
るふ時をな覺す法●年齢により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體
思の色白くし且つ艶美ならしむる法●苺酒を製造する法●富を造るの秘
法●一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●盤の汚染を落
す新法●新しき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顔術新法●衣服に油の付た
るを落す良法▲以下數拾法略す(合計壹百四十法あり)着金即刻送本す

專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 **日新館商店**

女子文壇讀者諸子の姉さんにお讀みになるやう勧めて戴きたい！

四月一日發行の

第十巻第五號



どんな事が書いてありませう？

こんなことが書いてある

▲男十萬に女七千の新世界（米國理學士・岡澤鹽子）▼媛の爲めに選ぶ縁談（阿部藥藏氏夫人）▼天才肌の風樣（片山博士夫人）▼卒業前の女學生（上原綾子）▼雜記帳（與謝野晶子）▼家庭敎師の利益と害（某敎育家）▼春の花の畏れる趣味（物集梧水）▼十人の子女を丈夫に育てた私の實驗（弘田博士夫人）▼六人の妻を離別したる工學士に嫁ぎし最後の妻の告白（一無名女）▼三人の子女を遺して夫に先立たれし七年間の悲しき奮闘歷史（蟹江博士夫人）▼花の墨田川（高野聖）▼スヰートホーム（金子百合子）▼色々に工夫して一家を樂しくした經驗（鳩山博士夫人）▼煮賣店女中の生活（一記者）▼九州一の大都會（白縫女）▼我家の園藝（花守）▼寄宿舍の炊事日記（露子）▼北海道の山里（龍子）▼京都女の社會觀察（都の錦）▼流球の奇風俗（沖繩女）▼笥料理（桑原東涙女）▼盆山と盆石（捻華庵主人）▼美人の化粧は如何にすべきか（日向代議士夫人）▼産婦の心得べきさまぐの事柄（産婆西尾京子）▼乳呑兒を抱へて良人に訣れし妻の苦心（曾我部常子）

その體裁は洋裝菊判紙數二百八頁石版寫眞口繪は大に振つたものである

その價は僅かに一冊廿錢郵稅二錢である

發行元 東京日本橋本町三丁目 博文館

伏見宮博恭王妃經子殿下



名門の令嬢



子爵松平賴和氏令嬢信子
（學習院女學部卒業）



子爵京極高備氏令嬢萬喜子

梅毒根治新劑

本劑（藥名ドクトル）は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一ばい毒根治特効の新藥なり故に徵毒及徵毒に關聯して續發する諸症（即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。疳毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等）ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**することと確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絶し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

生殖機病特効新劑‥‥（獨逸新輸入藥）

内服 ヨヒンビン

拾錠入壹劑
藥價送料共壹圓九拾錢
郵券貳割增

本劑は獨逸國伯林大學教授博士スピーゲル氏の發見に係る男女**生殖機不能**即ち**陰萎病。腎虛。神經衰弱**遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖虛弱。生殖機能障害。早老者。精液精蟲缺乏。不姙娠。冷症。發育不全等に用ひ天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力を增進**し生殖器を强健ならしめんと望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**世にありふれたる無効賣藥と同一視することとなかれ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑（藥名ヨードチリン錠）は學理實驗に徵したる現世紀唯一の發明中症て血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれは無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢
貳劑分六圓廿錢特別製分
九圓廿錢着金即刻送藥す

世界唯一 麻病消渇の根治新藥

麻滅（りんめつ）

麻滅は最も進歩したる最新の麻病消渇即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**麻病消渇**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし新藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ

藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢
郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 全治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦腦を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徵したる世界無比の毛髮速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はつぼうはげの痕、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮蒼々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

特別製分 金五圓三拾錢
大瓶貳圓卅錢
中瓶壹圓廿錢

以上六藥**専賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**（電話下谷五四六番）

名士の令孃



紳商米井源次郎氏令孃清子
（學習院女學部卒業專修科在學）



工學博士渡邊嘉一氏令孃晴江子
（學習院女學部在學中）

對照



紐育領事補官青木新太氏夫人幸子



朝吹英二氏令息常吉氏夫人磯子

（に ノ 四）

（にノ五）

竹久夢二著

夢二畫集

春の巻 五版　定價五十錢　送料八錢

夏の巻 近刊　定價五十錢　送料八錢

花の巻 近刊　（定價送料未定）

『門』といふ小説の主人公は『今』といふ字を忘れた妻君に聞くと『人』の下に『テ』の字を書くのだと教へられた。然れども、それが『今』といふ字に思へない。とあつた。

『藝術は誇張にあり』とロダンといふ人が言つたそうだ。

『藝術は忘却にあり』と言つて見て『はどうだろう。

長途の旅を終へ、久し振りに新橋へ帰りついて、花死斯や、アークラムプの明るい銀坐街頭に立つた時、忘れられた都會の印象は、どんなにフレッシユな感傷を疲れたる旅人に與へたらう。

あゝ、僕は、すべてに別れたい、すべてを忘れたい、そして見それたるすべてに初見の如くに逢ひたいと思ふ。

『春の巻』は、その旅の前に書きあつめたもの

『夏の巻』は、この旅の後に書いたのだ

『花の巻』は、自然主義に反意があつて書いたのではない、たゞ幼稚なセンチメンタルな戀のメモリーに過ぎぬ。——夢二——

發行所　東京麹町區麹町二ノ二　洛陽堂

名門の夫人



子爵大給近孝氏夫人



男爵波多野敬直氏夫人

和裝と洋裝



東洋汽船會社支配人 白石元次郎氏夫人萬子



法學博士江木衷氏夫人榮子

◀本誌は現代詩歌壇の一大王士也▶

毎月一回一日
四六倍九十頁
本號特價
貳拾錢

創作

三月一日第壹號發行好評再版殘本僅少あり

定價十五錢
送費一錢

四月一日發行二號要目

短歌

尾上柴舟　與謝野寛　吉井勇　土岐哀果　田波御白　武山英子　寺本みち子　三津木貞子　前田夕暮　若山牧水

◎最近詩壇　北原白秋

△ボードレール研究（第一）

◎最近歌壇　HHH

瀕死（小說）　田中民三

濱へ（小說）　秋田雨雀

ツルゲーネフの散文詩を論ず　仲田勝之助

情調藝術の由來　森川葵村

創作社詠草　七百七十首

長詩

北原白秋　蘆谷蘆村　森川葵村　三富朽葉

散文詩

河井醉茗　佐藤緑葉　福永挽歌　永代靜雄　前田夕暮

◎地方歌壇　SSS

岩野泡鳴　土岐哀果

蒲原有明　永代靜雄

◎收穫合評　創作同人

短歌

近藤元　尾崎楓水　山田くに子　白島野石　岩淵蘆江　高瀨溪水　三浦曉村

赤野伴二　富田碎花　吉川多美子　細谷澪標　野島芳翠　花岡桃崖　西內白穗

短歌評釋　尾上柴舟、水野葉舟、

詩集の印象　前田夕暮　若山牧水

同人喝語　諸家

其他

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目十　電本一六一三九振替東京五六一四　東雲堂書店

鳩山家の新夫人



法學士鳩山一郎氏夫人薫子

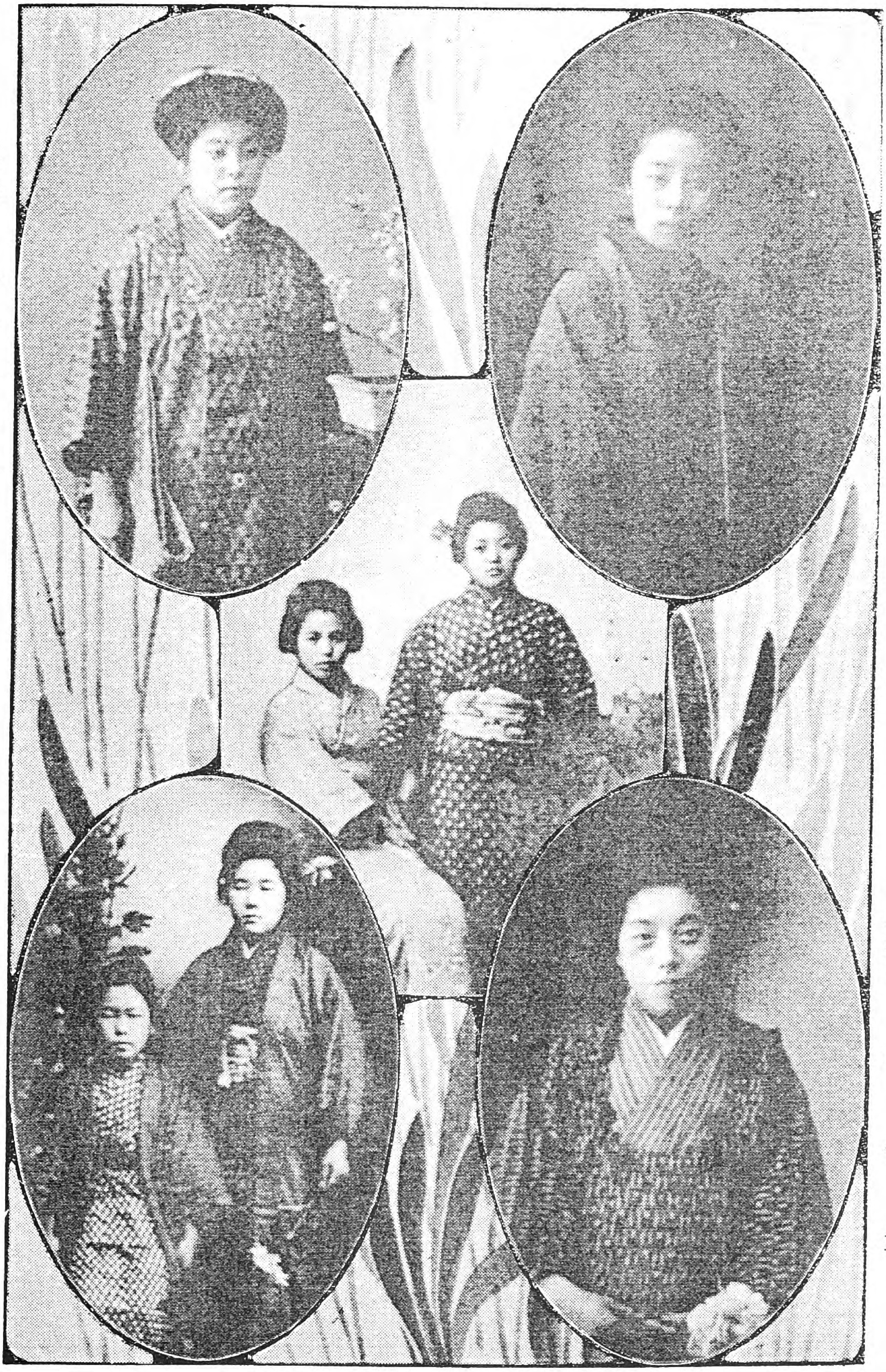


男爵菊池大麓氏令嬢千代子
(鳩山博士二男秀夫氏の夫人に婚約成る)

誌友

（丹後）吉田せき子

（函館）谷内ふさ子



（神奈川）倉持美音子と其妹

（京都）田舎娘

（直江津）木島磯巾着、池原磯千鳥

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



◎るいれき患者に注意す

▲瘰癧は古來難症中の難症で本病の治術としては先づ局所切開するのが通例です併し根治の療法とはいへない假令一時は治しても十中の八九は必らず再發します加之頸部には最も醜態なる瘢根を殘し之が爲め往々婦女子の婚嫁を妨ぐることあるは實に氣の毒千萬の次第であります此病毒は單に容貌を損ずるばかりでなく漸次進んで體內樞要の臟器を侵し終に生命まで奪はるるに至ることも亦往々見聞する事實で此病の恐るべきは申迄もないが今日迄確に治す藥がなかつたのであり升

▲發見の新藥　金線草丁幾は此病に對し不思議の効能あり即ち小なるグリグリは內部より消散し大なるものは自開排膿して根切全治せしむるのみならず連續服用中全然體質改良健全ならしむる獨得の効力あり

▲本藥は石津藥學博士及內務省衛生試驗所の試驗を經たるものにして其効能の確實なるは實驗せる醫師並に服用患者の證明に依り明かなる次第でありますす此の實驗を掲げたる八十頁の說明書「金線草私言」を無代にて送呈す　東京日本橋本銀町四丁目東光堂　三田幸藏

▲本藥の價は四百五十瓦入參圓、二百廿五瓦入壹圓五十錢（送費拾貳錢）

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし

三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀　河村愛子



◉診察時間朝七時より夜九時迄◉あざほ黑こぶいぼ

梅毒りんぢ疾わかき生殖器病神經衰弱症

東京　淺草瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場黃兩國橋より三丁

中央醫院

生殖器病神經衰弱　記臆力減衰陰萎遺精早漏夢精發育不充分症等

梅毒　横根下疳　りん病　わかきぢ　皮膚諸病

▲各自病狀を記し郵便切手六錢を封送せば其病症を速に全治せしめ得る特効新藥の說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八淺草橋通瓦町電車停留場横

中央藥院

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大好評　紀念保存の價値あり　増刷出來

女子文壇　紀念號　満五週年

一月一日發行　例號二倍　三百廿頁　本號限り　定價三拾錢　郵税貳錢五厘

▲松の葉……泉鏡花
▲敵地……中村星湖
▲市街を散歩する人の心持……木下杢太郎
▲脚本　落潮……河井醉茗

◎額繪　温室（石川寅治筆）（石版極彩色）　妙齡の一美人、温室の戸を開いて草花を剪る所、其表情の嬌艶と色彩の鮮美とは一見して恍惚たらしむ、新春無類の粧飾。

◎附録　口繪　光澤紙刷　◎名書雪みち（原色版）外◎山階宮、東伏見宮兩妃殿下◎閑院宮司公爵松平伯爵兩夫人◎德川家達公三令孃◎一條實孝公夫人◎加藤弘之男家庭◎金子子爵令孃◎跡見玉枝女史と其門下◎仲小路遞信次官の室外和樂◎盛裝の六孃◎誌友面影◎鳥海山外二景の十四頁（寫眞）

釣……森鷗外
演劇の種類……坪内逍遙
女性の文藝……片上天弦
Ｔ氏とＫ氏……眞山青果
月のたまもの……蒲原有明
響動……吉江孤雁
三味線林……小島鳥水
赤色……兒玉花外
金ほうけ……與謝野晶子
落葉林……若山牧水
憂愁の庭……三木露風
薄暮の瞳……川路柳虹
黄落集……前田夕暮
女學生と小說……柳川春葉
御題と御歌所……松原良文
弱者……溝口白羊
歐米の若き婦人……寺木定芳
婦人の寂淸生活……木下尚江

文士と家庭……佐野天聲
花束の用ゐ方……國木田治子
男性の爲に與へられたる刺戟……水野葉舟
露西亞婦人の過激なる活動……五人女（エリミヤ、バルト、ベザン）

名流婦人の日記
○跡見花蹊○山脇房子○加藤照麿夫人○石川博士夫人○嘉悦孝子○羽仁もと子○佐々木雪子○長谷川千代子○北川美那子○加納國子○谷内せい子○木下良子○吉川賢子○たけ子○千鳥○棚橋絢子

形式的の艶書……マックスオレール
表情體操……白井規矩郎
女性と色彩の觀念……澤村胡夷
お琴の先生と其流派……さき
英文……星野久成

投稿傑作　百四十頁　滿載

東京京橋大鋸町　女子文壇社發行　（振替口座東京壹七九貳）
賣捌　全國雜誌書店
若し品切の時は發行元へ速に御注文あれ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

會員募集

會長 帝國大學名譽教授文學博士 重野安繹

書翰文練習講義錄

◎どんなに手紙のかけない人でも美事にかける樣になります!!!

▲文學士 大町桂月 ▲文學士 鹽井雨江 ▲本橋講師 ▲文學士 久保天隨

▲文學士 內海月枝 ▲講師 前田木城 ▲大畑講師 ▲講師 稻川雲谿 外數名

懸賞募集 特等金廿圓 以下各種 評點六十以上悉く進呈

添削無料 ―本會々員に限り雜誌『筆の香』無料進呈(毎月一回)― 講義錄 毎月二回發行 十ヶ月卒業

講義錄 見本は會則 無代進呈

東京本鄉區根津宮永町三五
振替口座東京一九八三〇番

日本書翰學會

秀才文壇春季大增刊

陽春號

四月八日發刊 例號二倍 定價廿錢 郵稅一錢

本誌曩に『處女作號』を出して、新作家を紹介し、些か文壇に貢献する處ありしが、今また茲に陽春四月を期して『陽春號』を發行し、普く文壇の諸方面より實力ある新作家を撰拔し、各自その自信ある新作を發表して、文壇に問はんとす。本年は或は都市に或は地方に、多年蘊蓄修養怠らざりし、實力ある新作家が一擧して中央文壇に迫らんとするの歲なり。本誌は特に是等作家の爲めに悉く全紙を開放して吝むことなからんとす。願くば、本誌が紹介する新作家をして現文壇に飛躍せしめよ。

東京神田旅籠町一丁目
文光堂發兌

好評嘖々

女子文壇增刊 殘部僅少

若き婦人

(要目)◎夜の淺草公園◎二十才の聲◎デヤレスト◎富士裾野の外國人の夏期生活◎樂に受けた檢定試驗◎肺病に罹りし實驗談◎子爵家に乳母を世話す◎獨身の私が媒妁をした記◎秘密の夏◎若き夫と生活の苦痛を味ふ◎時代に覺まされたる一人◎お才さん◎若い女其他

(小說)◎隣の人◎歸途◎繼母◎汽車の音

定價貳拾錢 郵稅一錢五厘

東京市京橋區大鋸町
女子文壇社發行
(振替貯金口座壹七貳九番)

見落す勿れ

▲女子文壇第二增刊

都會婦人



五月十五日 發刊

▲▲定價金貳拾錢 郵稅壹錢五厘

都會の思想界は溢るゝ泉の如く、都會の婦人界は燃ゆる花に似たり、眩ゆき都會、動ける都會、生ける都會を縱橫に觀察し、最も**新しき眼を以て描寫し來るもの**は「**都會の婦人**」**號の特色**にして、從來有りふれたる東京案内的の冊子とは全然面目を異にし、**興味を中心とせる一部の最新東京印象記**を讀者の前に**提供**せんと欲するものなり。

東京市京橋大鋸町 **女子文壇社發行** （振替口座壹七貳九）



女子文壇

第六年第五號

明治四十三年四月一日發行

春雨や人住みて煙壁を洩る
指南車を胡地に引去る霞かな
　　　　蕪村

咲くからに見るからに花の散るからに
春風や三保の松原清見寺
　　　　鬼貫

川の香のほのかに東風の渡りけり
逢見しは女の賊やおぼろ月
　　　　太祇

簾に入て美人に馴る丶燕かな
うまず女の雛かしづくぞ哀なる
　　　　嵐雪

山路きて何やらゆかし菫草
命ふたつの中に生きたる櫻かな
　　　　芭蕉

ツルゲーネフの女性觀

文學士　片山孤村

ツルゲーネフの散文詩に『雀』と云ふのがある。其大意は、或日ツルゲーネフが犬を連れて獵から歸つたとき、庭の並樹の下に巣から落ちた一羽の雀の雛が身動きも得せず倒れてゐるのを見た。犬がのそ〳〵と其方に近づくと、突然傍の樹から老いた親雀が投げた石のやうに犬の鼻先に飛び下り、羽を逆立て、鋭い絶望の叫をあげて、二三度大きく開いた犬の口を目がけて跳び付いたが、終に恐怖のために氣死した。雀は雛の爲めに身を犧牲に供したのである。『犬は雀の眼には巨大な怪物と思はれたに違ひ無い。それにも係はらず子の爲めには樹の枝から傍觀してゐることは出來なかつた。雀はその意志よりも強い或る一種の力に動かされたのである。……笑ひ事では無い、私は實際此の勇敢なる小鳥に對して、その熱烈なる愛の發露に對して畏敬の念を禁ずることが出來なかつた。私は考へた、愛は實に死よりも、死の恐怖よりも強い、たゞ愛に依りてのみ生命を維持せられ、活動せしめられると。』

この散文詩はツルゲーネフが戀愛觀の縮圖と云つても差間は無い。ツルゲーネフの考に依ると戀愛は人間以上の或る猛烈なる魔力であつて、幸福と云ふ餌を懸けて人間を釣り寄せながら、その幸福を人間に呉れたとは無い。適に呉れることもあるが、呉れたかと思ふと直ぐ取り返す。慈悲も情もあつたものでは無い。たゞ弱い人間をおびき寄せ、突き退け、こづき廻し、その苦しむ所を見て嘲笑ふ惡魔である。一旦怖ろしい戀愛の爪牙に懸つた人は、唯ぢつと辛抱したり、諦めたりするより外に仕方はない。藻搔けば藻搔くほど身の破滅に近づくばかりである。實際ツルゲーネフが其小説

中に描いた戀愛のうちで、殆んど一つとして滿足な結着、即ち結婚や家庭の創立に達したものはない。その主人公は大抵失戀の結果斷念に終る薄命の美人才子ばかりである。これはツルゲーネフの小說を讀むものゝ心を駭かす著しい特徵である。彼れの傑作『フアウスト』の中にかう云ふ語がある。『人生は戲でもなく、遊でもない。人生はまた樂でもない……人生は苦しい仕事である。諦め、斷へざる諦め、これが人生の秘密な意味、謎のことばである。この厭世觀は實にツルゲーネフの血肉となつてゐるので、彼れの描いた戀愛の多くが悲劇的に終るのも固よりである。これより二三の著しい例證を以て之を說明する。

『ペトゥシュコフ』と云ふ小說の主人公は題名と同じ名の一士官であるが、或る田舍町に同僚と交際するとも無く、其娛樂に與るともなく、極く固氣に暮してゐたが、或る時突然、愚かな浮氣なパン屋の娘に惚れて、每日その娘と叔母の家に入り浸り、痴話喧嘩や悋氣で娘を苦めてゐたが、終には愛想を盡される。士官は惚れた女に嫌はれて絕望の餘り飮酒に耽つて僅に悶々の情を慰めてゐたが、パン屋の娘もさすがに氣の毒になり、他の男と結婚して後もその家に出入することを許す。すると士官は大喜びて女の家の茶の間とも云ふべき所へ座込み、煙草を吹かしたり酒を飮んだりして其の日〳〵を暮す白痴同樣の男になつてしまふ。之れは戀愛の爲めに堂々たる男子が理性も恥も外聞もなくなる一例である。

『書簡』(一八五四)にも類似の趣向が述べてある。マリア・アレキサンドロフナと云ふ女が廿六歲の時約婚の男に棄てられる。マリアは哲學を研究して慰安を求めてゐたが、不圖した緣で或る立派な青年と書簡の交換をすることになる。マリアはこの青年をこよなき親友と信じて未來を樂んでゐたところ、此の青年は突然或る下等な舞妓に懸想して墮落し放蕩の結果夭死をした。死ぬる暫く前にマリアに與へた書簡にツルゲーネフの戀愛觀を見るに足る重要な文字があるから、大部分を譯出して見やう。

『我々が書面や口頭で戀愛の本性について論じ合つたとや、穿つたやうなことを臆面なく述べ合つたとを、貴女は覺えていらつしやいますか。所が實際に當つて見ると、眞の戀は我々が想像したものとは似も付かぬ感情であると云ふとが解りました。戀は元來感情では無くて病氣であります、身體精神の特殊の狀態であります。さうして段々に發展するものでは無くて、存在してゐるものです。さうして何時も同じ姿で現れるものでは有りませんが、その存在は疑を容れぬ事實で、これと隱連坊をする譯にはまゐりません。戀は通常頼みもしないに、突然、然諾なしに、丁度虎列拉か熱病のやうに人間を襲ひます、襲はれた人は命も危いとがあります。………戀は熊鷹が鷄の雛をつかむやうに犧牲となつた人間を引つ摑んで行き度いところへゆきます。………人間はどんなに逆つたつて駄目です。……戀には平等と云ふとは有りません。二人の靈魂の自由なる合一とか、ドイツの大學の先生たちが暇に饜かせて考出した其他の抽象物の自由なる合一とか云ふとは有りません。實に戀に於ては一人が奴隷で一人が主人です。よく詩人が戀の首械と云ひますが誠に其の通りです。戀は首械です、而もこれ程重い首械は有りません。少くとも私だけは斯う云ふ確信を得たのです、而も經驗に依つてです。私は彼の女の奴隷として死ぬるのですから、この確信を命と云ふ代價を拂つて買つた譯になるのです。』

『餘計な男の日記』の主人公は一生運命から繼子扱ひにされた男であるが、最後に或る無垢な女を見染めてすでに其の愛を得んばかりに漕付けると、公爵何某と云ふ自分とは身分が提灯と釣鐘ほども違ふ競爭者が現はれて、何の苦もなく戀人を奪ひ取る。男は憤怨の餘り公爵と決鬪をして負傷をさせる。鷹揚な公爵は武士の情を以て弱敵を赦す。赦された男は益々肩身が狹くなり、剩へ事を荒てたかどて、女には益々愛想をつかされる。餘計な男は益々餘計な人間になつてしまふ。

『薄命女』の主人公スサンナ・イワノフナはロシアの或る貴族と或る猶太女との私生兒である。これがすて

に生涯の大不幸であるのに、はじめての戀人には死別れ、第二の戀人には棄てられ、戀の敵を哭ひながら自殺する。この小說はツルゲーネフの傑作の一つで、スサンナの姿は活けるが如くに描かれてある。前に述べた『ファウスト』（一八五五）の主人公ヱラ・ニコライヱフナはもと嚴格な敎育を受けた貞淑の女性であつたがゲーテの『ファウスト』を讀んで人生と戀の歡樂を知り邪道に迷はんとして良心の苛責に堪へず終に入水し、『アッシア』（一八五七）の戀人は意思の弱い爲めに女に見離され慚愧と後悔に慘な一生を暮し、『貴族の巢』（一八五八）のフェドール・イワノヰッチは正直で思慮の深い立派な男であるが不貞な妻のためにこれも亦詫しい一生を暮す。若しそれ實父の爲めにわが戀人を奪はれたる『初戀』（一八六〇）の少年が失戀の苦悶に至つては實に言語の外である。最後に、淫婦に迷はされ、後弊履の如くに棄てられたるサーニンの末路を小說『春潮』（一八七二）より譯出して此文を結ばう。

『……次は歸國、寂しい、毒を含んだ生活、下らない心配、價値のない活動、苦しい無益な後悔と忘却、形は定つてゐないが、絕間のない、永劫の罰——重くは無いが、癒える望が無い病氣のやうな罰一錢づゝ濟し崩される數百萬圓の大借財……』（『春潮』四十三節）

ツルゲーネフを無解決の詩人と名づけたのは誰だらう？

▲接吻　獨逸の古諺にも『花の唇にキスせよ。躊躇すると、荒らくて冷たくなるから』とあり又佛蘭西人も『速く彼女に接吻せよ今直ぐに、彼女の唇は年一年温か味と元氣とを失つて冷えるから』と云ふて居る、有名なる伊太利の學者マンテガザ曰く、女の接吻は受動的のもので他に接吻するよりもせられる方を好むものであると、女の接吻は實に心の有り丈を盡すものである。男が公衆の前で婦人に接吻するのは殘酷の極みである、又た昔から婦人同士では（親子は知らず）心から打ち解けて接吻する事は出來ないもので、何故に神は異性間には甘い接吻と云ふ惠を與へて婦人同士の接吻を苦がくしたものであらうか、昔からの有名な人々の接吻に關する諸說を綜合して見ると憶うてある『若かき人々よ御身達は父の慈愛深き接吻をも受けた、將た戀人の甘き接吻、妻の、姉妹の、或は子供等の數知れぬ接吻を受け取つたてあらうが、其中で孰れが最も深强なる印象を止めたか、答は恐らく次の如くであらう曰く『吾母の接吻！』

『煤烟』の批評

文學士　生田長江

「煤煙」に就ては、所謂事實と作物との兩面に渡つて、深い興味を持つても居るし、又是迄之に關して考へて居た事も少なからずあるので、短い時間の間に、之に對する批評と言ふものをまとめる事が却つて困難てある。なほ此後機會が有つたら今少し精細に研究をもして發表したいと思ふから、今日はたゞ順序の立たぬ斷片的の感想位で御免こうむつておく。

私の見る所では近頃の所謂自然主義の小説なるものは、十中の八九まで尋常茶飯事の外に出ないのてある。

ドストイエウヰスキーの「罪と罰」を眞似たとか、ゴングールの印象的描寫を眞似たとか言つても、或はイブセン張のものを書くとか、ゴルキー式のものを書くとか云つても、ほんの外形を模倣するだけで、取扱ふ所の材料に重味がない、それに現れる所の感情に強さが足りない、どうしても淡々しい微温湯のやうな手ごたへのないものに成つてしまふのが常である樣に思ふ。

かくの如き小説界の傾向に對して、「煤煙」の取扱ふ所は、先づ第一に尋常茶飯の事でない。其點に於て私は如何なる人も先づ一應の注意を拂はなければ成らないと思ふ。

「煤煙」の作者は何等の僞る所なく事實を描いたとは言つて居るが、然し嚴密に事實ありのまゝを描くと云ふ事は誰にした所で出來ない事て、少くとも私の知る限りに於て、所謂「煤煙」の事實と、其作物との間には、多少の間隔がある。殊に誇張、誇大が應々にして見出される樣に思ふ。

然しそれを作者の怯懦なる爲に、社會上の利益から打算して、所謂自己辯護をしたものと見るのは間違つて居る。誇張誇大は事實をより多く藝術的にせんが

爲の誇張誇大である、それだから或る場合には、主人公要吉なるものを、實際よりも、より多く意氣地の無い人としたり、より多くみえぼうとしたり、より多く愚痴つぽい男としてある所もある樣に思はれる。强て云へば僞惡は有るかも知れないが、僞善は殆ど無い樣に思ふ。

私は此間の消息を最もよく知れるものゝ一人として文壇に對し又一般社會に對して特に辯じておきたいと思ふ。

「煤煙」は主人公を第三者として描いてある。然し乍ら私は『私は』と書いた方が讀ものとしては却つて好都合で有つたかと思ふ、之はダヌンチオの「死の勝利」を讀んだ時にも同樣に思つた所である。

小宮豐隆君が「ホトヽギス」誌上に於て、「死の勝利」と批較をして居たが「死の勝利」と「煤煙」との間には餘程の類似がある。もつと適切に言へばダヌンチオと云ふ作家と、森田草平と云ふ作家との間には、よほど類似して居る點がたしかにある。作物の中心點となるべき所謂主人公の立ち場に立つて專ら觀察をすると云ふ行き方、從つて描寫よりも感想を重んずると言ふ行き方、從つて抒情的に成ると云ふ傾向は、たしかに双方に共通して居る、又あくまで濃厚に、あくまで脂らつこくしつこく、一本道を衝き進んでゆくと云ふ點も、よほど似て居る。然し乍ら草平君の描くものはどうしても華やかなる點に於て、つや〳〵とした點に於て、よほどダヌンチオに及ばぬ所がある。ダヌンチオの血は燃ゆる樣な深紅の色に成る事があるけれど、草平君の血は眞黑く凍りついてゐる樣に思はれる。

その代り草平君の作物には談理が多い、單に多いのみならずダヌンチオよりか深く且鋭い、其點が即ち草平氏の單にダヌンチオに於て滿足せず北歐の深刻なる哲學を要求する所以であろう。

談理の事を言ふついでに漱石先生と草平君との双方をくらべて見るに、双方とも負けず劣らずの理屈やて殊に漱石先生の理屈は我々を啓發する所が常に多い、

けれども漱石先生の理屈は專ら分析的で、草平君のはむしろ綜合的である、そして學者としては漱石先生の理屈に感服するけれど、作家としては草平君の理屈の方が面白い樣に思ふ。

言ひ換れば一方は手品の種を明してしまう樣なもの一方は折々云ひ澱んで又口籠つて却つて思はせぶりが有る樣に思ふのである。

無闇に批較ばかりする樣だが。草平君の同門なる鈴木三重吉君と批較して見るに、鈴木君は何でも無い唯の雨が降つて居るのを見ても、作品の上には春さきの花を溶して流すやうな雨と書かなければ承知しない、其と同じ雨を森田君の耳に聞かせると、ぽたり〳〵と惡獸の血がしたゝる樣な雨と聞えるのである。

私はどちらも面白いと思ふ、言ひ換れば其一方にだけ滿足しては居られないのである。最後に今一つつまらぬ事をお話しするやうだが、只今私が飜譯してゐる所のニイチエのツアラトウストラの中にこう言ふ言葉がある。

「純粹の男子と云ふものは二つのものを要求する曰く危險と遊戲」

此定義からゆけば「煤煙」の主人公たる要吉は必ずしも女性的とは言へない、婦人の方には或は不賛成をお唱へに成る方が有るかも知れないが、私共の見る所では、先づ一般に婦人の方は危險と遊戲とを要求しないのである。單に遊戲は要求するかも知れない、又親の爲兄弟のため或は戀人のために隨分危險を冒す事はある。然し乍らそれは必要のために冒す危險である、醉狂はどうしても男子のものである。と私共男子は勝手にきめてゐる。

私は要吉を以つて神聖の男子であると斷言したならば、作者たる草平君も驚くかも知れないが、然し私は其意味に於て、要吉を神聖の男子であると言ひたい。

私は何んにも要吉を豪いと云ふのではない、要吉よりか自分が豪いかも知れない、又要吉のやうに成ろうと思ふのではない、がとにかく要吉一流の性格、從つて露骨に言へば森田氏の如き性格を單に女性的である

とのみ言ひ切るのは極めて不贊成である。
も一つ最後に附加へて草平君の文章に對する短評を試みておきたい。習俗を打破したと云へば雜血兒の日本語みた樣な、子供の片言みた樣な、所謂自然派作家に共通の文章もそれに相違はないが、草平君の文章は極めて直譯臭味のない、而も亦同時に思ひ切つて習俗を打破した文章である。個性もきは立つて見える。單に新らしき文體文章として見ても「煤煙」は近來の注目すべき作物たるを失はぬ。

以上は「煤煙」並に「煤煙」の作家たる草平君を餘りに讚めすぎたかも知れない、或は或る點に於てあまりに缺點をひろひすぎたかも知れない、然しそれは私と言ふものと「煤煙」並びに草平君との間隔があまりに少ないから來る所の結果で、何んとも致し方がない、公平なる批評とは自分でも思つてゐない、どうか其つもりで讀んで頂きたいと思ふ。(談)

日は沈んだ(アルノー・ホルツ)

秋元蘆風

日は、沈んだ。
私は待つた。久しいこと……
　不明瞭に、
　しのび泣きのやう、
　柳の樹蔭に流が響いた。
暗を探つて私は、傍の、紅い草花に觸れて見た。
　花は萎れて居る。
汝は私を忘れたのだ!

我等の眼は(マキシミリアン・ダウテンデイ)

我等の眼は空しく、
我等の接吻は萎れて、
我等は泣いて、默つて、
我等の胸は最早打たない。
燕は海のほとりに群がつて居る、
燕は別れる、
彼等は復來る、
けれど、我等二人は最早決して。

故里

窪田空穗

ふる里よ戀ひて行くなるふる里よ祈らまほしう胸はあへぎつ

ふる里やかばかり深き愛着をつなぎつつ居るわれのあはれさ

味噌汁のわびしきにほひ幼くてここにありける日の浮び來つ

雪の日や遠く歸りて野のはてに見たる我が家の忘られかねつ

種こぼしこぼしつすれど百年を芽生えもせずて立ちたる槇よ

仰ぎ見る槇の老木の細りゆき盡くる梢やさみしみの湧く

面かげも描くよしなく忘られてこの家にいます代々のみ親よ

み親らがまつられいます家のうちの煤けし厨子よ見るにかなしき

夜來ればまづ石打ちて淸き火を取りつみ親の前にかかぐる

秋めきしこのたそがれや聲しぼりあな聲しぼり蟬鳴きやまぬ

夕闇や濕り帶びたる土の香のふる里の野をこめてただよふ

山照らし野を射る夏の日のうちに煤けて小さき我が家を見る

丸木もて家はつくりつその夕野に一つなる灯やともしけむ



心のはて（外一篇）

川路柳虹

心のはて

落葉は散る、胸に、
色褪めた唇に、
愛の去りゆく心に。

蒼白い額に曳く夕暮の光りは
蕭やかに心を林の中に包む。
枯れた樹立には鳥が冷く噪ぎ、
默れた想は冷かに夕日を眺める。

おゝ赤みざした日の面、
落ちてゆく紅い薔薇の面、
「過去」はしづかに鮮やかに、彼方の空に落ちて
ゆく。

目覺めた瞳のうちにはその微やかな落葉。
水たまりの落葉……
目覺めた瞳のみ明らかに、
暗い夢の中を輝く。

夜

夜よ、
汝の默つた瞳から、
魅られるやうな恐怖が突い立つ。

夜よ、
汝の寥しい懷から
堪へがたい歡樂が湧き出る。

夜よ、夜よ、
私は迷つてゐる。
夜よ、夜よ、
答へもない汝の胸には
あらゆる生命が囚はれてゐる。

脚本筋書『パステーユの囚人』

烏鵲生

此芝居はデューマの『鐵假面』を改作したもので、イントリエクに富んだ極く甘物であるが、ラインシャム座では大變に評判の宜かつたといふ事を "The Theatre" で皮肉のやうに紹介して居るから何んなものか御話しやう。こんなものが面白い、奇麗な芝居といふのであらう。

最初の舞台は、佛蘭西のシユームルの古い莊嚴な寺院の庭園である。この僧院はデルブレー僧正と云ふ老僧の監督の下にある。その僧庭へ主人公たる青年、ヒリツプ、マーシヤルが出場して來る。この青年は自分を看護して居る人以外には、自由に會ふことの出來ない悲慘な生活を送つて居る。處が、この青年と、その看護をして居る娘ルイザとの間に、熱烈な戀が成立した。最初二人が會つた時から、もう若々しい華やかな戀に囚はれたが、それが日に〳〵深くなつて行くばかりであつた。

然るに、茲にまた、バステーユの知事で、セント、マールスと云ふ男があつて、この男も亦ルイザの若い美貌に魅せられて、彼女を何うかして自分の思を遂げようと、種々煩悶して、終にはその戀のために、マールスとヒリツプの間に、決闘をすることになつた。處がヒリツプが勝利を得て、ルイザとの戀は依然として繼續せられた。斯んな理由て、マールスは戀敵として何日か此の復讎をしようと、深くヒリツプを怨み憎んだ。茲で一寸云つて置かねばならぬのは、主人公たるヒリツプの身上である。彼は、世が世であるならば、權勢當時の佛蘭西皇帝たるルヰ十四世の皇弟として、を縱にすべき身分であつて、今の皇帝の父君たるルヰ十三世の雙兒として、ルヰ十三世とは雙兒の弟に當るのである。處が父のルヰ十三世は、この雙兒を養育したならば、成長した後には、必ず權威の爭闘になつて、國中に内亂の起るべきを恐れて、遂に一策を案じて、その弟たるヒリツプを、生れながらに一生を幽囚の身として、この僧院に送つたのである。その生れた儘の皇弟たるヒリツプが、此荒れた僧院に送られたの

は、星影もない暗夜で、産衣に被はれたなり、誰一人として此の秘密を知るものもなく、遂に今日に到るまで、わが運命の秘密を知らず、可惜青春の情燃ゆるが如き身を、古き僧院に幽囚の客として暮らしたのである。

處が此の秘密を知つて居るのは、デルプレー僧正とその付添の乳母との外には誰もなかつた。而して僧正も固くその秘密を守つた居たが、ビリツプとルイザとの戀が、日に〳〵熱烈になつて來たに就いて、たう〳〵この秘密を打開けねばならなくなつた。然るに一方では、ビリツプの兄たる現時の皇帝、ルヰ十四世は、元來非常な暴君で、宮廷内には常に歌舞絃聲の絶えることなく、臣下に命じて國內の美人を捜して、王妃として宮中に侍らしめ、一人の女に飽けば、之れを近臣に與へ又他の美人を求めると云つた暴威を極めて、これが爲に國內は從つて淫靡に流れ、華美を縱にするやうになつた。

此時に當つて彼のルイザに失戀した、バステーユの知事セント、ヤールスは、兼ねての戀の敵を取るべき時と、策略を繞らして、王に向つてシユームル



の僧院にルイザなる美人のある事を告げて、直ちに王命に由つて、ルイザを捕ひに向つた。その時ヒリップは部室の窓から飛出して逃れた。

第二幕目は、王宮の一部で、茲はルイザの部室に當てられて居る。此時は已にルイザは王の囚人となつて居たが、彼女は戀人ヒリップを一心に思詰めて、何うしても王の意志に從はず、王に會ふことすらもしなかつた。而して年老いたスユッテの乳母に慰められて、その日を暮して居た。王は非常に怒つて、何うかして自分の意に從はしめようと、手を換へてはルイザに迫る。デルビー僧正も此の事を聞いて、大變に心痛する。此時に當つて、王の近臣にマザワンと云ふ、狡猾な佞臣があつて、この男が王に進めて云ふには、茲に好い策略がある、これはルヰ十四世とヒリップとは元來雙兒の兄弟であるから、その容貌が似て居る、併し勿論この二人が兄弟である事は知つて居ないが、その非常に好く似た事を利用して、王に進めて、ルイザの戀人たるヒリップの扮裝をさして、彼の女を誑したらよからうと云ふ事になつた。而して王は此事が成功したらば、その報酬として、何なりと汝の好む事をかなへてやると約束した。其處でマザリンは、ルイザの室へ使を送つて、是非兎に角一度、王に面會だけするやうに告げさせた。

此處で事件が二つ重つて、一方ダブレー僧正は、此の王の策略を知つて、王がルイザに會ふより以前に、彼女とヒリップとを逢引させる事にした。處が二人が密會して居るのを、宮庭の役人等が見付けて、然々とマールスに密告した。てマールスは非常に怒つて、此のルイザの部室に飛込んで、此處にヒリップとマールスとの格鬪が初つて、遂にヒリップはマールスを傷けた。マールスは愈怒つて騷ぎ叫んだ。その間に僧正は、王が脱捨てた服を淡つて來て、ヒリップに着せた。一方宮中の役人達は、此の出來事を知つて。それ〳〵武器を持つて、此の部屋に入つて來た。而して彼の狼藉人を捕へようとした處が、量らずもそれが王の服裝をして居たので、皆躊躇した。僧正は役人等を叱咤して、汝等は王の行爲に向つて何事をすることが出來るか』と叫んだ。で役人達は初めて王の行爲であつたかと知つて、その罪を謝して退いて了つた。此の間にヒリップは窓から飛出て王宮を逃出した。然るに未だ二人が遠く逃げない内に、僧正の聲で『その人間を捕縛

せよ。彼の上着を外してその顔を隠せ。』と叫んだ。ルイザはびつくりした。それには實は理由があるので、其時恰度王が此の部屋に入つて來た。而してセールスは僧正が此の部屋に悪人を忍ばせたと王に云つた。が僧正は、實は今その悪人を捕縛しそこねたのであると答へた。最初王は僧正の言を信じて居たが、後では其を疑ひ出して、ダルブレー僧正はセムールの牢獄に下し、ヒリツプをバステームに送つた。そして、ヒリツプの顔には、鐵の假面を着せた。

處が、此の時分は最早、王はルイザを欺くことが出來て、シユームルの僧園に居た青年は自分であつたとまんまと彼の女を自分の意志に從はしめて居た。而して、ルイザもそれを眞實であると信ずる様になつて了つた。

第三幕目は、その後六年經つた後の事で、ルイ十四世は彼れ程までにして戀ひ慕つたルイザに飽きて了つて、今ては何うかしてルイザを、彼のバステーユの知事であるセント、マースと結婚させようと考へて居る。一方では、王とルイザとの間には可愛らしい子供が生れて居て、それが丁度いたいけ盛なので、王も大變この子供を可愛がつて居た。ある時その子供が、此の頃世間の評判に依ると、バステーユの牢獄に鐵の假面を被つた囚人が居ると云ふことを聞いて居たものだから父親の王に向つて、何うか自分にその囚人を見せて呉れと云つて聞かなかつた。王はその事を聞いて、内心非常に驚いて自分の子供を叱り付けた。此方ではルイザは、十四世の心が變つて居るなどゝ云ふことは夢にも知らず、近い内に催さるべき王の誕生日の宴席に着けて出られる衣服の刺繍を、自ら王の爲縫ひながら、昔日の二人の戀に陷つた時代の、懐かしい月日を偲んて、親切に自分を愛して呉れた夫の事を思ひ、又自分も耻かしい乙女心に一心に慕つた事を追懐して居た。

然るに王は、最早自分を斯んなに慕つて呉れるルイザに飽きて、セント、マールスと結婚させやうと謀つて居る。何日もルイザに付添つて慰めて居る、乳母のデユワンと、デルブレーの方では、何うかして牢獄中て鐵假面を被つて苦んで居るヒリツプを世に出して、自分の兼ねての野心を實行しようと時機の到るのを待つて居たのである。

デルブレー僧正は、其處で計略を考へて、王に向つて『彼のバステーユの牢獄に入れたヒリツプは、もう

生命が長くない、就いては兼ねて自分が心に藏して居る秘密を、死ぬ前に何うかして王に會つて打開たい。』と云つて居ると告げた。て、王は牢獄に行つてヒリツプに面會すると云ふことは好まないが、その秘密を打開けると云ふことに心を惹かされた。デルブレーは尚言葉を續けて、『若し陛下が私の言葉をお聞き下すつて、バルテーユへお出で下さるならば、是非私がルイザを解付けて、セント、マースと結婚させて、王の胸中を安める。』と云つたので、王のそれに心を惹かされて、遂々王をバステーユに引出すことが出來た。

一方、ルイザと乳母のヂユアンの二人は、この計略があることを知らない。其處で二人相談して、マースがルイザの部室へ這入つて來た時に、ルイザはマースに從ふと見せかけて、二人は此部室を拔け出して、外から鍵を下して了つた。セント、マースは計略に懸つて一人此の部室に閉込められた。そんな間に、デルブレー僧正はバステーユへ急いで行つた。

次ぎの幕は、バステーユの牢獄て、重々しい壁が押し付ける樣に被つて居て、牢内は陰欝な空氣が沈んで居る。その牢屋の片隅に、低い車付のベツドが据ゑられて、その上に悲慘な恐ろしい鐵假面を被つたヒリツプが横つて居る。而して一道の黄色の光線が、鐵窓の間から漏れて、その光線が微かに鐵假面を被つたヒリツプの顔に落ちて居る。デルブレー僧は、先づバステーユに着いて、王に使を送つて、『牢屋の鍵守に約束して、王が牢中に這入られた事も、出られた事も決して他言せぬ。』と言送らした。而して僧正は牢内に這入つて、寢臺の上でヒリツプを擁き起した。この哀れな鐵假面を被つた囚人は、七年間の歳月を暗い不自由な牢中に送つて、世間の出來事も、宮中で起つた昔の戀人ルイザの身の上も何も彼も知らない。僧正は此の不幸な青年を擁起して、『貴方の兄弟のルイ十四世は、斯く〱の事を爲た。』と始終の出來事を告げた。而して又自分の兼ねての計略を打開けて、ヒリツプに牢獄を出て御國の帝位に付くように進めた。ヒリツプは一度は自分の運命を悲んだが、終に僧正の言葉を聞いて、再び牢を出て帝位に付く事を約した。

其處へ、王の近いて來る氣配がしたので、デルブレー僧正は、ヒリツプを牢屋の柱の陰へ匿して置いた。と其處へ王が這入つて來たので、案内の鍵守から自分が牢屋の鍵を受取つて、その男を遠けると、直ぐ王の

傍へ近いて、行きなり隱して持つて居た、コロロホルムを浸したハンカチーフをポケツトから取出して、王の顏を被ふた。て王は忽ち其處へ痲醉して倒れて了つた。その間に僧正は、王の服を外がしてヒリツプが今迄着て居た服と取換へて、ヒリツプが被つて居た鐵假面を付けさせて、恰度誰が見ても今迄のヒリツプの樣にして、寢臺の上に横へさせて、一方ヒリツプと僧正は王の服を着けさせて、此のバステーユの牢獄を脫出した。

最後の場面は、矢張以前の宮中の一間で、デルブレー僧正は都合好くヒリツプを牢屋から連れ出したものの、元からルイとヒリツプとは顏が非



常に好く似ては居るが、何を云ふにも七年間も牢屋に居たのだから、若しや役人等が考へては困ると非常に心配でならなかつた。

處が宮中に歸つて來るとルイザとルイとの間に出來た子供は、最初はヒリツプの顏を見て、變に思つたらしかつたが、ヒリツプが非常にルイザの事を懷かしさうに云ふので、その子供も直ぐにヒリツプになついて了つた。其處へ以前のルイ十三世の王妃、即ちヒリツプの實の母親のアン、オブ、オーストリヤが這入つて來て、王とルイザとの愛情が以前に回復したのを見て非常に怒つて、是非ルイザをマースに結婚させよと迫つ

た。其處て、今迄總ての秘密を一身に隱して居たデルブレー僧正は、此處で總ての事實を打開けて了つた。而してオーストリヤに向つて、『ヒリップの方が實は兄の方で、今度牢に入れたのが弟であるから、ヒリップが佛國の王たるのが當然の事である。』と告げた。然し高慢な太后はなか〳〵にその事を承知しない。而して『ヒリップを逐出して、ルイを王にせよ。』第一この子供の親はルイ十四世であるから。』と云つて居る處へ、ルイザが入つて來て、『この子供はルイの子ではなくて實際はヒリップの子です』と云つて最後の幕が降りるのである。（談話筆記）

白日

森川癸村

自分は壁にもたれた儘、恍惚として白日の空を視詰めて居る。

手にした讀みさしの書物を讀み續けようとした、また散歩に出掛けようともした――併し何故だらう、何故だらう、手も出ない、足も出ない。一躰自分の意志は何處へ行つちやつたんだらう、自分の脳髓の裡には、得躰の知れない、而かも自分よりは強い或る者が最早、ちやんと陣立つて、自分を命令して居る。自分は空虚しい白日の空を視詰めた儘、壁の中へ押し込まれて了つた、否自分は最早壁にされて了つた。

自分は壁になつて此の世界の白晝を眺めて居る――人が死んだり生れたり、轉んだり滑つたり、荷車がガタ〳〵したり藁屑が飛んだりする世界を。そして自分は斯う思つた。自分の今見て居る世界は只斯う見えてる許りの世界であつて、一時間前の世界とは何の連鎖も無いものである。それと同じに『自分』の存在も、現在、斯うある(sein)ばかりの『自分』で、泣きもし、怒りもし、罪も犯した昨日一昨日の『自分』とは全然關係の無いあかの他人である……

自分は又這麼感じがした――恰度、蠟燭の蠟が熔けて流れるように、無色の『時』が虚しい空間を熔けて滴るような感じが。

僕の詩

朧ばな幼時の記憶のうちに殘つて居るのは、自分が初めて鉛筆の片を拾つた時のことである、戸棚から引

きずり出した帳面に、書いたは書いた、胴の無い人、眉毛のある犬、さては帆かけ舟となり美いちやんの顔となつた。

自分は只書きたいから書いたのである。父は欺し賺して鉛筆を取り上げた。自分は泣いて駄々をこねた。以後十有五年、竟に父は自分の手から鉛筆を取り上げることが出來なかつた。悪しき遊戯に父も姉も、果た自分も泣いて居る。

何故書きたいか、何故歌ひたいか。眞靑に晴れ渡つた空を見給へ、鳥でさへ鳴いて居るではないか——其れ以上は、知らない。

批評家諸君よ。僕の詩は、只歌ひたいから歌ひ、只書きたいから、書くのである。決して爲にする藝術ではない、人生の爲にも、藝術それ自身の爲にも。

音

何か鳴いたやうだ………

自分等二人の立つて居る足下から十間ばかりを丸く殘して、夕方の霧が練兵場の野を立ち罩めて居る。

『本統に何か鳴いたやうだ。ね、君。』

二人は、このだゞつ廣い野原から、針の先程の細い鋭い聲を求めて居る。

僞

最も愛するは、最も僞るなり。

少女よ、飽く迄吾を僞れ。君を僞つて、僞を覺らしむることなかれ。君は美を欲す、かるが故に吾は僞を欲す。

吾を生み、吾を僞りしは母なり、接吻と抱擁とを以て吾を僞るものは汝少女なり。あゝ吾は僞に生れ、僞に生く。汝が醜き『眞』の素顔を見はす時、即ち吾死なり。吾は生を愛し、美を愛し、僞を愛す。

○

『慨然だと思つて呉れ——僕はたゞ眞實の事が知りたいばかりなむだ」から言つて、僕は女の純い顔を見たが、この暗い纖かな墻壁の背後こそ『眞』の潜匿處としか思へなかつた……僕は氣も狂しくこの薄い殼を微塵に碎いて手づから『眞』の正躰を攫み出して篤と腑に入れなければ承知が出來ぬ……』(アンドレエフ、『嘘』——迷羊譯)

痛ましき犠牲よ、汝はレンズを見て過てり。知らずや純き顔の「纖かな墻壁の背後」に汝が見たるものは

實は『眞』にあらずして、『眞』の虚像なるを。純き額を誰か見たる、誰か愛したる。汝が求むる敵は外にあらずして内に在り、汝まことに「『眞』の正躰を攫み出」さんと欲せば、汝の眼を破れ、汝が心臓を把つて微塵に碎け。而して後汝は眞に『噓』を殺すを得ん。殺して以て汝が求むる正躰を得ん。

『吾は今樂しく死なん、君吾を愛すればなり』とヴェルテルの一語、僞を信じ、僞に歸依する者は幸なるかな、よく知れり。不幸なる近代人よ、汝は『眞』に呪はれたり、魅せられたり。汝は不幸なる贈物を受けたり。汝は汝が藏する『理性』の鋭き錐に、汝自身を刺され傷められ、而かも求めて竟に得ず。

In allen Tiefen
musst du dich prüfen,
zu deinen Zielen
dich klar zu fühlen,
Aber die Liebe
ist Trübe —Dehmel.

あゝ死して自らを証さんか(dich prüfen)果た生きて濁り(Trübe)に、噓僞に醉ひなむか、蓋近代人が歩む一條の道、將に絶えなんとする所、一の碑銘あり。曰『噓僞に生きよ、然らずんば虚無に死せよ』

留守居

水野仙子

「おてんきでようございますねえ」と門のところで美以さんの聲がする。岩田さんのをばさんが表に出て張り物でもしてたのだらう。茶ぶだいの脚を折つて伏せて、そこらに散らかつて居た紙片を拾ひあげて、曲つて居た机の前の座蒲團を直したが、さて私はそれから何をしていゝか一寸まごついた。小石川まで一寸と出掛けて行ッた美以さんの歸りはどうせ夕方になるのだらう。それまで私は何をしてたらいゝか、本を讀まうか何か書いてみようか、それとも襦袢の襟でもかけ直して置かうか――家の中に唯一人の私は何をしようとそれは勝手だ。何か奇抜な悪戯をやつて、歸つて來た美以さんを吃驚させてやりたいやうな氣もするし、押入れの中でも掃除しておいて、夜になつてお蒲團を出す時に「まア!」といはせるのも面白い。併しながら細かな御用からして置かなければならないから、私は先づ飯櫃を洗つてそれを裏の四ッ目垣の竹の先にかけ先乾だつた足袋を日あたりの竿にかけ直したりした。

眉に眩しいやうな光りのみちた午后である。私ら二人の住居を訪問れるとて來た湖畔の女が、道すがらそれをのぞんで「ま、白い家が！」と詩人らしく吃驚した、代々木練兵塲のテントの家々が（それには糧秣が一ぱい積まつて居る）目の前の畑を越えて松林をあしらつて、からつとしたあたりに浮き出たやうに見えて居る。風こそ少しつめたいけれど、この二三日の春めいたこと。

再び家の中に戻つて、何するともなしに私は机の前に殊更着物の前を合してきちんと座つた。暫く机に頰杖ついて、動いたあとの荒い息を納めて居ると、さつ〳〵と屋根續きの隣りに竹を削る音が、あたりの靜かさを破らぬ程の調和をもつて、どうやら暢氣さうにきこえて來る。そこには竹籠を編む若い男が一人、終日ものも言はずに仕事をして居る。飽けば覺束ない尺八の音が慓えるやうに聞こえて來るが、折々御飯を焚きに來る母親が顏を見せた時だけもの言ふ聲が聞かれる私は此間から母子の會話を聞くともなしに聞いて知つた、その縁談のことなぞを想像して居たが、長い間ぼんやりして居るといふことが大好きな癖に、また一方それが非常に氣が揉めてならないのが私の性分で、直ぐにふつと起ちあがつてそこらを見廻した吐嗟、私はふと或る仕事を思ひついて、本箱の引出しから幾切れかの餅を取り出した。黴びかゝつたと言つてそのまゝにして置いたのを、今暇にあかして削らうといふので。手近にあつた東京全圖を机の上に廣げて、其上に新聞紙を敷いて私は、早速ナイフの先でこつ〳〵とはじめた。

氣まぐれにやり出した此仕事は、意外にも私に黴といふ或る色彩の美しさを敎へた。白、赤、黄、綠、目に入るのはたゞこれだけであるが、肉眼に訴へない他の色もそのうちに隱れて居るのだらう。赤が一番深く點になつて植はつてあるのを、それはナイフの先で抉ぐるやうにする。

するうちに手先に對する注意はやう〳〵薄らいで、幽かに指の先の疲勞を感じながら、散れ〳〵に考へは考へを追ひ、曾ての折々の印象なぞが泛び出て來る。手の先は猶動いて居る。

あの時あの折のあの人の態度、あの言葉、など〳〵考へてるかと思ふと、ある時ある塲合に言つた自分の言葉や行爲を、も一度頭の中で繰りかへして見る。かと思ふと人の顏がちら〳〵と通り過ぎて行く――。

黒い上着を着て居た。二つある小さな窓の貯金爲替受付口と書いた一つから、默つて爲替券を差し出すとそれを受取つて小爲替ならば消印をよく〱調べ、もしくは通知表の字と一字〱見くらべて、さて一點も間違へのないところで引出しを開ける。それが紙幣だつたならばたとひ一枚でも、海綿をつまんでは幾度も〱數へて見て、また思ひ切り悪るさうに數へて見る。いつでもあつけにとられて眺める、いつものあの郵便局の人の、眉の迫つた神經質らしいあの顔！

あゝあの女がまた！厭な顔、厭な顔、なんといふまア！何氣なく歩いて居た足がかうして襲はれるやうに立ち止る時がある。屯ろして居る幾條もの煤烟をのぞむたびに、此處から都會といふ感じがいつも新にする。府下から市中へと志す時にぶつかるのがこの新宿の停車場である。品川行と掲げて去つた列車の煤烟が濛々とあがつて來て線路に架した橋に當つてわれて騰る。其煤烟の中にかすむ人が再びはつきりして來るとあゝまた其處に例の女が！風の日だつた。初めて其女の顔を見たのは、やつぱり美以さんと一緒だつた。

「何て厭な顔てせう！」

「何て厭な顔てせう！」

と二人は一緒に言つた。青くて青くもない、黄色くて黄色くもないやうな顔色、一寸見れば十七八とも見える。或る日は廿六七に見えた。腫んだやうな、それでゝ赤い唇を動かして人の顔さへ見ればぽく〱と首を下げる。へつそりとした汚い羽織を着て、胸には南無妙法蓮華經と書いた袋がかゝつて居る。杖にのしかゝるやうに道行く人の顔を覗き込むけれども、人は大抵ちらと一瞥を與へたまゝでさつ〱と過ぎる——。私は此頃ところ嫌はずその顔が時々目先にちらついて困る。

くうーんと青梅街道口に中野行の電車がとまつた。四五人の人が降りる。侍つて居た二三人が乗る。車掌の笛がピーと鳴るとまたぽうつと動き出す。我足の下でしゆうと昌平橋行のが擦れ違つた。と踏切りの番人が、車のついた棚をずうーと開けて行く。兩側に溜りに溜つた人は、我先にと荷車人力車馬車肥車、女男子供大人、ぞろ〱と入り交つて線路を越える。後れ馳せに驅けつけた小僧が通り切らぬうちに、番人はまた棚を引きはじめた。新宿電車の終點の方から來た魚屋が一人荷を擔いだまゝそこに行きつまる。子供の手をひいた女中が來て棚にとまつた。がら〱と勢ひよ

く角筈の方から驅け付けた人力車がまたとまる。車の上の中折の人は腕組みをして居る。はらり／＼と一人二人づゝ來て皆線路の方を今か／＼と眺めて居る。電車が通つて柵がひかれると、またごちや／＼と入り亂れる――。傍の架橋の上に立つて、それがたわいもなく面白く眺められたことなぞも思ひ出した。

私は間もなく仕事に飽きた。ナイフを握つた指が痛くなつて、首から右の腕へかけて非常な重さを感じる。削つた黴が汚く目の前にうづ高くなつてるのを見ると私はナイフを投げ出して、そして肩をあげて首の運轉を試みた。

處女作　ゆめ路

破れたる衣は縫はずもよしや母汝が兒の戀はまた破れたり
二寸ほどたけ低き子と別れたる壁にもたれて物おもひする
「旅人あり繪筆を抱いてここに死す」と刻みてあらば悲しからずや
野の石やこゝに抱きぬ涙しぬ白き花さき夏とはなりぬ
いつの世に捉られけむ少女子は袖屛風して忍び泣くもの
紅絹裏の君が袂に見出しぬわが處女作とダリアの花と
落日は手傷の如く赤かりき白馬に君をぬすみ去る時

ありふれたる夕暮の情調

あゝ又も夕となれば、
日の光、うすく、冷たく、
我目路をたゞよひ流る。
枯草の丘――
丘の上の長高き樹よ。
枝はまばらに、
姿ぞ見ゆる小さき鳥よ。
悲哀をうたふが如し、
あたりと共に、
むなしくも暮れゆく胸よ――
礫多き道、
鞭のひゞき、
けたゝまし蹄の音、
馬は忽ち遠くなりて、
彼方の空ものしづかに、
あゝ――　光はいつか、
うすぐらく夜の氣となりぬ。



英語を學ぶ心得

女子學院長 矢島楫子

初めて英語を學ぶ方の爲に何か心得になるやうなことをお伺ひしやうと思ひまして、女子學院の矢島先生をおたづねいたしました、其時先生の外に同校の三谷民子先生、また卒業生の方なども其座にいらつしやいまして、何かとお話を伺ひました。ですから此お話は三人のお話を一つに纒めたやうなものでございます、一寸此處に其お斷りを申して置きます(K、Y女)

英語を學ぶと申しても、學ぶと言ふ事に於ては何を學ぶも同じ事で御座いますから、別にあらたまつた心得と云ふ樣な事がきまつてゐる譯では御座いませんが習慣的に成つてゐない事を習ふのですから、一層の奮勵を要する事は申上るまでも御座いません。

何を學ぶに於てもそうですが、殊に英語は、至つても氣長く、ゆつくりとかゝつて、捨てず怠らず續けると言ふ事が何より大切で御座います。廣岡虎次郎と云ふは名もない醫者でしたが、長崎で醫學を修めてゐる時學んだ英語の爲に、明治五年頃細川越中守が始めて飛脚船に乘つて江戸にのぼる時唯一人通辯の任にあたりました。あとで人がどうして英語を學び得たかと聞くたびに「一字百遍」とばかり答へたそうですが、一字百遍、此通りで御座います。

それからお學びなさるには又、良き師に付いてはやくから學ぶ事が大切で御座います。

私などは四十の年に習ひ始めて見ましたが、師を選ばなかつたのと、年が長けて居たのとて、どの樣に苦しんでもとう〳〵噛り付けずに體の方がたまらなくなつたからやめてしまひました。

只今は英語ができなくては絶對にだめと申してよろしいくらゐで御座いますから、私の學校ては、其事を深く認めて、他の學ぶ事はすてに習慣的にもよほど學んて來てあるのてすから、一日の授業の半分は英語の爲に費やします。そして出來るだけ容易に、もう自然的におぼへこむやうにつとめて居りますから、八年間（本科五年高等科三年）の修業を終つたものは英語のお話は、どの方面から不用意にどう云ふ事をお話しかけられても答へに惑はぬやうに成ります。



大いそぎて學んだ英語は、時候、朝夕の挨拶、白黑、是非の應答は出來ても少し話がこみ入つてまゐりますと必ず行きつまつてしまひます。之ては誠に甲斐ない事てすから八年と云ふ長い月日を、ゆつくりと敎へこむつもりで、只今よくはやります「認可」はうけませんて國益の爲めに英語を十分學ばせる樣につとめてゐます。（以上矢島先生）

又英語を學ぶには注意が大切て御座います。例へば

辭書を引くにしましても、たゞぼんやり此字が不解からと云つて其字を引いて譯がわかればそれでいゝとしてゐる樣な事ではだめです。一つの字を引くにしても此字が動詞の時にはどう、名詞の時にはどうと、よく氣をつけて其アクセント(調子)のかげんを用ふる場合を知つて置くなど緻密に學ぶのが大切です。

それから出來るなら、先生を始め日本の方でよくよく英語のお出來なさる方につき、リーダーの半分位から今度は外國人について學ぶのが宜しう御座います。發音などでも始め日本のお方につきますと自分が苦しんだ經驗がありますので、同情があつて、よくわかる樣に說明してくれますが、外國の方ですともう習慣的に其音が出てゐますから、習ふ方ではわかりかねる事が間々あります。

こうしてだん〳〵外國の方のよい調子がきゝ取れる樣になつて來る、つまり耳で學び得る樣に成ると其進步は大さう早う御座います。さて學んだ事は間違つても何　もよろしいから出來るだけ口へ出して云つて見る事です、あちらの音はこちらの音の樣に單純でありません、アイウエオでゆかない間の音がありますから、此調子になれるのには餘程舌の熟練がいります。習つた事を胸の中にたゝみこんで置いて、胸の中で言つて見て、よく言はれたことも、いざ口へ出すとなるとどうも胸の中で言つた樣に言はれぬ樣な事が有ります。日本の人にはわかつても、外國人にわからぬ樣な事では何んにもなりませんから、習つた處は常に用ひてみて、輕く其言葉が出るやうに熟練させる事が必要と思ひます。

ざつと以上の樣ですが、何を申すにも忍耐が第一です、五日懸命に習つたから二日は休むと云ふ樣ではとても進步はいたしません。

戸なひきそ外面は今しゆく春のかなしさ滿てり來よ何か泣く　牧水

春の雨ふれる宵なりあたゝかう君にながるゝわが涙かな　萬里

ちる花に小雨ふる日の風ぬるし此夕くれよ琴柱はづさむ　とみ子



新學期に際して

麹町高等女學校講師　中村春二

東京の方も地方の方も、是から高等の教育を受けやうとなさるには先づ第一に學校を撰ぶことが必要と思ひます。

昔と違つて只今では學校も一種の商賣の樣に成つてしまつて、我れ勝ちに大げさな廣告などして其實內容のあまり整理はないのがあるやうですから、よく／＼調べた上入學なさるのが宜しいと思ひます。

さて首尾よく入學した後は、眞面目に勉强する事が何より大切です。

地方と違つて東京は外に氣を紛らす事が澤山ですから、つい其方へ氣をとられて何時か學科の方は、忽かに成ると云ふやうな事が間々あります。例へば音樂會とか或は寄席芝居のるいなど、とかく目や耳を刺戟しやすいものがありますので知らず／＼其方へ氣をとられてしまふのです。

地方に居ればこう言ふ恐れは有りませんが、東京へ來れば見聞する事が廣く成る、それだけ又誘惑――とまでは行かなくても、娯樂的の事が多く成りますから學問しやうとして出てゐらつしやる方には、しつかりした監督者が付いて居て、嚴重に監督なさると共に、自分自身もしつかりとしてかゝらないといけません。殊にこう云ふ事は出來の好い人に却つて多い樣です。つまり頭腦がよくはたらくからでせうが＝よく／＼注意しなければ成らぬ事と思ひます。

男子の方ですと中學卒業してもなほ、六年も七年も勉强する事が出來ますからまだしもですが、女子の方は只今の所、そうした道をとる事が極てむづかしい爲に、多くは短い四年なり五年なりの間學んで、十年以上も自分より多く學んだ人と家庭を造るのですから、實に此短い年月はゆるかせにすべからざる尊い月日であります。

それを唯夢中で、敎へられる事をばかり記憶さへすればいゝ、卒業さへすればいゝと云ふやうな心持で通學してゐらつしやる方が少なくない樣です。從つて學科の方の記憶はよくても學科以外、世の中と云ふもの

に對しては何一つ自ら進んでおぼへやうとする人が少ない。こう云ふ人が五年の學科を終つて世の中に出てゆくのは實に危い事に思はれます。之は各が心がけてもう四年とか五年とか言ふ級に成つたなら、東京には其機關がいくらも有ますから、多少なりとも社會と云ふものを知つて、曲りなりにも自分のゆく道と云ふ考へを頭の中に作つておく様に心がけるがよかろうと思ひます。

　女學校時代は所謂修養の時代ですから、何事もわからぬ事はわかるまで聞いて、一つでも多く知つた方がよろしいのです。

　求めよさらば與へられん

とバイブルにある通り、求めて始めて與へられるのですから、何んにも恥しい事はない、本でも新聞でも讀んで不解い事が有つたなら、どんな突飛な問ひでもかまはず、先生なり先輩なりに遠慮なく聞いては出來るだけしつかりおぼへこんで置く様に心がけたが好いと思ひます。

　此學校などでも勉めて然云ふ方針にして居りますが一年二年のうちはよく問ひもしますが四年五年となると、どうも手をあげません、不解いことでも其まゝすごしてしもうと云ふ傾きがあつて困ります。何を云つても修養の時代にはしつかり修養して置くにこした事は有りませんから「男子とちがつて學ぶ月日の短い」と云ふ事をよく心にとめておいて、眞面目に勉強するやう心がけるが第一です。（談）

趣味を養ふこと

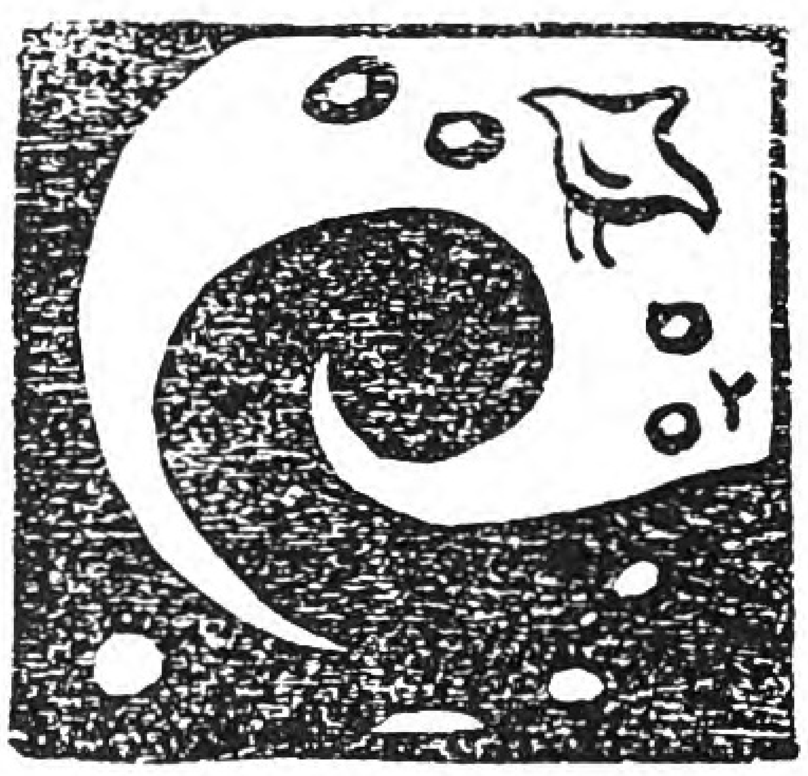
法學博士　岡松氏夫人

世の中に氣の合はぬ夫婦ほど、不釣合で、そして見苦しい家庭はありません、私は家庭を組織する上に於て、夫婦共に同趣味を持つと云ふ事が、最も必要であると思ひます、趣味と云ふことは、獨逸では、是を「自己の利益」だと申して居ります、又或る方は「美の觀念」だと云ひます、ほんとに此趣味は一言で答へる事の出來ないほど深く精神を慰藉するものであります、そこで、夫の方には趣味があつても、妻に無いとか、妻の方には趣味があつても、夫に無いとか。云ふ所から、夫婦仲がわるくなり、果は一家族が面白くなく暮

すと云ふやうな家庭が往々あります、これを私は物あはれなる心細い秋にたとへやうと思ひます、之に反して、一家圓滿に治まり、夫婦共に趣味を同じくして、常に和氣靄々たる家庭にくらすものは、人生無上の幸福であつて之をたとふれば、恰も花咲き鳥歌ふ、樂しき春であらうと思ひます、斯う云ふ家庭はどこから見ても、實に品の善いもので、何となく奥ゆかしい心地が致します、かく趣味ある家庭を作る上に於て、他日一家の主婦たらんとする孃樣方に向つて趣味の修養をお勸め申したいのであります、又此趣味と云ふことが技藝や、學問を修養するにも、是非、必要でもあり、又他日、夫に對する慰藉としては、趣味に俟つ所が多からうと思ひます、今日孃樣方が學校に於て技藝を習ひ、學問を修めらるゝのも、皆他日、之を夫の家に應用して趣味ある家庭を作り、愉快なる生活を求めん爲て御座いませう。

趣味にはいろ〳〵あります、文學趣味、美術趣味、音樂趣味、それ〳〵人に依つて、異にしてをります、また、新聞雜誌を愛讀するのも趣味、盆栽に目を喜ばしむるのも趣味、すべて人として山川草木禽獸虫魚に對して、多少の趣味を持たないものは殆んどありませぬ、從つて家庭の趣味を得ると云ふことは、六ケ敷い樣で、少し心掛があれば容易いことだと思ひます。

一體女子の讀書、或は文學を以て心を優美にし、品性を高むるのは、人の妻となつた曉に、優しく美はしき心と、笑顏とを以て、夫に慰藉を與へて滿足させるためで御座います、然るに更にこの趣味を解しない妻は男子に取りて、不幸此上ないのです。（談）



結婚の秘訣

福光東衣

戀を發明した者は神樣であつたが、結婚の案出者は惡魔であつた、と或る惡謔家が云つたことがある。結婚制度の發明といふことと惡魔といふものとの間に如何なる關係が存立して居たか、予にはハッキリと解らぬが、なにさま惡漢の工夫に相違ないと思はれる場合が數々あるところを以て見ると、この言葉を全くの不合理と排斥するわけには行かないやうだ。けれども

亦、親の目の前で、否それどころでは無く、列國環視の眞ッ只中で、男女が相愛することを得といふ點から見れば、神樣の發明かとも思はれる。して見ると、矢張り發明者は天地創造の神樣で、その專賣特許權を得たものが惡魔であつたのかも知れない。が然し、其の判斷は暫く之を後日の査定に俟つこととして置いても良いと思ふ。といふ理由は、假んば惡魔が考案したのであらうと、專賣權を得たのであらうと、孰れにした所で、人間社會が夫れを採用しなければ夫れ迄の話で別に何等の痛痒を感じない理由であるのに、今日に及んでも依然としてこの制度を認めて居るといふのは、畢竟社會が相愛の男女の幸福の爲めには是以上に都合の良いものは無いと見做して居るからのことで、從つて諸種の結婚問題も結婚制度の存廢如何を是非するのではなくして、存續することは依然として存續して置きながらの結婚問題であるからだ。既に然る以上は、假かに神だ佛だ惡魔だと呼ばはつたところで愚な話ではないか。

であるから、諸種の結婚問題は、如何にせば結婚の利益を最大ならしめ得るか、との問題に根據を置かなければならないと思ふ。これに根據を置いて而して後に、或は其弊害の一面のみを論述指摘して惡魔を引合に出したり、或は又思索の序に本質論根源論を參考するのならば、決して差問はないのである。(誤解を避ける爲めに一言して置くが、こゝに結婚といふのは、單に夫婦關係の始期に於ける形式のみを云ふのではなくして、夫婦關係の連續的狀態即ち結婚して居る間のことを云ふ。

一體この結婚といふものゝ一大缺點は、其獻立が始めから終まで情的、智的、及び肉體的の同一な材料で成り立つて居るといふことであつて、從つてお客樣を飽かせない爲めには料理人の手腕が秀れて居て、同じ材料でも色々な形や味に調理するのでなければいけないのだ。結婚院の扉の鍵は實に爰に在る。聰慧な妻は自分が知らないやうな役を妻はどうしてこのやうに能く了解んで居るだらうと、良人に驚嘆される位に、いろ〳〵な科白を心得て居るので、さてこそ結婚院の永い芝居で成功するのである。斯ういふ夫婦は、ともすれば單調に流れて飽の來易い共棲の生活に、却つて酌めども盡きぬ無限の興味を感ずる。であるから、何時迄も若く美しからむことは勿論望ましいことではあるけれども、しかも必ずしも夫婦關係の主要題目ではな

いので、それよりか寧ろ、永久相互に興味を持ち合つて行くといふことが、此問題の主眼となる。世間には、一生懸命汗水浸になつて働いて金を儲けて、そして誠實に其妻を取扱ふ、といふ二つの事實を唯一の楯として、我こそは良人といふものゝ手本で御座る、と自得して居る男がある。同時に又、飽までも良人に信實て、そして家の内の道具の何かゞ塵埃に塗れて居るやうなことがあつてはならないと、始中終鼻を突き出して室の隅々を嗅いて廻り、かくて妻といふものゝ龜鑑は此人と世間から讃められて、したり顔なる女がある。

如何にも結構至極のことで、なるほど恁ういふ男女こそ世間の手本と云ふべきであらう。が然し、予の見るところを以てすれば、由來世間の多數といふものは自分に損のいかぬ時に限つて人を賞めるものだ。而して又、手本といふものと見本といふものとは屢々同一の意義にして了うものである。商品見本となつて得意先に持ち廻されて、なるほどこれは良い〱と、賞めても損にならない連中に讃められて、撫でまわされて——撫でまわされる時にはどうかすると手の垢もつく——それで以て自ら得たりとなす夫婦ばかりが果して眞の夫婦たるものであらうか？乃至又、利殖に沒頭する男と、室內清潔法に腐心する女とが、只だ單に誠實といふ帶——色も綾もない無地の帶——のみに結び付けられることに依つて、單調にして飽き易い結婚狀態が果して幸福に持續され得るものであらうか？



予は思ふ、單調に飽くといふことが人類心理の必然の現象である以上は、續けて行くべき共棲生活に興味を除外することは出來ないものである、と。即ち、初めに相互の愛に依つて結婚し、而して今も其間の愛が全く冷却して居るといふわけでは無くつても、漸く其生活の單調に飽いて來ると云ふことは人として免れ得ないことであるから、其場合に處するには、單に事業だとか誠實だとか云ふことより外に、良人は妻を、妻は良人を、互に興味の眼で見合つて行くことが大切であると云ふのである。而してこの目的の爲めには、夫婦は、互に結婚して居るといふことを忘れるに在る。尤も、「忘れる」と云つた所で、現在夫婦であるといふ事實を頭から非認して破倫不德の行爲を敢てせよ、といふのでは勿論ない。只だ「飽く」といふことを防ぐ爲めに假にしばらく忘れるのだ。同身一躰といふことは勿論結構な考へであるけれども、絕えず自身の良人であると思ひ自身の妻であると思ふからこそいろ〳〵な不足が限り無く心に湧いて、其結果現在の生活が益々つまらなくなつて了うのであるから、斯く云ふのである。この方法は餘りに消極的だと思ふ人があるかも知れないけれども、と云つて積極的に出ると夫婦といふ制約を全く破らなければならないことになるから、かくては再び神樣と惡魔との議論に後戾をしなければならないこととなつて、果しがつかない。所詮は目的の爲めに方法を說くのである。て其共棲して居るのは決して同じ屋根の下、同じ部屋の中に呼吸せよとの天の法則に縛られて居るからではなくして、自己が孤獨の生活に堪え得ない爲、相互の交友を樂む爲、であると想像するがいゝ。其女は、我が妻といふよりか寧ろ我に最も親しい婦人であると假想し、而して日常生活の煩末な事柄は之を其女の思慮と才能と敬愛すべき注意とに一任して置けば、必ずや夫はそこに無限の興味を感じ得るであらう。其女も亦、絕えず其男の氣分に注意し、重大の事柄で無い限は一切の家事を自身自ら愼密に處理し、その男の眉に屢々現はれる暗い陰は愛の減退を意味するのではなくして事業上の心遣の表象であることと思ひ、其男が友を欲する時には自ら快活なる友となり、商議を要する時には相談合手となり健康者は神心の衰へて居る時には看護婦となり慰藉者となるといふ風に、機に應じ時に從つて其男に對する自己の關係を心の上で變へて行けば、不足が消えて快感が起るに違いない。

予の知れる一米人が嘗つて耶穌降誕祭の前日商用を帶びてカンサス州の某市へ行つた。其妻はニューヨークに殘つて居た。年に一度しかない樂い降誕祭の一日を、かくて別れ〳〵に暮さなければならない有樣であつたが、男は東から、女は西から來てシカゴで落ち合ひ、遂に降誕祭の樂を共にすることが出來た。
結婚せる男女をして常に中途に於て會逅せしめよ。ニューヨーク及びカンサスの市が結婚の生涯に於て何を意味して居ようとも、兎に角、夫婦をしてシカゴに落ち合はしめよ。(マクスオーレル)



配色の原理

文學士　菅原教造

多樣なる色彩の變化の中で土臺となるものが三種ある。第一は色の品の變り方であつて色の調子の變化、色の性質の變化といふ。第二は程度の變り方で心理學の方では色の飽和の變化と言ひ或は色度の變化と言ふ第三は色の明暗の變化で明度の變化とも言ふ。

有ゆる色を出す場合に必ず總ての色を用ひずとも原色と混じて何の色でもできる。原色と混色にも大體二つの見方がある一は畫具の混り方、二は光線の混り方である。畫具の原色は赤と青と黄であるが光線の原色は赤と青と綠の三色である。かく根本的に違ふ混ぜ方でも日本でも古くから衣服等に用ひられた。配色や混色のことを見るに必要なる餘色表といふものがある。赤を上にし淺黄を下にして十種の色を圓形に聯ねる、即ち赤より右へ順に牡丹、紫、青、褐色、淺黄、其より右へ上つて綠、ひわ、黄、樺、赤と元へ歸る。扨て光線の混色法に特に必要な事件がある。若し向ひになつた色赤と淺黄、青と黄といふ類を混ずると二色を合してねずみ色が出るこれを互に餘色と稱して赤は淺黄の餘色、淺黄は赤の餘色と言ふ。近き色、例へば赤と黄を混ずれば中間の色即ち樺が出る。

同じ配色でも又遠近に由つて調子や飽和や明暗に變化がくる。青色を草色の上へ貼つて遠く離せば見えなくなる此れを赤の上におけば反對にはつきりとしてくる。又遠くなると色が中間の濁りとなる。濁つたものを明い所におくと赤となり暗い所におくと青く見える

濁れる空氣を通して遠山は青く太陽は赤くみえる。煙のなびいて天に至れるものは赤く山にかゝれるものは青く見える。又近くみればはつきりと地と摸様の區別が見えて遠くなると混つてきたなく見える。

夜景になると又違つた變化が起る第一はブルキイ子の現象である、朝早くか或は日の暮れ方に起る現象で灯せずに障子に向つて立つと白いものは眞青となり赤は黒くみえ綠や青は冴えてくる。日中は紅葉の色美しく段々暮れかゝると紅葉は消されて常盤木の綠が冴えてくる。第二は燈火の光である、赤味を帶びたるランプの光、青味がゝれるガス燈の光、其等の光に由つてみたる色は皆異ふ。月の光はブルキイ子の現象に從ふて變化するものである。

次に色の殘像といふ事がある。澤山並べられた繪畫等を見る塲合に起ることで試みにねずみ色の上に赤なら赤をおき暫らく見つめて居て赤、取ると其反對の色青といふ餘色が殘る。

次に對比といふ事でねずみ色の細紙を作つて其下へ色紙を入れると入れてある部分だけのねずみの上へ入れた色紙の對色が出てくる。又相對の地色の上に相對の色をおくと上の對色は冴えてみえる。對色でない時は上の色の側へ色が押されてしまう。背景に由つて其物體の色の變ずるのは此理である。

上述の事は皆眼の働きより來る必然の結果であるが今度頭の働きから一つの變化が起る。小供が横向きの人の顏に目を二つ描くやうな事柄が發達した人の頭にも殘つて居て色彩の上に顯れる事が多い。白と黒就中黒である。ランプとガラスの光を比較すればランプの光は赤いといふ事に氣がつくが短夜ではランプの光に照されたる障子紙を白だと信ずる。又常から雪は白いものだといふ觀念に支配されて青空の下や陰の雪の青いといふ事を知らない。光明と暗黒との實際の差は非常に異ふが繪具ては白と黒との區別が少しかない、一と六十六の差で明暗の區別が少ない。

配色と言つても色々に考方がある、唯考へると美醜の問題だけてあるが、實際は其反面に色の表情が伴ふ。乞食には乞食、二十歳には二十歳と相當な色を考へなければならぬ、表情が土臺となつて配合は其後にあるのだ。

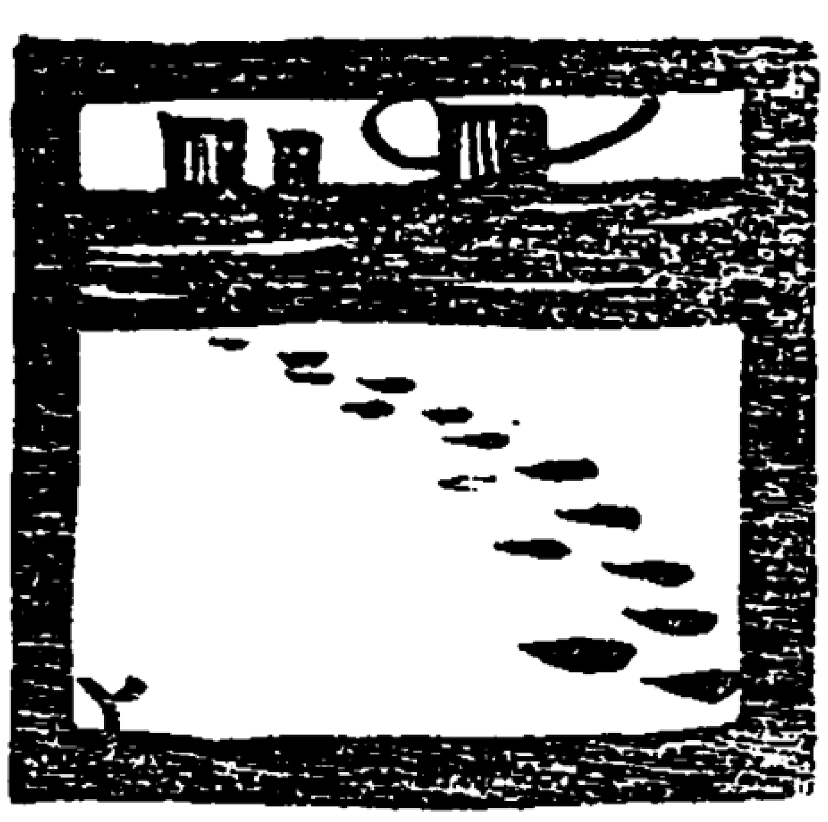
表情とは社會的に言へば赤は赤心、熱誠を顯し、白は神々しさ、不祝儀等を思はせる又赤と白とを合して日章旗、水引等を意味する。此等は皆國士、風俗、人

情、時代等に由つて觀念の變遷がある。心理學の表情の方は赤は活動、紫は靜止といふ風に見える。人々の感じ、心持を色に投入して見るのである、又或は外界のものを聯想して青を空とか水とかに赤を血に見ることもあるけれども、自然界の聯想よりも感情を投入する方が先である、此れを衣服にするときは年齡、季節、趣味性格等の表情がある。この表情の最も面白きは藤原時代の女官のかさねの色目である。單に配合の美しきのみならず一々意味があつて裏に表情を伴ふてゐる鎧の胴皮も進步したものであつて配合以外に年齡趣味、性格等を知ることができる。

配合の研究は大別して三種に分たれる一は選擇法である、明暗有ゆる色をとりて三十九種の色から四千近くの配色ができる其内から好きものを選ぶのである。第二は使用法で實際上に用られたるもの即ち何處には如何なる裝飾があつた何夫人は如何なる服裝して居たとか或は各國各時代の建築、織物等の美術品を研究する、第三は自分で應用するので即ち美術家、藝術家等の採る方法である。

相對の色を並べると派手な非常に變化多き配色ができ、之れに反して赤と近きオレンヂとか薄き赤を配合するといふ風で純不純を缺いたものを並べると統一あるものができる。變化ある配合は野暮だが短き時間てある程好き感じを與へ、統一ある方は澁い方で短い時間では好く解らない長く見る程味が出てくる、故に建築等の永く殘るものは古來何れの國にも統一ある配合の方が多い。

此の二つが大體配色の原則であつて、尚又配合と表情との關係が三通りある。配合を主として表情を屬としたものは見た眼は綺麗である。表情配合の調和されたものは上品、表情の主なのは雅致はあるがあつさりし過ぎる等で此れは仲々大切なことである。（國華倶樂部講話）



自由にして壞亂せざる歐米の若き婦人

ドクトル　寺木定芳

日本の男女關係は甚だ單純なり

日本の若い女の戀愛と、西洋の女の戀愛とを比較し

て見ると面白い、從來の日本人の戀、殊に所謂初戀なるものは、大概は近親者である。例を云つて見ると、彼の芝居で演るお染久松などを見ても解る通り、所詮、日本の家庭組織が然らしめることではあるが、而してその戀人と云ふ者は、或場合の外は、多くは美人でないと云ふ事が出來る。即ち、此の初戀に陷つた若い男女の精神狀態を研究して見ると、此場合男女双方共に、唯異性と云ふ感は、それに伴ふ懷かしみ、好奇心と云つた感情、或は生理學上の異性に對する要求なども混つて來るのであるが、それが我國に於いては、社會制度、風俗、習慣などの爲めに、若い男女が自由に交際することが出來ない。唯、若い異性同士が相知ると云ふ機會は、親戚の間柄とか、從兄弟の塲合にしか無いと云つても好い。即ち、互に青春の熱情盛んな、若い男女が初めて知合ふのは、此の近親者であるから、此の兩者の間に初戀が成立するのは、當然の事である。

一方から云ふと、國木田獨歩氏も書いて居るが、彼の『戀を戀する人』と云つた態度は、日本人現代の時代精神的であつて、前にも云つた樣に、日本の若い男女は、異性に接する機會が少いから、隨つて、好奇心或は自然の要求として、異性に接して見たい、異性と共に話して見たい、異性の感情、心持は何んなものだらうかと云ふ詩的空想に驅られて、懷かしいとか、忘れられないと云つた感情的に、唯戀愛とは何んなものか、戀をして見たいと云つた單純な考から、茲にその互の要求を滿足させるものとして近親者間の戀が成立するのである。

要するに、日本の若い男女は、異性に接すると云ふ塲合が少いからである。其處へ行くと、西洋の家庭は自由である。而して、唯家庭的精神的に異性へ接するばかりでなく、身體的に異性に觸れる機會が多い。即ち、日本では禮儀作法として、點頭と云ふ習慣があつて、如何に親密の間柄でも、唯離れて居て頭を下げるばかりであるが、西洋では、男女共に十四五歲位までは接吻をする、それから成長して後ち、必ず握手をするとか、又は手を接吻させることになつて居る。此の身體的に異性に接すると云ふ事は、日本では非常な無禮卑俗な行爲と考へられて居るが、西洋の男女間は、決これがある爲めに、若い男女を自由にして置いてもして忌はしい關係なぞが起らない、重大な原因ではなからうか。之れが日本の青年男女の間にして見ると、此の身體的に異性に觸れると云ふ事が無いから、唯若

い男女が測らず手と手が相觸れたならば、それこそ互の顏が眞赤になつて、こんな單純な事から、戀が成立つたりすることがある。それだから、加留多會が直接な動機となつて、歸途に暗い處で手を握り合つたなどと云ふ事が若い男女の間には、忘れられない感銘を殘すことになるのである。

過渡期の犧牲

自分は米國に居る時に、度々彼の地の上流社會の令孃を訪問した事がある。斯んな時には、應接室に案内せられて、其處へ令孃が這入つて來ると、一緒にその父母や家庭の人々も這入つて來て、一同に挨拶する。而して暫時すると、父母はその席を外して了つて、若い男女が自由に話合ふ事が出來るのである。

それが日本であると、先達ても下田歌子女史などが、女學生の男に對する時の心得として、非常に體裁の好い、御都合の好い心得書を作へられたが、今の若い女學生達に對して、何うして守ることが出來るだらうか又彼麼事に盲從して行く樣な女ばかりだつたら、之れも亦一つ考へものであるが、到底そんな事は不可能の事である。何とか云ふと、直ぐ女學生の墮落呼ばはりをして、一人の墮落した女學生でもあると、多くはそんなのは實際の女學生でない場合が多いが、直ちに女學生全體が腐敗し墮落した樣に考へて、時代の罪、社會の罪に歸して了ふ。即ち、現代の日本の社會が、舊思想亡び、舊道德亡んで、未だ是れに換はるべき、新時代の適應すべき風俗習慣が起らない過渡期にある事に思到らないのである。此の舊時代の道德習慣か亡んて、新時代の道德習慣が起るには、それに拂ふべき犧牲の生ずるのは當然の事である。故に、當然拂ふべき犧牲は犧牲として、速かに新時代の起るまて、この儘にするより外はあるまい。あたら、因循姑息の彌縫的抑壓を用ゐるのは、却て此過渡時代を阻碍するものである。

結婚前の快活なる氣風

歐米婦人の處女時代は實に快活である。若々しいと云ふ壓へられない感が、心地よく何物にも表現れて居る。だから若い娘などに合ふと、つくづくと處女美と云つた感に擊たれる。然るに、日本人は何うであるかと見ると、此の生涯の花とも云ふべき青春時代にあつて、若かるべき自由たるべき時代を、殆ど睡つた樣な内に過ごして居たのが、從來の處女時代であつた。

然しながら、歐米婦人の此の快活な、而かも嚴格な、何物にも拘泥されない處女時代を過ぎて、一旦人の妻となつたと定まると、處女時代の嚴格であつた反動や、或は餘りに女性の權利を重くするの結果として、上流社會の婦人にあつては、忌むべき行爲が盛んに行はれる。實際歐米婦人の處女時代と結婚後とは、石と臘と云つた程徑庭がある。又、その家屋の建築構造なども、此の惡弊を實行するに都合好く出來て居る。即ち夫たる人と妻女との室は別々に離れ、各自の室は皆鍵を持つて閉し、他人の自由に入ることは絕體的に許さないことになつて居る。併しながら。夫たる人にしても、それを知りながら、容易に離婚の要求をなしえない理由がある。それは離婚裁判を經ねばならぬからで、此の離婚裁判に際して、妻女は夫に對して、財産の分配を請求すべき權利を持つて居るからである。で、夫たる男も、之れを默過して自分も他の女と通ずると云つた惡弊を見るは、實に遺憾至極である。

吾家のピアノ

　次ぎに、家庭と音樂に就いて、歐米の家庭には、如何に貧しい家にも、必らず一臺のピアノが据えられてある。而してそのピアノは大抵履歴付きで、母から娘に傳へ、娘から孫娘に與へたと云つた風で、此の音樂趣味が一般に行渡つて居て、有名な詩人の歌を作曲した樂譜だとか、オペラの流行の詩句だとかは、何んな娘でも知らない者はない位で、このピアノの前に立つて、樂しい懷かしいラブサングを聲高に唄ふのである。

　夏の夕、月影が若葉の梢に照り輝く樹蔭を散歩すると、樹間がくれに電燈の光燦くかげに、一家團欒してピアノの周圍に集り、白い着物を着た女が、大聲でピアノに向つて調子を取つて居ると云つた事はしば〳〵見受ける。

　而して又、若い男女が戀に陷つて、二人が相對して、互の情緒感情が高潮に達した場合などは、女は直ちに椅子を離れて、ピアノの前に走つて行き、感情の高潮に達したと同時に起る、人間の劣情欲望と云つたものを、此の靈妙なる音樂の音と、淸淨なる詩句に依つて散らすことは、演劇などに於いても好く演ずる通りである。

　其處へ行くと、日本の音樂なるものは、實に哀れなものである。彼の唯一の家庭音樂とせられて居る琴な

どは、到底彼の平調な樂音では、若い青春の情を滿足させるべく、餘りに單調無味に過ぎて居る。それから三味線であるが、彼れは直ぐ花柳とか藝者の專有物たる傾があつて、一般の家庭に入れると云ふことはむつかしい。

危惧の念なき男女の集合

米國などでは、如何なる會合の席にても、夫婦一緒に列席する風習がある。又散歩などをするにも、若い新夫婦が手を握り合つたり、青春の情萠える戀中の男女が、肩と肩とを抱き合つて公園を散歩するなどは、實に羨しいばかりである。而して好く若い學生等が寄集つて、友人會と云つた會合を催して、若い男の學生は、必ず各自にレデー、フレンドなる若い女學生を伴れて行く。而して之等の若い男女の會合は、自由に快活に、皆互に打解けて交際する。娘達は娘達で、勝手に男の間を斡旋して會話ふと云つた風で、この會合などに集る娘の内の花形とも云ふべきものはベスト、ガールと呼ばれて得意になつて居る。

又、市街の處々に舞踏場がある、貸席になつて近處の男女が、勝手に一のホールに集つて跳る處である。

それが上流社會ならば、園遊會とか晩餐會とかで、若い男女が抱き合つたりして跳り廻るのであるが、彼等の間には決して忌はしい評判や、危險な行爲は起らない。

座居の弊

それから、日本の座ると云ふ風習は、生理上肉體の發育から云つても、非常に害の多いことである。隨つて家屋の構造だとか、衣服の改良なども大に注意すべきことである。

次ぎに、我國の小説に圓滿なラブ、ストーリーがない、そして、往々戀愛小説を讀んでも、それが藝妓だとか娼婦に關した情事が多くて、眞に若い青春男女の眞面目な戀を書いたものが乏しい。由來日本人は最初に云つた樣に、異性に對する感情が、非常に束縛せられて居る結果として、反動的に種々の惡弊を惹起すのである。

人は結婚後一日に七年老けたるを知れ　ベーコン

敏捷なる妻は遲鈍なる夫を作る　シエクスピア

急に結婚すれば徐に悔ゆる事あらん　コングリーブ

現に流行の色合

三越　飯野一三

貴婦人方の春の盛裝としては重に紋附て、御嗜好になる所の地質はお召の中でも橘お召、白金お召、金剛鶉お召等である、けれども必ずしも紋附とばかり限られたのではないから、やはり色氣の事に就て述べて置く必要があらうと考へる。

現今は濃い色氣のものは全く去つて了つて藍氣を中心としたものゝ中でも藤色が、まづ流行色のやうに想はれる、併し同じ藤色といつても、餘り淡くない、藤色に少しく鼠氣を加味したものが喜ばるゝ傾が多いので、例へば二十歲位の年紀の方なれば、藤の花の中へ少く鼠色を加へたものが令孃や奥さん方に歡迎され、それより年上の方々になると、藍氣のない、難波鼠、朧鼠、住吉鼠などゝいふやうな色氣の物が春着として御注文がある、之れを繰返せば、藤色が間色として多く好かるゝやうになつたのである。

それから尚ほ重なる流行物の色氣に伴ふ所の副色といふものが、半衿とか帶物とか、又は下着といふやうな物によつて流行するので、それにはクリーム色、オレンヂ色、ウスヤナギ即ち柳の芽ざし色等の數種てある。

一時小供衆向として大層流行した所の褪紅色も、余程昨今は以前と違つて、一般に極く淡い〳〵色を好くといふ風で、例へば、オレンヂ色と褪紅色との間色と云ふ向のものが七、八歲位の小供衆の春着として流行しつゝあるのである。

次に摸樣は如何かと云ふに、單に寫生風の美しい謂ゆるたゞバツトしたといふものよりはその、寫生風のものを摸樣化させた趣味ある雅味あるもので無ければ氣受けが好くない、例へば、光琳風の草花を摸樣化した謂ゆる光琳式明治摸樣となつた樣なものとか、又光琳風であるものを今日の絞り風にしたものとか、或はまた光琳風の摸樣を絞つたとか云ふやうな物が喜ばれて、是れまでのやうに寫生その儘のものは廢つたのである、云はゞ趣向の異つたものが好かるゝといふ傾になつたのである。

お孃さんものは年一年と華美になつて來る一方で單に裾や襟の先ばかりでなく、胸や肩の邊までも摸樣を施して、殆んど總摸樣のやうなものが、十五六歲位の御

年配の方々の間に流行するのである、約めて云へば、極く華やかなるものが好かるゝので、例へば、牡丹に菊に櫻に梅にといふやうな各種の植物を、謂る明治式光琳風に摸樣化して、それから總體に工合よく配置した樣なものが歡迎される、又裾摸樣も一般に昨年より大にして一尺二三寸なり、色氣は極く濃いものを用ひらる、それは淡色を好まるゝ故自然の結果である。

帶はどうかと云ふに、副色にクリーム、オレンヂなどが流行する結果、金茶といふやうな色は遠ざけられて、薄鼠を好まれるといふ傾向であるから、帶には唯の白茶といたやうな薄色か好まれる、即ちクリームの如き、又は白地のやうな物が春着としては注文が多いのであるが、その摸樣となると、成るべく一種のもので、種々のものが集つて、そしてそれが一纏になつたものは流行らない、例へば梅か菊とかいやうな、遠くからハッキリと見えるもの、人の眼に附くものに尚ほ一方他の摸樣を扱かつたものが流行つて、有職摸樣などは全く地質は金泥織とか、又銀泥織とかいふもので、それに黑繪摸樣などを繡つたもの、或は全く黑繪摸樣を書いたもの等が流行するのであるが、尚ほ之に就て少しくお咄をすれば、春着の上へ用ゐらるゝ帶は、繻珍などよりも糸錦などが流行して居る、その他綴織、綿上綴の樣なものが流行て、之に次ては厚板織であらう、又綴ちりめん、靜波織、ゴブラン等が盛んに行はれ、これには又花卉の摸樣化されたのや、廣東縞を摸樣の中へ應用したものなどが專ら流行して居る。

夢二より

ブーンと線香の匂ひがする、そして色の好い願がかゝつてゐるのが好きだ。さつきもあすこの所を通つてたまらなかつたのです。いつかこの願をかけた額をほしいと思つて一つ盜んで歸りかけたが、何だかすまぬ氣がしてまたおいて來た。今日はおもひ切つて一つとつて來た。そして私は線香を買つて納めて、心のうちで「どうぞこの願主の病氣が平癒しますやうと、私は道樂でこの額をもらつてゆきます」と祈りました。

私はなほあの願主と、神樣にすまぬやうに思つてないませんから、もう一度參るつもりです。

二十七才　たま　といふ人がなぜか、なつかしい。年若いヂレッタントがその額を盜み去つたとは夢にもしらず、病の快癒を祈つてゐるてあらう。

たまさん、たまさん、なつかしい名だ。

act in a becoming and attractive manner? But it must be remembered that children depend, for their good manners, upon the example set by their parents. "Example is better than precept."

擧動を現はすに非ずや. 然れども子女の善良なる風習は 共兩親が示す 模範に依ることを記臆せざる可らず.「實例は教訓よりも尊し」.

A FLOWER-VIEWING.

A. What a beautiful spring morning it is! I wonder if the cherry-blossoms are out yet.

B. Well, they are already beginning to blossom.

A. Let us go to Ueno Park to see how they are.

B. What a crowd of people! It is not possible to get into any of these tram-cars.

A. Shall we walk then?

B. Yes, that will be better. It is rather pleasant to walk, as the wether is so nice.

A. Now here we are. It's rather nice; in fact much better than expected.

B. Oh! How beautiful the park is! It's full of blossoms.

A. Yes, they are now at the best. Everything will be over in two or three days.

B. Oh! See how beautifully these people are dressed!

A. Come here and look over the whole city. They say Tokyo is called 'They city of flowers,' and now I see how it has got such a beautiful name.

B. Here is a bench, let us sit down.

花　見

甲—まあ麗かな春の日和ですこと. 櫻花はもう咲きましたかしらん.

乙—左樣さ, もう咲きかけて居ます.

甲—上野公園へ 花の樣子を 見に行かうじやありませんか.

乙—どうも非常な人ごみですなあ. とてもどの電車へも 乘れるものぢや ありません.

甲—それじや歩きましようか.

乙—はい, それがいゝでしよう. 天氣がこんなに好いから歩くのも却て愉快です.

甲—さあ來ました. 此は中々好いこと. 實に思つたよりは餘程好い.

乙—まあ此公園の美しいこと, 一面に花ですれー.

甲—左樣, 花は今が眞盛りです. 兩三日も過ぎたら散るだらうと思います.

乙—まあ, あの人達はしやれた風をして居るではありませんか.

甲—此處へ來て 市內をずーつと 御覽なさい. 東京は「花の都」だと人が言いますが, 成程こんな美しい名の附いた譯が今解りました.

乙—此處に腰掛がありますから, かけましよう.

英　　文

(第六年第四回)

星野久成



THE WIFE AND MOTHER.

There is a saying that the wife is the key of the house, and a famous writer says that the home is the corner-stone of the nation. Indeed bad manners are the outcome of bad homes.

The wife, the mother, the home builder is to take this matter in hand. She ought to know how to make a girl into a lady, or a boy into a gentleman. If she does not know she ought to learn, as she learns to do house work. This is what the home is for.

Everything that relates to the care of the person, to the character or spirit of a lady or of a gentleman, ought to be taught by the wife and mother.

Is not the boy who is polite to father, mother, sister, likely to be polite to everybody else? If a girl cultivates the habit of courtesy and propriety at home, will she not be likely in other places to

妻と母

妻は一家を取締まる鍵なりと云ふ諺あり，又有名なる一記者は，家庭は國民の基礎なりと言へり．實に惡しき風習は惡しき家庭の結果なり

妻たり，母たり，家庭の建設者たるものは，此事を擔任すべき筈にして，女子を淑女と爲し，男子を紳士に養成すべき方法を知らざる可らず．若し之を知らずんば，家事を學ぶ如く，之を學ばざる可らず，是れ家庭の必要なる所以なりとす．

淑女或は紳士の品性若くは精神に對し，苟くも各人の注意すべき萬般の事項は，須らく妻と母とが敎ふべきものなり．

父母，姉妹に對して鄭寧なる兒童は，恐らく何人に對しても亦鄭寧なるに非ずや．若し女子が家庭に在て禮儀を守り行儀を正しくする習慣を修養せば，他所に於ても恐らく坐作宜しきに適し心を引寄する

〔註〕 corner-stone, 基礎の隅石. to take in hand=to undertake, 擔任す. ought to, 云々すべき筈なり. This is what the home is, 是れ家庭が何の爲めに存在するかと云ふ理由(即ち家庭の功用)を示すものなり. likely=probably, 多分は. depend upon. 依賴す.

日記より

醉茗

自然を崇拜するのは野蠻だけれど、自然を畏敬するのは野蠻でない、一體に近代人は自然を恐れなくなつた、それだけでも宗教心の衰へたことが分る、寧ろ文學者、藝術家と謂はれる人人の方がまだしも自然を畏敬してゐる。

犧牲の觀念に缺けた現代の女子は、實際的生活の上に於て不幸である、彼等は解放されたと思つてゐるが、其實は時代の犧牲になつてゐる武士道に鍛はれたる舊時代の女子は、自覺せずして美しい犧牲となつた、之も不幸に相違ない人間は遂に解放されざるものである。

誘惑も恐るゝに足らぬ、虛榮も忌むに足らぬ吾は最も不誠實なる人間を憎む、虛榮は一種の美術なり、誘惑は一種の文學なり、而かも根本に於て誠實を缺く時は、凡て惡魔なり。

牧水の短歌は男性的で底に強く、夕暮の短歌は理性的で、外に烈しい。薰園の近業には內省的のものあり、空穗の復活は歌壇に力を與へること多大である。

眞の公平なる批評は多く讀むべきものとして發表されない、却つて口から口に傳はる言葉に眞の公平なる批評がある。

文學者も一歩を誤ると所謂通人と選ぶ處なきに到る、神經の過敏と、新智識の要求とは偶ま通人を造り出す恐れはなからうか、ぼんやりの文學者、智識に乏しき創作家は、毎に何者の的とならぬ。

善人も惡人も一個人の生活は極めて嚴肅なり二個以上の生活となると嚴肅を缺く、孤獨を悲む人は悲む意味が分らぬ、孤獨を自覺し得る人は寧ろ幸福である。

葉舟は話の面白い人、空穗は話のうまい人、白鳥は話のしにくい人、春雨は話の眞面目な人白秋は話のぼんやりした人、鏡花は話に興を持つ人、葵村は話の純なる人、露風は話の賢い人而して自分は話の下手な人だと思つてゐる。

詩を作る者は日本の國語の不自由でもあり、數の乏しくもあることは皆知つてゐる、色彩を表はす言葉なども然うだ、原色と云へば、赤、青、黄の三種であるが、之を混じて畵具と光線の作用で三十九種の色を出し、更に此色から四千種近くの變つた配色が出來るさうだ、それに一々名をつけたら隨分色彩の名詞も豐富になるわけだ。

ウヰスキイを紅茶に入れて飮むとうまい、ウヰスキイだけを飮むと、藥のやうで少しもうまくない。

わが「敷島」を愛するのは其包裝紙に嫌味がないからである。

一年の日記には幾多の矛盾あり、十年の日記を繙けば少しも矛盾なし。

短篇小説

水野葉舟選



○淋しき日（天賞）

牛込　小笠原　ゆり子

信一はあほむけに兩手を枕にして目をつぶつたまゝ默した。二人の間は再び沈默に落ちて終つた「信さん……信さん、ねむつて？え信さんつて云ふのに」春子は手をのばしてこたつの向側にねそべつてる信一をゆり起した。「え」と男は一寸目を開いて「何か用かへ」と氣だるそうに云つた「イヽエそうぢやありませんけれど……起きて入つしやいなつまらないじやありませんか、ねて許り居ちやア」

春子は沈默を恐れた。そしてそれをさけ様とした。少しでも沈默の續くと二人の心は離れ〳〵になつて終ふ様な氣がして如何にかして離れて行く心と心とを引止め様と勉めた。行く處迄で行き盡した二人の此戀の行末については少なからず不安をいだいて居た。つまらなそうな男の顏を見ると無性に腹立しくなつてきて親をすてゝ迄一所になつた事をくやしく思時もあつた。然かし春子自身も今迄空想に樂しんで居た時の樣とは此現實された新家庭は違ふ樣に思はれた。かへつて自由な戀が今は何となくあつけない樣で今少し二人の仲がどうにか……たゞどうにかなりそうなものとわけのわからぬいら〳〵しさが胸をおそうて來て時折一人で裁縫などをして居る内此樣な事を思ひ出しては思はず布をムシヤ〳〵にして終ひ度くなる時もあつた。

春子は男の目より何者かを見出そうとしてジッと其顏を見つめた。信一は云はるゝまゝに爭もせず生あくびをしながら起き上つて今更らしく兩手をこたつの中へつゝこんだ。

「あなたは……あなたは此生活があきだんでせう……私と……」とうらめしそうに男を見た。

「え、」と男はギョッとして春子を見たが春子の視線をさける樣にして「何を云ふのだ……くだらない」となげだした樣に云つて又ゴロリとなつた。男の胸には云ひ知れぬ疲勞と倦怠とを覺えて光のうすい一月の日が障子に葉もないさるすべりの影をうつして居る其影を見つめて居ると深い〳〵底の知れぬ谷の中へでも下りて行く樣な何とも云はれぬ淋しさとやる瀨なさとが滿ちて來て思はずためいきをして眉をよせて目をつぶつた。春子は見ぬ樣にして信一の顏を見て居たが此時「だめ！だめ！」と耳もとで云はれた樣な氣がして「あゝもうだめ！」と心にさけんで蒲團の上にうつぷして終つた。外はめづらしい風のない日で猿すべりの影も動かず弱々しいふつくらとした日光が南側の四枚の障子を通して室の中に充滿した。信一はソッと目をあけて春子を見たがのぼせるかして福耳のたぼがまつかに充血して白い襟足に束髮の毛がいた〳〵しく亂れかゝつてるのを見るとさすがにいぢらしくもなつた、けれどどう云ふものかそれすら今はなぐさめてやる氣は起らなかつた。「己はほんとうにどうかしてる」と信一は心につぶやいたぢくした木の實が大地に落ちて行く樣に二人の戀も靜かに二人の胸から離れて行く時が來たのだと感じたそしてそれを人間の力ではさゝえる事が出來ない。これからは戀を離れた二人が一所に生きてゆかねばならぬとも思つた。

然かし其を春子（弱い女……）に迄自覺させると云ふ事は信一には何となく悲慘の樣に思はれて今迄親のそばであまやかされて居た春子が自分と一所にこんな所へ流てきてこんな風に泣てるのかと思ふと又此上もなく可愛想にもあはれにもなつて來てどうにかして今迄の樣に樂しいスヰートな心持を取り返そうと思ひ返した。

信一はつッと起き返つて「春さん……」とやさしく呼んで見たがきこえぬのか返事がない「春さん」と再び呼んで見たがやはり春子は動かうともしなかつた。信一はソッとふとんの下から手をのばして女の手をにぎつて見た。

春子はさつきからうつぷして居たがフト二人の戀の成立た當時の事が色々と頭に浮んで來て其當時の二人の對話が如何に美しく善良で夢の樣であつたか。その時の若々しい如何にも快活で頼しそうな信一の顏が思出

されて今の力の無いいつも浮かない顔ばかりして居る此頃とをくらべて其春のみぢかひ事を悲しんで居たがふと男の手が我が手にふれると何んだか急に悲しくなつてきて涙が一時に出て來て容易には聲も出なかつた。

「家に居たつてつまらないぢやないか春さん散歩にでも行うか、え今日は風もない様だ」

「えーどつかへ行つて見ませうか」とは云つたが春子は中々涙が止まらなかつた。

一月末の日をあびながら門口の松かざりがとりのけられたから急に淋しくなつた様な町を春子は泣顔を見られまいとうつむいて二人は別々の事を考へながら歩いた。



(天賞) ごばん跡　水戸　玉川すま子

この二人の男と女とが感じて居る心持は、可成、痛切な問題だ。戀に倦んだ心持、その戀に對して殘つて居る記憶の惰力。それらの生きた心持がそつくり書かれて居る。自分はこの作を佳作と信ずる。(評)

○子クタイ　(地賞)

土佐　寂靜子

硝子戸をビシャンと閉て洗朱の包を小脇に狹んでツンと氣取つた風に出て行つたハイカラな女學生の後見送つて美沙子はホッと息を吐いた、まだ此家へ嫁ない前の事、三年前の事が浮んだのだ、或時は遠い〱古の様に或る時はつい此間の様に胸に浮ぶ。

三年前美沙子が結婚したのは田川と云つて慶應出の其頃女學校の地歴を受持つて居た。田川が廿六で美

沙子が十八の秋だつた、田川は兄妹も兩親も無い孤兒で伯父の家に同居してたが結婚してから女學校から五六丁離れた處に小ぢんまりとした家を持つた。

土曜日や日曜日には四五人の紫紺の袴がドヤ〳〵と訪問れる、美沙子は小學校を卒業と茶の湯や裁縫を習つたので女學生の中には友達は無かつたが大方同年や年上のもあつた。此等の人と美沙子は、茶菓子を出す事も忘れて遊んだ。「オイ美沙お茶を出さんか」夫の苦々しい聲に顏赤らめて立つたものだ、美沙子が立つとドッと何か云つて笑ふ、夫の聲の混じつた其笑聲にも格別美沙子は氣を止めなかつた。來る若い女學生らが自分には成るつたけ語るのを避けて夫に夫にと話しかける、けれどこんな事は氣にもかけなかつた。

初めの一月近くは唯浮〳〵して過ぎた、樂しい、嬉しいと摘んで示す事は出來なかつたけれど、夫の擧動や言語に少しも疑の目を入れる事は無つた。

急に女學生等が來訪なくなつた、同時に四時迄にはきつと歸る夫が日暮れ頃てなくちやあ歸らなくなつた。

何故？美沙子の胸は妙に轟いた、夫は何だかソワ〳〵してる樣に思ふ、何時だつたか、女學校では一二を爭ふハイカラの庭球の撰手の從妹の文樣が、毎日日暮てなくちやあ歸らないのに何故か早く歸り出したので、「貴女此頃お歸が早くなつたわ、何樣したの？」問ふと「されば、」と例の可笑しな身振りして「學校に殘つて居つて面白くもない英語の先生の加藤先生がね、先日若い奥樣をお貰いなすつてからさつぱり殘つて居らしやらなくなつたもの、そりや可笑しいのよ放課を待兼ねた樣にお歸りなさるのよ、ホヽヽ余程大事の奥樣と見えるわ」笑つて居た事を思出した、それだのに自分の夫は何樣した事だらう!?家庭の事、若い妻……自分……の事は思はないだらうか、美沙子は晩の膳立をしながら此樣事を思つては妬しい〳〵思ひに胸が燃えた捨てられた妻と云ふ樣な物の不安が湧く。

或る朝だつた。お給仕をして居る時、御飯の盛つたのを出すのに手に取らんから何樣したのかと顏を仰ぐとじつと空を見詰めた儘、微笑んで居た、「あら貴方何樣遊ばして？面白い事でもあつて？ホヽヽ」美沙子はわざとニッコリした、夫は樂しい夢から覺めて詰まらない現實に返つた時の苦い失望の色を遺憾なく表はしてゐた。無邪氣らしい笑を見せた美沙子は「夫はきつと他に快樂を求めてゐるんだ!!」と鋭く夫の顏色を讀んだ。口惜しい、情無い思妬ましい思が胸に溢れて熱い

涙が滴れた。

洋燈の掃除の仕方が惡いと、少ばかり曇つた灯をみて怒つた夜だつた、夫の着物を疊んで居ると、「アッ待つた!!、机に倚つてた夫は飛んで來て突然着物を奪つた。美沙子は不意を打たれて茫然してると、夫はコツ〳〵袂をさぐつて居たが「ウン無い筈だ、ハヽヽ」笑つて、

「何樣したの?」と吃驚して居る美沙子には目もかけず、机の中から手紙樣の物を出して讀んでゐた、美沙子は其顏を恨めしそうに見て涙の出るのも知らなかつた。それから又此樣事もあつた。雨の日は和服を着て行くのが通常だつた。夫がよく「此着物を着ると若う見えるつてほんとうかい、」ともう雨の降る度云ふので

「さあ、何樣ですかね、何誰が仰言いましたの?」と問ふと「何樣ですかね、なんてお前は冷淡だ、それはお前の樣な冷淡ぢや無い人が云つたのさ。」此樣な時は快活く笑ふ、それが美沙子の胸には悲しく〳〵響くので。其着物は銘仙だつた。其雨の日も此着物を出そうと思つたがふと綻びてたのを思出して他のを持つてゆくと、「銘仙は何樣したんだ何綻びてる、よく御覽氣が付かんね、其れでも妻の役目が勤まつてる氣かい、默つてゝも縫つて呉れる人があるよハヽヽ。」よく見ると綻びは奇麗に縫はれてあつた。たしか此雨が上つた時分だつた。出勤の夫を見送つて「何だか若く見える樣だ」と思つた、其歸りよく見るとネクタイが變つて居た、美沙子はギヨッとした、暫く夫を見詰めた儘突立つた、「何樣したのだ」夫は快げに笑つた、美沙子はニッコリともしなかつた、余りだ!! キッと唇をかんで熱い涙を飲み込んだ、其夜は「心地が惡うございますから」と云つて早く寢た、之迄胸に包んだ恨みのありつたけを書いて自殺してやらうか」とも思つた、一時頃だつた、夫が枕頭へ來て何か云つて居たが美沙子は無言つてゐた。

今はもう他家の主婦となつてゐる美沙子は、三年前の此樣事を胸に繰返して、今でも何樣しても忘れられない鼠色の朱珍のネクタイ!! 今日、今の女學生の買つて行つたのと同じ柄のだつた「これネクタイに好いかしらね貴女」と云はれた時美沙子はギヨッとして、自分の夫に送つた人を思つた、今日買つて行つたネクタイを送る人、送られる人、蔭れて胸を痛めてる人、そんな事を想像した。

（評）何處かにチヤーミングな處がある。男の行爲が少し不自然に感じられた、行爲が不自然なのではなく、書き方に誇張したあとがあるからだ。

○羞恥（入賞）

名古屋　月　靈子

明日は如何しても學校へは行くまい、と春子は枕へ就いてからも其那事ばかり思つて居た。抑へると手に餘る程ふつくらとした乳を苦にしい〳〵、肉付きの好い體を彼方此方寢返りしながら、考へると羞かしいので堪らなくなつた。

遂ひ五六日前の事だつた。其の日は朝から白いものがチラ〳〵して、殊に風さへ可成に荒んだので、午前の學課が終へると、皆申し合せたやうに、作法室の大火鉢に集まつた。女學校といへば何所でもさうだろうが、上級生となると下級生から絶對の權利を認められて居るもので、其の日なぞも先に小さい者が、重なり合ふやうにして、火鉢を取りまいて居たのだつたが、一人二人と大きい者が增へるにつれて、何時の間にか孤鼠〳〵と姿を消して了つた。て結局大火鉢も期せずして、上級生の專有となつた譯だ。

春子の級には青山と云ふ雄辯家があつた。其の日も例の通り青山さんを中心にして、種々の話が出た。運動家の淺岡、佐藤、井田と云ふ、さう云ふ連中も珍らしく顏を揃えた。

不偶話が可笑な方に逸れた。血の湧く若い女の群は嚴重な校則の下にも、這うして秘かに顏を染めるやうな事を、お互ひに耳にして見たいと云ふやうな氣持があつた。

と、突然

『赤坊なんておかしいわねえ、如何して彼那大きなものが……』と、一人が失笑したいやうな聲で這那事を言ひ出したので、待つて居たとばかりに、皆一度にどつと笑ひ崩れて了つた。

其の中で春子一人怪訝な顏をして、隅の方に小さくなつて居た。

『まあ、館林さんの眞面目くさつて、』と、誰かゞ云ふと再た思ひ出したやうに皆クス〳〵笑ふ。春子は眞赤になつて了つた。自分だつて既う十八だもの、其那事のわからなからい筈がない。けれど羞かしい、どうしても羞かしい、さうした事を耳にするだけでも、何んだか烈く處女の純潔を傷つけるやうな氣がする。で、春子は飽くまでも知らない顏をして、何氣なく座を立つた。

と、

『おかしな方ね……』

『ちよいと……昔うからよ』

『……、あれに？さう、さうでせうねえ』

這那私語が途切れ〳〵に春子の耳に這入つて來た。春子ははつとして走るやうにして廊下へ出た。

明日は恰度體格檢査の日に當つた。春子は前の日の事と、明日の事とを思ひ煩らつて、如何しても寝付かれなかつた。福田先生——若い男の——と杉山さん——校醫——の前で、其れから口の悪い友達の十人も二十人も詰めかけて居る所で肌を脱ぐ——あゝ何といふ嫌な事だらう、屹度青山さんなぞ『春子さんのお乳、こんなよ』なんて皆に吹聽するに違ひない、そして『あんなにおぽこのやうな風したつて……』なんて



（地賞）　朝　青森市　松尾千代子

云ふに違ひない――。

到頭時計が十二時を打つた。其れでも春子はまだ、恁ふした幼ない羞恥に囚へられて、とても〳〵眠れそうもなかつた。

幼い心持だが、作りものでないのが嬉しい、短篇としてのまとまり方もいゝ。たゞ刀が人の胸に切り込まぬやうな氣がする。（評）

【秀逸】

○その夜

横濱市　松田むめの

お若はかるた會の歸りを、其店の吉どんと云ふのに送られて歸た。吉どんはお若の家の門口迄來ると、威勢よく格子をあけ乍ら「只今お送りしましたよ、お若さんを確かにお送申しましたよつ」こう念を押す樣に可成り強い聲で云て見たが家の者が一向出て來相な氣勢も見えなかつた。それでお若は、「皆寢たと見えるわ、もう大丈夫よ、すまなかつたわね、本統に有難う、えゝではよろしくね、寒いのにすみませんでした、氣をつけてつてね：：」斜めに身體を半分格子の中へ入て白い小頸を傾げ乍ら、心からすまなかつたらしい表情を見せた。吉どんは厭やで堪らなかつたのを、無理に送らねばならぬ事になつたので仕方なしに、送て來たのではあつたが、今夜初めてお若と歩いて初めて直接に口をきいて、而して初めて何と云ふ慕しい子だろうと思ひ出したで人通りのない、夜更けの街を却て、幸と思はせた程お若の事のみ思て歸た。

其夜お若は床へ就くと、急に今迄の華やかな醉はされる樣な場所から、靜まりかへつた我家へ歸て、ぢつと落ちついた故でか、神經が妙に高ぶつて、急には眠りに就けなかつた。それでこう云ふ時には、いつもする樣に、冷い頰を軟い夜具の襟に埋めて、何か想を一ツの事に、注集し樣とつとめた。でお若は今宵の夢の樣な歡樂の味を、もう一度かみしめて、醉へるものなら醉て見たい：：こう思て胸一杯繰りひろげて見樣としたが、何か譯のわからない――否判らせたら解るであろうがそれを考へたくなかつた――それが邪魔して、變に心が淋しい方にそれて了ふ。何故此頃は此麼になつたのだろう。何故美しい夢の世界に死ぬ迄住でゐる事は出來ないのだろう。否出來てもさせてくれないのだあつ折角美しい夢に醉てるものを、無理に苦い現實に突込まうと努める人間がわからない。厭やだ厭やだ、考へたくない。考へたくはないけれど：：もう見えてるぢやないか――それだから私は、此麼ぢゝむさい、いじけた根性が出て來たのだ。お若はこう思

ふと、何となく泣きたい、泣いたらいゝだろうと思ふ樣な氣になつた、而してそつと夜具をづらして、ぽうと赤くなつた頰を冷ひ空氣にさらして、ぽつちりした黑い大きな眼を明けた。するとすや／＼小さな寢息を立てゝ眠てゐる十五になつた妹が、白く丸い顏が、うす暗い中に、くつきり浮んで見える。お若はそれを見てゐて、自分よりも、五年も後から生れた此妹の身が羨やましい樣な氣がされた。廿歲……こう考へて見た計りでも情けない。

廿歲いゝぢやないか、何だかさくから、生き／＼した、さも張りつめた胸を持た、若い子と云ふ樣にもきこえる年齡の名だ。けれど併しそれは廿になつた子の云ふ事ではない、もつと老けた人々が、恰度廿歲と云ふ若い盛りであつた……—と語るのだ……お若はあの一日狂奔して、疲れた身體を机の前へグッタリ据えて只一枚になつた日記の紙に向つた。去年の大晦日の夜の、あの泣くにも泣かれぬ淋しい感想を思ひ出さぬ譯には行かなかつた。あゝ十代が逝く、もう今宵一夜の短時間を眠て醒めた時には、十代の娘ではなくなるのだと……には違ひないが、其時お若は其悲しいと云ふ自分の心に反抗して、悲しいものか、年齡等何であらう、只標準だ人間の標準に年齡等と名をつけたのだ。だから廿になつても卅になつても若く見えたら、見せておこう、我は屹度若い心でゐたい——！こう願たけが——それは余りに世間を知らぬ儚い空想であつた。

お若の母は此頃になつて、不思議な位お若に對して束縛した。而して二言目には、年を考へろと云ふ。それ許りなら未だよかつたに、もう大方きまりかけたと云ふ緣談迄聞かされた時の悲しい愕きと云たら、けれどもお若は決して反抗し樣とは思はなかつた。而して嫁ぐ迄の自分が自分の命が。こう思ふから其事に就ては考へまひ、よし其機が眼の前に迫て來る迄も、華やかな胸若い命を長く保せ度い。とは思ふけれど、如何に心からのお可笑さに、高い笑ひをしてゐる時にも、不圖其事を思て、云はう樣なき落寞の感に打たれる。つい此間迄の自分、只現在の快樂に醉はされてゐた浮草の樣な心で今少し居たかつた。でお若は此頃になつて、愕く程我儘になつた。蓮葉だ浮氣者だと八方からの攻擊を、平氣冷笑して受けて、瞬間の快樂を求めてゐた。で誰れに對するにても、其顏よりも、態度を複雜した表情の巧さに、大方の人が自分を愛してくれると云ふ儚い誇を持てゐた。「だから、辛ひとか悲しいと

か、考へる丈けでも損なのだ。それよりも、嫁ぐ日の前迄も、處女らしい、若い心を持て居樣。」――其夜お若は眠られぬ儘に、靜と起き出て、誰れにと云ふ當てもなく、長い手紙を書いて見た。

この作は男の心持が面白く書けて居る。女のセンチメンタルな抒情はくどすぎる。且つ古い。この兩方の心をチヤンと並べて書いたらもつと面白く出來たに。

○會費

本郷　筆子

薔薇の香や、三色菫の匂ひに蒸されたる、花室に夢見る樣な心地は、もう再び捕へる事が出來なかつた。私も又戀より覺めた。そして旅行中の兄に這麼手紙を送つた。

昨日池内先生追悼會を宅で開きました、來會者僅か八名、去るものは日々に疎しとか、全くですわね兄樣。それに兄樣でも被入つたら、少しは振つたかも知れませんが、何しろ、第一會より二會三會と寂れて行く、矢張世の中なんてせうか、私は涙がこぼれます。同時に先生の主義主張が、斯くの如くにして世を遠ざかりはすまいかと、私は恐れるので御座います。でも然し私等は永遠に先生を忘れますまい、ね、兄樣。就ては私、藤森さんとの間は今日限り全く隔離して了ひましたよ、吃驚なさるでしやう、加之に原因と云つたら、兒戯に等しい馬鹿げた事からなのですが、私は厭になりましたの、兄樣と藤森さんとは無二の親友で御座いましたね、私も又あの方には少なからず尊意を拂つて御交際して居りましたくらい……兄樣に申上るのもちと變ですが、ある時は這麼事もありました。

草が匂ふ野道を三河島から町屋へ、先生の遺骨をあげに、藤森さんと連立つてまゐりました。石地藏の道しるべから曲ると、淺黄のつやゝかな空へ、によつきりと立つ煙突から、どす黒い煙りがむら／＼と廣がつてゆく、あゝあれは火葬場です。池内先生もあの中で燒れた、而已ならず日々人類の遺骸を、永劫に滅して了ふ烟だと、私は本當に悲哀を感じました。折も折、菜の花畑を横ぎつて、空駕を舁いだ葬式の歸りが來る、白むくの小袖、駕傍の蓮の造花、此時春の日影までうつとりと寂れて見えました。私は死といふ事を痛切に思つたのです。私が死だら矢張駕に入れられて、この道を舁がれて行くのですね、何だか妙な氣持です。息が絶えて土の中へ這入つたら、什麼でしやう、私時々這麼に思ふのです、凝と眼を閉じて耳をふさいで、何の物音も聞くまいといふ意氣組て、夜具の中へもぐり

込んでると、たゞ低くごう〳〵と響がします、あんな風ぢやあるまいかなんて……そう云ふ風でしたから、偶と死の幻影に追はれた樣に恐怖を引起して、いつか一間も先になつた藤森さんに馳けて行きました。私は自身が不安て〳〵たまらなく何とか斯う、たよりほしげてあつたところ、「妙さん」と藤森さんは此方をお向きになつた、濃い眉、白い頰、「え……」と傍へよつた時、私は覺えず胸をおどらせました。
戀？あゝそれは戀でしやうか兄樣。そうなら

夕やけ（入賞）　京橋　くに子



果敢ないものでしたわね、けれど、その後うつゝ心地で歡樂を思ふて居つたのですから、つまりは戀ですかね、だがそれは、兄樣も許して被入つたのでしたつけ……。
先刻、追悼會の總勘定を致しました、藤森さんは私の手控へを見て、「こりやあ、惠來くかゝつた」と一生懸命手帳へ數字をならべて、加算をして居ましたつけ、此度は丁寧に控書を又見始めました、すると「何てすね、油代の十錢……油は五

錢あつたら可でしやう……」とこぎるのです、そして此度の會迄には殘さなけりやならないと、會費ばかり氣にして被入る、私は何だかむつとして、「あ丶さうですか」と云つたぎり、ふいと其場をはづしました、後で藤森さんは母樣と遣つて居た樣です、兄樣、些細な事ですけれど、私は面白くありませんのです。兄樣が常々仰る「藤森は嚴密だ」とは、かういふ所ですか、私、男らしくないと思ひましたの、そして、藤森さんもこんな了見ぢや成功しさうもないわと感じて了つたのです、戀と愛もかう相手を鑑識する樣になつては、もう終ひでしやう。私は到底あの方と共に行けさうもありませんわ、だつてこんな詰らぬ事ですらですもの……。私は歡樂からさめました、俄に又藤森さんと遠ざかつた樣に感じられます。

兄樣御前に。

この作者の前の作には感心したが、この作には感心しない。この女主人公の感情の不自然な變化を書くのに、藝術的にしつかりと眺めてない。そのために「たゞごと」に過ぎないものとなつた。（評）

○雨の音

横濱　矢野きみ子

「今晩は……」

暖かい晩、二三日續けて降つた雨に、大分惡い道をものともせず、由子はおさよの家を訪れた。

星はこぼれる程澤山、美しい光を放つて、月のない空をうつとり照らしてゐる。時たま吹く風は、花の吹くのももう直きだと頷かせるやうに暖かい。――

格子をあけて、障子に手をかけた時、由子は幾足かある下駄に眼をつけて、一寸ためらつた。

「お這入りなさいまし」

とおさよは由子と知つて、内から言葉をかけた。すると障子が鳴る。――由子は上つた。而して、

「今晩は……。お邪魔に上りましたのよ」

と故意とらしく挨拶をする。

長火鉢の向ふにはおさよが、長煙管を持つてゐる。此方には二三度此家で顏を逢はせた事のある二十五六の男と、他に二人ばかりゐた。

「さあどうぞもつと此方へ……」

おさよがすゝめてくれた蒲團に由子は半ば膝をのせて、

「おばさん、あの人來なくつて？」

と氣を兼ねるやうに、小聲できいて、心持ち顏を染めた。

おさよは三十ばかり、肥つて醜い女ではあるが、思

ひやりのある性で、由子が思つてゐる永田と言ふ男に、時たま自分の家で逢はせてやるのである。――
おさよも他の人には知らせたくないやうに、
「未だ‥‥今夜來ると言つたの？‥‥」
と言ひつゝ、茶を入れてくれた。
他の人は默つてゐる。――窓の障子は開けられて、庭の木が黒く見える。ずつと先きの、大きな樹の聳えてゐるのが、何だか月のない空に對して、氣味の惡い感じを起こさせる。と、一寸は文學思想のある由子は斯麼事を思つた。

長火鉢の男も他の人も歸へつて、八時も過ぎ、九時にも近付いたが、由子の待つ永田は來ない。
「どうしたのでせう」
と二人顔見合せては默つてゐたが、由子の胸には恐ろしいものが湧いて來た。自分にも其れが何物であるかは知り得ない。只、不安のやうで――胸さはぎがするのである。
九時が鳴ると由子は、おさよのもう少しゐたらばと言ふ言葉もきかず、歸へる事にした。
永田さんも來ないし、良人でもまだ歸へつて來ない‥‥今夜はどうしたのだらう‥‥」
おさよは誰に言ふともなしに斯樣言つて、表まで由子を送つた。

先夜は失禮しました。つい心にもない事をしてしまつて申譯がない。――困つた事が出來てしまつた。私は神戸の支店詰を命ぜられて、三週間以内には是非行かねばならない。どうしたものだらうか。――何しろ〇日には、又おさよさんの處へね。きつと此度は待つてゐるから‥‥。

由さまへ　　　　　　　　永田

由子は勤めから歸へり、此手紙を見てびつくりしてしまつた。今更永田さんだつて嘘言を言ふわけもない。本當とすれば別れなければ‥‥。おさよさん所での胸騒ぎも、斯麼事の知らせであつたのだ。――食事もすゝまず由子は考へた。母は心配して、如何かしたのと聞いたが、何とも答へず、早く床に就いた。
約束の日は、雨であつたが、勤めの休みを幸ひ、二時頃行くと、もう永田は來てゐた。
此前に變つて酷く寒い。暗らさも暗らし、嫌やな日である。――永田もおさよも炬燵に這入つてゐた。お

さよの連合は今日も仕事に出てゐない。

由子はおさよの家へ來る前に、もう一つ恐ろしい事が身にせまつて來たのを覺えて、どうしやうかと、一人胸をいためた。――手紙を貰つた二日目あたりから、身體が變つたのである。

何時ものはつきりした、色の好いのに似ず、淋しい顏付をして永田の顏を見た時、

「どうしたの……」

と永田はやさしくきいた。

雨の音、風も少しまざつて來たらしい。――おさよは炬燵から出て、茶を入れに立つた。

由子は眼元に悲し氣の笑ひを見せたなり默つて、炬燵へ這入つた。そしてしつかり永田の手を握つて、顏を掛蒲團に埋めた。永田は其樣をじつと見てゐたが、之れも默つて、あらぬ方に眼をうつした

由子はそれと決つたらしい身體、永田との別れ――それ等の事を何と言はうかと、心配に胸がせまつて、顏を埋めたまゝ泣いた。すゝり泣きをした。

雨の音、風の聲は漸くはげしくなつた。――

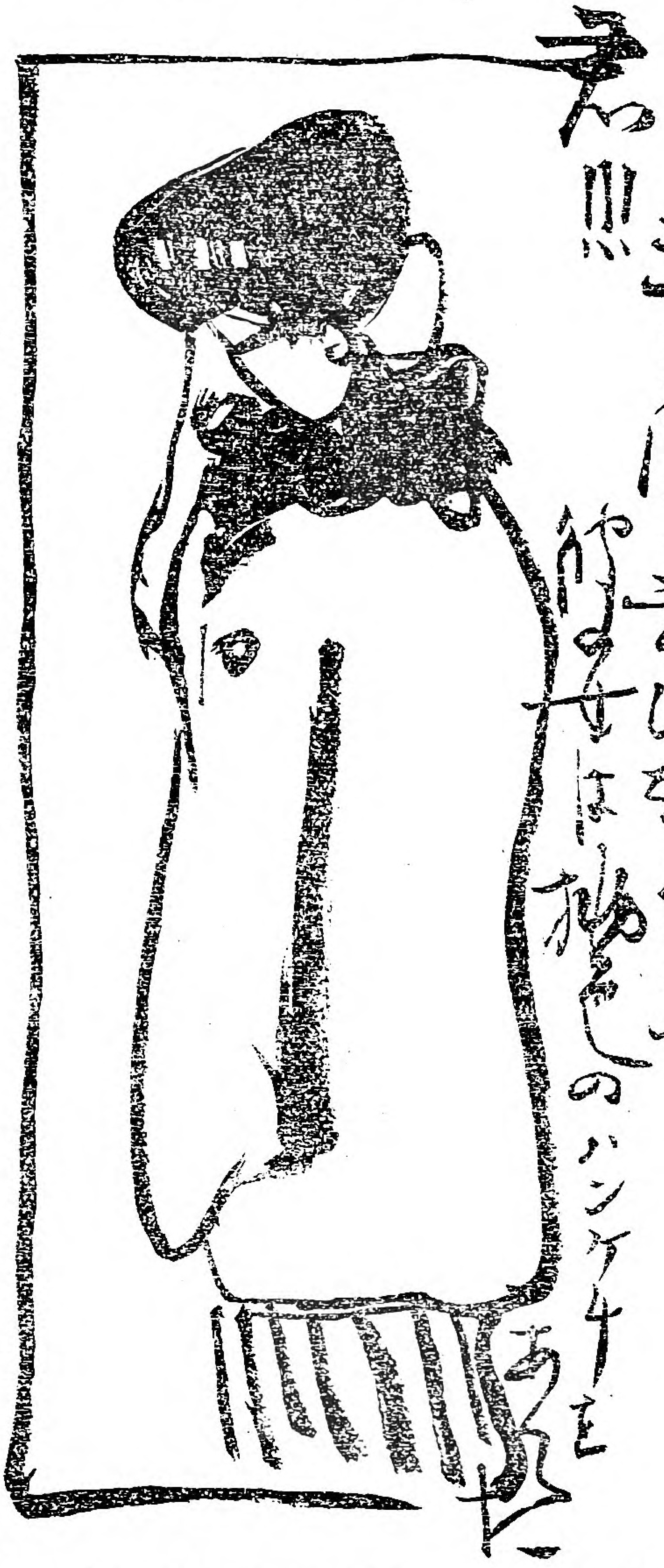
（評）前半の分に出て居る空氣が面白い。たゞ全體としては幼稚な作だ。

○歸郷のまへ

神奈川町　松田妙子

お露は其を考へると耐まらなく淋しかつた。やりかけの裁縫をそのまゝ、思出した樣にふいと立て足音輕く裏二階を上て東向の高い物干場に立つた。低く立並んだ家の屋根に赤い夕日が弱々とてらしてた。昨日洗つた肌着やネルの厚ボツタイ腰卷が冷たい空氣にさらされてもうカラ〳〵に乾いてた。其れを肉附の好い腕をさしのべて、器用に竿からはづして片手にかゝへて了ふ、それ迄殆ど無意識に手をうごかして居つたのだつた。『お苦勞樣ね。』と後に思がけぬ義從姉の幹枝が格好の好い身體をスラリと立て笑てた。『まあ幹さん。』ふりむいて顏を合せてお互に意味もなく笑合た。『お稽古すんだの？』長唄の本を入れたつばくろ口を持てる幹枝を顧みてお露は斯う云た。『ゑゝもう。』『さむいのに感心ね。』『でせう。』と云て大きい眼に懷こい表情をみせた。二人は云合せた樣に干場の欄に並んで背をもたせた。お露は空想勝な瞳をあげて夕暮迫る街の樣を眺め乍ら『あゝ明日の今頃は故郷だわ。』今の今迄考へてた其事をふともらした。心細い聲だつた。『又花の頃にや出京ていらしやいよ。』『え有難う然雖とても其麽譯に

やいかないわ、好いわ田舍だつて住めば都て云いますもの、殊に私の樣な反抗心の強い貧乏人は都會はいけないわ、周圍を眺めると苦しくつて仕方がないんですもの。』『およしなさいよお露さんは、何故其那事云度いの？』やさしい眼に睨む眞似をして見せた。『でも私眞面目よ。』とお露は大きい黒瞳を渠に注いだ、『まあ好いわよ、それよりね今夜で露さんともお別れだからつて先刻圭さんから電話で今夜行て琵琶をきかして上げますつて、ね嬉しいてせう。』幹枝はお露の手を堅く握つてふつてみた。お露は思ひ思てた其人の名を云はれて小さな胸はワク〲と苦しい程騷いだ、『琵琶？久振だこと。』出來る限りの平静な態度で斯う云た。『露さん、嬉しいと思たら何とか御禮を云ふものよ。』『まあ什うして？お互に好きな物を聽かして頂くのは嬉しいけど何も此方から頼だ譯ではなしきかして下さるのは先樣のお勝手ぢあないの。』お可笑な程眞面目な口調で斯う云つて快よげに口を結だ、此場合意地にも自分の弱い心をみせ度くなかつた、實際其麽問題に思なやんでる



別るゝ人　本郷秋田健子

時、それを他人から推則されて兎や斯云はれる程侮辱を感ずる事、自分の誇を傷ける事はないとまで思てる人なのだつた。『貴女は反抗心が強いね、でも好いわ私だつてそうよ。』苦にもせづ笑て語る幹枝の態度をお露は矢張り世間に馴れてるのだと思て今さらの樣に感心してきいた。見返る街の店頭に電氣の燈の華かに寫る頃、二人は思ひ〱の事を考へて干場を下りた。其夜は殊に寒氣が强かつた。幹枝の繼母の忍は少さな身體に厚綿の刎織を二枚も重ねてギコチなさ想な風をしてた。其でも獨りで歸郷支度をしてるお露の傍へ行つては七くどく世話をやいたり自分自身にも何か忙はしげにコマ〱と身體を動かしてた。お露が揃へた品を小形のトランクへ詰めてる時、忍はコソ〱と入つて來てお露の耳端に唇を押つけて『これ内密だよ。』と右の袂から縮緬の丸絎の帶止を出してトランクの隅へ突込だ、お露は何ともいへぬ暗い淋しい心地を味つた。早くから母に別れた渠は實子を持たぬ此の不幸な叔母が蔭に表に注いてくれる愛の泉をどれ程嬉しく汲んだろう、然それを感ずる毎に自分の淋しい不幸な境遇を明暸にされる樣で自負心の强い渠には耐え難く哀しかつた。其夜宵から來た圭治は、更るまで遊て行た、琵琶もやつた。體質の弱い渠は僅か許しの酒量に顏を赤くして吐く息も苦しげだつた、お露が進める冷たい蜜柑の汁を貪る樣に汲つては語た。お露にとつて此夜程はげしい强い歡樂と共に底深い哀愁を味はつた事はなかつた。其人が明かるい座敷の正面に座して、姿勢正しく琵琶をかゝへ、靜かに眼を閉ぢて撥を當て樣とする前に『貴女の好きなの、物狂』と云つて力の籠た眼を向けられた時若い胸の血は極度に燃えた。戀人がした其瞬間の表情は久い間を渠が歡樂の香に醉ふべく充分だつた、今度お目にかゝるのは何頃でせう？と男が氣遣しげにゆつた時、何故もつと意味深い答をしなかつたろう、別れる前に何か渠を深く感動させる樣な、はげしい印象を腦の底に打込てゞもをきたかつた『あゝもう別れて了た。』玄關に送出して自分の室へ入つた時得も云はれぬ寂い遣瀨ない悲愁に沈だ。其夜床へ入つて枕の上でした空想は愕ろく程大膽であつた。翌日新橋まで送て來た幹枝に散々迷た末何かの話の序を利用て『圭さんは×町何番地でしたつけ。』ときいた。『さあ何番地だつたか私もうつかりしてゝ。』とまだ長く要するに忘れたと云ふ事を例の親切らしい詞付で丁寧に述べるのをお露はたまらなく口惜い樣なイラ〱した

心持できいた。

ごちやついて居る。その上材料も見方も古い。（評）

○お房　　牛込みち子

妹のお房を一人殘して良一が歸省してから彼是四十日もたつた。兄が歸省する一月程前上京したばかりのお房には、打解けて話すほどの友人のある筈はなし、といつて訪ねていつて語る宅も廣い東京だけども只の一軒もなかつた、てお房はずいぶん寂しい思ひて一日送りに四十日も暮して來た、五日め位にはきつと泣く樣に上京の催促は兄にした、けども胃病持の兄は、「淋しからうが、も少しの間保養さしてくれ、」といふことを謝罪るやうにいつも書いてよこすのだつた、其内にとう〳〵一月は過ぎた、お房は毎夕戸締りをする前に、水をバケツと手桶とに一杯づつ汲んどくやうにしてゐた、其は此間家主の奥樣が、朝は井戸綱が氷つて水が汲み難いからと、態々手桶を持つて來て親切にいつてくれてからの事だ、今夕も形の樣に汲みに出た、序に郵便受の中へ手を入れて、やがて一人にこ〳〵しながら一本の手紙を懷に入れ、急いで歸つた、無論、兄からの便で、「いよ〳〵此七日頃に上京する事に決まつた、」といふ嬉しい文句が一番に見えた、其からは滑稽な兄の亂筆で、讀めばお房が獨笑ねばならん樣な事ばかりを而も籔棒式に書いてあつた、お房には此上もない懷しい香の梅の花も四五輪卷込めてくれてあつた、お房は又所々をひろひ讀して見た、其所には——ところてお土產は何？無論餅も持つていくさ、何とて、一にも二にもお房思ひのお母樣だから此點はあてにして待つてゐなさい、其から宮下の義一君が珍らしく歸省してね愉快だつたよ一昨日立つたばかしだ、房さんの上京を聞いて丸い眼をしてゐたよ、猶義一君からはいゝ物をことづかつてるが此も上京の上の事としようお房は耳までが赤くなつた、そして包みきれない樣な笑がこぼれた、机の上に落ちてゐた、さつきの梅の花を手にして我しらず接吻した、もう五日だ、四日だ、と思つてお房は一人ほく〳〵して待つた、言つた通り七日の午後兄の良一は上京した、お房は夢中になつて故鄉の消息を聞いた、當にしてゐたより以上の當にしてゐない友禪の長襦袢までが入つてゐたので、お房は飛び立つ樣によろこんだ、何はさておき、義一からことづかつた品はと見れば、細長い新聞でくるんだ箱みたいなものだつた、開けて見たら橫笛だ、お房は取

り上げて口唇へそつとあてて見たが妙に顫へて吹けなかつた「オホヽヽ此見て去年の夏を思ひ出すわ、」とちらりと兄を見たが良一は默つて寛ぎきつたといふ樣に目を塞いでゐた、「ねえ兄さん、どうして此を私によこしたんだらう？あの時なんかあれほど重寶がつて僕の生命だなんて勿體つけてゐたに……」とお房は頰べたの赤い所を掌で抑へながら依然目をつぶつてる兄を心足らず見守つた、良一は兩手を後腦で組んで肱で耳の所をかかへたまま、ごろりと横になつた、「お房さんお前と一緒だつたかね、須崎の娘と女學校は――さうか、義一君も遂々義理とか、ひつぱつたとかで押しつけ往生に須崎へ養子にいく事に決まちやつた、」と例の大きな聲で話した、お房は横笛をトンと取り落した堪えきれず障子の外へ出て椽側に立つた、そして袖口を嚙みしめたなり身動きもせず、ほろ〳〵と涙をこぼして居た。

もつと新しい心持で書けないものですか？。

心ありてわが家をめぐり降る如くこの夜の雨のあたゝかきかな
しづやかにさむれば青き幻のかの大空にかへりぬるかな
たそがれの落葉ふる野に身一つを放たれてある心地するかな

園

日光をも人目をも、その洋傘に避けた二人は、美しい頰の觸れるばかり寄り合つたが、「如何だ、見られまい！」と一人は態と太い聲で言つて、頸を縮めて笑へば、「あら聞えてよ藤子さん：……」と一人は氣遣はしげに後を振向いた。「關はないわ。此樣な事を氣にしたら、他日社會へ出てから、何うする事も出來ないわ……貴女だつて、これから書生するんじやありませんか！」「貴女は本當に活潑ねえ！私なんぞには到底も……。」「可厭な順子樣！貴女の樣に温和い女は無いわ、今の談だつてさうよ、私が貴女なら無事ぢや置かないわ、預つた金を返さないなんて……、あの禿頭、叩割つても取つて見せるわ。」「大變な事を仰しやるわれえ、」と笑つて、「惡いわ、貴女の姉婿さんだのに。」「姉婿さんだつて、厭な事ッた！彼樣な大言家！彼樣な敗德者！私は子供の時代から嫌いよ、姉樣とも、姉婿さんとも、私只の一度だつて呼んだ事はないわ。」「あらだつて姉樣は本當の姉さんぢやありませんか？」「本當だつて噓だつて、自分の嫌いな者に、姉樣なんて敬語を拂ふ義務は無いわ！」と言つて大きな眼に笑を湛へ、「私の同胞は、兄の政男に姉の順子、それだけよ。」「あんな事を……藤子さんて言へば。」と紅くなつた。「だつて未來の姉さんだから……」

（天外——コブシ）

詩



河井醉茗選

○白い花（地賞）

横濱　せゝらぎ

戀人の文を枯れかゝつた艸の下に埋めた。若くさが萌える日に、紅い花となつて咲くだらふとおもつて少女は野を去つた。
春がきた。少女は胸をかゝへて野にきてみた。柔い草のなかをたづねたけれど、紅い花は咲かなかつた。
次の年も、少女は小さい希望を抱いて野にきたけれど、紅い花は遂に咲かなかつた。
三度目の春――少女が新しき人に嫁く春はきた、
雨の降る日、草の根も土もしつとり
ぬれて、
文を埋めたあたりに、
小さい白い花がうつむき勝ちに、はじめて咲いた。
けれどをとめはそれを知るときは來なかつた。

（評）誰が見ても女らしい詩の姿、愛情を惹く作だ

○春來る前（人賞）

岡山　はる子

春僅かにわれらを音づれ
すべてのものやうやく眼ざめむとす
あゝ、しづこゝろなき日にまた夜に
忘れがたきは昔の戀の記憶なり。
半夜、LAMPの灯影に
すゞしき君が瞳をみつめしとき、
やゝ疲れたるKISSの腕の
いつとなく離れゆくとき、
われは知れりき、われらの前に
甘へ寄る幸あるを。
されども
あはれ、されども
春きたり、成年となる掌に
殘るはつめたき哀傷と寂寞のみ……
あゝ春の日、華かに道路をあゆみ

又樹かげに寄り添ふ少年よ、少女よ、
PUREなる汝らよ、
夢幻と
現實と
束のまのあとの悲哀を
われらたゞ想ふにもたへざるを。

詩才があると云ふだけて格別の事もない、此詩には女の香が少しもない。(評)

【秀逸】

○海にて　XYZ

太陽は一條の溫みをもちて
磯の砂道によろぼひぬ。
みはるかす大海原の一部分、
波たゆく、ゆたに重なり
おほらかにうたを誦しぬ、
あゝ此時よ！我胸いづこまでも、
かけりゆく術をさとりて
今はるか靈のゆくへよ――
そはいづこ――仰ぎみぬ。
海青く空みどり、只ひろく只はるか
おごそかにさびしく遠し
はて遠き水平線のかなた
しらじらと緣うすれて
雲橫に流れけり。
いづこともなく小さき魂
音もなく歸りきて、柔かき我胸に、
すみかをさぐり、やすらひぬ。

今の女性のうちの作詩する多くの人に、此れ以上を需めることが困難であらうと思ふと、大いに心細い。(評)

○拾た花　新潟縣　星野　白露

寂しかつた私の胸にも、何時の間にやら、燃ゆる樣な―また醉ふ樣な香の高い花が、今一度柔かな息吹の下に開かうとしてゐる――。――開いたならば――どんなに美しからうとふくらかの蕾に暖かい唇を――あて樣とした、其瞬間‥‥影の樣に現れた姿――恐しいぎよつと、驚いて押しかくした、雨の手で‥‥「匿しても駄目だ、僞りの子――捨てゝお終い其胸の花を！―噫どうしやう捨て樣か――けれ共忍び得ぬ、惜しい花、美しい花――逃れ樣、胸を抱いて走りだした――微かに見ゆる、白い光をたよつて、暗い〱闇の道をあゝ「匿して下さい」と、縋らうとした其刹那、現れた！胸の花がばつと――！。「僞りの子―」と、此處までも追ふて來た聲、あゝ無殘‥‥捨てられた花、掻きむしられた――苦しい、呻いて眼を見開くと――夢‥‥夢だつたけれど、傷められた胸と――慘しい花のむくろが‥‥まだ――、見える樣。

內容がある、其內容は能く表はれてゐないけれど想つて見ることは出來る　女らしい弱い情調も動いてゐる。(評)

○そのひと時を　名古屋　岸　次子

ある時は火にしも似たり
淚ぞ出し――

ある時は氷にしも似たりけり、
冷たき笑ぞこぼれし——
そよひと時、
囚はれの身のいまはた何をかざして
泣くべき
嘲むべき
窓低き悲しきわが室よ、
灰色の壁の色を、
怖ろしき夜のさゝやき——
あゝ我、
近づける物皆に怯えたり、
いま——されどあゝされど、にごれる灯影を背にせめてもの、
瞼しかりし、そのひと時のおもひで——。



夕暮を心淋しく　　　きん子

象徴めいた詩想が充分に歌はれてゐないから何となく空隙がありすぎて、遂に何事をも考へさせないで終る。（評）

○こゝろ　　萩花

ふと目はさめぬ五年の
心の醉に驚きて
若き此身を眺むれば
早我春は老いにけり　――幻境――
心なく誦しける詩に、ふと
心驚きかへりみすれば
處女の町もいくまがりせし
はや我は人妻の身なりけり。
手にもつは男の衣、
此日頃持ちなれし縫針の。
まだ肩あげも折深し
純白き前掛に緋のてがら、
其魂は折々に
あらぬ御胸に巢くはんと
かけりゆきては、はた現在に
かへりてぞ泣く小女なり。
世の人は妻てふ型に
ゐりこみて、夫の衣を
縫へといふ夫の御胸を
守れといふ見知らぬ人を
夫と名づけてつかへよといふ――。
みづ〳〵と芽の生ふるまゝに
育みてこし靈なれば
針もてば針箱の桐の面に
戀てふ文字をほりてみつ、
詩てふ文字をかきてみつ、
想は遠くあまがけり
はぐゝまれぬる其詩の子の
上にぞまよひ――たゞよひて
こそあれ――。

餘りに單純だ、詩を作る術を深くわきまへて居ないのは是非ないけれど。(評)

○海べり　　下谷蕉雨子

蒸されるやうな魚の匂。
暑い砂山には
大きな魚籃が幾つも並んで、
濱べの草原が潮風にざわつく。
そのなかに
こほろぎが鳴いて居る。
何んだか胸が誘られる日だ。
空の色、
海の音、
何處からともなく、
恐ろしいものが迫るやうな氣がして
と、また
死んだ魚の匂がする。――
無氣味な、あざれた肉は
斯うして腐りはてるのかと思ふと
堪らなく胸苦しい。
こほろぎが鳴いて居る。
いや、こほろぎが鳴くんぢやない、
自分の心が咽び泣くのだ。
この草原のなかで、
大きい自然の力の前に
生のさびしさを嘆いて居るのだ。
そして、やつぱり獨りだ。
そして、終りは死だ。
空の色、

海の音、
恐ろしい物は絶えず迫つてくる、
日の光が白く燒けて
眼が眩みそうだ。
こほろぎが鳴いて居る。

魚の臭ひと、こほろぎの聲とで、海邊の晩を表はさうとしたのは、初心でないことが分るけれどそれだけ手加減を合點しすぎてゐるやうに思ふ。今少しぼんやりした心持になつた方が好い作は出來るだらう。（評）

○二つの笛

茨城　黒澤とよ子

あかるい〳〵室の中。
いつの間にか私の前に、二つの笛がならべられた、一つは赤く一つは青い。赤いふたを取つて見た、
赤――白――、とき色の花が、
薔薇の花だろふと思ふが、ぼんやりとしてゐて分らない。
いくら近よつて見てもパッキリと見えない、手に取らうとした、
フーッと消えてしまふ。
手をはなす。又ぼんやりと見える。
此度は青いふたを取つて見た。
忘れな草に、眞白な大きな蝶々がとまつてゐた、ハッキリと見える。
いつまで見てゐても動かない、
そつと手でさはつて見ても、動かない。氣味がわるくなつた。
ふーッと吹いた、蝶々の羽根から、
白い粉がとぶ。
ああ蝶々は死んでゐるのだ。

考へ〳〵句を作り出してゐるやうで、その印象がパッと一時に映らない、心持が餘り靜かすぎる。（評）

○此窓

土佐　寂靜子

雲の色、花の香しめやかにしめやかに、戀する若人等の喜び吸ふ氣のいつぱいかぶれた樣な、此夕暮、寂しい思嬉しい思悲しい思種々な思出の胸を抱いて、妾はいつも此窓に倚りますの、あゝ此窓、此窓は南向き、靜雄樣の御窓は北向き、南へ流るゝ暖い水に妾の心をうつした朝は、柔い〳〵南の風が此窓を訪れてくれましたの、そう靜雄樣は南の風の樣なふつくりした方でしたよ。あゝ忘られませんよ白いカアテンをまくつて、妾が此窓、あゝ此窓から半身を乘り出した時
あゝ其時の、燃ゆる樣な唇、あゝあゝあの美しい齒：：妾の頰は赤いでせう、ほら眞赤でせう。
あら、いつかあの靜雄樣の御窓には明りが灯さましたよあゝきつと美しい新しい人と、蜜の樣な囁きを交してらつしやるでせう、あの喜びに滿ちた樣な灯
神樣は「あんな僞の男は忘れなさい！」って、
仰言るの、でも、でも、妾は忘られませんわ、
妾の胸には、頭には、優しい人の面影が：：。

あゝ、あゝ何樣して忘られませう、
燃ゆる樣な瞳、美しい齒、唇、此窓
あゝあゝ何樣して忘られませう、胸
に殘れる暖かりし人！

熱烈ではあるが、まだ根抵が据はらぬ。(評)

○池　常陸　木村桂月子

私の胸の狹い池に、誰か來て巨大な石を投げ込むだ、瞬間：：平穩だつた池の面が俄かに暴れ出した、高い〳〵山のやうな波が、どとん〳〵と音を立てゝ、烈しく岸に打ちつかる。やがて其れが元の樣に靜かになると、今迄水の底にヂット沈んで居たきたない泥濘が：：：：もろ〳〵と：：：恐しい勢いで浮き上り、淸い〳〵水が濁つて了つた、と池の中にある「思ひ」が汚れて了ふあわてゝ取らうとすると、其物迄濁水に染つて了ふ、悲しい、あゝ、：：：悲しい、一生懸命もがいてると、遠くて、石を投げ込むだ人の嘲笑つて居る聲が、かすかにきこえる。

型に嵌つた思想だけれど、正直なだけに取りえがある。(評)

○海の心　播磨　笹舟

水の色鈍い銅色をして濁つて居る、其上をすーつと油がながれて——古い材木や新しい材木がごつちやになつて泥水に浮いてゐる。
古い方は水銹にあつて黒くなつてる新しい方はぷんといゝ香がする。
其新しい材木にどろ〳〵と油滲みた水が襲ふて行く。
いゝ香のする木の魂を泥水は奪つて行くのだ其木の間に藁屑や干魚などが浮いてる。
赤黒い海の水、只ごろ〳〵と音たてゝ狹い港を勞れた樣によどみ渡つて居る。
今にも美しい大きな海の心にあの油ぎつた汚染が這入りそうだ。
あつ流れて行く、心の扉があいて。

木の魂と云つたり、心の扉と云つたり、努めて內觀的情調を出さうとしてゐるが、此態度ではまだ〳〵無理だ、單に描寫的表白の進んでゐるのを採る。(評)

○たそがれ　桑名　吉川澄江

鈍色の野の
靜かなる空氣を傳ふ、
晩鐘のなげかい。——
聲をひそめて歔欷く、
腐れ水のひゞき——。
漂浪人は、
朽ちた橋の欄干に依つて、
耳を傾けて、音を聞いた。
まはりの灰色の中から、
華かな過去：：暗き現在とが、
彼の胸に流れる。
彼は、青白い、
不安の顏を擡げて、
強く永き吐息をついた。

灰色の黄昏は、
野を包み、山を覆ひ
また漂浪人を隠した。

技巧には悪い僻もないけれど、さりとては餘りに平凡だ。(評)

○苦めよ！

本月の詩壇も、全體の成績が揚らぬ、其くせ詩の來ることは月々增加してゐるのだけれど好い作に乏しい、詩壇の振はぬ原因は澤山にあらう、其中の一つとして皆さんにもつと苦みなさいと言ふ、苦みなさい、大いに苦みなさい、皆ざんの作は餘りに樂に出來すぎてゐる、唱歌をうたふやうな態度で詩を作られては困る、殊に散文詩となると猶其弊が加はつてゐる惟ふに文藝思潮の誤解から來たものであらう、無技巧など云ふ聲に欺かれたものであらう、恰も一部の若き婦人達が苦勞も辛酸も束縛も經ずにやれ自由だ、解放だと叫んで勝手氣儘な擧動をするのと同じてある、斯くては生は荒むばかりだ、放縱に流れるばかりだ、詩歌のガーデン荒涼たる原野と化するであらう。苦めよー、大に苦めよ！、詩は決して樂に出來るものでないと云ふことを知つて、愼重に、誠實に、一月に一つの好い作を成せ、多くの駄作より一の傑作を望め目前僅に二三十行の文字に過ぎなくとも、其爲に大いに苦んだ結果は他日に到つて何んなに好い收穫になるだらう。(醉茗)



おもひで　青森　松尾千代子

○櫻草

本鄕　望月麗子

櫻草よ、お汝は何處の夢を見てるの、こんな小さな鉢に轉されて、廣い、野が戀しからうれ、
「イエ私は野はなつかしくないの、野には種々の花があつてれ私ばかりを愛してくれなかつたから、
又苦しみが多くなつてよ、私は野に行きたかない。」
そう……ぢやお汝はこゝが好きなの……でも私も愛さなかつたらどうするの

○如月のさびしみ

金澤　むらさき女

深い／＼淋しみをあらはそうなら如月の淸い大氣に、洗はれてる空！あゝ、あゝ、今あの空に淋しみに泣く、私の魂が宿つて……
薄い雲がはいてる間をかけてゐる。淸い／＼悲しみを感ぜしめるものは如月の骨立つた森の上を、悲しい歌を唱つてゆく風……
どこまでもゆくだろう……冥土のはての森が終りだろう。
たまらず慕かしい如月の町を若い人は淡い日を背にうけて步いてる……亡なつた柿樣にそつくりな後影あの冷たい墓の中に、濕つた土の香

を身にしめて……
お丶姉様よ……

○春の夕暮の町

德島市　中村勝子

何處からともなく鐘の音が、
ゴーン、ゴー…ン、ゴーン。と、
重くるしい響きをつたへる……
ほろり〳〵と白い、
櫻の花がこぼれる。夕まぐれ、
私は家の小窓から、
華やかな春の夕暮の町を見た。
美しい衣を着た、花見歸りのほんのりと赤らんだ男女の顏——若々しい色。ぞろ〳〵行く。
何となしに溫たかい風が吹くと、
ほろり、ほろり、と白い花がこぼれる、あの私の魂のやうな白い花。が又ほろり〳〵とちると、重くるしい鐘の音が、
ゴーンと何時までもいつまでも。

○森

上總　黑坂赤笑子

靜に雨降る夕——
萬象は眠るごと
みだれし落葉さゝやき止めて
森閑たる深き森——
思に沈む我
獨りさまよふ。
暗き森淺く
落葉分け行く
寂寞の響あり——
外方より來るにぶき光
我淡き影うつせり
いたましき哉。
古き切株に——もたれて
遠く遠く故鄕思ふ——
雨何時しか止みぬ

○夢

備中　馬越昌子

木もない草もない、只狂える濤の音のみ高い、海のもの丶けがわめくのかはなれ小島。どうしてこんな處へ、一人送られたのか、噫生に捨られたのだ、助けを乞はむにも舟もない、呪ひの雲の鈍やかに襲ふように、うれ〳〵と… 恐怖の念に滿された、

○夕暮二篇

札幌　安達けい子

病人のやうな——壓迫された空の中に、
光のない、
赤黃色い、夕日が——、
苦んでもえてゐる、
(もうお前は此世に居つたつて駄目だ)と、
いつたやうな濕つぽい、
溫い風が——動く〳〵、
甘い甘い花の香がたゞよつてくる。
私は甘い昔を思ひ出して
氣のぬけたやうに、
ボンヤリと立つて居る●

○

月は夢のやうにかすんで
星はボンヤリと、
(どうも愉快だなあ)と輝いて居る。
妾は心にかなしさを秘めて
儚い林果敢いあの萬象の夢に
淡い淡い口吻をして
新しい——うすつぽい——
うれしさを味つて居る。

○夜の室

伊豫　よしゑ

灯の下——
テーブルかけに肱をついて頰杖をしてゐる。
前にある置時計のハッキリした秒をきざむ音と遠い車の輪立の音——千里も萬里も、陰府の世界までもつゞいて行きさうな遠い音。
自然に瞳がすはる、灯は片頰を薄赤くてらして居る。ボツ〳〵と梟がなく、涙にぬれた靑白い月の光りに輝いてゐる山の木立とあの梢——梟がなく、薄絹を膜にして聞くやうになつかしい、淋しい、物憐れな聲。
「人は死にましたよ」と誰かゞ云ふ「人は死にましたよ」と答をうながす靜かな聲が又起る、そのまゝ三秒——五秒——七秒——一分——二分夜の室はゆるやかに靜かに、訪づれてゐるものゝ聲と音とをきいてゐる。

○如月の朝

長野縣　東條周子

しら〳〵と林をつゝめる——
灰色の靄は——
うす絹をはぐ如き、やわらなる音を立てゝ
何處ともなく消えて行く。
消えて行く林の木口は、魂の抜けたる死骸の如き、

骨に似し姿をあらわしぬ。

朝の鐘はいともゆるやかに
靜に〱渡り來れり
空は紺靑に晴れて何物の影さえ見せず

再び朝の鐘はゆるやかに鳴りわたりぬ。——其の靑き空に響きて

○春

丹後　中澤伊志子

いたみてもなれ來し冬の
夜の灯、寂默にゆらぎ、
また、吹雪になよび疲れし河岸の楊柳たゞ靜けく立てるを昨日も見たり——、
あゝこの寂靜けき地上に
やがてめぐり來る春のいのちをつかさどる大いなる天地の玄妙の力よ、汝
我が冬になれし魂の、ゆるがず瞑らぬを何處に逐ふ……

何處に逐ふ……
音なくれむりにおつる冬の懷に——か。
魂は夢となりて生きむ今日よりは……………
あゝ我が胸奥にひそむ彩羽の小禽！
輕らかに飛翔らむと羽つくろひいそがし、
灯は來るべき歡樂をゆめみ
もの怖ぢもまぢるうれしさになやみふるふ。

あゝ………
病ながらに
我もあゑかの子とならむかな

……春三月。

○旅の夕暮

牛込あけぼの

うす闇い坂を登つて行く——
追々闇くなつて行く一足〱と——
中程迄登つたふと目を上げると向の空にうすゞみながした樣な雲がある、
其下にたつた一つ——み空のほしによく似た光りがあゝ其の時のうれしさ——
あゝ——二つ——五つ九つ——
坂を登りつめた時は光りはふへて二十程見えた
あゝ今夜はあの村に——

○雪の日に

麻布花子

なゝ寒い、雪はなぜ降るのだろう……
寒い日、悲しい日、妾はなぜこうも淋しいのだろー、黃金に、虛榮に生きないのだろう、
虛榮に、生きれば屹度、華やかな友の樣に——
なぜだろー、世の制裁に、迫害壓迫に、疲れた心も立たなければならない、あゝ……あゝ——
地位も名譽もいらない、少しても心の儘がよひのに——もしも、心の儘に、走して、心の君！
人のおん許にひざまついたらー噫！

○古池の心

伊豆春野彌生子

窓から歸れる
夢のやうな……
夢のやうな音樂の響を
疲れた神經は俛れて聞いてゐる
…………

古池のツと寂びれたる心に
靜かに、靜かに波打たせて
浸み入る旋律の惱ましさ……
追憶もなくたゞたゞ
いはれなく流るゝ泪よ——
葬られたる人の面影よ——
囚はれし身を凭せる若木に
月は眠れる人のほゝ笑のやうな
淡ひ光を降りそゝぐ——
あゝ古池の心は
果てしなき咲かひに沈む……
窓から洩れる
夢のやうな樂聲に……

○おもひて

大阪草村君子

おもひてよ、あゝおもひてよ
今になりては懷しきおもひての一つよ
その夜の甘き情緖若き血の匂ひ
いと燥ぎし笑聲の旋律よ、
そも見果てぬ夢のそのまゝに
いつかわれを去りて何處にかまろびいてたり
充實せる果實のおのづから
その執着の糸をさかりて落るごと
我等の戀も音なくひびきなく、
離りていづこにかまろびいてたり
はかなき戀よ、覺めての今も、
なほしみ〲と殘る哀しさ
冷たき記錄にいろどれる
たゞ一つの甘き憂ひ……
冷き心にて追憶をあぢはひつゝ
冷きペーヂを繰りゆかんかな
あはれ冷き胸のおもひてよ、

新詩句

○淋しい沼から白い水鳥が飛んだ
鈴木小菊

原作「美しい水鳥が飛んで出た」とあつた。飛んで出たはをかしい、「飛んだ」で澤山だ、餘り不用意な言葉を使つてはいけない。

○椿が落ちた、私は又淋しくなつた
靜香

原作「椿は落ちた我思の色はあせた」とあつた、思の色とか褪せたと云ふことは餘りに口語には使はないし、又實際の感情を表はすには耳遠いのみならず、歌を作る人などには熟れ切つた言葉で少しも新しい感情を動かせぬ。

○何處から來た、嫌な蜘蛛、嫌な——
濤田芳枝

原作「アッ！嫌な嫌な蜘蛛が何處からか來た」とあつたが、別に不都合はないけれど、わざと句を置きかへてみた、何處から來たといふことを強く響かさうと思つて上へ置いた、言語の自然と云ふ意味に於ては原作が自然だらうけれど——。

○行燈の火は優しい母樣のやうだ
篠田とみ子

此れは原作のまゝで一字も變へてない、行燈の火の煤びたやうて、溫みのあるやうて、強くなくて、植物性の油を吸ふやうな聯想が如何にも人の子の母らしい感じに似てゐる、今回の新詩句では是が一等だ。

○名も知らぬ鳥、名も知らぬ花、名も知らぬ人が戀しい
よし子

原作「人が戀しい」とあつた、「名も知らぬ」を入れた方が好い、少し技巧がありすぎて嫌味に近いけれど人に覺へられ易い句だ。

○淋しい獨りの火、自然に消えた

原作「山家の火」とあり「誰が消した」とあつた、誰が消したは理に落ちていかぬ、「山家」と指して云ふと、其場所は聯想し得るけれど、場所を指定した爲に其山家と云ふことに捉えられて、古い歌の思想などが邪魔をするつまり家と云ふ限られた感興に陷る、それよりか場所を示さず只孤獨の火の明りが、何かしら自然に消滅して了つたと云つた方が餘程寂寥の感じを深くする。

○醉て〳〵さうして醉て倒れたい
花子

此は原作のまゝ。

○山は紫になつた、野は青くなつた
紅雀

原作「紫の山青い野邊こゝにも春は來た」とあつた何も春は來たとことはらなくても、山は紫になつた、野は青くなつたといへば分つてゐる。

○いゝえ私、何と言はれても思ひ切り泣かう
なか子

原作「いゝえ弱い私…女」とあつた

○近くなつた、白い顏、女だな
要司村鬴子

原作「人が來るよーだ、白く、丸く」は餘り投げやりの句でものにならぬ、句は短くても印象は明確に表はさねばならぬ。

○人の詩が私の心を歌ふ
とみ子

原作「人の作つた歌が私の心によく合つた」は聊か幼稚の言ひ廻てある、一句の姿が餘り浮ついて居てもいけない、何處にかおちつきがなければならぬ。

○耽溺の人、唇のやうな花を探してゐる
望月聽子

原作は「牡丹花に口づくる」とあつた、餘り露骨である。

○杉の木が戰慄した、吹雪の中に
白露

原作は「吹雪の日暗綠色の杉がうなる」とあつた、暗綠色の配合が一向利いてゐない、うなると云ふのも言葉の聯絡上此處では何等の力もない、只何の意味も考へずに文字を弄ぶのはよろしくない

○何處かで嬰兒の啼聲がする、木枯の吹く晩だ
高山米子

原作には「子供」とあつた、嬰兒の方が實際であらうと思ふ。

○雪は眞直ぐに降る、鳥が飛んだ
木村うた

原作は「重い雪がまつすぐに降る其中を鳥が二羽すつと飛んで行つた」とあつた、あまり說明にすぎて面白みがない。

散文

編輯局選



○櫻の窓のお給仕（天賞）

德島縣　吉田紫花

二株三株畑に殘つて居たほうれん草を色よくゆでてお父樣がお好きなしたし物を拵へて江戸櫻の眞盛りの夢見る樣な窓の元でお父樣に夕飯をすすめた。

お話相手もなく、煙管はたく音淋しう一人庭の春を眺めて居らしたお父樣はすぐお膳に向はれたが「オオまだこれがあつたか」とほうれん草を殊の外のお喜び身にしみて嬉しく、外した襷を輪にして膝の上に置いた儘じつと召し上るのを見て居た、開け放した窓から櫻の花瓣が一ひら舞ひ込むと、お箸を止めて「散りかけたな」と今更の樣に櫻の梢を見られる、一寸見れば元氣よく御飯を召し上つては居られるけれど、中風氣味のあるお父樣、いつ卒倒するやらと思うと今お給仕して居るのさへ儚い氣がする、今召し上つて居る唐草模樣のお茶碗と象牙のお箸とはお若い時から用ゐられた品ださうで、お母樣の亡くなつた後は猶更そそうの無い樣洗う時にも特に苦慮した此二品、いつか此の品々がお父樣の片身となるべき日に此のお茶碗を見て妾はどんなに泣く事であろうと思うと、もう〳〵堪へられぬのでございます、マアお父樣、お茶碗、今思つてさへ私は堪へられませぬ、我儘なお願てございますがいつそ〳〵今の内にお父樣御自身に此お馴染深いお茶碗をみじんに碎いて仕舞つて下さればいいに、お箸も川へ流して頂きたうございます、勿體ない事と知りつゝ私の胸はこんな思に搔き廻される樣て、しらず〳〵涙が湧き出るのでございます、湧き出る涙と御飯の湯氣とて曇つて見えぬお杓子をまさぐりつつ儚い想にいつになくお話もしないてお給仕をすませた、お父樣は

常の通り直ぐ煙草を召し上りながらさつきの樣に櫻を眺めていらつしやる、お膳を仕舞つた妾もそこに座つた儘外を眺めましたが、暮れにくい春の夕暮の書にある樣な雲のたたずまい、じつと見つめてゐると其深碧な空の色の悲しいとも悲しい〳〵ものの樣に思はれて、其上廣い田圃のどこともなく泣いてゐるたくさんな蛙の鳴聲が妙に胸のあばらの間で鳴かれる樣な妾の耳には悲しい〳〵調べの樣に聞えて、咲き盛つてゐる美しい櫻さへやがて落花の恨みがあると思うと堪らなくなつたので「どうせう」思はず口へ出たのがお父樣に聞えて、「何ぞ」と澁い語、「イヽエ蛙の聲が淋しい事」と何氣なく云つて櫻の梢を仰いだが、又お茶碗の事など思ひ出して咽ぶ樣な悲しさに遂に縁に出て縁の柱にもたれて美しい春の夕を一人泣いたのでございます。

淡々しい感傷を誇張した筆法で表白するのもよろしいが、これはあまりに誇張しすぎてゐるやうに思ひます、やはり淡々しい愛愁──春の夕暮のやうな──に止めて置きたかつた。（評）
又曰く、誇張はありますけれど、父に食事をすゝめてお給仕する邊りは限りなく懐しみがひそんでゐます。（評）

○色　（地　賞）

芝　や　ゑ　子

「泌みる日だ。又雪が降る」と兄さんは云つた。

私は柳の一枝を取り上げて赤い皮をむいた。鈍い銀の實が現れる。兄さんは炬燵の上につゝ伏してゐたが、ひよつと頭を擡げてこつちを見る。

「もつとからつとした花は無いか。妙にいぢけた色だ」

「恁麼のがいゝのですよ。兄さんのやうな變人の御部屋には調和します」枝の先を矯め乍らさう云つて兄さんの方を見ると、兄さんは「落日」を見て居た。私は其口繪が大に氣に入つた。此家からは、愛宕の森の枯木を透いて落日のあかきが見える。凋落の悲しき色である。巷の人は其よわい光をわずかに浴びて急いで行き交ふ。

お花を活け終へて眺めて見ると、如何にも暗い顏が一枝一枝沿うて居るやうで、私も此の花の色に壓倒されるやうな氣がした。お前は冬の人だといつか兄さんに云はれた。冷い空氣の底に沈んで居るやうだ。と。けれど此の花も冷い空氣に沈んで居るやうだ。此の花はこれだけのものだが、私には若い血がある。とつよく思つた。

兄さんはいつのまにか寢ころんで居た。座蒲團を四つをりにして枕の代りにして居る。東の窓から薄白い光りが射して顏の半面が暗く見えた。

靜かな空氣をそろ〳〵とかき廻すやうな音が、障子の紙からも壁からも天井からも迫つて來る。

見ると雨だ。霙まじりの。雨も銀色の線引いて地に落ちる。重い大氣がもや〱うごき出すやうな氣になる。その雨のかたちにそゝり立てられて、じつと今の境遇に居る事がもどかしく、どうか有りたく切に思つた。思つて何げなく兄さんを見た。

餘り冥想的になる結果、獨斷晦澁に陷りはしまいかと疑はれたあなたの文章を、此一篇を得て安心しました。此調子でゆけば其弊に陷ることはないでせう。思想の暗いのは宜しいが、表白の暗いのは何うかすると無意味に終ります。（評）



氷とり　　青森江渡けい子

○片矢の濱に立ちて（二）

（入賞）

伊豫　よしゑ

ザク〱音のする砂利道から松原へは入つた、もう、あい色の海も、松のある島も、白い帆前船も見える、ゆつたりとしたのどかな空氣につゝまれて居る。丁度、私共の前に油繪をかゝげられたやうで、松の根をあちらこちらによけ乍ら、清ちやんの暖かい手と握り合ふて、うれしさに囁き合つた、二人の輝く

瞳は、醉ふたやうに沖に投げられて、二人のくちびるは動いて居る、松原を通り拔けて、潮が干て洲の見ゑる渚の方へあるかふとして、横四五間の所に横たはる或るものに氣がついた瞬間、二人はいよ〳〵かたく手を握つて、身體はさながら氷にてもふれたやうにかたくなつてしまつた。

よく見ると、この磯に打ち上げられたまゝの無慘な馬の死體で、足は沖へ向けて揃えて、頭は東に、背半分の肉がとれてえぐつたやうになつて居る。頭に一點黑いものが……何だらうと思ふ間も無く、六七羽の毒々しい鳥が羽ばたきし乍ら、一齊に何處からか下りて、その馬に集まつた。

見るにしのびなかつたのだらう、手を離して淸ちやんは私を離れたけれども、私の心にはもう、淸ちやんのかげも、日に光る油のやうな海も無い、無意識に渚をゆきつもどりつ幾遍もくり返した。遠く浪の上をただようて居る間には、かぎりも無い浪と一しよに、すごい絃月の光りにてらし出された夜もあつたらう。此處に打ち上げられて、鳥のゑばになる馬、憐れな馬の肉を食つて腹を滿たす鳥、無限の感に打たれる。

暫くしてから吾れにかへると二三間後しざりした、肉のくさつた臭氣が、風の吹く度おそうて來る。

その時砂ふむ足音がしたかと、思ふと松原の後ろから貝を拾ふ女、貧しいよれたやうな着物をきたのが現れた、かづいた手拭の下から、横目に馬を睨めてにがにがしい顏をしたが、そのまゝスタ〳〵私の後を通りすぎで、西の方へ浪打ち際をたどつて行く、後姿を見やうと眼を上げた時に、一二町も先きに、淸ちやんのリボンの色と帶の色とが、際立つて目には入つた。

「きーよちやーん、待つて頂戴！」思ひきり聲を上げて浪打ちぎわにそうてあるき出すと、クルリと此方向いて微かに、うなづいたが、右の白い手を沖の方へ向けて上げた。

「蒸汽浪！葉さん蒸汽浪よ……」渚は浪に吸ひ込まれるやう、沖を見ると他の波よりは五六寸高いのが、打ちよせて來て居る、渚をよけて、浪に似た磯に咲く花をふんで、うつむいてあるいてをると、ふつと前に馬の死體が浮ぶ、あの頭にあつた黑いかたまり……鳥……深く食ひ込んでゐて、人が行つても逃げなかつた、あの一羽の鳥だけ……

再び目を上げた時、淸ちやんは岩を積んだ向ふのかげにかくれて居た「……み空も水にとけ合ひて沖なる島はうすがすむ……夢の如白帆流るゝ……」あの引きしまつた澄んだ聲、海の空氣をたゞよはせて、ひびいて來た時、私は始めてよみ返つたように、頭を上げて岩の方へ急いだのである。

磯端に馬の死骸の打揚られてゐると云ふのは嫌なことのやうだけれど、斯うして書かれてみると意味があります、其他海岸の描寫はまるで活畫のやうです。(評)

【秀逸】

○青き花

府下　鈴木春子

ほのかなうるみもつ軟かい空氣の、一ぱいにみなぎつた雑木林の内に、青白い靄の様な月光が細々した線をなして流れ込んで居る。

冷かな理性の光滿ちたる我胸の内は、餘りに白く、餘りに淋しい。我と同じき若き子等の、悶えの聲にも、叫びの聲にも、喜びの聲にも耳抑へて、冷然と一笑せる我がこの態度の、如何に僞りの誇りに輝けることよ

柔かい若芽と新葉の甘い匂ひは、美酒の様に四邊の空氣に泌み渡つて、幼時より、強いてものに驚かず、動かざる如く衍ふべく馴らされたる我胸の内にも、稍々暖かい血潮の湧くを覺えしめる。私の體軀は段々に其生氣の溢れた青い匂ひの渦巻きの内に、浮動しつゝあるが如く感じた。ほの顫ふ印象の情緒の聲は、引切りなしに胸の底から湧いてくる。……幻の如、瞭然と唯視界の内なる樹影のみ、映るが儘に映らしめたる我瞳の内に、何となくなつかしい響含んだ暗い色が、次第々々に擴がつてくる。——うるんだ青金光の星の瞳は、月のない大空一ぱい散らばつて居る。闇の水面にも何處となく薄い光が流れて、地平線まで際立つて白くみえる。……黄色の光澤のない提灯の光の輪で闇を小さく染抜いた足許の砂地に、微かな金藍色の閃めきもつ白い波頭が、軟かい曲線を描いて、ゆたり〳〵と戯れてゐる。……魔の姿した黒岩の所々、磯櫻の花が白々と朝の色を芽ぐんで居る。——

私は、其光景の内に立てるなつかしい面影の幾人が、じと〳〵と鹽氣含んだ海の香と共に、私の身を取巻いてゐるかの様な暖かい感じを覺えた。而し直ぐ又私の胸の血は元の冷静に返つた。否、冷静と名づけんには餘りに多く悲哀と不滿の分子を持つてゐる。——三つの白い其笑顔は、皆私をして、永久に呼ぶ事もどうする事も能はぬ様な頼りない後姿みせて、一人は生無き人となり、殘れる二人は、ある大いなる力にゆらぐ、美しき七彩の花の灯の内に。

私は、ふと眼の前の丈低い八つ手の廣葉をみた。青々と重なり合つた葉の間に、ぶつ〳〵と毬の様に集つた白い實が透いて見える。何氣なくだん〳〵瞳を上に移すと、暗紅色の櫻の樹や、白く光る山茶花の葉と交つて、いじけた欝金櫻の花が、まばらに淋しく咲いてゐる。其鈍い黄青の花の一つ一つは、眞青な葉に擬ひさ

うに、青う月の光を吸込んで、さながら妖の笑を洩らしてゐるかのやう、何となう冷たい冬の香が漂うて、其影迄も凍て付た如く濃く見える。眞黒にすえたる闇の毒素は、影の内に鈍く淀んで、時々重黒く動くやうな感がする。

あなたの作にはもう一個の人格が表はれてゐますから、作物に對する信用はついてゐます、けれどもいつも同じ類型の文章を作つてゐることはあなたの爲に取りません、更に廣く眼を開けてごらんなさい。（評）

○裁縫所

名古屋　胡　て　ふ

紫に、赤に、青に、白に、光琳に、市松に、桃山式、いろ〳〵の花の樣な絹の中にうもれて襦袢の襧襠を裁つて通箱に入れた。八疊の綿入部の雪樣が、蝶樣もう掛け（襧襠の事）はいやよ手間が取れて入れ惡くて仕樣がないもの半物（羽織）をちつと裁つて頂戴、と被仰ると仕上げ部から、縞お召か高貴織の意氣なのを少し願ひます、と妙な口調で被仰るのは大通評判のお葉樣、納戸地に五葉牡丹の裾模樣に鋏を入れて被在るお君樣が、ハッ委細承知致して御座る、と芝居のこは色を使いなさると大笑ひ、此お二人りが部屋内での愛嬌者、意地惡るで氣取屋の繁子樣が仕上げた、源氏麻のお子のお被布にぶんこをつけながら、私もこんな柄のお被布あつらへ樣かしら、と兩手で胞をかゝへて一寸反り身に成つて氣取りなさる、と前の君樣が物尺で私の膝をツンと一ッ、お葉樣が、生れかはつてお出て遊ばせ、皆どッと笑ふと、ツンと澄しなさる、あちらからも一寸鋏を拜借、こちらから濟みませんが物尺を一寸、もう鳥渡そちらへよつて頂戴な、あら私これで一ぱいよ、と五の間をつき通して十八人の人ゆゑそれは〳〵大變な騷ぎ、平常なら、お靜に！、とお師匠樣のお小言ある所、僅々の日數で十五荷のお支度を引受けて夜晝つめきりの事ゆゑ、大目に見ていらつしやる、それをよい事にして又騷ぐ、縫い立て部の八ちやんといふ十四になる可愛い子が密つと上つてきて私の耳の傍で、駒樣からお手紙よ内證て、と三寸ばかりの紙切れを渡していつた、君樣が、何あに、と被仰る、エンピッで、掛けや振袖はあき〳〵高尙な縞か何かを裁つて頂戴、どれも〳〵白裏て目が惡るくなりました、それから今日は一度もお目もじ致しませぬゆゑ小用にいらしたとき一寸ヲ、としてある駒樣はあなたを好きな方〳〵と被仰つてるのよホヽヽとお笑いなさる、駒樣は島田にばかり結ふて被在るお美くしい方、元氣屋のお時樣の言葉ぢりを取つて相變らず賑かして被在る、藍納戸や薄ねづみの裾引きの縞物ばかり通箱に一杯裁つて下の縫立て部へ送る、あちらでも大變賑かな樣子、若い方ばかり三十何人も一緒に被在るのだから——も

ら電氣のつく時分。

十六荷の嫁入支度を一挺縫所で引受けて縫上ぐとは面白い事柄です、それにしては此文が物足りぬやうに思ひますけれど、描寫の眞實なのが何よりでした。（評）

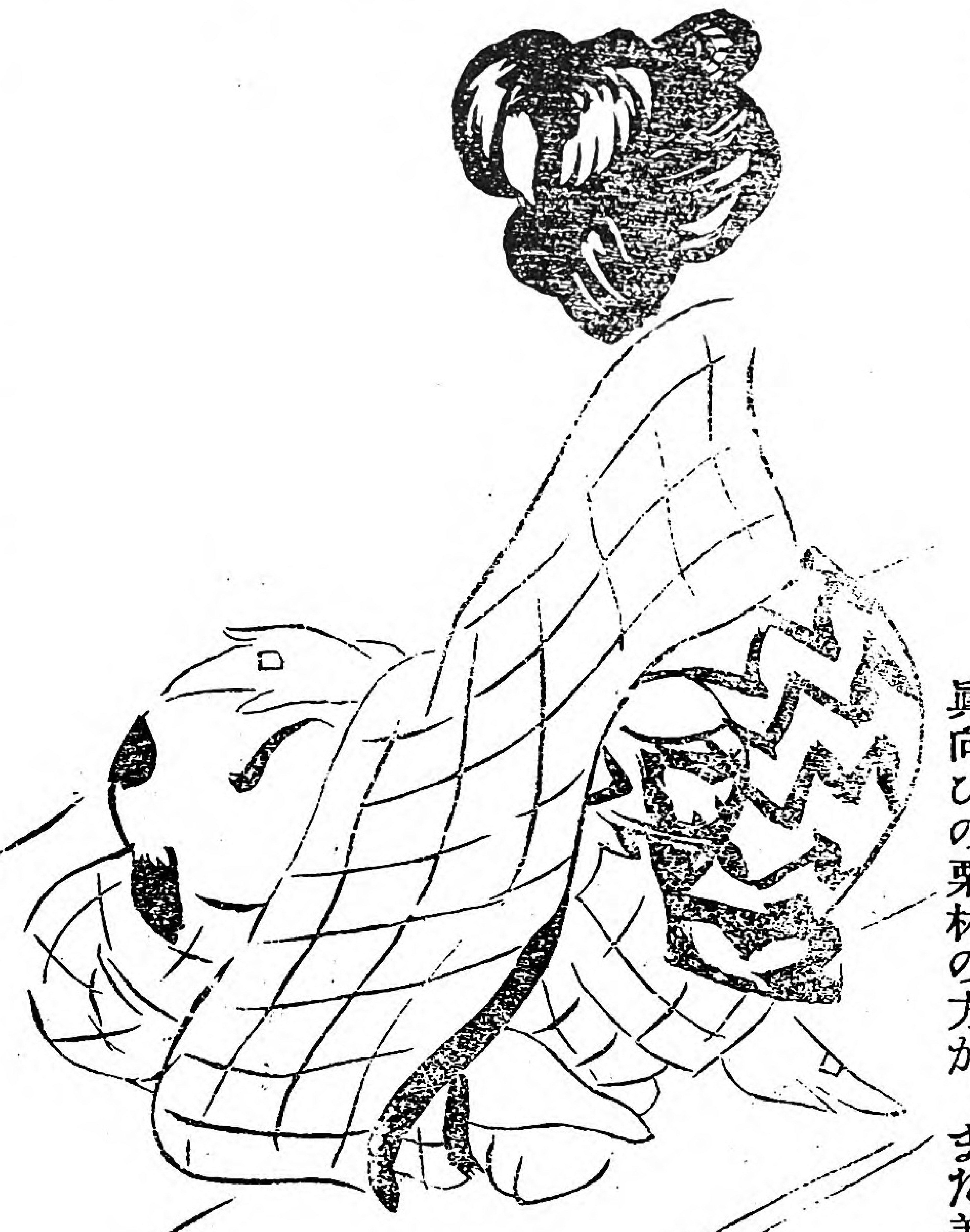
○雪の朝

安藝　秋　花

目の前の黒い物がむく／＼と動く、何んだらう、はつきりとわからない。桃太郎さんのお供には、」可愛い〻聲に目が覺めて、今更らしう四邊を見廻すと、並んで寢てゐたあやちやんが、寢床の中から、身躰をゆすりゆすり大きな聲で歌ふてゐるのだつた。

時計を見るともう六時を過ぎてゐる、急いで起きた、障子を明けて椽に出ると、雪が降つてゐた、澤山は降らなかつたと見えて、道だけは皆消えて、下の十文字の所から、白い畑の中をうね／＼と四方に別れて、はつきりと長うつゞいてゐる。

松林の上に積つたのは、ほつ／＼と綿をちぎつて、くつつけたやうで、美しくはあるけれど、それよりも、眞向ひの栗林の方が、まだ美しい、中の高い、圓い栗林は、ふもとのぐるりが竹藪なので、こちらから見ると、丁度お鉢の中に細長く切つたお大根を、盛つたやうだ。下の道を、六十餘りの爺さんが、コン／＼せきながら、炭を脊負つて西の方へ行く、大方一里先きの町に賣りに行くのだらう、あの曲りかけ脊に、あんな大きな物を負つて、どんなに重いだらう、可愛そうな者よと、うつとり後姿を見送つてゐると、ばあーつと東の方が、明るく成つたので驚いて空を見上げた。



どなた？　徳島　多田さは子

東山の上から中空へかけて、淡つすりとぼかされた中に、一と塊りの雲が、赤く／＼火のやうに燃えてゐる北の方から、白い雲の一と片が浮き出て、東の方へ／＼と流れて行く、山の上近うなるに從つて、だんだん赤くなつて、果ては眞赤になつて火の海と一つに成つてしまつた、後から／＼、ちぎれて流れる雲は、皆んな赤くなつては、一所に成つてしまふ。

輿に乘ッて、心もうき／＼と成つた、ぐるりと椽を廻つて、築山の方へ出ると、一躰が濕地なので、土の上にも苔の上にも積つてゐない、木葉も何故か、上の葉が少し、積つてゐるばかりで外は皆んな消えてゐる、私は雪の積つたのは大好きだけれど、雪解けは大きらいだ、折角の興もすつかり覺めてしまつて、何んだか腹が立つた。

少しも文字に囚はれてゐない處が氣に入つた。（評）

○一年後の友のおの／＼

かすみ子

スクール時代に七人組と評判されて、どこへ行くにも離れた事のなかつた親友も、一年後の今は散々ばら／＼「雨につけ風につけお便りは必と致ましてよ」なんて立派に仰つた藤井樣なんか、どこへ被居たのか梨のつぶての音沙汰なし、同窓雜誌にさへ其御住所がのせてないのだもの……、おかわいそうなのは三浦樣、卒業なさると三月目に儚なく逗子の露とお消えなすつた、あゝ矢張り美人薄命か知らむ、後に殘つた五人だけは先づ無難に文通を續けて居たので、一年後の消息もどうにか斯ふにかわかつて居る、意外と云へば松野樣、從兄の許から結婚披露の招待狀が來たので、何氣なく出掛るとまあ驚きました新夫人が七人組の一人の松野樣なんですもの、思はず知らずあッと叫ぶとうつむいて被居た松野樣がふとお顏をお上げなすつたので二人の視線がぱつたりあふ、ひきあはせられた時の間の惡るさつたらなかつた、御當人もさぞ氣まりがお惡るかつたろふ。林樣は學校時代から軍醫の奥樣だつたが、何時の間にかお母樣になつて被居るそうだ、知らして來ないから惡らしい、其内突然御訪問して見あらはさなければならない。川合樣は表情がうまいので評判だつたが今は古郷で小學校の椅子をしめられて被居るそうだ。未だ廿にも滿ない若い先生！定めし例のたくみな表情で生徒をチャームして被居る事だろふ、田舍にはお惜しいスタイルの方だつた、變りも變つたは森樣のお身の上、唐物屋の御内儀さんにならうとは思もよらなかつた、まさか店へ座つて「入被いまし」も仰るまいけれど、クラスきつてのダンス上手、自然的

なハイカラスタイルで何時も級會の時は活人書の主人公に選ばれる方、「私音樂家でなれば嫁かないワ」なんて仰つてた方かと思ふと不思儀でならない、最後は私の番だが自分ばかりはたいした變化はないつもり…。

日本は櫻の咲く國、女の身の早く變る國。（評）

○不調子

東京　ＸＹＺ

一寸立つて又、中古の桐の火鉢を一人圍むで、本を續けて讀まうとした（あれ何だつたかしら、さつき、こうしてた時何か思浮べて、それをきわめ樣として、とらへて置たのは——…思ひだせぬ、え…！なぜ私は、こう皆時間といふ扉で思を閉ざして仕舞ふのだらう。考へださう考へださうとギュッと疊の燒穴をみつめたそれても考へだせぬ。腦の中に今ぐるぐるよぢれた、或物が亂れてゐると思ふと性なく狂ほしくなつてきて瞳は灰色の壁から最後に青い青い空に、たゞよふ白雲のいろを見た。

いくらかせいせいした。

（あれあの雲あの色氣持がいゝ事、あのちぎれちぎれの白雲が後から後からと行つては互につながつたら、屹度まひるの神樣はお渡り遊ばすのであらう！まさかね!?）

あら又考へださうとした思はあせつてとんでもない事を考へださうとしてゐる！私の此心、えゝぢれつたいこう思がからまつちやだめ、よさう。

ス——と眼を落す拍子に「不調子」と心は叫んだ。ごらんなさい！欄干のねぼけた樣な蒲團、まだ夕の夢にむせてる樣ないや——あな面をしてゐる。あんなにまあ太陽がゆれてるのに——

すい〳〵した綠の空、かけるくも、海だつて島だつて近くへ走つてあの磯の松だつて一つ調子にはれ〳〵してゐるぢやないの、

この家の内のふざまつたら、壁にはられた新聞のすゝけた色、そんな泣顏よして頂戴といゝたい。

よぼ〳〵した蠅が今すてた私の爪の上をこえた。嵐の後の二階の向の間は戶だつてあけてやしない。

烏瓜のくされた色、去年の暮春の景物の殘り、麥わらの鶴が梁にかゝつてゐる。

それでも戶の隙から光が——、あら——どつかで三味の音、階下から肉のにほひ、まひるだと強く思つた。噫なんて人間界は不調子なんでせう、いゝえいゝえ私の心も——。

不調子と云ふ處に氣が着いたのは好いです、文章の態度は浮ついてゐていけません、此題てならいくらも書直しが出來ます。（評）

○トンテル堀り

麻布　江森美子

梅の花が咲いて空は春らしくなつた。日あたりの宜い空地に、八才位から五才位までの可愛らしい男の子が集つて、二月許り前に道普請の爲め土方が運んで置いたモッコに四五杯の土の山を、踏んだり、乘つたりしてゐる、此の小さい人々が毎日斯うして踏みかためるので、小さな山が出來た。今、其山の麓へトンネルを穿たうと云ふので、小さい人々は力み返つて大騷ぎ、一番年長の春夫さんと云ふ子は技師と云ふ格で、可愛い瞳を四方に配りながら、ハキ〳〵した聲で、芳夫さん、此處をほつてくれ給へ、時ちやんはあつち、勇ちやんはこつちと指圖してゐる。色の白い眼のパッチリした絞の筒袖着た子も、黑い顏に何時見ても笑窪をよせてゐる悧氣のない子も、或る時めく家の坊つちやまも、皆渾身の力をこめてトンネルの發堀に着手した。皆があつちこつちと堀返すので小山は蜂の巣のやうに穴があく、春ちやんは氣を焦つたと云ふ風で「こんだは僕か」と言ひ〳〵一番深くほつてある穴の中へ竹をさし込んで小さい口を堅く結んで、兩頰をふくらし〳〵滿身の力をこめて、もう少し〳〵とをして行くうち春ちやんの顏が、力滿ちて眞紅になつた時。あゝ出たよ〳〵と小さい人が口々に言つた。見れば、竹の先が向ふへ、つき貫けて居る、あゝ出來た〳〵トンネルが出來たと、春ちやんも交つて雀躍りしないばかり、其のをもてには歡喜の色があふれてゐる。其の中に誰言ひ出すとなく、こんどはおだんごをこしらへて遊ばうよ、と言ふと、皆我れ先きにと、ぬれ土を持つてきれいも、きたないもなく紅葉の樣な手で、ころがし始めた、あゝ樂しい時代と私はあかず眺めて居た。

まだ文を作るに注意が足りないやうですけれど、上達して行く見込は充分にあります。（評）

○無言

麻布　花子

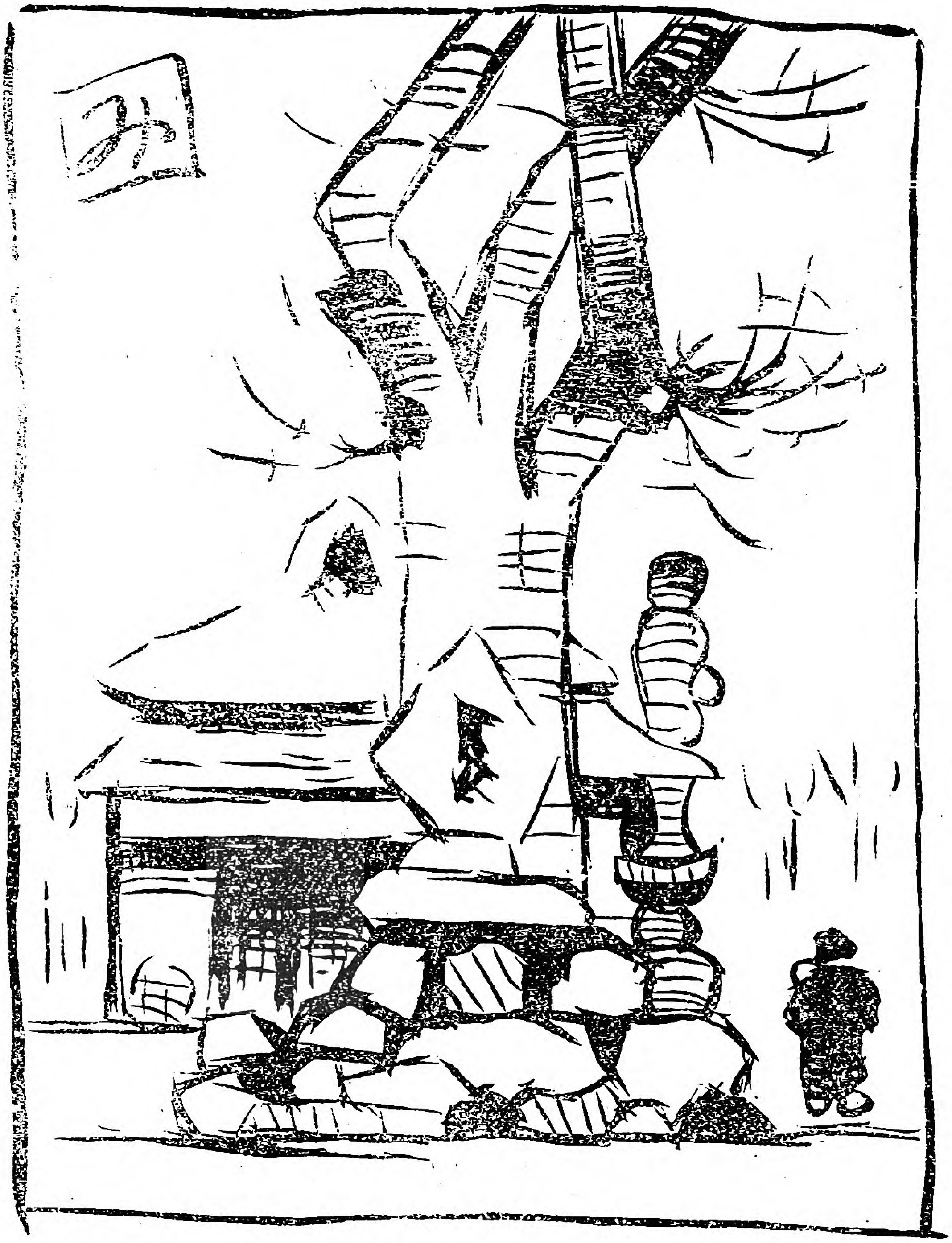
何んな事が湧いてこようが、降つてこようが、無言でなければならないのが弱者です、そうして無言で生き無言で死ぬ、誠に哀れな運命です。

弱者とは？私共の事でせうか、それとも生活に疲れた人を指示すのでせうか？なにしろ私共女性は弱者のかずにもれない者です。

いかに女だとて權威の爲めに服從はできませぬのに、無言でゐる、——眞情の訴へも、反抗の叫びも——感情に任して言たい事の溢れる樣な胸の叫びも、後の辛い口惜しい償の爲めにぜひとも無言でなければならないのです、……あゝ、只一度、一度でようございます心の儘、心ずむまで、言いたいのです、……つく〳〵思ひますのに——噫！この思ひ、この希望も永久に、このまゝ強者のはげしい迫害に葬られようとするので

せう、どんなにもがいても〱、弱い〱女の身てすもの、——人にまみゆる時の僅の微笑もいつしか渇いて、噫、悲哀、恐怖不安胸に心にくり返して呻きつゝ人を視るのてす、あゝ鋭い青春の嬉びも悲しみも、いつしか蒼海に一人坐したる心地して人はあれども救は乞はれず、孤獨を!!自からさけんで、はげしい感情の傷手に胸の淋しさを、くりかへし無言の底に葬むるのが私共弱者の常てす。

無言、沈默の眞理は誰しも感ずる處てす、此作者は未だ言ひたいことが一ぱいあるやうに見えて、能く表はれてゐません。（評）



廢寺の一部　茨城縣　小堀みち子

○春の色

横濱　矢野きみ子

○

二三日前に降つた雪が未だ殘つてゐる。其雪をふみながら、若い女が二三人笑つて行く。ゆるい日が同じやうに結つた桃割れの髮を照らして油が光る。

「嫌やだわ、あんな髷なんぞ……」

と一番脊の低いのが、紅い顏をして言つた。すると他の連れが思ひ出したやうに笑ふ。——若い人は苦がない。春のやうな心地だ。——

○

美しい日——私は思はず斯樣言つた。

蒼い空、白い雲、霞が棚引く。鳥が鳴く。——もう雪空ではない。冬は去つた。若い苦のない私等のやうな女の心——春の日だ。

「金ちやん遊びに行かう」

と前の家の子供が呼んだ。甥はすぐ出て行つた。此美しい日に、じつとしてゐられはしない。

○

樂隊の音。

春の照る日を浴び乍ら、色々の旗を持つて樂隊が通る。道も好し、空も美しい。人の心は華やかだ。——樂隊は面白さうな譜をやつてゐる。その後をぞろぞろ女子供がついて行く。皆嬉しさうである。

餘り樂に書きすぎました。（評）

○渡英しての感

在英國　遊子

私は一昨年の秋、渡英しましたが、まづ第一に何れの方面より見ても進歩して居る事です、それから此の英國人は非常に快活で我々日本人の眼から見ると實に羨しい者です、又口惜しくも思ひます、男子よりも女子が一層日本と異つて居る、此の英婦人の、來客のある時です、其應對振りなんぞの上手と云ふたら、日本に居りては到底想像する事は出來ません。

小供の時分から敎育の仕方が變つて居るのですたとへば「坊や、御前今日學校で習ふて來た唱歌を御客樣に歌ふて御見せ、良い子だから」などゝ云ふたら直ぐ臆せず後れずやる、もし忘れたら、覺えて居る丈けやると云ふ風で無邪氣で可愛らしい者です、又主婦に向ふて貴女「ダンス」が御上手でしたけね——何卒見せて下さいませんかなどゝ注文するともう客の氣に入る事なら何んでもと云ふ樣に勇氣があつて驚きます、ですから何事にも上達が早いです、今非常に、ジャマン語が流行して居ます、ジャマンの人が來ると其國語一ッでも二ッでも知つて居る丈け話す、又日本人が行けば日本語をまねると云ふ樣な具合で、もし知らない處があると、何んな人の前でもずんずん聞く、又人にも敎える、日本人なら人の前で聞かない樣にするとか、又知つて居つた處でもやらないで控えると、恥しくつてやらないのか又謙遜してやらないのか、一寸もわからない、或は臆してやらないのかも知れん。ですから覺えて居つた處でも忘れてしまうと、それから家庭に面白い話が出て笑つて居つても人が來ると「キリギリス」

が人の足音で鳴かない樣になつたやうです、日本の教育者たる人は、宜敷く此の歐米各國の文明進歩を識らねばなりません。

ロンドンからの投稿は珍しいことです、文章は格別でもありませんが。(評)

○寄宿舍生徒の外出前

伊豫 夢の子

出納簿を出してる方は受取にゐらつしやい、とすき通つた先生のお聲！皆かしこまつて受取つてかへる。

「Aさんあなた幾らお出しなすつて？」

「壹圓」

「そんなに澤山出して、何になさるの」

「寫眞代よ、だけど出納簿には釜絲と毛絲と筆と書いたのよ、Bさんあなたは？」

「私もないしよがしてあるのよホ……」

「あなたどこ／＼へ行らつしやるの？」

「勸工場」

「寫眞屋へも行つて下さいね」

「あらCさん外出簿こちらへかして下さい、じやBさん外出簿の方は勸工場と○○町の保證人方とかいときませうね」

「Kさん勸工場まで行つて來ますが何か御用はございませんか？」

「ありがたう！別にありませんのよ」

「Sさんは？」

「私今日外出しやうと思つてたんですがこんなに裁縫がつかへたものですからよしましたの、すみませんが封筒と巻紙と買つて來て下さいませんか」

「Bさん御挨拶に行つて來ませう」

「先生、○○町の保證人方と勸工場まで外出させて頂き度うございます」

「外出簿につけましたか？」

「はい」

「行つてらつしやい」

「行つてまゐります」

「Sさん、Kさん、行つてまゐります」

「お早くおかへりなさい、おみやを澤山……」

對話で出來上つた文章も面白いと思ひます。(評)

○新橋の停車場

麻布 蘆 久子

新橋のステイション、何と懐しいでしよう、大の仲好でした文子樣とお別したのもこゝ、大好な大坂のおば樣をお送したのも、又遠い／＼外國から歸朝なすつた兄樣や姉樣をお迎したのも此の所でした。今又私は姉妹の樣に親しくしてゐた友の清子樣御兄弟をお送致すので新橋の停車場へ參りました、場内は出る人入る人で大混雜です、赤帽の忙がしそうに荷物を擔て行く後から、カイゼルひげのハイカラが手さげのづつくを重たそうに持て來るのが目につく、と思へば魚屋のお内儀さんらしいのが子供をせおつてくると、今度は一際背の高い外國婦人の二人連と云ふ有

様で、千變萬化全く活動寫眞でも見てゐる様です。やがて清子様お姉妹をお見掛した時は、もう發車に間もない時でした故、私は清子様のお手を堅く〳〵握つて其では是でお暇れ、御きげんよくお着遊たらお手紙きつとよと只其だけ云つた計で後は思餘つて涙も出ません、清様もわざ〳〵有難う御座いました、きつとレター上げてよと其のみ云い置いてお二人共御機嫌よく御乘車なされました、私は暫く二人のお乘遊した車の窓の方計見て居ましたが、別を告ろ汽笛一せいと共に、車はゆらぎ始めお二人の振るハンカチの見えず成迄お見送致した後、獨取殘された様に私はプラットホームを出ました、今に成つてあのお別の時なぜもつとお話しなかつたろうか、御兩人共今頃はどの邊だろう等々色々に思つゝ家路へ向ふ、私の胸に浮びましたは去年兄様等をお迎した時は嬉しさの餘り言葉も出ませんでしたが、どう致してステーションへ參ると物がいへなくなるのでしようか、私にはわかりませんけれ共、懐かしくて好な所は停車場です、ことに新橋のステーションは一層好ていつも私の思出の種となります。

○束の間の誇り

徳島市　中村勝子

先に戀ひ先に衰へ先に死ぬ女の道にたがはじとする（「佐保姫」のうた晶子）

さくら咲く彌生のなかば、美しい歡樂の充ち滿ちた中に淋しい秋風をきくやうな思ひのする歌ではありませんか。

今天地は美々しく若綠して春めき初めた野山は心好い歡樂の夢に醉ふてゐる様。

私はいつもこの歌をよんでは人知れずわが過ぎ去つたいにしへの夢を悲しうもくり返し〳〵ては泣いてゐます。女とはかうも賴りない果敢ない者なんでせうか。

男にもうち勝つたゞ束の間の歡樂を誇つて、さも嬉しさうに笑ひさゞめいてゐるのも皆心からではなくて自らをいつはり欺むいてゐるんぢやありませんか。

――さう思ふと私の頬には止め度もなくほろ〳〵と涙がこぼれます。運命とは云へ私はどうしてかうも先に先にと樂しい夢を悲しい衰へを急がねばならぬ身なんでせうか。いつはりのよろこび、誇り―　そこにどれだけひそかにひめた悲しみがあるでせう。

然し女と生れた以上はんどな悲しい思ひをしても、矢張り男よりは先に〳〵と悲しい淋しい女の道に從つて行かねばなりません。

あゝ何といふ悲しい歌でせう。

○男と女

土佐　寂靜子

冷い風がピュー〳〵吹く唯一線の野の道の邊　枯柳に添ふて屋根の低い小さい家がある。煤けた天井には草履や草鞋なんかゞごた〳〵つるしてある。五六枚の漆のはげた菓子箱には餅菓子とひからびた様な洋かんが賣れ殘りの様に並んでゐる、これらが、うどんそば、と變體で書き散らした張り更へたばかりの眞白い障子の、大方地震か何かの爲だらう、入口の三分の一程すいた間から見られる、妾は其まゝ目返そうとして、ふと目に入つた、すぐ其處の上り框に腰掛けた黑い硫い髪の毛ののびた骨格のたくましい男と、餅を盛つた盆を一つ中にして坐つた若い女とが、妾はハッとして目をそばだてた、若し人が見たら注意深い目、猜疑の光に滿ちた目と云ふのだらう、妾はたゞ其男、三十五で獨身だと村で評判の其男に引きつけられたのだ、男の瞳は情慾に燃えてゐる、女はまだ若い十八九ばかりだらう色の白いちぼこい顔である。恐れる樣な恥かしい樣な嬉しい様な瞳だ俯向き勝ちに何を考へてるだらう、男は何を云つたらうとふと顔を上げたひやうしに妾と瞳があつた、妾はヂッと見詰めた女はハッとしたらしく男に何か云つて膝を立てた、と「何ッ!?」と云つた様な鋭い男の目が恐ろしい勢で妾に向けられた、妾はギョッとして彈き返へされた樣に止めた足を運んだ。あの獸の樣な男の目、弱々しい女、あの女は處女だ、きつと今は處女だらう、ああ其女と、あの男、妾は二つの瞳を頭に浮べて一種の不安な思がした五六間ばかり行つて振り返へ

ると、　入口顔らばかり出してジツと此方を見て居る、彼の男だらう、
はまた彼方をみた、寂しい野の道を通つてるのはたゞ妾一人である、
ゝあの女！と彼の男！妾はいつそ引返そうかと思つた、邊はもう闇くなつた。

○靜かな時

京都　ちぐさ

弟は寢たし、母は裁縫、私は用事をすました靜なのを幸にこれから投書の原稿を書かうとしたが、さて心はそれて胸は人なつかしさが千々にせまつて來る。筆は少しも動かない。春の夜といふのを二三行書いたが、つまらないから止してしまう。すると例の空想の畵が手帳の裂いた紙やそばの半紙等を、きらいなく見舞つて行く。

今泣く人を書いたと思へば、すぐ氣取つた寫眞のスタイルに走る。鉛筆を細くけづつてはかき先を折つては又けづつて居る中につい／＼茂子さんの御琴に氣がうつつた。やがて起る笑聲、春のさゞめきにぎやかなのが心にくい、又羨ましい。あゝ！手は此はいつか胸にくるまれて。

たしか、神經衰弱だと思ふと急にいやな心地になつた。清い嵯峨野の山奥に、いつまでも／＼美しい、處女として、虎風にも、はた神の御手にもふれずして、秋の半月影清う澄んで、虫の哀傷をそへる宵に、玉ちる美の露と消えて見たい。同じ散るならばこの様になりたい——

こんな事考へて居る間に弟は起床、あゝ又、いそがしい時が來たとノート鉛筆紙を片付けて守する。弟は無邪氣な可愛い子だ。去年迄は、よくこの子をモデルにいろんなことをかいて喜んだものを、あゝ、もう今は全くなやむ乙女。靜かな里に、靜かに終りたいとねがふ身だ。私は全くなやむ處女だ。けれど、これを過去として新らしい、智識を求めようとする自覺心を發揮さす勇氣もなければ、只、靜になやみの中の光明をのみ慕つて、靜に朝な夕な、あるひは袖をしぼり、あるひはほゝえんで、進みゆく世の、一片を借てり、日を送るのである。



ごぜ

新潟　水澤筆子

○悶え

備中　篠原しげ子

あゝ此悶え悲しみ毎日かうして机にもたれて苦しんで居る此腸を引き裂く樣だ、あゝもう一度少女時代に歸りたい、十一才の時であつた、隣の嫁さんが姑に氣兼でなりませんと云つた、ねえさん氣兼つてどんな事とあやしんで尋ねた。私其時何の苦しみも悲しみも知らず唯面白い許り無邪氣であつたあの私がかうも變つたもの、長ずるに從ふて嬉しさ樂しさは遠ざかつて了つて悲しい事のみ覺えられて一昨年よりは昨年春、春よりは秋、秋よりは冬と悲しき事のみ此胸に刻まれて過して來たが、一歳

取つての今年の春、今日此頃となつてはもう涙の乾く日とては更にないあゝ此悲しみは慕しき母樣にも知らせまじと陰になり陽になりして涙をおさへ平氣を裝ふて居たが、計らずも此間より食氣進まず顏色衰へ、呼び給ふに返事もせぬ事度々で母も非常に心配して下さる、あゝ氣の毒なあゝ私は此悲しい運命に生れた者か、あゝ私、私と云ふ者のなかつたなら此悲みもないものを。

○野路

丹波　涙　なき子

それは恰度秋の最中でした。私は村端れの小さい野—と言つてもほんの小山の間の平地—を通りかゝりました。心持のよい午後の太陽で彩られた野面には、赤兒の唇のやうな可愛らしい赤い花が咲き亂れてゐました。誰が何と言つても許さぬといつた樣なけ高い野の色は、私の胸には寂しいといふよりは、むしろ物凄い樣に映りました。

私は洋傘を横に置いて、小さい石に腰かけて、莖の赤うなつた草や、あちこちに生えてゐる茅萱のむれなどを眺めたり、果しのない蒼空を渡る雲のゆきゝに氣をとられてゐました。

すると私の前を、バサ〳〵と物さびしい草履の音をさせながら、十ばかりの女の乞食が、遠い青空を眺めながら默つて通り過ぎました。とそのあとは、急にひつそりとなつて、ぞつと寒氣がしさうになりました。いづれ母親があとから來るだらうと、心待ちに待つてゐましたけれど、いくらたつても誰も通る者はありません。唯小さい野面に秋の日が喰ひ入るばかり。

急に風が吹き出しました。さみしい、心の底を流れて行くその音。私の心は知らぬ間に大空に向つて、一足一足西に傾いて行く日影を眺めてゐました。

○幼き愁

鳥取　安木春子

今日此頃、私の思ひの何故かうも、不安な事であらう、何と云ひ表はしたらよいか、暗い、深い、穴と穴との間の、細い道を行くとでも云ふか——一歩—一歩足がふるへて、胸がふるへて、そしてはぢつと立ちすくむのだが、その兩の穴から吹き上ろ、冷い風に裾をまくられ、頰をなでられて、早く、この恐ろしい所を逃れようとあせる。今日も物思ひに勞れた頭を、靜めようと窓によつて、小止みなくふりしきる雪を見てゐると、もう止度もなく涙が出て、ほら！袂のこんなにぬれるまで泣いたのだ。五つの幼い秋に母を失つてから、姉は、母をしたつて我を抱いてこの窓に立つては、城山の東の一番よく光る星を指さして、れ御覽、妙の母樣は彼處にいらつしやるんだよ、泣かないで待つてゐたら赤いリボンやら、かんざしやら、持つてぢつき歸つていらつしやる」と、すかして下さつた。幾年かの後におぼろながらも、死の意味を悟つてからはいよ〳〵姉のなつかしう、只このかげにのみ、かくれてきたものを、泣いてすがる袖を拂つて、「何事も運命なれば」とのみ、人は知らじな、表面のみは美しい花嫁樣ぶりに涙をかくして、人に嫁いでから三年になる、せめてはすがつた父は老ひ、兄は日ならずして相愛の人を迎へる！あゝ、私は何處へ行つて泣かう、世は廣けれど私の幼い涙にひざをかして呉れる人はない、「いつそ母樣の所へ行きたい」私は獨言ちて、たそがれの東の空を、仰いだが雲は低う、たれて、其處になつかしい母の星を見出すことは出來なかつた、「お星樣も見えない！私はどうしたつて一人法師だ」ほゝにはまた新しい涙が流れた。

○私の家庭

京都　萩　廼　家

淋しい田舍町をはなれて、音無瀨河を渡つて南に數町行くと、たゞ一軒毀れかゝつた門があつて、その内に松や梅が所せまきまで枝をはびこらしてゐる庭が見える。その奥に、昔なら何々隼人何々直人とでも書いた標札が懸けてありさうな家が見えかくれしてゐる時々琴の音や、歌うたふ聲が洩れて來る筈。これが私の十八年間育つた家である。

家族は四人である。朝飯がすむと、父はお勤めに、兄は學校へ出られる私はお庭とお座敷とを掃除して後、母の側でお裁縫をする。お晝は、母と二人で淋しく御飯を認めるが、晩になつて四人等しくチャブ臺に向ひ五分心の釣りランプに照らされて、ほく〳〵笑つて皆が箸をとられるのを見るのが何より樂しみだ、が去年の春、妹の千代子が逝つてから何となう皆が無口になつたやうに思はれる。然し決して〳〵一家の平和といふものは損ふてゐない。父は何の隔たりもないやうな調子で時々おつしやる。赳夫も今年は卒業するんだが、嫁なんか貰はないでもいゝよ。夏子もだ、もう一人前になつたけれども、何も隣りの斐子様のやうに無暗に急がないても、れ、ミッスて暮してもいいぢやないか。かうして親子四人が睦しう暮すのが乃公は一番のたのしみだかられ……と。母はその都度莞爾とせられて、さうですれ、とおつしやる。兄は別に反對などしさうでもなし。私とても異議のないのみか、否寧ろ左様あつて欲しいのだ。けれども危ぶむのは、このスイートホームがいつまでも〳〵續くてあらうか？をだけてある。

○淋しき夜

横須賀　君枝

小春日和の暖たかさに、お椽に出て、新聞見て居ると、濱子さんがいらつして、今晩是非芝居に參りませんかと、お誘ひに來て下さつた、どうして、御許しはないとは思つたけれどもしやと思つて、髮など結びかへて、夕飯の時おそる〳〵お願ひすると、あんのじよう、御許がない、アゝなぜ家の父様は、こんな昔氣質でいらつしやるのだらう、悲しくて〳〵涙がポロ〳〵落ちる、なんてつまらぬ晩なのだらう、毎晩遊びに來て下さつた、櫻子さんは横濱にいらしたし、今頃はあの賑やかな町を歩いて母様にリボンてもれだつていらしやる頃だらうに、アゝ思ふまい一人居間に入つて、火鉢によりながら、色々の事思ふと只羨ましくて〳〵一つ島ちやん(猫)と遊びましよう、折角れて居るのを起して球をじやらすと、今日赤いリボン掛けてやつたから思い切つて遊べないのか、すましたもの、それとも島ちやんの一番仲好の櫻子さんが、いらしやらないので淋しいのかしら、ほんとに可愛らしいこと、私の膝を安樂椅子と思つて居るのか、もう膝の上でグー〳〵。

久しく御無沙汰致した、誌友の廣島作子さんと東京の鹿子様に端書書いて昨日の日記つけ終ると早や十時アゝれましよう〳〵れていゝ夢でも見ませう。

○箱根の夏

靜岡　こすもす

翠したゝる山陰の石壘に立つて居ると夏ながら肌寒い山風がすら〳〵と襟元のおくれ毛をなぶつて其處に長い袂がひら〳〵と宙に舞ふ足本を流れる谷川は泣くかと思ふと怒り咽ぶかと思ふと激して、紺青の水面からは眞白な煙がさつと上る。私は餘り面白いのでひたひたと水のよせて來る所まで行つて見た、そつと手を入れるとしびれる樣に冷たい、ぢつと水底を眺めると大理石で作つた樣な眞白な私の手は翠の苔の上にかつきりとすいて見える、ほしや〳〵と水を動かすと縮緬の樣な波がよつて無名指のリングがきらりと見える、私は先山から取つて來た撫子の花びらを散らして見た、一ひら二ひら……三ひら四ひら……可憐の花びらは渦卷く波間を見えつかくれつ、はては岩の影へ――、私は何だか五つの花びらの行方が氣になつて來た、五つの運命をもつた五つの花びらは何所まで行つて何所で止まるだらうと、思へば私達五人の兄弟の行末を暗示してる樣て、もうやたら胸が騷いて、いつそ川を下つて私達の行末の幸か不幸かをたゞして見たい樣な氣がする、突然さつと大きなしぶきがかゝつたのでびつくりして見ると肩から胸へかけて縞モスの單衣はしつとり私は先から夢中になつて考へてゝしぶきのかゝるのも知らずに居たのだ、餘りくたびれたので紅のハンカチで手を拭いて立ち上ると、ぱつとクリーム色の洋傘を掠めて岩燕が飛んで過ぎた、私の目はいつか鳥の行く方について行つた。

○寂寥

下谷　蕉雨子

思ひがけぬ雨に逢つて×神社の軒下に雨宿りをした。敷石は瞬く中に濡れて、水小舎の奉納手拭を搖かす風は、如何にも冷たさう。

この時、傘を打つ雨の音が、近くに聞えたので、振り返つて見ると、それは頰の瘦せた、蒼白い顏色の、見るから痛々しい、病あげくらしい、四十格好の女であつた。敷石の上を徐やかに步を運びながら、拜殿の方へと行くその後姿を、私は眤と見送つた。

さゝあの力ない步きやうは、何か心の裡に潛む、苦痛の影ではあるまいか、私は何うしても彼の婦人が、たゞに病後の疲勞の爲に徐々步くとは思はれなかつた。女はやがて拜殿の軒下に傘を窄めた。

そして光線の達かぬ拜殿の奧を、凝然と見上げ乍ら、鐘の緖を振ると、鈴の音は如何にも嚴かに、且つ心の奧までも泌み入るやう、雨に靜かな廣い境內に鳴りひゞいた。稍暫らく跪いて、一心に祈念をこらす女の姿は、賽錢箱の傍を動かなかつた。

やがて雨は小止みになつて、空行く雲の斷れ目も見えそめ、四邊は何時しか明るくなつて來ました。

拍子の音にふと彼方を見ると、女は今立上つて傘を拵つた。沈み勝ちな淋しい瘦せた姿、そして思ひ做しか知らぬが、霑んで居るやうな眼を見ると、私は堪らなく氣の毒になつて、面を反向けてしまつた。

鳩が三四羽羽音高く、濡れた敷石の上へ舞ひ下りた。

○苦しき胸

伯耆　ふみ子

妾は、夕ぐれの淋しい景色に、あこがれながら、激した胸を、ぢつと抑へながら步いて居るのです。疲れた灰色の雲が、ちぎれちぎれ寒い風に吹かれて、果てしもなく走つて居る。足引の山の麓に住つて居る暖が伏家からは、細い夕げの煙が昇つて行く。妾は、不突強い寒さを、腟のあたりから覺えた、思はず、オヽ　寒ッて肩掛の中に顏をうづめた、途端今まで、はりつめて居た妾の胸は、急にゆるんだ。妾は、さつき迄職ッていふ事を、いちづに、考へつめて、もう頭も胸も、しびれさうになつて居たのです。しかしどうしても、決行する迄には斷案が下せなかつたのです。母樣がいつも「從順に好く勤めて呉れ」つて涙ながらに、おつしやるのが、耳の何處かで私語く、同時に生活といふ儚ない思ひが、潮の如く湧いて來るけれど、之れらは妾の心て、強ひて打ち消しもしたが、友の淸子さんの一件は、胸をはなれない。

淸子さんも、校長とある何かにつき、衝突があつて感情の強い早く燃ゆる性分の淸子さんは、お互の感情に傷つけられた所に寸時も居るのは、心苦しいといふので、獨案で遂う〳〵斷行なすつた。世間の人は、馬鹿と冷笑した、天晴れ才女としての　淸子さんの名譽は、此の一事の爲め奈落の底に陷つた。妾も、今、淸子さんと同じ境遇に望んで居る、いつそ彼の人の樣に妾も思ひ切つて、……　……〆は、思つて見るが妾は淸子さん程、感情が強く熱しはしない、妾には名譽や虛榮は、どうしても捨てる事は難い。それだけ冷つこいのだ。

あゝ妾しは冷つこいだけ、淸子さんより苦しい、いつそ淸子さんのやうに強く〳〵前後の事情を、覺えんまでに熱せば好いのですのに、……

○乳母の實家に行く途

福岡　白ばら

門を出る時、兄樣が「未だ御乳が戀しいのだね」と御笑ひ遊ばしたのも一向無頓着、夢の樣にして乳母やの後に續いた。何時の間にやら田舍道に出て居た。左は小溝、右はいささ川、ころ〳〵と妙なる小琴に譜を秘めて、流れて行く。野、山、川、乳母や、妾、何と云つたら此景色に適當だらう？などゝしきりに頸をひねつて居ると、急に乳母やが「御孃樣大變御靜です事。此度はようく遊んで入らつしやいな。淸水樣へ御嫁で遊ばしますと一寸には出られませんからね」とほく〳〵して居る。あの御孃樣此樣な事がありましたよ。貴女樣が三つ四つの頃の事御美しい御子にも似合ず髮が赤うございましたので、奇麗に御剃り申したのですよ、處が御風を召しましてねハヽヽヽ大變心配致しましたの。「あらいやよ」「ほんとでございますよ」オホヽヽヽハヽヽヽやつと村はづれ迄來て居た。



和歌

與謝野晶子選

◯（天賞）　麻布　江森美子

思ふこと皆筆にするおほどかさ似るものもなしわが戀の君

◯（地賞）　宮城　沼倉馥子

おばしまに寄りてながめぬ肌さむき九月の末の大空の星

◯（人賞）　大阪　草村君子

時雨來て襟うつさまにさも似たる身にしむ言をきけるものかな

【秀逸】

◯　伊賀　山村龍子

世の女なにを足らはでつぶやくや心のまゝに我れは戀はるゝ

◯　金澤　むらさき

木の芽どもほのくゆるらし如月の丘に立ちつゝ遠山見れば

◯　舞鶴　壺内若葉子

君戀ふる心を人にさとられて寒さおもひす不覺なるかな

◯　長野　櫛原たづ子

思ふ人さはにあるごと春の夜はかろき疲れにうたゝ寢ぞする

◯　信濃　吉川多美子

瑯玕の壁の中より聲かけてわれあることを人に知られむ

◯　長野　石上照子

それを見て若人の眼のまたく醉ふ少女に二なき玉をもたぬか

○たまり井の水やうやうに涸るる如こゝろはいつか君をなくせり　青森　小野寺美能惠

○うたがひに馴れしが罪かみなし子は日も夜も絶えずはぐくむ僻み　四谷　味方こう子

○春風や君がみ肩にわが髪をなびかせてゆく山のほそみち　大阪　山内富子

○草山をまはりて去にしみ車のおとにみゝかす春のゆふぐれ　丹波　壬生仙子

○後の日のよき思ひ出かかなしみか知らねど今は君にひかるる　伊賀　岡花子

○まきて寝しよるのあしたのつとめてに春の野ゆきて花にねむりぬ　日暮里　藤掛常子

○わが髪の衰へにけるわが胸のさびしくなれるこの頃の日記　三重　後藤たい子

○泥よどむ心の瓶のうは澄みを君むごきかなまぜてよろこぶ　島根　長崎君子

○たそがるゝ春の山をばながめつゝうつら／＼とおもひぬ君を　伊勢　田中みね女

○いにしへの小野小町もおもほゆるうつりかはりし世に逢ふものか　徳島　中村かつ子

○川くまに咲きてぞ燃ゆる丹つゝじの花の匂を忘れたまふな　岐阜　南下枝

○ますらをの兄とは知れどたふとめど風の吹く日はなほおもはれて（遠洋航海の兄に）　出雲　しらぎく

○世にあるは君ある故とおもへどもすこしく命ものうくなりぬ　日本橋　月草

○いさゝかも拒まず君が言ふまゝにおのが行手にいばらをはこぶ　長野　浅田千代子

○男の子達わが少女らをかろんずるざれ言どもを云ふがくるしき　常陸　木村桂月子

○何となく人なつかしき今宵哉待つべき人のあるみならねど　牛込　なでしこ

○戀ふる身は道のをしへも神もなし情の海におぼれて死なむ　岐阜　美の枝

○華やかに咲てはあれどべに椿寂しう覺ゆ姉のおん寺　新潟　白露

○淋しさや月はむかひの木におちてふくろう啼きぬきさらぎの春　佐渡　本間綠子

○春の日のかげにのぼらんかげろふと戀のこころのあくがるゝ子と　松本市　哀花

○かの君に似たりと思ひふりかへる心なんども春めくものか　新潟　岩本芳子

○島の晝鶯鳴きぬ青き波は渚を打てりおもふことなし　伊豆　鈴木矢壽子

○北風や我が故鄕の空こえて吹き來るものと身にもしむかな　平戸　伊知子

○うかびたる思ひを友に語らむとうすき墨するしら梅の花　京都　伊藤紫水

○美しく咲きほこりたる白牡丹きらめく上に春の日のある　濱松　高畑小菊子

○笛もてる君が姿のみえそめぬ若草もゆるをかの路より　磐城　繁子

○高山に瀧の落つるをきゝながら榮華のわれを夢に見しかな　富山縣　むらさき

○ほころびし梅の小枝に朝まだきあられふるなりきさらぎの京　成田　登子

○悲しみを忘れむとしてことさらにゑみをつくれるわれにあらぬか　富山　篠原深雪

○夕月夜香にさそはれてしらぬ間に梅咲く園の人となりにき　沼津　鳴田若綠

○川添ひの柳ほのかにしづれつつ船のまろうどうたなどうたふ　沼津　渡邊とよた

○荒磯の波おそろしききりぎしに我身の立てる思ひぞつきぬ　愛知　筒井美智子

○相すめる今日此頃のもの足らぬ二人を見むと思ひかけきや　金澤　藤永靜子

○小さき花白き牡丹のかたはらに咲くにも似れどせむすべもなし　飛驒　眞砂子

○物云はずたゞほゝゑみてたゞ別るさびしき性をにくみ給ふな　飛驒　知代子

○うつせみのからなるものをある人は戀しと云ひぬあはれいとほし　岐阜市　篠田とみ竹

○り來し君が御文の其中に涙てふ文字多くある哉　呉市　碓井くれ竹

○指先に針をさしたるいたみさへ忘れずありぬきさらぎいく日　府下　かすみ子

○强ひられて好まぬ酒を飲む如くおもひて僧のおん敎きく　大阪市　鹿島綾子

○春の朝まだ明けやらぬしののめに汽車の煙は銀糸張るかな　丸山ふさ子

○いつはりのこれは言葉か吾れは知らず知られどよしやいとこころよし　三重縣　吉川澄江

○湯かへりの足駄に附きし雪したき淺黄のれんをくぐりける君　加賀　田中白百合

○泣叫ぶ千人の涙それよりも雫ばかりのおん涙よし　大阪市　藪鶯

○枕してうたを思へば何處となく　のなく聲するものか　長崎市　茂榮

○あなわが瞳いづく見るにもうつくしき君がかほのみほゝ笑みてある　熊本　金子片枝

和歌

春花に似たる君をばわれぞえむさなくば死にて苦をのがればや　本波の花

○

戀てふは幼きときのよき夢のたゞよふ姿みる心かも　伯耆　夕葉

○

打つけに我を泣かしめいたましめ微笑み給ふ人もありけり　鳥取市　桑澤しのぶ

○

ことごとく取れとのこらず手の玉を君にしめしぬま玉紅玉　西多摩　よし子

○

あゝ若きみ魂を冥にみちびくや香の煙はたえだえのぼる　羽前　あらゝぎ

○

尺ほどの鉢のあぢさゐやはらかきやさしき芽ふき春となりぬ　丹後　松本たき子

○

むかし見しその夢のあとたどりゐる少女ありとは知らじな君は　淡路　若葉

○

北の海のこのさむさより猶われは寒き思ひす十日文見ず　山口　酒向敏子

○

うたうたひ田植なし居る少女子を神とおもへり山ざとのわれ　上毛　高柳靜子

○

わがいのち生かす泉は枯れ果てゝなぐさめの神雲にかくれぬ　三河　天野淸子

○

心にもなきなさけにも面染むる山の少女をなつかしと見し　鳥取　安木はる子

○

黑髮のやがて落ち行く悲しさをくりかへしつゝ秋ふけてゆく　美濃　堀ときわ

○

一たびは世のことはりにこの君をしりぞけしかどされど忘れず　伊豫　夢の子

○

相見たるそのはじめの日うつむきてものいひしより忘れぬと云ふ　豐後　冬花子

○

そことなきあこがれ心火影より君あらはれぬふときえてゆく　香川縣　綠葉子

○

百千の樂聲我をそゝろともこの悲しみのいかで消ゆべき　上毛　柳澤もと子

○

本堂に一人文讀むわかき子をにらめてありぬ如來尊像　上毛　岩井梅代

○

我窓の紅梅の花笑みそめぬ口づけすなり鶯の來て　越中　山本紫菫

○

あゝ我は聲聞く度に思ふかな我死ぬ日にも烏鳴くやと　備中　都喜子

○

まごころは知らず笑顔の報酬をばよろこびて受くおろかなる人　奈良　中富よしみ

○

靈魂の住家の幸を老人の思へる窓に夕せまりぬ　府下　鈴木春子

○

美くしきわが妹の衣ずれの音に見かへる白椿かな　信濃　下枝よし子

○

世にそむき人にそむきて二十して琵琶いだく身も秋はさびしき　大阪　福井まさご

○

何となく云ふべからざるよろこびをつゝむがごとき春の宵哉　大阪　小百合

○

我心二十四時の束の間も涙下りて母のこひしき　千葉縣　吉井光子

○

十のゆびみなかゞなへど待つ君は來ず夜のまどに雪ふる雪ふる　美濃　傍島小枝

○

ちら〳〵と六つの花散る古里に父の御墓をまつりにぞゆく　小石川　齋藤尾花

○

病みぬればものみなわれに死れかしと云ふとごとくにひがみぬ春に　北海道　安達溪子

○

ひろ見つる草履の中の赤き緒のちさき草履を夢に見しかな　陸前　小岩やなぎ

○

わが心ならくの底に悶へける少からざる苦しみをして　加賀　福田節子

○

うら〳〵と立ち初めにけり春霞沖の白帆のかずもそひつつ　小石川　渡邊芳子

〇静岡　原田山吹花

朝の雨いつしかやみて日かげさす小窓の梅に鶯ぞなく
〇静岡　小玉

月見るはよけれど寒さはだをつくあはれ野中のあばらやの床
〇静岡縣　清子

君がきて二年むかし我胸に火たきしその火なほもえのころ
〇伊勢　露木雅子

十六の少女の胸に抱くなる緒琴のみだれ母も知らじな
〇富美子

雪の里わがとひゆけば戀人がわらきぬた打つ音かすかなり
〇京都　井上すみ子

われ旣に第一の戀うばはれぬふたゝびものは思はじと云ふ
〇下關　山田くに子

思ふ事云はて過せしあさましさこのうきことはわれぞつくれる
〇兵庫　紅雀女

夕暮れの小雨にまじり山吹の靜かに散るはおもむきのあり
〇茨城縣　篠塚けい子

云ひ知らぬやさしき君がみ言葉を日記にかきたる春雨の日よ
〇茨城縣　岡田きよ子

いろ〳〵の悶の末は我が心かならず君をうらみにゆきぬ
〇秋田縣葦會　秋葉みれ子

さらぬだに悲しきものをいとゞしく胸うちしなり病む閨の雨
〇三重縣　瀨木八重子

なつかしき君がみ文を今日見ればいのちの十年ちぢまるここち
〇﨟布花子

夢の間も堪えず思ひぬ彼の人に戀の少女のありやなしやと
〇埼玉　せつ子

君がすむ家とも知らで去年の今日めでてすぎけるしら桃の花
〇伏見　竹村まき子

鶯の聲まばらなる垣の内れんげうの花うす黃にぞ咲く
〇和泉　早川登志子

天地のものみなうれし春の朝田にさく豆の花を見て笑む
〇泉　金田文子

八重櫻花を連れて咲きしかど見る人もなしわが胸の園
〇明石　落葉子

何となくわれほゝ笑めばこの君もならひて笑みぬ朧夜の月
〇備前　岸本正子

曇りつつ雪ともならむ大空は君を得ざりし我胸に似て
〇京都　川島政尾

ひとしきり雨やむ野邊は人もなく松の雫ぞあはれなりける
〇信濃　藤澤すま子

ちく〳〵と籠の小鳥が父啼きぬわが身死ぬらん病のまどに
〇備中　馬越昌子

わが言をいなみたまえる君にしもいさゝか胸の焔のあるを知る
〇淡路　留子

荒れはてし廣野に似たる我心日ごと夜ごとに風の吹く
〇三河　名無し草

夕ぐれの雜林かへる牛の脊に白き雪降るふるさとにきぬ
〇兵庫　杉山春翠

世の常の言の葉をもて君われに今日も語りぬうらめしきかな
〇兵庫　菅原しづの子

笑みながらすぎし事どもこま〴〵と語りたまひぬいと強き君
〇大分　原田澪子

われよりもなほ美くしき彼のひとを愛でませとわれ云ひやりしかど
〇橫須賀　小夜子

鶯の初音も聞かで我が庭の紅梅の花ちりにちりつつ
〇臺北　久江

あゝ自然山路のゆりのまさかりにおびゆるごとき我思哉
〇滋賀　志賀小なみ

春の日の君が艷なるあしおとにさめたる蝶と野の花すみれ
〇大阪　香崎靜子

彼の君のおん頰の色はこの頃の盛りの花と同じかりける

麹町　かはたれ

○わが知らぬ三歳にして失せたりし兄がみ墓に花たてまつる

周防　白百合

○妹が二八の年をむかへしとよろこぶかほを見て泣きぬわれ

石狩　河合菊子

○羽子板を母にねだりし日を思ひ村の市などおもひやるかな

四谷　桝崎佐喜子

○心なく畵がきし顔は亡き姉ににたりぬ我の悲しきこゝろ

四谷　笹原芳江

○こは神の所爲か否かは知られども日毎にこころ運び去る人

近江　雅子

○人事をあやしみし日はとくすぎて今日ふみ初めぬこひのやみぢを

大阪市　向井白露

○悲しさをあつめし身さへ夢にのみ折々笑ふ事のあるかな

横濱　村田千代香

○笛たいこ若やぐ聲の三味の音につれて舞ひたる我身なれ共

香川縣　渡邊清子

○若草の道のゆくてに湖見えて君が城あり春の雲浮く

北海道　金子竹子

○磯松の風のしらべも音絶えて月ましろなる冬の海原

信州　むらさき

○降りつもる山々の雪よそにして初日にあがる淺間の煙

靜岡　こすもす

○知恩院の鐘のひゞきに花散りぬ春の逝く日をうれひてあれば

宮城　眞野圓葉

○北上の川霧深く立ち罩めて幽かに聞ゆ春のかりがね

加賀　葉末

○ふむまじき道とも知らずたどり來しこのつみ人をふかくとがむな

近江　田川優子

○笹屋根の脊戸の筧の枕木に春の雪して鶯ぞ鳴く

小樽　清田芳

○鐘つけば遠き淺間に餘音してほろ〳〵と散る梅ほの白し

清國　藤本美津子

○梅が香に鶯の曲歌ひつつ春まつ家の小琴のあるじ

越後　新井田つれ子

○そのかみにしばし囚はれうたゝ寢の夢の中にも髮ほこりせし

二木富子

○あな苦しあゝ悲しうしあゝつらしあゝ冷やけき日にあふわれは

愛知　佐分華影

○紫にあかきがまじり雲もゆるみ空のもとに心のさわぐ

信濃　飯沼春枝

○打ちつけに戀ひしと言はむ力なきかよはきものを少女と呼ぶや

伊豆　村瀨常月

○吾が心靜ならんとねがふ子よ風なき磯の松かげをゆけ

本郷　相樂なでしこ

○のたまへる其一言は我胸にたへず華さくくれなゐの華

大阪　改野夢垣

○春の夜の門に消えたる口ふえの君に似たるが心やましき

下總　岡田富美子

○黒髮は千筋の金蛇炎はくそれの如くにかぜにふかるゝ

小石川　渡邊喬子

○君いますその大船のしら帆のみかすみのこせる春の海ばら

大阪　高山米子

○春來れど百千の花は笑へども世のさびしさをひたなく少女

四手絹子

○春のみちおちたる細き紙ぎれに戀と云ふ字の紅きがありぬ

茨城　すみれ子

○風吹けば少女菜洗ふ水の上に雪とみたれて散る櫻かな

上澁谷　國分常子

○三味線の一の太糸切れしごと我が戀こそは終りたりけれ

杉山仲子

○君がきて我黒髮にかさしたる白ばらの花よき香するかな

○　和歌山　白　歌子

戀といふもあまり淋しきことかなと一人隱れて泣きぬ春の夜

○　伊豫　白萩

洗ひをへしたらひの水のさゆらぐにはじめて知りぬ春の小雨を

○　大阪　秀峯

ゆらぎては止むる知らぬ胸の水君が心にしたがひてゆく

○　大磯　山口芳子

けふあすと待ちあこがれし梅の花しら〳〵咲けどわれ病みにけり

○　尾張　加藤ちよう子

春の日の日の暮かたの木かげゆき入相の鐘きくさびしさよ

○　愛知縣　山上しう子

あゝ淋し思出かなし夕暮の軒の春雨しめじめとふる

○　渡島　千葉深雪

夜もすがら枕に涙こぼしつつわが思ふ子よつれなき人よ

○　神田　松村富美子

夜もすがら古郷の空しのばれて聞くもかなしき細き雨かな

○　福岡縣　荒川みつ子

春くると梅が枝に來て鶯が花散らしつゝ初音もらしぬ

○　群馬縣　大塡千代子

幾度か躊躇たりし君が文封じ目きりぬ春の夜にして

○　陸前　阿山としえ

袁は君を見ぬ日のわがくしにからむおち髮それにしも知る

○　長野　古畑よしみ

別れてふ時にのぞみてなほ君をうらまず君が性をうらめる

○　長野　中島あさへ

三星座頭上に見えて五日の夜君と別れし空に似るかな

○　麻布　石井すみえ

われひとり牢に座る心地して別れしあとのいく日をくらす

○　陸奥　和田八重子

あくがるる人に逢へども言ひも得ぬ戀はくるしきものにぞありける

○　京都　高城笑子

雨またく晴れてあかるき化粧室のまどにきてなく春の鳥ども

○　長野　志津なみ

朝あけの庭の白雪はきよせてほのかににほふ梅よろこびぬ

○　岩代　笠間松江

しづかなるよき月夜なり草も木も芽をふくらしや霧ふる中に

○　秋田市　小室信子

野にさかば君愛てべきをわが胸に咲きたる花は魔とにくむ君

○　豊後　里清子

さまよひぬ落葉木立のしづけさに夕月ゆらぐ白き徑を

○　伏見　京子

うつゝ世をのろふさけびか木枯の枝をならしてやみにひゞくらむ

○　高知　寂靜子

かへりくれば今年も咲きぬふるさとの古沼に白き名もしらぬ花

○　京都　田中春子

あるをすてなきをもとめて日もすがら泣き暮すをば戀といふらん

○　備中　沖本胡枝子

面似たる兄君を見て又泣きぬ父の棺をおくるたそがれ

○　福島　夕顏

黑がみのみだれをときし君なればすべてをやらむばらも牡丹も

○　福岡　澄子

疾く死れと神のさゝやき給ふごと時計響きぬ病みてある夜を

○　山ざくら

男の子とは惡魔の巣かをそろしや妾をあざむき妾を捨てつつ

○　北見　涌谷ひで子

死出の旅早め給ひぬ君なくば此哀しみは見ざりしものを

○　遠江　鈴木小菊女

香煙の渦卷く中に吾戀ふる君の御靈は迷ひ居るらむ

○　横濱市　堀江きく子

かたはらの我を忘れて友だちと興ずる君のうらめしきかな

○　信濃　東條周子

春の雨少女二人のかささしてたどる野道にうすけぶる哉

○信濃 川端澄子
花さきぬいと美しきいろをしていとも嬉しき香をもらしつゝ

○日本橋 松岡千代子
我とわが性の知られずものとへば白梅なりとゑみて語りぬ

○岐阜縣 熊崎浪江
力なき冬の日さしておちがみの好き黒髪の一筋に照る

○徳島縣 野澤繁子
櫻散るおぼろ月夜にたゝずみて人知れず見るそのかみの歌

○福岡 建部良久子
君もまた我と同じき思ひしてこの年月を悶ゆと云ふや

○神田 愛子
散りてゆくかをりゆかしき紅梅の梢にうたふ春の鳥かな

○佐渡 静香
白き道紅の道の二筋の辻にさまよふわれなりしかど

○佐渡 朝香
春行くか我も少女のほこりをばうしなひし身ぞ涙流るゝ

○河内 西村浪子
里の子は草苅る業もあきはてゝ河を隔てゝ石いくさする

○茨城 直井はる子
紫の雨のそゝぎて春の野の草はもゆらん心のどけし

○和歌山 木澤てる子
去年見たる小女はあらず衰へし翁物うる橋ぎはの家

○備中 篠原しげ子
かの海の潮に生あり心あり月と相引き相戀ふるさま

○信濃 紅ゆり
對ひ居て語れど心ときめかぬ寂しき性とわれはなりけり

○信濃 丸山峯子
そよ風に朝露ちりて涼しげにゆらぎて吹きぬ桔梗なでしこ

○黒百合子
彼の君は戀しき君はわかくさの妻あり子ある世と思へども

○讃岐 衣輪ちゑ子
かげらふや道は分れてかんらんの若葉の森に一筋は入る

○新潟 水澤筆子
春の朝遠き櫻の山々のかたへにうしとおとどひを見る

○丹波 涙なき子
かく迄にかなしき歌をうたへるにえ知らぬさまに鳥はとび行く

○松香
たぎる湯も時へば水となるものを變らじとみし我幼なさよ

○南信 貞子
泣き沈む君に疲れし手をかして大わたつみのきりぎしにきぬ

○横須賀 齋藤松代子
玉川の清き流れの舟にある人美くしや紅梅の花

○能登 和枝子
女連友禪の袖つられつゝ春風の吹く町をあゆみぬ

○上總 黒坂白笑子
舞ひ終りしろがねの花うちにほふかしらをひざにもてくる少女

○横濱 ちよか
みどりなす小波よする湖や白鳥赤き口あけてなく

○小石川 渡邊喬子
春雨の一日二日とふるまゝに緑をひゆく春の若草

○伊豆 春野彌生子
いとせめて夢に會はむと眼を閉ぢぬ片戀の身のかなしさにわれ

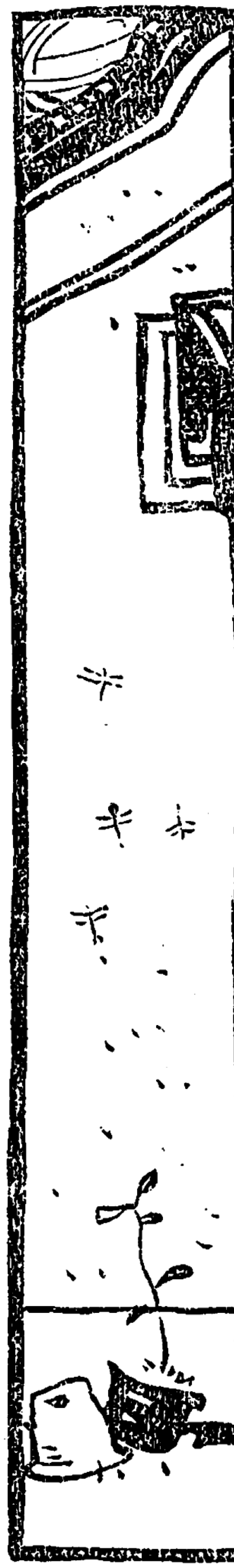
○長野 川澄薫子
花さきし梅の梢に鶯は長閑けき春をうたひつゝ居る

○磐城 倉田かつ子
ほの白き面輪浮びぬくら闇に只吾一人ものをおもへば

○美濃 藤井しづゑ
なき君の聲の聞ゆる心地して幾夜立ちけむさくらのもとに

○本郷 相樂きみ子
つくつくとながむる花も心なく冷たき人の植えしそれかも

○長野 臥雲紫子
鶯の初音きゝたりあけがたの白梅かをる風ふく中に



日記

横瀬夜雨選

○去年（天賞）

赤坂静江

二月七日、晴、華氏零下廿六度、今朝遂々井戸が凍つて分銅落して漸々汲み上げた。新市街へ買物に行くのも止めて、神妙に母樣の側でお裁縫する。內はペーチカ(露式暖爐)をどん／＼たいて割合暖かいが、玄關ふくのに雜巾が氷つてと艶がこぼしてゐた。東京から封書が二本、文樣の卷紙の末から紅梅が二片落ちた。小樽へ注文のキヤベツはまだ屆かない。夜に入つて氣溫は零下廿九度六分に下降、それでも便船の都合もあるから務めて返事書き終へて、床に入つたのが十一時十分、澄み切つた空には、北國特有の紫の樣な星の光が輝いて、何とはなしに胸が痛い。窓にそむいて漸々眼をつむる。

八日、小吹雪、華氏零下卅二度五分、宵の空にもなく降り出した雪に風さへ加つて、父樣のお見送りに玄關を開けると息がつまりさう。上靴の底に眞綿を敷く。使に出た馬丁の話では、司令部の門標が樺太守備隊司令部の守の字迄しか見えぬとか、何にしても吹きつける向だから堪らない。

裁縫は止めて、母樣と客間で雜誌等見る。ペーチカの上に足をのせて外を見て居ると、何處からか二重の玻璃窓を通して降り込む雪が椽に高くなつて居る。此の降りが止むと徑三寸もある氷柱が軒一面に下る、見馴れぬ眼には美しからふが、私は內地の青い山がなつかしく戀しい。鈴谷山脈と聞けば優しげだけれど、月波、あの懷しい月波――私は佗しい白い山に倦きて仕舞ふた。今日は父樣おひげ氷らせてお歸りになる、明晩司令官々舍で夜會があるとの事。父樣のお役柄に母樣と私は參謀を仰付かつて四時迄に上る筈。

夜東京へ歸り度いと云ふたら、意地惡の父樣が「海の上は步けんよ」と仰有る、小樽大泊間の航海ですつかり醉ふたもので皆にからかはれる。

今亞庭灣は全く氷に閉されて居る、其が解けて航路に流氷の懸念のなくなるのは五月頃と聞く。私は未だ三ヶ月此の淋しい白い天地に過ぎねばならぬ、噫、入床十時三十分。

樺太あたりの雪の天地が聯想される、紀念として殘して置くには好い日記です。

○春の日（地賞）

横濱　せゝらぎ

裁縫してゐると隣の教室で御琴の音がする。高い爽かな音は丁度あを空をとんでゆくやうに氣もちがいゝけれど、秋の日、雨の晝など淋しいとおもつてはよくきいた、そしてあの人の居ない倫理室の窓に凭つて、雨に煙つた海や程ヶ谷の山など眺めて泣いたこともあるやはらかな日が森を照らしてゐる、春の日だのにお琴の音をきいてると淋しくなつて行く。

夕方お湯に行くと、此間本を貸してあげた雛妓がきてゐる。湯槽の中で一緒になつたので名を聞いてみると御座敷の名ですかほんとの名ですか、ときく。可哀そうな情ないやうな氣がして、おざしきの名はといふとすゞめと云ふあの人はねと、板のまで洗つてゐる伴の半玉を指さして、かるつて云ふのと可愛い顏を横にしてわらつた。

誰も居ないのでそつと去年の日誌を出してくつてみる闇ぞらに美しい星が輝いて居た。梅のさいたゆかしい夜を夢のやうな想ひを語りながら、お峯さんと二人で町の灯の中を歩いた。暗い橋の上にたつて、忙はしげに瞬くとほくの町の灯もみた。遙かにつかれきつたやうな遊里の青い燈も見た。今夜は姉さんのお嫁入りなのである、さつき明るい座敷に通つた時紅絹の振りや袖口の美しく揃つた衣は、衣桁に懸けられてあつたけれど、姉さんの姿は見えなかつた。晴れの姿を一目見たかつたけれどとう／＼逢はずにいまごろは新しい人の家の人であらふ。川さんのところへ寄つたら彼の方もきてらした。峯さんと三人でいろ／＼話もなすつたけれど、私はたゞ默つてきいてゐた。

這麼こともかいてある。あの頃は身もこゝろも自由だつた、そして周圍のものは皆花やかだつた。姉さんとよんだお琴さんの嫁いだのは去年の今夜だつた。艶かなりし島田髷を憶ひ出す。大晦日の日にまちで逢つたら、ぐる／＼のひつゝめ髮でだらしのないやうな風してゐた、此麼なりしてと、淋しそうにわらつた、大きなお腹に注視するとお正月に生れるのだと云つたつけ、あれからまだ逢はないが姉さんはどうなすつたらふ。五郎さんがきて、今度の半ドンにあなたのとこでかるたしやうと云つて歸つた。

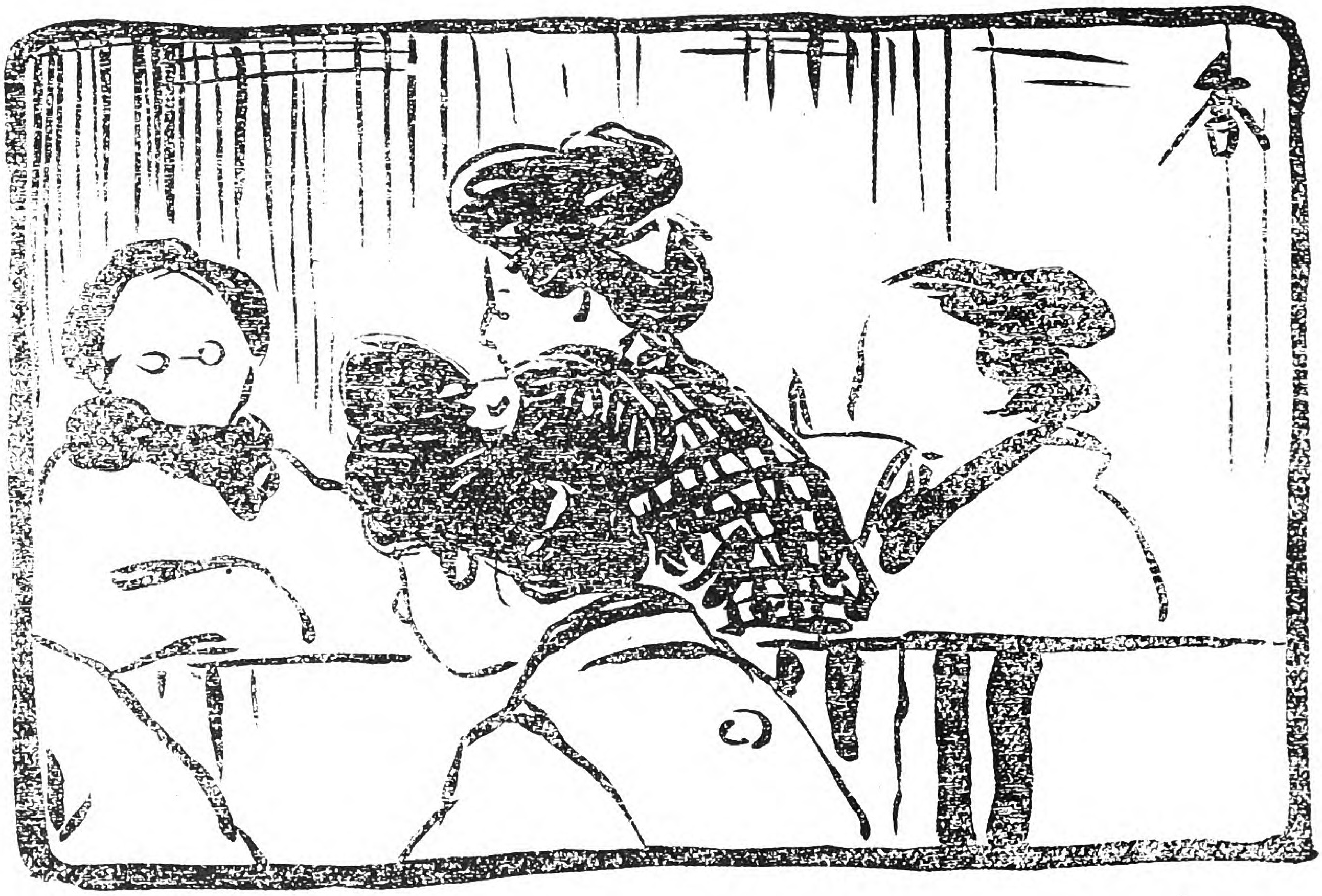
お酌に名を尋ねる處は實に女と云ふ情が溢れてゐて好い、艶麗と嬌態と相俟つて情趣が深い、此作者近來めき／＼上達して來るやうに思ふ。

○機織日記（入賞）

胡てふ

十二月十八日（曇り）。姉様が敬坊を負て手傳ひに來て下さつてから、今日で四日目、それにまだ半分も織れない。彼時姉様が、七八分絹絲だから、大分織難いよ、何なら私が二日程暇を貰つて、織りに來て上げようと云つて下すつたけれど、姉様とても忙しい身、姑様の前も有らうと思つて斷つたのだが。――

ほんとに、是れが自分のだから、まだしもだけど、弟等ので有つたら、其れこそ嫌になつちまうだらう、など思ふ。雖然、金茶の勝つた、すつきりとした好な柄、母様染めて下すつたのだと思ふと、餘計懷しい。お正月の二日に招れた、○○様の歌留多會には是れを仕立てゝ、黄八丈の下着と重ねよう、屹度、よく似合



春の芝居　横濱市　村田千代香

ふだらうと思はずニッコリする。

十九日（雨）雨降りの故か、よく切れること、殊に耳てよく切れる、もう／＼自棄になつて來ると、餘計ミシン臺の上の、女子文壇が眼に附く、機の上から、手を延すと、危く達いたので、ずる／＼と引寄せて、布の上へ擴げて、一心に詩欄を讀んで、感心して居ると、勝手の障子がスーと開いた。ハッと思ふて、慌てゝ文壇を、ミシン臺の上に放り飛し、「ひ」を持つたとたん、離れの障子をぐわらり！父様は？と首を出したのは、岡本の伯母様、要こそあれと「あら、いらつしやい、伯母様、私ね、何故此布は此樣に切れるんでせう、一寸見て頂戴」と云ふと、立つた儘で、「なに、雨が降るからわれたけるんだよ、父様に用事が有るんだが――何？お留守かい、

ぢや又」と、何やら慌て込んで、さつさと行て了ふ。まあ憎らしい……私此間、彼んな忙しい間に、京ちやんの着物でも縫つて上げたんだのに、厭な伯母様。夜、父樣迄、「お前毎日離れへ何しに行んだね」「あら、私布織りぢやありませんか」「むう、わしの羽織か何ぞ……」「いゝえ私の着物」と云ふと、「此間、綾が來て、騒いで居つた、被布かい？アツハヽヽ、途方もない長い反物と見えるの、丈の高い方は違つたもんだ」なんて冷かす。これでも、忙しい思ひをして居るんだのに。

斯う云ふ人にも讀まれると思ふと女子文壇の意味がなほ深くなる。

【秀逸】

○遊動圓木開通式

府下　あき川

去年の十月から軒下に横たへてあつた、長さ三間餘りの縦の大丸太が、今朝は運動場の中ほどにころがされれて、新しい麻裏をつゝかけた虎大さん（村の大工の名）が曲尺を兩方の切り口に當てて見たり、手斧で以て節の高くなつてゐるところを削つたりしてゐる、ただそれだけの仕事をしてゐるのを、寒いのにあたりもせず立つて見てゐる小供もあつた、校長先生が住宅の方から見えると、先に昇校してゐた○○先生が「今日近所の青年夜學生に頼んでひと思ひにやつて貰うことにしましたので、もうさつき荷車を曳いて共有林へ伐りに行きました」といふと「はあそれはよい鹽梅、愈出來ますな」と先生まで嬉しさうな御樣子。第一時の授業が終へて出た時には、皮を剝きたての杉の丸柱が六本、車から下ろされて、八人の大工のお手傳が、金具を引張りこしながら、寸法をきめたり鋸を使つたりしてゐた。直に出來さうでもなか〳〵手間がとれると見えて、正午過ぎになつてから漸く穴を掘りはじめた。一日の家業を休んで手傳つて呉れるのだから、何か暖いものでも御馳走しやうといふので、校長先生の奥さんに小豆を一升五合煮てもらうやうに頼んだ。三時の放課後私は饂飩粉を捏ねてお團子を造つた、小豆が煮えてお團子を餅の代りに入れた田舎汁粉が大鍋いつぱい出來上つた時には、青桐の木と、梅の木との間と何もなかつた場所とへ華表のやうなのが建てられて、大圓木は今吊られやうとしてゐる所であつた、職員室の半分へ莚を敷いて、眞中の大火鉢に火を積みあげ、目刺の焼いたのと燗をした德利とを用意して、いざお呼び申さうと思つてお庭を窺ふと、もう圓木はキッキッと揺られて子供やら大供やらが乘つたり落ちたり大騒ぎ。○○先生に接待を願つて、大工さんと都合九人の土足のお客様に兒童用腰掛の椅子をすすめて席が定まると校長先生が今日は皆さん御苦勞様でした。子供の喜はどの位だか知れません」と勞を謝した。酒を飲む時間よりお汁粉を食べる時間の方が長かつた遊動圓木開通式（橋のやうだからとてみんなが名づけたの）の

祝宴が濟んでから乘らうかと思つて傍へ行つたがとても、子供ばかりか圓木を寄附した〇〇さんまでがにこにこして見てゐるのだもの、それでも歸宅しやうと思つたらもう福は内の聲がきこえた。（二月四日）

刺戟の少い田舍の小學校の活氣ある一日の樣子が見えるやうだ。

〇或る日の日記

府下　かすみ子

昨夜から降出した雨は今朝になつて一しほ強くなつた、ぽちや〳〵とけたゝましい雨だれの音を聞いてぼんやり椽に立つて居ると、バタ〳〵と幸さんがかけて來る、相變らず束髮には燃える樣な眞紅のバラをさして、「京さん音樂會へ被居いな」つてパチッとした目を見張て切符を見せる、可愛い目と思つたが、是で敏さんをチャーム仕樣と焦せつて居るのかと思ふとにくらしくもなる、誰がだしにつかわれて一所になんか行く物か、二人て被居いなと云つてやりたかつたが堪えて苦笑しながら、「私用が有るから」と斷つて部屋にはいつて無意識に火鉢の灰をかきまはして居ると、「京さん三人て行きませんかつ」て云ながらガラリと障子を開けて敏さんが顏をだす、「えゝ有がとう折角ですけれどお祖母樣が御病氣だのに皆て音樂會でも有りません物……」つて八ッ當りに心にもない皮肉がつひ出る、「ぢやあ僕もやめだ、京さんが行かなけりあつまらんもの――」まあ空々しいと心てあざけつた。

午後から敏さんと幸さんとは前後して出掛た、必とどこかで落合て音樂會にでも行くのだろふ、彼の人等は何を狂言して居るか知れやしないと思ふと不滿で堪らない、橫田さんから葉書が來た、かるた會の案内狀だ、かるたと聞くだけでも手先のむづ〳〵する私だけれど今日は氣が進まないので早速斷り狀を出す、雨はいつかやんで西窓にうつすりと梅の影が寫つて居る、やがてお花の先生がお見えになつたので、あら今日は六の日だつたと今氣が付いた、すら〳〵と紅桃の活つたのが嬉しくて今迄のむしやくしやもどこへか消えて終つた、急にかるたにも行きたくなる、もすこし斷り狀を出さずにをけばよかつたと思つた。

娘心の動搖してゐる通りが少しの僞りもなく出てゐる。

〇二月三日

佐賀縣　山根ふじ子

早くから目は覺て居るが、ポカ〳〵といゝ氣持て起き度無い。が、頻りに小便に行度なつたので思切つて起る。あら！何時の間に降つて何時の間に積つたらふ。野も山も草も木も眞白だ。宿の女が雪を掃寄て居る。「大變な雪でございます、此樣な事稀でございます」と云ふ。暖國だから三寸も積れば珍らしからう。お椽に干してあつた肌着の、衿のみが下つて手洗鉢の中に凍り付てる、衿をグッと引たらハート形其儘の氷がブラッと下つた。止め樣とも思つたが勇氣を出して冷水浴をすましてお琴のお稽古に出る。郡役所の前て、草鞋履

てトットとかけて來る高等小學の生徒に逢つた。本屋に寄つたらヤット今日來ましたつて。急ぎ短文の所を見ると御情で秀逸の部に出てる。

あや子さんが茶音頭を習つてる間待つて居る。ゾロゾロ足音がするから見ると中學生が草鞋履て正列してる。雪合戰に行くのだそうだ。

午後、裁縫の稽古に行つて私の緋縮緬の長襦袢を縫ふ。文壇を讀み度て仕方が無いからいつも四時だけれど、今日は三時にお暇する。文壇を讀み耽つてると、お湯が沸たと云ふ。惜いがやめて入らふとすると、あ熱い。人を呼ぶのも面倒だから、野菜に積れる白雪を集めて入れる。雪がチラ〳〵と顏に降りかゝる。お神さんが御加減は？と尋に來た。オヤ降りますね待つて下さい、屋根を製らへますからつて、二本竹を渡して其上に雨傘を廣げて行つた。熱くもぬるくも無い御湯に入りながら雪見。

湯上りの心地よく文壇を手にしてると神さんが三絃を敎に來る（神さんは上手だから毎夜習つてる）。福壽草を芽出度ひき納める。今度は我物を習つて見ましやうと云ふ。とくの昔きれいに忘れてるが仕方が無いから、チトンシャンとやり出す。神さんは長煙管でバク〳〵烟草を吸ひながら聞てる。中に續かない。仕舞にプリッとして手荒く三味線を持つて合彈してくれてツンツンして歸つた。が今夜は其樣な事におかまひなく、又文壇をよむ。今夜も更すだらふ。

おてんばさんらしい。

○暖かい日

信濃　優梨子

二月九日、恐ろしい暖かな日だ。北側の屋根には、雪が四五寸もあつて、南の椽は花が咲きさうに暖かい。斯う暖かいともう大雪など降らない樣な氣がする。「お祖母樣、もう釣瓶の繩が折れる樣な事は無いでせうか」とお聞きすると

「何の未だ〳〵是からびし〳〵寒じたり降つたりするんです、それ母樣が惡くて東京の病院へ行つた彼の朝の寒じ樣は。あれが三月の末だもの、こんなお天氣は設けものだよ。どれ解き物でも仕樣かの」とお祖母樣は靜子の綿入か何か持つて、座敷の南椽へ行かれた。

今日は水仕事が樂だつて、お松がにこ〳〵して居た。

夕方麹町の從姉から手紙が來た。今年も花の咲く頃遊びに來いと書いてある。

私は陽氣な品川沖の潮干狩や。向島や荒川の櫻が吹雪と散る樣、萬世橋あたりの電車の響きなど思ひ出した。そして又今年も行きたいと思つた、華やかな生活がして見たい內は、未だ私にも若い血があるのだ。こんな年寄じみた斷定を下しながら、其手紙を母樣の處へ持つて行つた。

「婦美さんは何時も綺麗な字を書く子」と母樣は、さも感心した樣に、斯う仰有つたきりだ。

夜、床につく頃も、ぽたり〳〵と軒滴れが落ちて居た。

珍らしい暖かい日だ。
雪があつて暖かい日の感じは好いものだ。

○金借りに行つた記

ゆみ

人の爲めとはいへ頭もよけいにさげねばならず、お世辭もいはねばならぬ、あゝ、併し母上なき後は並ならぬ御世話になつたあの方の爲め、こんな時にでも御恩の萬分一も御かへし申さなくちやならぬのだ、昨夜はまんじりともしないで話の順序文句など考へた爲め何となく頭がおもい、何もむりはない。御存じない旦那樣や、ぬいが顏色が惡いといつたのも



驕れる春　新潟　水野とし子

八時半旦那樣を御送り出し申して羽織だけ着かへ進まぬ足に凍た道をふみしめ〳〵○町○▽さんの家へ行く、來客とみえて意氣な女下駄がキチンとそろへてある、鈴の音に快くむかへてくれたのは、例の意氣なおかみさん、「まあお早くからよくいらして下さいました、今日は御ゆつくり遊ばせよ、□さんもきてゐますから、少しおさらへでも仕樣じや御ざいませんか、まあそんな處へ根がはえましたか、さあ御上りあそばせな、あれ御顏色のお惡い事、どつか御惡いのじや御ざいませんか」「いゝえどうもしないの、あまり急いできたものだから――」「そうですか、それな

らよござんすけど！さーあちらへいらつしやい」「えー私ね‥‥」「え」「私少しおねがひがあるの「どんな事ですの、私にできます事なら何でも」「キット叶へて下すつて？」「えヽえヽ」「ぢやね、お錢を廿圓ないしよて貸して下さいな、極ないしよてね、私のじやないんですけどね、かたは帶でもあげときますわ、本統にかして下さいね、私昨日からどんなに心配したかしれませんよ、あヽこれでやつと安心した帶？帶はどれでも私のですから、三月の末までね、それではすぐ誰か取りによこして下さいな、ぬいは使に出しときますから、じや私おいとまします」「まあお孃樣てば、一人できめちまつて、まあ少しゆつくりしてゐらつしやいよ、あのお帶は寶づくしのあれが頂きたく御ざいますね」「あんな古いの」「あれが結構て御ざいます、そう、じやあどうぞお願ひします、さよなら」「まあ奥樣てば、氣の早い、お茶の一つも召しあがるものですよ、まあ一寸奥へゐらしつて下さい□さんもきてるのですから暫く振りにゆつくりおどりのおさらへでも仕樣じやございませんか」

こんな生やさしい事で借金ができるのなら何も昨夜あの樣な心配せずとも、よかつたものをあヽ、

凡てが斯うはゆきません。

○謎

東京　つゆ草

音も無く親木に離れて散り行く樫の葉に吾泪は又誘はれた。何の涙—問はずに頂戴何卒。わけ知らぬ涙、故もなく寂しくて唯流れるのですもの、何故でせう、如何したのでせうね私。針持つたり好な本にまぎらさうとしてもいつか縞や字が霧ごしに眺める樣にけぢめが無く成る、其時はもう紙も布も濡れて居り升。變らぬ母樣の笑顏仰いでも無暗に迫る心細さは消えませんの。口惜しくても悲しくても只母樣を便つて居た私、いつもの通り其み膝にすがり付いて此胸引しむる悲しさを訴へて、慰めて頂き、叱つて頂き度いけれど‥‥あヽ云へない、否云へ無いのではない。我ながら何故の涙、何故の悲と解し得ないのですもの、いやな日でした。しめやかなたそがれ時、遠い姉が不快との短い便受けて又新らしい涙をわかして十二日はとう〳〵過去に成つて仕舞ひました。（一月十二日）

二十日

過去も謎、未來は一層大きい謎、斯うやつてる今の我も謎。こんな幼い頭ぢや解かれぬと知りつヽ、せめていと口だけでもほぐし度て幾日もあせつてゐる。靜かな寢息の妹を見て、三年前の吾姿の安らかなりしを慕ひ三年後の妹を想つて獨泣けたのは灯細き昨夜半てした。夢ですよみんな。死ぬ迄は嬉しい夢、苦しい夢を繰り返し見續けて行くんですよ。私ねえ。醒めて其の夢の謎が解き度いのてすけれど‥‥運命とは生れる前から決定された物だと云ふ。年と云ふ魔は遂には世知らぬ小女を慈愛の母の手からもぎ取らねば許さない。

弱きもの汝の名は女なり……何故々その弱い子を荒浪のもむに任せる？五つ上の兄様は未々母様の双袖に安げに抱かれて被入るものを。少しは母様の手助も出來やうと悦んだのに、もう離れるんですか。母様に……兄弟に……產聲あげた此家から……嫌です／＼。親を離れ、子をはなして他人と他人が只義理の絆に縛られてさりげなく笑つて暮す……苦しさは胸に秘めて。そんな不自然な馬鹿げたことに堪えられるものかしら。眞闇の吾明日を思ふと不安で／＼何にも手につかない。あゝ此謎、私の力では及ばぬ此謎をどなたか解いて下さいませんか。

先刻から始まつてる茶の間の歌留多、興が乘つて來てか賑な高笑……大好なかるたも今日はうるさく、頰杖ついたまゝ机の前にぼんやり考へてゐた。

此謎極めて解き易し、第二第三の謎を奈何にせむ。

○そのまゝ　茨城　と　よ　子

髪を洗はふかと思つたが、曇り日なのでよしにした。いつもながら仕事なしの退屈さに、紐でも絎けやうと、いろ／＼の切をもちだしたが、少しも氣が進まなかつた。今一度よみかへして見やうと思つて、女子文壇の十八頁を開いて、二三度讀んだ、やつぱり涙の流れるのをとめかねた。「望絶えたるわが胸に、今は光りも何かせん」と云ふ、御作を初めて讀んだのは、一昨年の秋であつたと思ふ、恰度その時、私は七とせ人に戀はるゝ身であつたのが、その戀はるゝ人を捨てゝ、新らしい人と結婚せねばならぬ破目におち入つて、泣いてる九年目の今日、こんな御作を拜すると、一入罪ふかい、自分の身がおそろしくなつてくる。「君の結婚は僕にとつては、死刑の宣告であるぞ」と、泣いた人を好んで捨てるのではないけれど、親の許さぬものはしかたがない、私は戀はるゝ人と、結婚することの出來ぬ運命なのだと、自分だけは泣いて泣いて涙のあらんかぎり泣いてあきらめてゐるが、死刑の宣告をうけて住所をかくした人は、どんなに私を怨んでゐるのであろうと、それればかりがしみ／＼と辛い。

雨がチラ／＼降りだした。

きく子さんから葉書がとゞく。

長らく御心配をいたゞき、ありがとふ御座いました、一昨日女子分娩、兩人とも健全でございますから、御安心下さい、お正月には實家にまゐりますから、その時ゆつくりお目にかゝりませう、さようなら。

お嫁に行くのがいやだと云つて、東京までも逃げたきく子さんとは、何うしても思はれない。

すぐにお祝の手紙をかく。

お目度ふとはかいたけれど、かく手は慄えて涙が出た。

あれも女、これも女

○初賣のお手傳い　常陸　木村桂月子

正月二日、晴、今日は初賣なので本家の呉服店の方へお手傳い、今朝四時から六時迄、例年の通り福袋を賣出すので、昨夜から本家へとまる、午前二時頃から袋切れ買ひの御客に、樂しい夢を破られた。最初の内は未だ定めの時間でないから、と云つて居たがだんだん人が集まつて來た樣子で、喧ましくつてとても寢て居られないで致方なし一同起床する、時計を見たら二時四十八分、お店から奥へ眞光りにランプをつける火鉢にいつぱい火をおこして、時間の來る迄あたつて待つてゐる、三時過ぎとなると戸外は益々騷がしく成り、開けろ早く戸を開けろ、と怒鳴る者もあれば、どんどん戸をたたく者もある、例もは硝子障子を閉めて置いてはめちや〳〵にこはされて了ふので、今年は戸を引いたので安心して居る、其内四時の鐘がなつたので、信どんに幸どん芳どん、がら〳〵と戸を開けると、待ちに待つた戸外の群集は、恐ろしい勢ひてわあつと潮のやうになだれ入つた、毎年の事だけれども本當に驚いて了ふ、前の方は後から押されてお店の上までのし上つて、赤や白や黑の色々の手が彼方からも此方からも長く出る、五十錢の袋に一圓の袋、皆お金と引き換へ、足をふまれて痛い〳〵と叫ぶかと思ふと死んぢまあ〳〵と叫ぶ者もある、まるで命がけの買物だ此麽思ひをして迄も買ひたいのかとつく〴〵思ふ。五時少し過ぎには六百個の袋切が一つも殘らず賣れ切れ、をくれて來て買へないで歸る人が、しほ〳〵して行くので何だかお氣の毒に感じた、八時に朝の食事お雜煮のおかちん四つ頂く、其れからはお年玉出しを受け持ち、可成に忙しかつた、夜、店員一同と歌留多取愉快にして、十一時半皆の止めるのも聞かず、幸どんに送られて歸宅す。

女店員に採用しに來るかも知れません。

○雪の降る日　越後　梅香女

昨夜から雪を誘ふ風が吹き出したので、又雪にならねばよいがと思ひながら寢てしまつたが、今朝起きる時嫌に寒いと思ふたらとう〳〵雪になつて終つた、御念入りに風まで吹いてる。朝飯後炬燵に入つて今朝の新聞を讀む、ヒユーバラ〳〵と雪が戸にあたる音、すき間からこぬかのやうな雪が降り込むその寒さ、暖國の人の夢にも知らぬ事だろふ。然しこふして居ながらも日本はおろか諸外國の有樣がわかるのだもの、つくづく今の御代の有がたさを思ふ。晝は寒いから餠やいて食る、初めはふるえてたのが終る頃にはまつ赤な顏になつて暖になつた、此間にと裁縫出して見たけど、戸外の音を聞くと氣から寒くなつて、遂炬燵に入つて終ふ、四時父樣御歸り、まるで雪のなかをころがつて破入つたやうにまつ白になつて。晩食は牛鍋と牛の薩摩汁と鮭の子と大根下しの酢物で親子三人圍爐裡を圍つて。父樣の二合の御酒がなくなる頃には部屋の内が暖い息に包まれて、外の嵐も今は

忘れたやうになつた。父様御寢み遊ばしてから母様と臺所の用濟せた婆やと三人、炬燵に入ると又婆やの昔話、今は汽車と云ふ有がたいものが出來て、今の人は仕合て御座ります、昔は此の三國峠を越したものてすが、今日の樣にあれる日なんかよく吹雪だをれて死だもので御座ります、村でも助小屋造つて置きますけどのう、へー助小屋て御座りますか、山中に半里位に小屋造つて中へ薪を澤山とマッチを入れて置きます、旅人が山中で今日の樣に吹雪て困ると、その小屋て火を焚いてあたつてると村のものが其火を見附けて、助に來ると云ふので御座ります、もとの事思ふと本當に夢の樣て御座ります、熱いお湯にはいつて寢る、これが寒國のなによりの樂しみ、また雪は止みさうにも見えないから、明朝は三尺上るだらふ、早く晴てくれるとよいが。

雪國の風俗、暖國の人には殊に興あり。

○日記の一節　金澤　むらさき女

三日、今日夕方からお餅をつくと云ふので、朝からの混雜一通りでない。四つになる甥が何事かと云ふやうに、唯譯もなく嬉し相につきまとつてる。あまり邪魔



ふるさとへ　新潟　水澤蝶子

になるのでそつと手を引いて、書齋に連れてきて「お餅つきだからおとなしくしてゐるんですよ。」と教へて雜誌を見せてゐると、初めは見てゐたがすぐ飽きて、勝手にゆかうとせがむのでほんとに困つた。いよ〳〵餅をつき初めると面白がつてきやつ〳〵と喜ぶ。「もうねんねしなさいね。」と姉樣が連れてゆかうとするけれど厭だ〳〵ときかぬ。おしまいに千願餅をつくと、力自慢の十八になる俊さんが空臼ばかり食ふので口惜しがつて居た。

四日、昨晩おそくなつたので寢坊した。東京のK樣からお手紙くる。相變らず輕い面白い事をおかきなさる。節分なので豆は今年父樣が煎る番。しかつめらしく座つて煎つてらつしやる恰好の可笑しかつた事、あとで茶釜の中へ豆を三粒入れて。私が酌む役だつたが、娚と私とのお茶碗にはいつたので大分不平の聲がした。けれど私は眞に神樣のやうな心になつて酌んだのだもの。仕方がないわ。近所の子供がたくさん拾ひに來てゐた。私はそのどよめきをきゝ流して書齋で花袋の「妻」をよんだ。

五日、學校から歸つてお稽古にゆく。ちつとも覺えられないのでお氣の毒だつた。夜、もう最後だと俊さんの友達や姉樣とかるたを十一時頃まで戰はした。

日記らしい日記

○私の午前日記

岐阜　華水

するつとすべり落ちた樣な氣がして、ふと眼を開く、外は、たら〳〵雨がふるらしい、今日は日曜日、村崎さんがいらつしやる筈だけれど、大抵はみへやしなからうが、さりとてお花をかへたりちらばつた紙でも一まとめにかたづけといたのだから、思ひあぐんで一つと、錢占をやろう、階下の母樣にはれたふりしてそーと手を伸ばして紙入をとり、其中から出たお錢が表ならお出でなさるし、裏だつたらみへない事と、こうきめて一つとり出したら、裏が出た、ちか〳〵の五十錢銀貨だ、こりやうまい、もう一ねいりしようと、かいまきに首をそつとすくめたのに、母樣が、とーちやんもうお起きなさいよ、つて仰有る、知らんふりしてると、とみ子、とみ子、つて二三度呼びなさろ、うーぐず〳〵、はい、つてな返事、お前ねたふりしたつてもう最前から起きてろぢやないか、つて圖をさゝれた、はあ、私眼はさめませんけど頭が痛たうなつたて起きては居ますわ、つてのそ〳〵起きて、朝の支度がすむともう十時に十分前、店で新聞よんだら、お客さんがあつて私にいひつかつてしまふ、入れ質が二つと出しが一つ、拔き質が一つ、それもいゝけど質札が失へたといつて、帳面をくらせられてやつきりしてしまふいの〇〇〇番が知れんのでもう店番はいやだ〳〵、兄さんに頼んどいて來てしまふ、机の前へどすつと座つて本でもよまうと思つたけど、何やらかやら心に思ひ出せて〳〵遠い處の先生やお友達の事を、誌友の人の中にも私のように今お机の前に座つていらつしやろかしら、とも思はれて、ぼんやりしてたら十二時半、清子が姉ちやんまゝがたべたい〳〵と大きな聲するの千代か鶴千代のやうに、足駄の音がしたので窓から覗くと、まあ村崎さんがとこ〳〵みへたの、三十日。

○大笑ひ

淺草　古屋近代

表が非常に騷がしいので飛出して見ると月明りて、どうやら喧嘩らしい、そこへひよつくり木村さんが歸つて來た、飄輕な顔を横へかしげて「只

今」と云ふ「お歸りなさい遲かつてれー」「え今日は。實に損しました」「奈何しなすつて」「帽子を落してれ」「まあ」「ハツハツー頭を落して來るつて笑止な話ぢやないか」三枝樣も笑ふ木村さん何と思つてか一生懸命かくしを探つて居たが一枚の書付を出して「共かはり恁云ふ物を拾つて來たんですがれ見て下さい」「どれ。何だ、ふーん是なんだい君」「何です、けれど多少金もうけの物でせう」「ハハヽヽヽまあ讀んで見たまへ」「どれゑーと。貳圓五十錢谷中墓地迄人足雜費極大棺桶一つ「ワハツ……」まあ驚いた、何ぼ何んでも木村樣は、妾は笑ふに笑はれず。苦しかつた、やがて皆が笑ひ止まると、木村さん聊か失望して受取をつく〴〵うらめしそうに見て「あゝ威嚇された大事の頭と取換へちまつたゥフフ……」變な笑い樣をして「詮方がない、勘定して下さい」「ハハ……たまにはいゝさ」涙をふき〳〵三枝樣も笑ひながら云つた「ふん這麼事が度々有つては堪ら無い學校は遲く成るし頭は落すし嘵つまらん」矢鱈に口惜しがつて歸つて行つた、受取はと見ると又後生大事に持つて行つたので又可笑く成つて大笑ひ。「もう皆歸つたかな」「えゝ皆かへりました。」かくて苦學會の戸は閉された。

二十人近い若い人達が毎日面白い事件を持つて歸ります、日記の中を拙い筆て。

○何にもしなかつた日

本所 小枝子

御亡父樣の御命日なので御靈前に水仙をさす、すれた私の心故か寒さうな此花が大好き、御亡父樣は如何かしら、此世で四年御懷かしい殘少を一世隔つ世に通して母樣に御嗜好を伺ふけれども御精進の世界には思ふ萬分の一にも割烹とても役に立たない、漸く胡麻酢に湯豆腐で供へる、御膝に眠つた母樣から「御前は御父上樣のないのが不足と幾度か伺つたとみへ、十七年の今日まだ頭に殘つて居る、御飯を戴いてたら道子樣から御手がみ、何時も小春日和を背中に一パイ浴びて小猫を抱いた時の樣な心持がする、午後みよ樣にデンヮかけたら、今夜合せ物致しますから入らつしやいと仰しやる、でも今夜は少し都合が悪いと申上れば、御島田が不可ないのでせう、母が是非お目に懸りたいつてほんとにお人の惡い、誰が一體そんな事を云つたのだらう、先刻御女中の來た時は障子の隱からでなかつたのに、硝子からでも見へたかしらと考へながら歩いたら、電氣にパタリオホー島田つて背が高い事、夫にしても明日はどうしやうかしら、皆樣頭高の御束髮か何かでいらつしやる處へ私一人島田に裰衣紋、オヽきまりが惡い、貞子樣は如何遊すだらう、一寸花に伺ひに上げて見やう、此方の御孃樣は御發會に島田でおいで遊しますか御束髮でオホヽ馬鹿々々しいは、無骨な書生に眞面目腐つて奥庭にても取次がれたら全てパツク、こんな事考へて居る內日が暮れてしまふ、塀の下で紺足袋にから〳〵日和下駄が追い付いて互ひ違ゐに行き過ぎた、夜夕刊に巴里洪水の慘狀が出る、絢爛目を奪ふやうな宮殿も一ひらの石塊もけじめなく刻々膨る水勢はき際期の朝寢を誇つた貴婦人を嘲る樣に、假貸いスカートは只徒らに足に絡んだ刹那、電の如くに淡き虛榮の影から覺るであらう、兎も角も里昂の良樣へ御見舞書く、セーヌ河のさかさに流れぬ限りはと少々おかしかつたけれど、床に入つてからふとノートルダムは何うなつたしらん、ハテ場處はどの邊だつたかと考へ出したりとうとう十二時を聞いてしまつた。

○郵便局日記

岩見澤 藤田夕子

二月三日、八時出勤、相も變らず塵が机の上から眞白になつてゐる、今日は餘程寒むい、雪は降らないが風の烈しい事。

御掃除をなそうと思つたがお湯もないのでそのまゝストーブにすがりついた。高野樣が頻に札幌也、小樽也、東京京橋なあーりと節面白く區分をなされてゐる、又押印臺の上には書狀やはがきが入亂れゐたので高野樣、まあ今日は常に珍らしく物數が多いですれいと御尋れしたらえい、內地便が一度に二日分結束したのです。

多忙で〳〵目が回りますから御手傳ひを願ひますと被仰から高野樣、御冗談およし下さい、私が區分したら必ず何月何日誤區分に付き當務者氏名回答あれと管理課から來ますよと申せば、責任は僕だからと被仰。それから代金引換小包數を調べ異狀がないから引つぎをした。そろ〳〵

爲替を御頼み申ますと人が參るから時計を見たら早九時、遊んで居られないと差立の準備、

切手に消印する音がポン〳〵、區分する聲アーアーアー、時間だー時間だと迫る、それも間もなくすんで淋みしい程寂んとした。

○四人の友

近江　小倉壽榮

十一日、夕方壽ゞ子樣、初がへりとて、民子樣御同道でおこし下さる、愛らしきお嫁樣ぶり、お互に改まつての挨拶もおかしく、氣まり惡るい。初歸りのおみやげ、戴く。

十三日、晝過ぎ秀子樣のお誘ひをうけて、吉田屋にすゞ樣祝ひの品を求め、家へかへるのも何だからと、學校へ筆をかりに行く、久しぶりて皆樣にお目にかゝる、あまりきつく留めて下さるので、しばらく遊んで、すゞ子樣お宅へ行く、幸ひに民樣も來ていらしたので、云はれるまゝに、二階にお邇しゝてかるたをとる。いつでも四人は離れないのね、と民樣が仰しやる、皆んな離れ〳〵になるのでしようかと、同じ事をつゞいて四人が云ひ出した、もうかるたもおやめにして居る。ああ、どんなに遠く離れても、四人は、いつまでも助け合ましようね、と美くしい誓ひが出來た。今日を紀念して四人が十六日に、寫眞をとる事に、話が成りたつた。それは今日のかるたとりのまゝをと……、日も暮れたので辭してかへる。

十五日、昨日は、秀子樣お宅へ、寄せて戴たので、今日は自分處へ來て戴くつもりて、朝から用意をして使をやる、明日歸京するのだからとてことはられた、がつかりしたが、も一度と使ひをやる、折角だからとて入らして下すつた、秀樣を呼びにやる間を、女子文壇を見せる、家庭日記の「今の女」には三人ながら、私も亦泣された、民樣とすゞ樣とは、從姉妹なので、すゞさん、あなたもうお嫁さんだから、よくお氣を、おつけなさいと、云はれる、今更に、おぐしを見上げて、ほゝ笑む。あなただつたら、こんな事、作れるてしようにもうすこし進んで學校へ入らしてはと二人ながら云つて下さる。民樣は秀才だつたのに……、惜しい人だと、ついうつとり考へて居ると、民樣が、もう私の家だけてすわれ、來て戴かないのは、母があんなのてすからゞと。民樣は繼母にかゝつていらつしやる。今度も亦、すゞ樣と一所に京都へ奉公に行かれるとか。慰めて上げるのは私等の役目。いつまでも變らないで下さいねと、民樣が言葉に、三人は亦も泣いた、日が暮れて行く、秀樣はまだ入らつしやらない……。秀樣も繼母だ、私は父を亡くした、けれども幸福……。今日は泪多い日てあつた。

○お返事認むる記

小石川　薄雪

「何て書かうかしら、」机の抽出をあけて昨夜の淸樣のお手紙をまた取出した。

「御姉上樣、御許に、」と女にほしいやうな美しい封筒の文字、兄樣へのついて、私に下すたのは是が初めて、「初春の御慶謹んで申上候、」と丁寧な御挨拶、催促された樣にこちらからも、明けまして、といふのも今時分おかしい。「未だ御目もじは致されど小生は武雄の弟淸雄と申す者にて候。」とつくの昔寫眞も見たり私のも行つてる筈なのに……、そしてよくお手紙の序には姉樣へ宜しくなんか仰しやるくせに、私からだつてお母樣へのたびに、改めてこそ上げなかつたけれど……じや私も「武雄の妻ゆきと申すものにて候」と書くのかしら、ホヽヽヽ。

「御緣あつて姉樣とお呼び申事を得るは、實に一身の光榮家門の慶事之に過ぎず候」まあ、ほんとにイヤな淸樣、今更改まつて、「姉と呼ばるゝ光榮、げに身にあまる嬉しさ、」とはずゐぶんキマリが惡い。同い年だと聞けば「私こそ御兄上樣とも親しみ參らせたう」とても……。(正月なゝくさの日)

京都の富士子樣、漏らせとは何を仰しやるのだらう？暮に戴いた八つ橋のお禮に書き添へて

「妹は十五の初春を、獨りは羽子もつき厭きて、福笑ひもして、と給を持ちありきてこの忙しき姉を困らせ候、祖母は七十の老の坂健かに、逆さに讀めば十七の花嫁年ぞとうち興じ候、主は今年……、これのみはいくつとは申上ぐまじ、たゞよき程の翁に候ふを笑はせ給ふな』ホヽヽ

こんな悪口書いた事見つかつたら……オヽ大變！。（おなじ日）

○お留守居日記

東京　光　子

廿日曇。五時半に起されてご飯たく、六時になつてもまだ外は小暗くてランプつけなければ何にも出來ない、父様七時のお出掛けあと片付けすつかり終へて身じまひする暫く仕事しなかつたので、何となく仕初めるのがつらひのでおひるまへ女學世界など見てゐる内に時計はずん〱進んでしまふ、母様は親戚へいらしつたので、いづれ歸りは夕方にならうからと夕飯のお菜など伺ふておく、すると仕事をしたところが二時までしかできないのだからと思ふて、出しかけたのを又しまつてしまふ、晝飯すませてから茶室の爐へ火をいれて、お釜には水をいれ、香をくゆらせておく、暫くしてお釜からは松風の音いとゆるやかにたつ頃、父様おかへりになる、薄茶點じて差し上げる、この二三日の暖氣にいつになう早く梅の花ほころびて得もいはれぬ香り室にみなぎる、四時のお出掛けだから二時半頃から煮物しはじめないと間に合はないよと、母様がくれ〲も仰しやつていらしつたので、すぐ煮物にとりかゝる、ご飯の仕度は出來たが、まだ時間があるので、靴磨いてついでに帽子もはいておく、まだ早いのでランプ掃除する、父様がお湯におはいりなすつたあとで座敷をきれいに片付ける、父様にご飯上げて洋服持つて行く、弟たちよんでお湯にはいらせる、母様がおるすだから何もかも代理をしなければならない、父様に洋服おきせ申してお出掛けお送りする、お掃除すませて夕飯は母様のおかへりまてまつ、あんかに火を入れて着物を暖めておく、とほどなくおかへりになる、羊かんと芋煎餅頂く、夕飯はたのしくすませる、少しかぜひいてゐるのでお湯にははいらずにいつもより早くやすむ。



田家所見　下總　小堀とし子

○ないしよの日の日記

伏見　まき子

二月四日。五時起床。ご飯の水加減して、義姉に火をたいて貰ふ。其間に、寢室をかたつけて來て、ふと見ると、例の如く、煙の上へ兩手をかざして、ケロリとして居なさる「ほら又手がくすぶることよ」あゝ、毎日同じ事を云はればならぬ。何をして貰つても、すべて氣のき

かないこと計り。出來るべき者で無いものを使ふのだから、つまりは、こつちの罪だと思へば、腹もたゝない。ご飯がむれてお湯は湧き、お茶も入れた時、義父と義妹を起す。義妹はいつものとほり、にぶつて居たが、「ちや、學校は休むの」と、耳へ口をつけて云つて遣つたら、夫丈はこたへると見へて、すぐ起きて、いぢけながらも用意に掛かつた。二人の外出後、義母と義姉と共に、チヤブ臺を圍んだ。「今朝のお汁は大さうおいしく出來たよ」と、久々に賞められて嬉しかつた。午後早々に、明日、小野様へ持參すべき土産物を買ひに京極迄行つた。未來の夫へ呈する物が、姑様のより、餘りに振つてゐたので、そゞろに氣がゝりだつた。十時就床。

五日、六時二十分起床、五月雨のやうな降り日。十一歳の時、乳母が、「貴女のお母様は、非常におしろこがお好きでした」と云つたことを、ふと思出して、急にそれがこしらへて見度てたまらなくなつたので、自分がつてにすることは出來ないから、一應義母様に伺つたら、早速お許し下さつたから、嬉んでいそ〳〵と掛つた。之も又、昨日のお汁よりよく出來たとて、およろこびのお言葉、即座に頂戴した。此手で未來の姑様や夫を嬉ばして上やうと決心した。が間も無く、あゝ眞の母様に味つて戴きたいものをと、つくづく思つて、遂に、ほろりとした。

○一月の日記より

山口　酒向敏子

十日晴

水仙かほる日ざしの暖い室で原稿考へてたけど島田のひよこるのが氣に成つて〳〵堪らないので、ポチ〳〵元結を切つたらまあ、おつむの所々はかさぶたみたいになつてるし、かもじはネチヤ〳〵にぴん付が付て居てうるさい事つたらもう〳〵島田なんかにはなんぼよく似合つても、いふまいぞよと迄に思つた、すいても〳〵ふけの除れないのを姉さんが見かれて、洗つてあげ様と仰在つたので、暫時クル〳〵卷にしといて、午後ふのりでおちすぎる迄に洗つて頂いた、顏へまでのり付して大笑ひ、本統におなかがよれたわ、お飾のわらしびてくびつて乾を早かれと祈る床しさほんとにあれが好きだ、やはり詩的の言葉がつけて見たい、こんな事云ふと横瀨先生は馬鹿だと仰有るかも知れないわ、しんてびの處をゼーエムつけたらいよ〳〵さら〳〵して嬉しかつた、けれどいつも程にはひさしがうかない、夜はお琴をお祖母様にきかした、いつでも千鳥をと仰有る、——水仙が時々かほる、あゝ今日は大好きな日だつた、

○春日記

淺草　金田靜香

五日。ガラガラとけたゝましい車の音におどろいて、はねおきる、一寸お茶の間の時計を見ると、五時半、父上はまだお目ざめにならぬので、安心した、勝手口を開けて空を見る、今日も泣きだしそうなお天氣、御飯が炊けたのでおはちへうつす時、父上お目ざめになつて顏を洗ひにいらつしやる、お湯をとつて上げる、あゝ今朝も御飯が不出來、またお小言かしら、——

六日。今日はめづらしく日本ばれ、それに少しあたゝかいので髮を洗ふ、お蝶さんに買つてきてもらつた、松の美どりを、五合ばかりの湯でといて、それをみんな髮の毛へこすりこんでしまう、すつかりおちた様なので、湯て何度となくゆすぐ、かるくなつて好い心持ちだ事、かわく様によくしぼつて、毛のさきをりぼんて結んでおく、髮を洗つたせいか、ぞくぞく寒くなつて來た。

九日。昨夜から雨がふりつゞいて、今朝は雪さへまぢつてゐる、東京てはほんの少しだけれど、お姉さんの行つていらつしやる越後は雪がふると、尺ではかる位だそうだ、お晝後久しぶりて、お新さんの家へ髮結に行く、あらい髮故、銀杏返しに結つてもらふ、歸る頃は雨が上がつて日が當つていた、一寸信明堂へよつて、うづらかごと己が罪を借りてきた夜淺草へ行く。

十日。朝飯後昨日借りてきた、うづらかごを讀んでゐるとお秀さんから手紙がきた、いつもながらお上手の筆、私などははづかしくつてお返事も上げられない、夕飯後大きな聲て唱歌をうたつてゐると、お向の笹枝さんが靜ちやんお上手ですれと、おつしやつたので氣まりがわるかつた、七時頃金神さまの緣日故、おとなりの伯母さんとお參りに行く、歸りに梅林堂てお豆をお土産に買ふ。

○しる粉

遠江　鈴木小菊

正月卅一日（月）永い間降つては止み、止みては又降り、之でも寒かと思はれる程暖かであつたが午後から俄かに恐ろしい空になつて來て、忽ち雹の樣なものが降りだし、打つて代つて寒くなつて仕事なんか手に付かず、皆んな炬燵へ引込んでしまつた。
夕飯後も炬燵を放れ得ず居ると偶々新田の敏雄さんが被入つて『餘り寒いに今から汁粉を食よう』と言ふ兄さんも大賛成はしたものゝサアと云つて酒餡を買いに行く人が無いので、ツイ『若役に御前行つて來い』と兄から命令の樣に云はれたので、嫁とも云はれず妹と沼のほとりなる間道を行く――歩む每にサク〳〵と霜柱が音を立てる、風が氷の面を勢よく走つて來ては、か弱い妾等に突つかかつて寒さは實に身を切る樣、されど血氣盛な妹は元氣が良い、鈴を鳴らす樣な聲を擧げて唱歌をうたふ。古沼の月は蘆間を張り詰める氷の下を、くゞりつゝ後れず二人に、ついて來る、――と仰げば空の月は妾の病み上りのやつれた面を鋭く射た、ハツと異樣な感に打たれて悶える胸を押へ乍ら步み行く程に漸く目的の都屋に到着した、そこで注文された酒餡を一本求めて元來し道を我家へ歸つた。
自分が是程苦勞して行つて來ても兄さんは只『御苦勞』と云つたぎりで、當然の樣に思はれ『眞個に割が惡い！』と呟き乍ら、妾が汁粉をつくる、兄さんと敏雄さんがお餅を燒くそれは〳〵大混雜…………。弟と妹は最うチヤンと火鉢の際に座つて出來上るのを早かれと待つてゐる、
戸外には風と犬の遠吠えと夜廻の柏子木の音が靜寂を破つて單調に聞ゆるのみ………………

○きまりのわるかつた日の記

播磨　翠子

いつもより早く仕事がすんだので五時頃家に歸つた。兄さんは早歸つてゐらした、何時でも負ける、机の上には封を切つた手紙が一通、表には山田勇殿とあつて裏には兄さんの親友大谷薫とある、其側に小さく「これをよめ」とある、兄さんに來た手紙を妾に讀めとは不思議、きつと大谷さんがまた和歌を書いてよこされたにちがひないと思ひつゝ取り出して見た。
細い小さな字それはそれは澤山書いてあるが和歌は一首もなかつた、讀みながら自分の身體中が何だか浮き廻る樣な妙な妙な氣がした。
中程に「君の令妹も今年は二十だらう、どうだ嫁にやる積かまた新宅でもする積か、もし嫁にやるやうならよい所があるのだ、山田小學校の首席訓導で月俸は二十七圓だ、中々の敏腕家ださうだよ」こんな事が書いてあつた。
山田小學校の首席訓導……あゝあの一月の中頃學校へ參觀に來た脊の高い眼鏡をかけた人にちがひない、まあ〳〵可笑しいこと、大谷さんもよくまあこんな手紙をと思つて茫然として居る所へ、兄さんが「どうだ讀んでしまつたか」と言つてずかずかと入つ來られた時の恥しさ、きまりのわるさ、一時に顏がヮクヮクしだした。

○入院中の或一日

淡路　菊子

午前十時過て有た、看護婦が寢臺の片隅に病床日誌を置いて見えなくなつたので、ソーと其日誌を引よせ今日迄の入院の日數を數へて見た「叔母さん私今日で百六十七日になるよ、始めの頃はこんなに熱が高かつたのですものねー、これ御覽なぜこんなにさし引が有のでせう」と體溫表に愛宕山や比叡山を畫いた樣になつてるのを示して居ると、白い姿が見え、續いて先生も被在つた、今日の樣な冷たい日は午後にして下されば宜いのにと思ひ乍ら無性々々肌をぬぐと、コン〳〵と指で叩いて打診が濟と今度は聽診、是も濟て次はお腹を診て頂く「別に變つた事は有りませんねー」と被仰る「足の腫れはもう引ましたか」ハイ「食は進みますか」ハイ「夜分はよく眠れ升か」ハイ、先生はこう尋ねながら病床日記に獨逸語で何か書て一寸お頭を下げてお隣りの診察に掛つた時、附添の伯母さんが「あなた只ハイ〳〵て先生は便りない答だと思つてなさいま

せう」と注意げな事を云ふ、其内御回診は濟て十一時半になると見習看護婦の方とやら徽章のない方がお藥を配つて廻る其瓶の音のいゝ事、十二時になると彼處此處でピーヒーと吹く笛の音がいやに胸に泌み渡る「どれお膳を」と叔母さんが出て行つたあとで又今日もいやな物斗りだらう、と思つて居る處へ附添が右手にお膳左にお鐵瓶を提て這入て來た案の條てお箸を附る樣な物は一つもないお粥も矢張りチャブ〜水に泳いで居る「信實に此處の賄は調菜が下手れーこんな物病人が食べられると思つてるでせうか」「それでも據食に通つてるのですもの」と附添が云ふ、お役目御苦勞な事これでも據食して有のかと私はつく〜いやになつて愈よ歸り度なつた。

○病寒日記

丹後　伊志子

二日。今朝は流し元もやり水の邊も水がめのふちも一面エナメルをかけた程滑らかに、凍りついて居て、たわしが石舟に引つついたまゝちつとも取れない。

寒いけれども風はなくて時々まぶしいほど日が照りつける、その中をふはり〜雪が舞ひ乍ら落ちて來る、じつとお炬燵にあたつて居たら、十時頃お隣りの姉樣が大きなお萩を持つて來て下さつた、すぐ神樣へお供へしてお下りをいたゞく。丸いお萩だ、そしてあん屋の前を一寸轉げましたといふやうな風に、小豆がところ〜凹凸に附いて居る、在のお萩はこんなものだと母樣が仰しやつた、恰度この寒空にお白粉をつけた姉樣の顏そつくり!!!(此れはひみつ)

がぶりと一口食べたら昨日のと見えて外がすこし凍てゝ居た、お砂糖がなくて鹽がすぎてしよつぱかつた、もう澤山々々。でも鹽あんのやうで淡白して居る。

間もなくお晝になつたけれども、私はお萩をたべた故もう御飯は要らない。ぼんやり湯殿の窓から裏を見るとまつ白の雪がキラ〜光つて美しい。お砂糖をまぜて食べたいけれど、私は病人だから來年まで待たう。

三日。隣家(西)の誰かゞ凄い叫び聲をしたと夢とも現ともなく思つて居ると、パッと燒臭い匂がする、私はまだ茫として居たが、お父樣もお母樣も寢衣のまゝでお向の家をたゝき起されたので私もハッと戰慄した。障子に映る晝のやうな火の手!私は私は自分の體も持ち得られない病人、起きるなり羽織をひつかけたらもう前後不覺いのりの語が口をついて出た、じつと祈つて障子の火の手をよく見るとなんの……アーク燈だつたけれども燒臭い、人々が隣家で犇めいて居る、私は表から流れ入る冷氣にぞつとして、何卒大事にならぬやう、常から弱い兩親の體に恙ないやうと思つて涙を落した。もう人がいつたものキッと鎭まるに違ない、しつかりしやう、私が病みついてから兄樣には死なれ火事が二度いきかけた、私は神樣に試されて居るのだから、逆上せちやいけない。――暫らくすると常から少し足らぬ女房を殘して商賣に出る主人も横着なものなどいふ聲が聞える、火も消えたらしい。兩親とも漸々歸つて來られた、母樣はひどく慄へて居なさる、草ぶきの長屋建故大事になつたら私の身をどうしやうと思はれたことかとそゞろ悲しい。

七時頃巡査が來た、父樣にこれが火の手が上ると見つけた人に賞與が出るのだが、などと氣樂な事をいつて居る。私は腹がたつた。

今朝はこんなごた〜て八時朝飯、いゝお天氣だが朝の中は寒く手水鉢には厚氷が張つて杓でたゝいても割れない、お湯をかけても氷の上をはしつて居た。

もう今日は火事さわぎで近所は大困雜、私等までその渦中にまきこまれさう!

○日記

信濃　ふもと

靜かな日、遠い林の嵐の音がかすかに聞える。恰度私の胸の底の言い知れぬ思ひが、あの遠嵐の樣て、ツッと聞いてるとたまらなくなる。中木戸を明けて蠶室の庭を一廻りしてみる。樫の木の並むだ方は雪も深いけれど、日當りよい曠庭はすつかり消えて、若草の懷しいみどりが芽か出し掛けて居る。五月六月、木の葉草の葉の繁りあふ頃は、此處に若い男女が必死の活動、戰場を見る樣な勇ましさも、もう今年からは見られまい。あの葡萄棚の下、急に桑が足りぬと言ふて、幾本の燭臺つけて桑むぎをした時、越後から來たお清は聲が優れてよかつた。なつかしい種々の思出よ、私のこれからの生涯は思出に生くるのであろう(廿九日の記)



論文

編輯局選

○主婦の務（地賞）

伯耆　蔦枝

下女其の人にもよりますけれど、家によつて二三年或は四五年と、永く一人の女中を使つて居る家があるかと思ふと、半期に二三人も入り變る家もあります、是について大抵の人が評しますに、前者には家人が優しい故だと言ひ、後者には家人が余り殘酷だからと女中に同情します。

前者の所謂家人が優しいからに因つて、女中が永續するのに二通りあります。家人が心から女中の憐むべき境遇に同情して、家事のひまひまに必要な業を敎へたり、且つ絶えず精神上の注意を怠らぬ樣、將來いやしからぬ人物に仕立てあげ樣と苦心した結果、女中も其の知恩にそむき兼ねて永續するといふ、是れ其の一であります、主婦が朝寢するから女中も早起する必要がない、一日の用事とて格別言ひつけられもしないから、手にあたつたとき物でも遊びながらして居ればそれで宜い、臺所は一切女中まかせだから、反つて主婦に對する氣兼は要らぬ、夜は自由に外出が出來る早寢が出來る、此の樣で自由を得ようとあせつて居る女中は、汲々として永續する、是れ其の二であります。

這麼家も多くないでせうけれど、私は甚だしき例を知つて居ります、言葉が惡るく不作法な爲、半年たゝぬ中に四五軒から追ひ出された女中が、或家に行つて二年余り續けて勤めて居るのがあります、こんなのはつまり下女か主婦を馬鹿にして居るのです、這麼主婦に限つて親戚知己の交際を怠り、吉凶の贈物を延引し、家事を召使に任せて其の不經濟を省みず、すれば澤山有る仕事を放棄つてわけもない事に時をつぶして居る

のです、此の様な事から親戚には疎まれ、知己には信用を失ひ、それのみか夫の成功を妨げる基となるのであります。

「人を使ふは即ち人に使はるゝなり」との格言の如く、人を使ふはなか／＼にむつかしいものでありますれば人を上手に使ふは家庭を見事に整理し得る婦人に始めて出來る事であります。今や人の使用が烈しくなつて中流以上の家庭は、みな婢僕を使用せねばならぬ有様となりましたが、此の場合にあたつて今の主婦たる者は、今少し品性を高雅に保つて、召使にまで侮蔑されない様、なりたいものと思つて居ります。

婢僕使用の目的はつまり自己の不足の補助者として手傳はすのである、即ち婢僕を愛するは我を愛する所以である、自己の手足を虐げて主體の安きわけはない(評)

○譽めて正に導け（人賞）

滋賀縣　磨志緒

譽められて馬鹿／＼しいと其行を捨る人があるでせうか、惡しく言はれて腹は立てながら其行を改める事はなか／＼てせう。廣く新聞に雜誌に目は通して居りませぬから事細かしくは知りませぬが、一時紙上にやかましく言はれた青年男女の風紀紊亂問題の如きも、悲しんで仰しやるのか好奇心から云はるゝ丈けか角帽がかうの海老茶式部がどうのと惡行計り書きならべて最後に之を矯正する方法はちつとも言つてないぢやございませんか。

轉んだ子供になぜ下見て歩きません、キョト／＼してるからだよ、と叱りつけて起してやらないと言つた今のやり方です。昔の青年にくらべて今の男女は何一つ優れた點はないのでせうか、決して無い事はありますまい、よく年とつた人の口から成程今の若い者はと感心なさる事もあります、例へ一つでも譽める行がありましたらば、其行をよく言つて扨て其代りかういふ事はよくない、だから氣をつけよ、かういふ心を持てと教へて下されば、どんなに滿足が出來るか知れません。斯く申せば或は譽めては毒だ、慢心を起すからと思召す方もあるでせうが、譽められて慢心を起す樣な人間ならば、惡く言はるれば言はれる程自棄の心を出します。

子供を連れて遠道するも同じ事、おゝよく歩くね、なか／＼きつい、一寸待て頂戴、そんなによく歩かないてと言へばよけい歩くでせう、何をそんなにグズ／＼してゐるの、さ、早くお出よ、横見してたらこけるじやないか、とせきたて／＼歩かせる子はなか／＼歩かぬ者、終ひに駄々こねて負つて遣らねばなりません。惡しく言つて其者の心を惡るくして反抗心を起させてよきに進めるのと、譽めて喜こばせて益々正に導くの

と、お饅頭を喜ぶ時代ならばいざ知らず、最早相當の知識を持ち、理想も描く時代に、と仰る方もあるでせうが、矢張り私は後者をとります。

一面の眞理を言ひ得ました、全く人には弱點としてかゝる要求がある、しかし是れ到底弱者の事ですいつまでも此方便のうちに居る事は出來ない、時至らば飛躍して此お饅頭喜び的時代を擺脫せねばならぬのは勿論です、思ふに論者も首肯するでしよう(評)

【秀逸】

○働け

下關市　山本芳子

人生は働きを以て第一とします。働きなき者は死物であります。

人はそれ自身で一つの小天地であります。天に日月あるは人に兩眼ある如く、地に皮膚あるは體に皺波あるが如く、艸木は恰度毛髮の如く、河流は恰汗流の如くであります。而して天地は常に活動してゐます。人として果して働かずに居られませうか、蒸氣機關も運轉せなければ、機關としての本分が缺けてゐるのであります。人間も働かねば、又人間としての本領を失ふのであります。父祖より遺傳したるこの世其物を、穢さぬやう傷けぬやう充分に保護の責任を全ふするのみならず、進んで是を清くし、幾分にも進歩的のもの理想的の者として、是を後進者たるべき妾どもの子孫に讓與するにあります。厘毛たりとも



老人日和　靜岡縣　原田ふみ子

國家社會に貢獻して後死するにあります。世には是ぞと思ふ程のことを成し證かずして貴重なる五十年を醉生夢死する者があります。この樣な者は國家の蠧賊であります。社會のバチルスであります。人生に對して破文の價値だに無き者であります。

西哲の言に怠惰は世界に於いて最も大なる奢侈物なりとあります。世に眞に貴ぶべき者は善く働く者であります。古來英雄と言い豪傑と言ふ、皆この最もよく働きし者をいふに外はありません。よく働く者は十日を以て一日とし、尚日の足らないのを憂います。怠る者は十日を以て一日とし尚時の足らないのを虞れます。

凡て働かずして快樂を得んとする者は下に位します。

働の後に大なる快樂の來るを豫想して働く者は中に位します。

働その物を以て快樂とする者は上に位します。

珍らしからず、しかし有益なり、末段殊に金玉の文字（評）

○古器物保護を望む

近江　鈴　蘭　女

鎖國の紐解けて以來異國の文物陸續として輸入されたーので其がため僅々四十餘年間に、我が國は諸般の事が驚くべき進歩をして諸州國と足なみ揃へて行く事が出來る樣成つたのは誠に悦ばしい事であります、が併し此處に一つ私の最も悦ばれない事が有るのです、祖先傳來の古器物古書畫等の澤山有る家は何となく奥床しく思ふ樣に、一村にしても何か由緒ある社寺古趾等あると何となく其村が高尙に又住み好い地と思はれ他家他村から畏敬されます、それで其の家村が古物を一つでも賣らう物なら噫彼の家も最う終りで有ると人は云ひます小なる一家一村にしても斯うですもの、國に澤山の名高い物の有ると云ふ事は如何位其品位を高める事でせう、美術の國と歌はれて居る我が國は各々の家に貴重な物が澤山有ります、其れを知つて居る外人は入國出來るを幸、我も〳〵と、驚く程の價を出して持つて行きます、是が私の悦ばない事です、今少し邦人が利を捨てゝ國と云ふ事を思ふと宜しいですけれど皆黄金の色に醉つて祖先から保存された其寶物を惜しげもなく賣つて一かど金まうけをした顔してゐるのですもの……斯うして名工の彫刻物、名刀、名ある古書畫ーと云つた樣な再び得られない物は皆外好古家の物と成つてしまふのです、眞に殘念な事で有ります、近頃内務省で古い建築物其他古昔の物を國寶として保護せられますが、彼れは國粹保存と云ふ所からでは有りませうが一は一般人に古物に對する觀念を良からしめんとの趣意からだらうと思ひます。昨秋英のキチナー

元師が大　市の或家の古物を見て高價に購ふと再三云はれたけど、如何しても賣れんと云つて堅く斷られたーと云ふ事を聞いて大變嬉しく思ひました、一般人が斯う云ふ樣に古物を尊び保護して徒に外人の手に渡さぬ樣にして貰ひたいと思ひます。

凡べて古器の貴重なるは其の出來する精神の籠るが爲めである、其れを金の爲めに賣るに至ては實に陋劣なる心事である、此文之を憤慨し得て太佳（評）

○涙に就て

靜岡縣　こすもす

女は泣く者、涙は女の專有物だなんて何時の世から云ひ始めたのでしよう、私は殘念です、思ふに之は明治になつてから浮薄な世に僞に泣き僞に笑ふ人が多くなつたからでしよう、昔もつとも町家は知りませんが吾々武士の家ではどんな事があらうとも親に別れても子に別れても涙一滴こぼさないのを誇といたしました、極端にすぎるかも知れませんが涙なんかこぼして取り亂した樣を見せるのを此上もなき恥と心得て居りました、又人も一寸した事に泣く樣な女は一朝事のあつた時に武士の妻武士の母として役に立たぬ意氣地なしと看做して居りました、と云ふて昔の人は情が薄かつたかと云ふに決してそうぢやありません、昔だつて今だつて矢張女は女です情に於て變りのある譯はありません、唯昔の人には己に克つ即ち齒を喰ひしばつても石にかぢり付いても堪へられる力があつたのでした、心では身も世も無い程なげいても平氣を粧ふ事の出來たのはたしかに昔の人のえらい所です、其れが證據に昔では普通であるべき若い人が今では賢婦人だ女丈夫だなぞともてはやされる世の中ですもの、何ですか私には女と武士道といふ物は大變緣遠になつた樣に思はれます、物事は日に〳〵進んで行く有がたい明治の代に女の意氣は段々退歩するのじやないでしようか、涙は女の武器だなんて云ふ人を殘念ながら私はとがめる事が出來ないんです、涙ばかりじやありません萬事がです今の人は心にしまりがうすい樣です、昔と反對に強さうで弱いのです、今日は涙といふ題ですから其に付いて丈申しますが云へばいくらもあります、私だつて現代の人間では若い未だ廿歳に足らぬ青二歳です、其れて居て現代の女といふ考を善く云へないのは殘念です、皆樣生意氣だつてお笑ひ下さいますな、私の胸には涙は女の武器てふ言葉が絶へ難い恥辱を受けた樣にひゞきます、どうかして此言を消滅さしたいです、此樣事申しましたつて私は決して泣くと云ふ事に絶對に反對するのではありません、唯昔の雄々しい女の意氣精神を忘れず泣くべき場合に泣いてほしいのです。

言はんとして言ひ得ざる所無きか、此儘にては聊か物足らぬ心地もする（評）

○今日の結婚の通癖

越中　藤澤種子

私は今日の各地に行はるる結婚法の通癖と思つてゐることがあります、之れは皆樣も或ひは種々な御考へもありませうから不束な私のについて御批評が願ひたうございます、御覧なさい、一體結婚なるものは取りも直さず一家を新らしく作ることではありませんか、して一家を作ると致しますれば即ち茲に於て異性間の圓滿なる共同生活が行はるるのでせう、そして天賦の重且つ大なる目的を達することになるのです。して見ますと、只一言に異性間の共同生活するだとか、天賦の目的さへ達せればよいのだとか申しますれば、結婚も至極單調な樣に聞けない事もありません、しかし皆樣結婚はそんなに無意味な物ではありません、で、あればこそ、國法にも兩者が結婚する年齡に於て其他特殊の條件のない限りは、如何なる方にも各人に於きまして此人ならば結婚其物の目的を達することが出來ると思つた以上は、兩方の父母に同意を得て完全に結婚が出來るのでせう、夫れが世間今申した樣になつてゐませうか、疑問です、否、世は兩父母に之を定めまして無理にでも其結婚する人に同意せしめて滿足らしく大なる勳功でもなしたかの樣にして得意がつてゐるのが通例ではありませんか、吁情けない譯ではありませんか、此樣にして結ばれた共同生活は將して圓滿に行けませうか、又天賦の目的が遺憾なく達することが出來ませうか、之れが國法に順つた結婚の眞意なのでせうか、私は斯の樣な結婚に付いては矛盾も甚だしく且又自然の大罪人と見做して敢て差支ないと思ひます、それでこんな事を申しますと「いや夫れは一理かも知れないが、青春燃ゆるが如きお前達には分ることではない、其間には無形の大暗礁があるから一任は出來ないのだ」と、仰せの樣です、或はさうかも知れません古から文にも見えてゐない自然主義とか社會主義とか申すものが耳新らしく古びた腦裡に印象せらるゝ現今ですから、しかし皆樣如何です夫れは餘分に現代の私共を見落した取越の御苦勞ですね、そこで世の中にはまゝ間違ひもある樣に聞受けますれば、或一定の規律とても申しませうか其の範圍内に於て眞正に兩者の意志を交換せしめて何んとか宜しき樣に致して此通癖を取のぞきたいものだと思ひます。

女子開放論の起る所以、新人乞ふ努力せよ(評)

○讀書に就き思ふまゝを

備中　小見山春子

世を知らぬ女の通有性の空想丁度夢を見た樣な朧げな果敢ない望を抱いて友の幸福や僥倖によつて立身した女所謂氏なくして玉の輿に乘つた新聞の三面記事によつて起つた野心極めて幼稚な慾望にみちて自分の境遇

も知らず單純な空想に耽つて悶えて居る人は兎角精神の平和を失ひ安眠を得ず苦しんで居らるゝと思ひます斯やうな人は神心の不愉快なばかりではありません人體に及ぼす害は甚だしい事と思ひます、で、こんな人は一日の運動を充分にしそして就床後三十分乃至一時間の讀書が必要だらうと考へます、讀書と申しますと廣い樣ですが無論こんな塲合人情小説は宜しくありませんが各自の嗜好又身分に應じた方面の讀書は有益と思ひます尤も讀むばかりで俗に空讀と云ふ事は何等の益もありませんが不行義だとか不經濟だとかお笑になるかも知れませんが自分は今三年程宅に居る限りは就床後三十分以上の讀書を缺かした事はありません讀物は月刊の文學雜誌の外天保



留守居の人　本所　安藤エイ子

時代からの本箱を探出して各方面の和文讀本をよんで心に留めてと思ふ處丈筆記して置くのです私は此上もない樂しみとして居ます一日忙がしく働いた體の勞れと就床後讀書の爲に勞れた眼球は悶えとか苦しみとか思ふ間もなく靜に眠に就きまして愉快な平常を送つて居ます是は結局運動と讀書の趣味によつた賜物と考へますつまらない事を申ましたが兎に角自分は朝となく夜となく悶え苦んで勞れ切つてゐる腦を就床後靜なるに任せ操り返して安眠を得ず苦しむ人は讀書によつて幾分か苦腦を薄らぎ併せて讀書に趣味をお持ちなさる樣希望致したいのです思ふ考の十分一も現はし盡されぬ無學の悲しさ意のある處學識ある諸姉御判斷を。



書簡文

編輯局選

○御無沙汰のお詫までに（天賞）

かごしま　深雪子

文子様、何卒お許し下さいましね。

毎度お優しい細々とのお便り頂きましても御返事も差上げませず嘸お恨み遊ばしてゞ被居ませうけれど、筆不性の處へ此樣なに早く子持ちになつてしまつたんですもの、お察し下さいな。いつも〳〵心忙しくほんの僅な閑を盗んでは何かと氣を揉んで齷齪致して居るので御座います。能く新聞や何かに若い奥樣が可愛い赤ん坊に乳房を含ませ乍ら雑誌に讀みふけつて被居る繪等描いて御座いますけれど中々あんな氣樂な者ぢや御座いませんのよ。私なんか年寄はなし少女も使用ませんから添乳し乍らもほころびを縫つたり、眠つた間を見てはお葉を洗つたり洗濯をしたり致しますの。夜は夜で又舊のお正月も間近になつたんですもの何は無くとも環に丈は小ざつぱりした物の一枚もと存じまして針箱を持ち出しますけれど、寒くはあり中々はか〴〵敷く參りませんので、存じ乍ら遂々御無沙汰致しまして眞實に申譯も御座いません、何卒お氣に掛けずに、お許し下さいましな。環も大分成長致しまして此頃では机や障子につかまつて立つ樣になりました、けれどまだ〳〵獨りでといふ譯には參りません。誕生前にお歩きのお子樣もお有てすが宅のは此分ではとても六つヶ敷そうで御座います。寫眞をとお希望ですけれど薄くぼんやりしたのや泣顏したの等許りでいつも〳〵思ふ樣に撮ませんから何れ其内又撮影次第お送り致しませう。お別離申しましてから最う三年になりま

す。お互に少しは變りましたでせう、文子樣何卒貴女のお寫眞こそ是非頂かして下さいな、ね、お願ですからまだ〳〵申上度い事は澤山御座いますけれど何れ明けましてから、ま、折角お身體お大事に好い年をお迎遊ばしませ。かしこ。

熟錬暢達の人が無造作に技を弄して而も少しも亂れないと云つたところがある、何分にも感心に堪へない。（評）

○行軍中の夫に（人賞）

萩花

只一週日の御別れに文まゐらするは御叱りの種と幾度か筆投げうち候へ共遂何も彼も覺悟の上にてこの文認め申候、僅か一週日とは申せど、初めての御別れ故かゝる心細さを何卒御許し遊され度候。絶え間なき雨に遠き山路を貴夫樣初め中隊の方々も御恙あらせられず、演習も御良好の結果を得させ給ひし由、私も嬉しさ堪へ難く候、さは候へど貴夫樣にはかかる時身命を忘れて餘りのお働ら故、又おけが抔遊さぬ樣くれ〳〵も祈り申上候、次に家の事は御心配御無用に候、婆やも毎日宿泊致し居候、又奥樣方や、憲兵樣等折々參られ慰め下され候まゝ左樣淋しくは是なく候、縫ひかけのお召も出來上り只今かの人形の衣服を仕立居り候。御歸りの日は人形にも美しき衣きせ共々お待ち申べく候。其日はまち焦れし私たん生日、如何にして日暮し申さんと老人居り候まゝ貴夫樣にも何卒よき御工夫願ひ上候、同じ所定めぬ旅の御身とは申せ明日よりは一歩一歩と此地に近づき給ふ由、何となふ心強く思はれ候。「めざましき功せよ、さらずば楯にのりし……」と夫を戰地に送りけるとやらスパルタの婦人の物語り、常々賞讃し給へる貴夫樣には、さぞやめゝしと御思召されんも、もろき私の事、此度のみ御許し下され度、尚手紙さしあげてあしき樣に候はゞ次に御知らせ下され度候、何卒御身御大切に遊され度、さらば

新婦が新郎の羈旅を想ふ情委曲纏綿せり、起て窓を排せば春雨絲の如く柳に烟れり、古への人も云ふ「……名殘りの山を今日か越ゆらん」と。（評）

【秀逸】

○病院より歸りて

赤坂　靜江

幾度か室持看護婦の檜垣樣にお願しますを繰り返して昨夜漸々病院から歸りました。病人は其後の經過大分宜ろしい方て、此なら秋の樣な悲觀はするに當らぬと院長も仰有います。亦毎日の海氣浴て色も善くなりましたから何卒御安心下さいませ。毎日何處からか手紙

も來ますし、日曜等親切に訪ねて下さる方もあります只佗しいのは雨の日、籠切りなので送つて戴いた本も大方讀み盡し、私の歸る時には『寄生木』だけよみさしてでした。不思議なのはAの病室が若い人許りなので其親しい事は、何と申しませう涙がこぼれる樣ですの炎ゆる希望を胸にひめて苦多き疾を抱く若人の、胸から胸へと流れる或物が斯うも美しい友情を産むのでせうか、此點で全く世の中を離れてゐると思ひます。毎週二回院長がいらして、常は副院長ですが親切な方許りて患者は幸です。今はこんなですが秋頃は眞實に心配致しました。何時か私が參つて初めての咯血の時病人より私がどうか爲なかつたのが不思議、呼鈴押したのも待てずに松原の中のあの長い廊下を醫務室に走つた時の心地は今に忘れませぬ。側に見てゐてもあれほど辛らい事はありません、其度華やかな希望が碎かれるのですもの、むごいと思ひます。

昨夕門で檜垣樣に別れて、聞き馴れた波の音を後に、田の道を獨り茅崎停車場に向ふ時、不斗夕靄に淡く松の間に見え隱れする幾棟かの病室をふり返つて、何とはなしに涙しました。噫あの白い洋館、淋しい波の響き――私はいつ迄も昨夕の悲しい思を忘れないでせう兎に角私も亦母の手の明き次第參る心算ですが、あなたのお手紙を大層待つて居ますからどうぞ、詳しい事はいづれ、叔母樣によろしく。

獨歩によりて茅が崎の文字は今や一部の若き子をチャームすべくなつて居る、さう云ふ感慨の爲めでもあるが、此書翰に尤も牽引する力があります。（評）

○弟へ返事

丹後　臼井若榮

勇ちやんお手紙確に拜見致しました、御壯健で何より嬉しう御座ります、さてお賴みのお金の事、機を見て父上に御賴み申すと、又かッ彼れにも困るな何してそう金員が入用なのだろう未だ十日と立たぬ内に……と一時は怒るやうに嘆じてゐられたが、僅の不足な故に若しもの事があつてはならんから、之を送つて呉れと下さつたそして實際親は甘いものと仰有つた。でもよかつたわね、お繼母樣に此麼事が知れたら屹度駄目の上に小言を頂くのですよ、勇ちやんそれを知つて丶內證で姉さんに賴んだのでせう、まあそんな事宜しいが勇ちやんお隣の奧樣がね宅へ來ては父上やお繼母樣の前で武さんの放蕩を口癖のやうに仰有のてすよ、武さんも武さんですわ藥代とか書物代とか言ふて詐しては皆な放蕩許りに費してゐられたつて、それが知れてお金を送つてあげないので困つてゐられるさうな、勇ちやんに限つて其やうな不品行は露程もないと

姉さんは信じてゐますがお繼母樣は元より父上もお隣のがあるだけに大分案じて居られますよ。よく謹んだ上にも謹んで下さい、でないと之から未だ〳〵修業する勇ちやんの爲めになりませんよ、貰ふたお金は早速く爲替てお送り致します。屹度身を誤らないやうに勉强をして下さらないと申譯もありまんよ今度の試驗には一心に勉强して何時も不安て居られる父上を驚かせて下さい姉さんはそれを樂しみに今から待つてゐます、お褒美には姉さんが勇ちやんのお好なものを買つて上げますから、お寒いてせう身體を大切にね、

さよなら

暗きところより出たものには暗き影が伴つて居る、此手紙など人に知られぬ心つかひが見えて居る、受けた人こそ之を知らぬ。（評）

○お別れしてから

備中　紅薔薇

春さま昨日はよく來て下さいました。ほんとに嬉しくつて嬉しくつて病氣も何も忘れてしまひましたわ。あなたをお送りしてあのまゝ門口に立つてお後姿をぢつと見つめてゐましたが、お姿があの角で消えてしまつてから堪らなく淋しくなつて俄に夕風が身に染むやうでいきなり床に馳け込みました、そして目をつぶつてゝも後をむいてニッコリ遊ばしたお顏が目に浮かんで‥‥實はねお歸ししたくはなかつたの、なる事ならあのまゝ側に居て貰ひたかつたのですが、あなたのお宅てはお手が少いと思つてね、「あれあの松に照つてた日が見えなくなつたもう歸り



あらさう　本郷　秋田健子

ませう」て被仰つた時私ほんとに泣きたくなつてつくづくお天道様が恨めしくなつたのですよ。春さん病むとこんなに淋しいものでせうか、私は此頃妙に涙弱くなつて一寸するとすぐ涙が出るんですよ、やはり病氣のせいでせうか、春さん今頃何していらつしやるでせうあのお二階で嫂さまとお二人でお縫物していらつしやるか知ら？毎日天井と睨みつくらもいゝ加減なものね、今度の日曜にも又早くから來て頂戴ね待つてますから。嫂さまによろしくね。

純眞なる病者の情。（評）

○在阪中の叔父様へ

紀伊　ゆ　ゑ　子

叔父様この間はありがとう御座いました、いつもお珍しい物送つて頂く許で田舎の事とて何のお返しもありませず、すみません。

お近い中御歸郷遊ばす由みな大喜びで御座います、第一兄様がね、この頃始めた養雞塲お目にかけ此道に委しい叔父様のお指圖がねがひたいのですつて、ほんとにこの頃は例の寐坊も雞のために止み毎朝御飯前からおきて、揚子くわへるとすぐ雞ですのよ、新築の小屋にいれたり餌をやつたり中々一人て忙がしい樣です、でもその忙がしいのが好きなのですつて「人が銃を肩に山遊びする代りだ」と言つて居られます、矢張り道樂はおかしい物です。

此頃一羽奇妙なこゑを出して歌ひ始めましたのよ、その又容子のをかしさつたら、私したち大笑ひして、歌ひ始めに笑ふと歌はなくなるつてしかられましたわ、其くせ兄様も横むいて笑ひかゝつて居ますの、今は皆で二十三羽ですが今に名古屋の眞物を百羽近く、叔父様も御存じの裏の桑園にはなすのですつて、そして我村の摸範養鷄塲にするのだつてひどい意氣ごみで御座いますが、どうですか、口の半分も出來れば結構でせう、どうぞ叔父様おかへりの上は第一に養雞上のお話しを……これは兄様にかわつて、まずおねがひ申ます、何しろ皆々に待ちぼけ喰わさぬ樣久しぶりで一時もはやくおかへり遊ばせ。

かしこ

雛鷄の歌ひ初めはいかにも間が拔けて可笑しいものです、面白い事を書きました。（評）

○そつとお知せ

水戸　菫　子

中の姉の縁談、いよいよきまりましたよ、きのふの朝さきは言はずとも御存じね、婚禮の日取はまだきまりません昔氣質のお仲人だものですからそれはそれはかつぎますの、まだ誰にもおつしやらないで下さいな。あなたにだけそつとお知らせ。

一字の無駄なし、全體氣が利きたり。（評）

○云ひ上げ

下關市　川村きく子

叔母さん此頃は大變に寒が強うございますがおかはりはありませんか、私ね叔母さんに御相談したい事あつてよ、私の兄嫁さんね私にお母さんないから後母の樣でしよ、此頃一寸をかしい事がありますよ、それはね私の物を何でも貸してくれ〳〵と云つてはね私のものを自分のものにしてしまいなさるのよ、それにかしたもの私取り返さばいゝのにねおとうさんや兄さんが貸したものはやれ又買つてやるからつて口ばかりお父さんも兄さんも買つて下さらないのよ、私何もかも無なつてしもふわ其上今月はちとをかしいのもし妹でも出來たらあんな兄嫁さんですから私尚々何もしてもらへないのみか皆取られるは思ふと心細くてたゞ涙が出るばかりよ、どうしたらいゝでしようね、叔母樣のお内へ何もかも私の物を持つて行きましようかね、あたし自分は心が行けと云ひますのよお宅にはお子樣がありませんから、私が女學校卒業する迄ていゝですから置いて下さいませんか、學校がすめば自分は先生をするつもりです而して自分のものはこしらへます、明朝伺ひますから叔父樣に御相談して下さいなたのしんで明朝をまちますさよなら。

悲慘なやうな滑稽なやうな、兎に角異彩を放つて居る。（評）

○友の嫁く夜

信濃　優梨子

美津子樣は今夜御輿入れて御ざいます。

「姉樣、美津子さんはもうじき嫁らつしやるのよ、今子綺麗なお車が、ずらりと御門の前へ列んで居るの」と、妹の注進で御座いますから、間も無くお出掛けて御座いませう。

露樣、美津子樣ネ、それはお綺麗におなりなさいましたの。

今日お見立祝ひにうかゞひましたのよ。私達の仲間は西野樣と久須美樣と、それから大丸髷の菊江樣と私の四人で御ざいました。

二十人許りのお客樣が兩側へずらりと列ばれて、正面のお床の間の前には、御仲人と美津子樣の御席が、チヤンと設けられて御座います。何誰も皆傍見も遊ばさないで、つんと澄まして被在るんですもの、私だつて默つて凝つと俯向いて居りました。と下手のお襖がすーつと明いて、御仲人の原田樣の奥樣と美津子樣が、御挨拶に出られまして、御仲人は黑のお打掛け、美津子樣は、濃鳩羽鼠に松竹梅の縫ひした、紋羽二重のお

裲襠を、裾長う引いてお席に着かれました。文金のお高髷が、それはお似合ひなさいましたの。「駄目よ、私は日本髮なんか似合はなくつて、一生これて居てよ」なんて、何時も恰好のいゝ丸髷の庇髮に結つて被在した美津子様とは、とても思へない程で御ざいました。

お召は、お納戸鼠にあつさりした亂菊のお裾摸様。錆オレンヂに、芭蕉の葉を思ひ切つて大きく金通しで出した其おみ帶がまた、それはお召によくうつりましたの、高砂のお掛物がかゝつたお床の間の前に、凝と俯向いて被在る美津子様は、ほんとに繪の樣で御ざいました。

あゝ今夜、四海波靜かな金屛風の内に、緋緞子のお打掛け召して、三々九度のお盃遊ばす美津子様は、まア甚麽にお美しう御ざいませう。

せめて私が十位ゐですと、無理にもお願ひして、長柄の銚子でお酌しましたものを……。

露子様、二人で美津子様の御幸福を、陰ながら祈りませう子。

華麗、此作者大得意の處。（評）

○奉公先より

兵庫縣　春子

おなつかしい母様

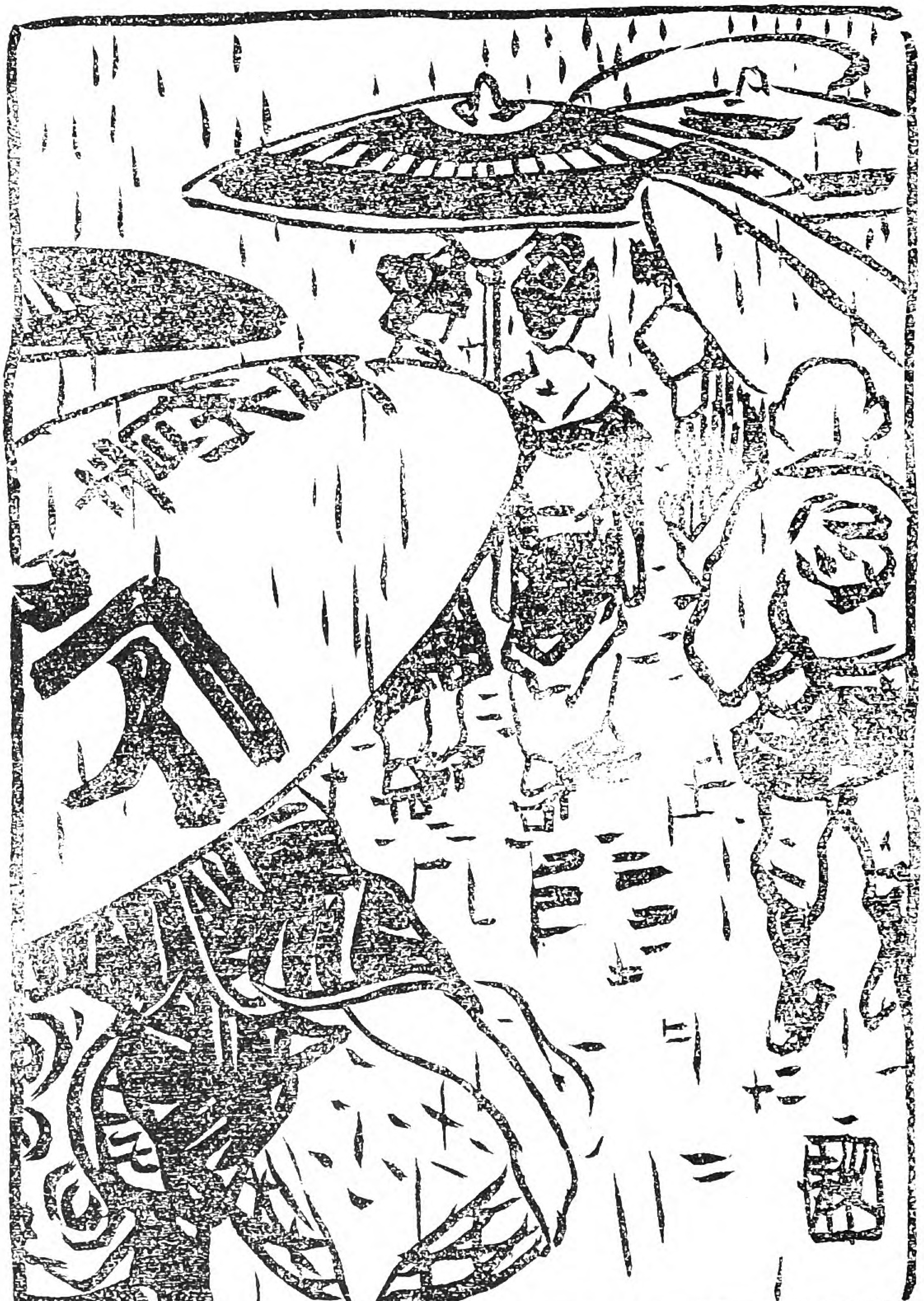
只今は美しい糸織の綿入お送り下さいまして有難う御座います、殊に母様がお織り下さいましたのですつて今に始まらぬお情身にしみて一入嬉しう存じます、けれども此お寒いのにランプの側で目を細めて嫂様にお氣兼ね遊ばしながら縫ふて下さいましたのでせうと思ふと勿體なうございますわ、どうぞね、私の事ならもう御心配遊ばさないで頂戴、奥様はね、ほんとに私を可愛がつて下さいますの、よく働くからつて、お給金も此月から上げて下さいました、なる可く儉約して、一枚でも澤山着物を造へるやうに致しますから、義兄様や嫂様にお氣兼ね遊ばしてまで、私の爲にお心おつかひ遊ばすのは止して頂戴、ねえ母様。

私ね、ほんとに丈夫になりましたの、お前は弱いからと、母様はお案じ下さいましたが、此頃の姿お目にかけたうございますわ、御安心遊ばして、まあ昨日から急にきびしく冷え出しました事、今朝なんか井戸のポンプが凍つて水が出ないで困りましたわ、元氣のいゝ私でさへ水の中へ手をつけますと、しん／＼うづきますのに、私が居ないではもしや、母様が冷めたいめをしていらつしやるのじやなからうかと今日もお米を洗ひ／＼考へて居りましたの、けれども嫂様がなさるて

せうね、どうぞ、みんなに冷えます間は、御身おいとひ遊ばして御無理をなさいませぬように、くれぐれもお頼み致します、海をへだてた、遠い都の空で、母様の事を毎日々々思ふて居ります私の心の中は母様よくお存じてすわね、申し上げたい事は山程ございますがまわらぬ筆では、思ふ事の萬分の一も書けません、それに、ねむい目を、こすりながら、かきましたので、申し上げる事も後や前になりましておわかりにくうございませうが、お判じ下さいませ、お暇の節には亦御手紙下さいな私そればかり楽しんで居りますから、母様だつてそうでせう、末筆ながら義兄様、嫂様、によろしくお傳へ下さいませ。

さよなら

涙を以て書きしもの涙を以て讀まれん（評）



春雨　京都　山田靜子

○北海の友へ

小石川　つゆ草

恭様：御地はまだ〳〵雪に埋つて居るので御在ませうね？そちらに御越し遊ばしてから、早いもので御在升と、最早二度目の冬で被入い升から御寒さにも餘程お慣れ遊ばしましたらうし夫に今年は昨年から見るとずうつと寒氣がゆるやかで御座いますから必と御機嫌よう御暮し遊ばすと存じて居りますが、斯う御便頂けませんと何だか心配で御ざいますの、多分、御用多でとは御察し申上げますけれど、ちと御消息お洩らし下さいましな。當地は今梅の盛で御在升の、毎日新紙に深梅便が出て居りますが、鼻を赤くして遠方迄出向くのも氣がきかないつて裏の四五本の御花見で滿足致して居りますわ。私近頃お臺所の手傳を致しますの、中々むづかしいもので御在ますねえ。失敗だらけで毎日笑の種子をこしらへてばかり。十月の御手紙で御在ましたつけか、もうストーブを置いたと仰しやいましたのは、いつも私さう思ふんで御在升よ、カツ〳〵と燃えるあの火を御覧遊ばしたら學生時代のストーブ會議をお思ひ浮べになるまいかと。今あのストーブは誰かに圍まれて、どんな空想を聞かされて居るでせう、隨分私達盛にやりましたつたわね。まだ小さい様な氣が致して居りますけれど、恭様、此三月の卒業生は木村様方で御在升よ。そろ〳〵コメディの練習が始まる頃ねえ、表情が下手だつて叱られちや泣きましたつけ卒業式には參るつもりですから當日の評判記でも御目に懸けませう、最早お客様で大威張で見られますわ、あゝコメディと云へば、ホラ一番御上手だつた田鶴子様ねえ。去年の暮にある文學士と御婚約御成立と承りました。始ほのかに御噂が傳つた時、すゞ様時子様と相談致しましてね、からかつて上げましたらね。例の極々眞面目の御返事下さるのですもの痛入つて仕舞ひましたの、いづれ近い中緋鹿の子かけた可愛い奥様ぶりを拜見致すとて御在ませう、御背がちとどうもつて皆な惜しがつて居りますの。名古屋の國様も才様も、最早マヽにお成り遊ばしたんですつて：お二人とも御美しいから赤ちやんがどんなだらうと偲ばれますわねえ、時に、恭様、貴女はまあだ？お知らせ下さらない筈はムいませんけれど念の爲に……だつて皆様があんまり御便が無いから怪しいて仰しやるからよ。御手紙頂戴よ。御寒さ切角お厭ひ遊ばしませ。では又……

さよなら

どこまでもスラ〳〵と樂なもの。(評)

○航海中のお兄様へ

神戸市　宮本こと

新嘉坡出の御手紙只今嬉しく拜見致しました。お兄様

には御壯健の由によろこばしく存じます、當方にても一同無事に暮して居りますから何卒御安心下さい、此度の御航海は初航海の事とて面白い事や珍らしい事も澤山御座いませうと存じます。今日は丁度「古倫母」を出帆なさる日ですねー、此處を出てからスエズ迄の十三晝夜の御航海は定めしお暑い事て御座いませうとお察し致します、汗かきのお兄様が汗でずぶぬれになつてぬれ鼠の様な姿をして入つしやるのが目に見えます然し波靜に月のさえた夜「ソハリ〳〵」と心地よい海風に吹かれ乍らデッキの上に只一人當直なすつて入つしやる時のお心持はどんなで御座いませうね、こんな時にはキットキットお家の事を思つてお出てなさるのでせう、お兄様がお植ゑなすつたあの櫻が今は盛りと咲きみだれて居ります、噫出來るならばお兄様のお歸り迄このまゝにしておきとうご座いますが、若しや夕にも嵐が吹きましたならそれこそ大變で御座いますから只今の中に一輪だけお送り致しますからどうぞ見てやつて下さいね。……

お兄様何卒御身を御大切に遊ばして珍らしい話やお土産をお船に積み切れない程澤山持つて少しも早くお歸り下さいね呉々もお願ひ致します　さよなら

地圖と旅程を片手に書いたものだから確かなもの、知識と感情とを交ぜて面白い。(評)

○兄様に

宮城縣　眞野圖葉

春とは云ひながら、まだ〳〵寒さが、強う御座いますことねえ、御地は殊に寒地ですから、嘸、姉様も悦子さんの御世話に、お骨の折れる事で御座いませう、先日御送り下すつた悦子さんの御寫眞、何てまあ可愛いんでせう、マル〳〵肥えて、頰が落ちさうですわねえお父様もお母様も、目を細くして喜んで、其後と云ふものは毎日御機嫌がよくつて、いつもなら怒るような事があつても、今ては笑顏をして居らつしやるのよ、ですから私なぞも大抵の事は叱られずに、すむのよ、何しろお父様やお母様にとつては、初孫ですものねえ併し兄様、私どう考へても可笑しくつて仕方がないわ兄様が父様におなりだなんてねえ、私達とテニスをしたり、カルタを戰はしたり、私のお友達て兄様に泣かされない令孃はなかつた位、其キカンボの兄様が、父様だなぞはほんとに振るつてる事よ、今頃は兄様あの薄い八字ひげを捻り〳〵、いかにも父様らしい、お顏をなすつて濟ましてゐらつしやるでせう、當りましたでせう、ホヽヽヽ、兎に角兄様、花の咲く頃には悦子さんを連れなすつて、御夫婦て御出て下さいな、お父様お母様も、是非と仰しやいました、兄様が御好きだ

つた、あの庭櫻も共にお待ちして居りますのよ、さよなら

若い父君苦笑一番「振るつてる」は宜かつた。（評）

○梅のかへしに桃

臺北　毛利久江

妙さん御手紙有難う皆様御丈夫ですつてね、まあ武坊が御箸が持てる樣になつたつてどんなに可愛いゝでしよう少し位の御戯は何でもありやしませんわ、體の丈夫なのが一等、早く御寫眞見度い事ね、私の方の艶ちやんを御覽なさい、始終御醫者の御厄介になり通してもこちらに來てから思の外健康になりました、其代り隨分よ此頃では清やが手をあましていますの何處で覺えるのやら土語なんか片言交りに御しやべりしてほんとに困つてしまう、困ると云へば昨年よりも二寸も深く積んだつて御寒いでせうね皆様に御別れして淋しい思ひは有ますが、是ばかりは當地の德よ今此手紙書いてる室の窓には早咲の紅桃が笑つてるんですもの暮に送つて下すつた手袋が二月と云ふのに二度役に立つた計、小包で送れるものなら此氣候をね。

先日御送りした夜光貝の印材が大變森さんの御氣に召したつて奇麗てしたてせう其内東京の妹さんと妙さんにあれの御揃の指輪を送りましようそりや意氣よ御宅の父様御好物のバナナね昨日の便で內まで送つて置きましたから多分貴女のとこにも屆けて下さるでしよう余りしつこい樣ですが梅の花の御禮に此桃を。

どうか其氣候を氣送郵便で願ひます、しかしマラリヤは御免。（評）

○里みやげ

茨城　川和田波津子

春は實に爭はれぬもの、こんな山の中も、もうすつかり春めきましたよ、背戶の梅も眞盛り訪るゝ鶯の初音も自づと長閑な、心地がいたされます、麥もはや三寸位にのびましたよ、政ちやんはピイピイにするんだつて引き拔いて毎日毎日叱られて居りますよ。いつも腕白大將には閉口てすよ、ほんとうに月日の立つのは早いものでこの政ちやんが今年からは學校てすよ、もうとうにお父さんに御ねだりして、學校の御道具を買つて戴いて、威張て居りますよ、それからね、裏山には柔い柔い餠草が澤山出ましたよ、ほら去年の丁度今時分てしたね二人て籠に、したたま摘んで前の小川て洗つたのは、おほゝ、其時よあなたが足を辷らして、下駄を流したのは、てもあの時落つこちなくつてよかつたわ、ほんとうにあの時驚きましたつけね、それからこれはね昨日みいちやんと二人て去年あなたと摘んだ裏山て、もすそかゝげて摘んだのよ、そして今朝ぢいやが搗いたのよ、まだほんとうに柔いのよ、あなたの大好物だから澤山あげるわ、どうぞ澤山召上つて、田舍の

春を偲んで下さい、御序が有つたら都の春をね、是非
お知らせ下さい、待つて居りますよ、さよなら

野趣を以て勝る。（評）

○臺灣なる兄様へ

大坂　高山米子

昨日は珍らしい繪葉書有り難うございました。もう菜種の花盛りですつてね、何てお早いんでせう、内地は未だ／＼お寒う御座いますのに――、冬は臺灣が羨ましいナつて父様が、ほゝゝゝ、勝手な事計り仰しやいますの。

昨夜から大變な風でしてね、今朝起きましたら水道が凍つて仕舞つてますの、今年に成つて初めてゞ御座いますよ。草ものが皆可愛そうに萎れて、折角菩が紫になつた菫が、グッタリ頭をたれてゐるのですもの、お湯を流しますと直ぐ後から／＼氷つて行くんでせう、大阪へ來てから此んな事めつたに有りませんでしたわ、それにツヾラが下りましてね、珍らしいものですから鶴ちやんなぞ大喜びでしたの。もう寒明けも近づいてますのに、これでは餘寒が思ひやられますわ。

寒いとつい無性に成りましてね、ホゝゝ、ふだんからですけれど……、お炬燵に計りは入り込んで何もできませんの、御約束の編物御催促で恐れ入ります、つい遊びにぼけましておそくなりました、漸く五つ六つ出來ましたから此次の便で御贈りいたしますよ。

あゝ、寫眞をお撮りになつたのですつて、早く拜見したうございますこと、お髭をお生しなすつたそうですから猶更待ち遠で堪りませんわ、私もとらうと思ふのですが、此頃は益々横に肥えてオホゝ、もちつと薄着に成りましたら、必ずお目に掛けますわ、だつてお口の惡い兄様ですもの……

末乍ら御身おいとい下さいますやうに、では又、左様なら。

輕快。（評）

○海草にそへて

伊知子

登代子様今日も大分寒う御座いますね！

私は此の寒さにも好きな事とて丁度日曜でもあり、汐時でありましたので、安と二人てヒヂキ（海草）取りに行きましたのよ、彼の御存じの古館崎にてすよ、玄海見晴らす海でせう、ですから北風がビュー／＼吹き荒れるのですもの、其寒さといつたらありませんでしたのよ、でも潮水は溫いものですから水にばかりつかつて居て取りました。今二三寸になつて居ますので取るにも食べるにも丁度良い時であります、取れる丈取つて歸りましたの、そして直ちに湯をわかして茹でましたのよ、まだ若いのですから其の色の青々として美しさ。余り美事で又初物ですから、少しで御座いますけれど御分配致します。私は安に持せて上げました後て今夜のお副物に之を味噌和へに致す考へで御座いますのよ。御宅も畑の野菜ばかりでせうから、時には海の野菜も風味變つてよいものて御座いますよ、此のヒヂキは茹てて乾かして置きますと何時迄も用ひられますから、御好みで御座いますれば、お春さんを取りにおやりなさいませな、又明日も安を取りにやる積りで御座いますから……



短文

編輯局選

○芽?（地賞）

新潟縣　白露

冬の日がまぶしく白い雪を射る朝、湧き出づる清水で、柔らかな昆布を洗ふてると、長くひろがつては、ヒラ／＼動く。丁度海の底へ生いてる時の樣だ。洗ひ終つてから、光線の集まる水面をじつと見つめると、マア何の芽だらう? 透き通る水底に黒い種をつけた可愛い二葉!! 長い冬に倦きた心はこんなのにも嬉しく感じる。

評　乞ふ幼なき自然を讃せよ

○兄さんの下宿（人賞）

兵庫　すが子

田舎下宿の二階住ひとなられた兄さんの處へ行つた、窓を開けて見ると他に二階建の家がないので町全體が見える、瓦屋根が重り合ふて浪の樣である、陽炎がキラ／＼とたつて、眩しい、遙か向ふの屋根の上に干物臺があつて私と同じ位の娘が居る、そうして彼方此方を眺めて居る、あの方も多分初めて兄さんの處へ來たのであらうと思ふた。

評　さうかも知れぬ

【秀逸】

○怖いもの

伊豫　よしゑ

夜あけ前、眼がさめたので、昨夜から炬燵へかけておいた風呂敷のやうな肩かけを羽織つて障子を出た。紘月が淋しくかゝつてゐる、庭の木の葉が靜に呼吸をしてユラリともしない、天地を青白い月光がサラ／＼流れて、寂寞、怖い。素足が冷たい椽に冷々する。

評　有明の油も盡きんとして

○薄き愁

大阪市　とき子

在學中は屢々先生に御注意を受けた位。卒業後も極容姿構ぬ無頓着で廿一の春を迎へました私は、欲がりもせぬのに父母が拵へてくれました一二枚の絹物、ふと出して着て見ましたが何れも似合ません。寧不斷着の

方がよい位。私はふと薄き愁を覺えました。

評　而して冷やけき笑み

○雪の朝　徳島　みさを

何處ともあてなしにさまよひ出でた私は、何時しか御社の境内に來て居た、見るともなしにふとみると、美しく積つた雪の中を、足駄の跡と、木履の跡とが一所に社前までいつてまた、かへつてある、一つは外輪に一つは内輪に。

評　杉からバサ〳〵と雪の一塊

○病める夕　西多摩　與志子

一時間でも晝間寢ると心細いものをでも早速御全快で何よりでしたわねと自分のことは何とも云はない端書を床の上で花さんに書いてしまつてから、障子の帶ガラスから外を見てゐると夕べの星が一つ淡い光を瞬かせながら覗いてゐたので、病苦を忘れてゐると、未だ明るいのに雨戸を締められてしまつた。

評　又更にはかない感じ

○雪どけ　伏見　京子

春の雪は降つても降つてもつもらぬ解けた道は牛車にふみにじられて泥の海午後二時頃からはギラ〳〵と日に照らされて。寒い空つ風が電線をならして吹く、酒屋の軒下に干してあつた番傘がコロ〳〵轉がつて泥の中へ仰向けに落ちた。

評　やがて又豆腐屋の來る時分

○浪　佐渡　美人草

浪―聞いてさへぞつとする、私の母樣を奪つたのも……姉樣は何時か岩の上で、「美さん浪は恐いものよ、母樣も此の浪で……」とゝまで云つてはほろりとなられた、母樣は未だ、浪の中に御出でになるかしら……遠くから人を呪ふような浪の音がきこえる。

評　凄愴

○ねざめ　佐渡　本間　綠子

ふと眼がさめて、お母樣と呼んでも返事がない、頭をあげるとやう〳〵窓がわかるくらゐ、しと〳〵と降る雨の音、私は異郷にある事を思ひつひて、俄に淋しくなる、蒲團をかぶつて眼を閉ぢた、何やら重い荷を負ぶつた樣な心地がする。

評　深き底から雛の聲!

○春の日　成田　のぼる子

私は窓に寄つて櫻山を仰いだ、美しく輝いたコバルト色の空に綠濃い老松がくつゝいて何とも云へない美しさだ。笹の中の小路を別けて上半身丈あらはして中學生が二人歩いてる、何だか私も歩いて見たいような氣がする、唱歌室から面白いコチロンマーチが聞える。

評　流鶯終日

○おけいこ　府下　かすみ子

お師匠さんの四五間手前迄くると盛

んに琴の音が聞える。又込んで居るのか知らむと、そつとのぞくと五六足の下駄がそろへてある、おや〳〵と思ひながら仕方なしに格子をくぐつた皆の目は一度に此方へ向く、私は默禮して後の方に座つたまた格子がから〳〵とあく。

評　櫻炭の匂ひ、ヘリオトロープの香。

○順禮　　松本市　哀花

春の野に、二人の順禮が、すや〳〵とねむつてゐる、暖い日は、長閑に射して、若草の香はやわらかに、二人を包んでゐる。人家の方に、鷄の長く、なく聲がきこえる、程たつてふりかへつてみれば、そのあたりの野は、うすくかすんで、紫のかげろふが、ゆら〳〵と立ち登つてゐる。

評　あの山こえてこの山越えて、同行二人の夢は遠し。

○わからぬ　　伯耆　夕葉

筆さんも、おなみさんも、時枝さんも、私も揃つて十八になつた、けれど誰も別に驚きもしないし、よろこびも悲しみもしない。誰も此頃は花輪擦へて遊ばうと云ふものがない、まゝ事しようと云ふものもない、何故だらうか、知れきつてわかつてゐる樣で、てもわからない心地がしてならぬ。

評　コンペンシヨンの威力は大なる哉、刻一刻若き生命が死んで行くのに驚かない!?

○雪降る空　　羽前　あらゝぎ

綿をちぎつたやうなのが、ぽた〳〵落ちてくる、灰色の空を仰ぐと、ちようど無數の黑い埃が立ち舞ふてゐるやうである。屋根から下て、はじめて、白く見える。晴れた日には、深い綠をあらはすあの空から降つて來るのだと思つた。

評　『雪程黑いものはない、』古諺我を欺かず。

○車　　熊本　波の花

車は一生懸命にかけ出した、が一町もきたらもう息がきれそう、もう七十だといふもの私は氣の毒て〳〵たまらなくなつて下してと口まで出たが後でさぞ心配するだらうと思ひ返してゆつくりで好よといつたら尚更いそぎ出した、あらどうしよう。

評　彼は車を轉覆させてまでも其義務を盡さんとするのだ、世がさうさせるのだ、

○時雨日　　島根縣　時雨女

「姉樣如何だい」急がしく枕元に學校の包を投げ出すと袂から蜜柑を一ツ「今日の茶話會のさ」熱ある身の渴を思ひ遣の志嬉しく枕にとり縋ると「火がないね」小倉の袴据輕げに屛風の後で炭をつぎ初めた覺束ない手振りの寒い時雨日。

評　早くよくなつてやらればならぬ

○彌生初めの夜　　信濃　優梨子

彌生始めの寒い夜である。
私は、氷つた暗い街を歩いて見た。
自分の下駄の音許り邊りに響く。
たまに見える瓦斯燈が、ぼんやりと雪の道を照して居る。

もう彌生だのに、梅の香さへも漂つて來ない。身振ひする樣な北風が、さつと吹いて來た。私は早く明るい街に出やうと急いだ。

評　あゝ春や何處

○冷涙　美濃　堀ときわ

君樣の死去、妾はどんなに愕いたろう、どんなに涙を流したろう、けれど夫れはたゞ表面だけ、叔父樣や、叔母樣の前だけ、涙は冷かなものであつた、而して文雄樣の心を妾の方へ引き付ける機會の至つたのを、窃に歡んだ。

評　恐ろしけれど表はし方足らず惜むべし

○母　京都市　萩廼家

ふと目が覺めた。夜は更けてゐるらしい。臺所の方に火が見える。何？と思つて這ひ寄つて襖の破れから覗いて私は驚いた。常とても豊でないのに、私といふ病人が殖えたのを心配なすつて、暗いランプの下でお母樣は、肩掛の房つけをしてゐらつしやる。‥‥私はどうしませう‥‥。

評　只安靜なれ

○春の宵　下關市　山本芳子

深沈として降る春雨の宵、陰氣な濕つた空氣の滿ちてゐる室裡に、灯を點けて物想ひに耽いた。ふと鏡に寫



職　新潟　水澤筆子

つてゐるのを見ると、眼の球がうるみ切つてゐる。私は死ぬるのではないかしらと、弱い神經に強い刺撃を與えた。燈火がまたたいた。

評　更に思ふ、もう死んでるのでは無いかと

○井戸の水　筑前　みどり女

春になると、私の家の井戸の水は屹度綺麗に變ります。そして又夏になると素の赤い金氣水と變ります。未だ梅の花も咲かないのに、最う井戸の水は綺麗に變りました。今は、濾さずに溫い水を使用してゐます。

評　名けて曰く陽春の井！

○立　春　羽後　加藤うん子

二階で四方を見ると、空には塵程の曇も無晴れ上つた春空、山野は薄綠立つた、工場や鍛冶屋の鎚音何處とも無響き行く、電線の乙鳥はさも春よ春よと囀つてゐる樣子、妾も思はず胸が湧立ちました。

評　若き心、若き自然

○變　遷　三重　瀨木八重子

二三年前迄は明日の餅搗も三日の雛祭もとかく人寄程嬉しく樂かつた時はない、けれど今は前途暗くつて暗夜に物を探る樣に進む足下に大きな石がある、どうしてもすむ迄は其に躓く心地がして安心が出來ないあゝかうして莫大な罪を作つて老ひてゆくのだ。

評　生れたのが運の盡き

○深　夜　伏見　田舍娘

ふと目さめた。いつか燈火は消えて終つてゐる。……胸苦しさに起き出て、失禮な事とは知り乍、つひ、衾のひまからのぞいたら、彼方向きに居らした、未來の姑樣は、つと、返り見られた。

はつとして、思はずよろめいた時、「稻荷〱」と、深夜に響く驛夫の聲。

評　大變面白い見どころだが徹底しない

○病中の感　麻布　光子

あゝ、早く全快したい。寢臺に寢たぎり、動くなと醫師は云ふ。晝でも光線の通はない、暗い處で働く、嫌な職業と聞く、鑛夫さん今はなか〱羨ましい。彼等は自分の身を自分で働かすのだもの。勞働は神聖なりといふ。全快したら下女代りでも何でも、喜んで仕樣。

評　怪しいものだ。

○社の晝　伊豆　鈴木矢壽子

友禪物の振袖を着た舞妓が二人、木履の鈴を鳴して大鼓橋を渡る。鳥居に群れて居た鳩はパッと舞ひ立つてまた舞ひ戻る。クヽと鳴く聲がねむたい。舞妓は御手洗鉢の水を小さな柄杓で白い手にさら〱とかける、庭の紅梅の花が靜かに散つた。

評　白丁神饌所に入る。

○節　分　丸山　房子

朝からのからつ風も、火ともし頃か

らわすれたほど靜になつた。今年の年男はぢいやがやると、早やく湯に迄入つてのおめかし。祖父樣の初めてと云ふところに、しやがれこゑをはり上げて「福は内鬼は外」ガラガラピシヤン。あまりこゑがよかつたので、猫がおどろいて飛び出してしまつた。

評　笑聲滿堂

○何の涙　常陸　本村桂月子

姉樣は我から喜び進んで約めた結婚に、いざ嫁くと云ふ晩に成つたら、人目も恥ぢず、半帕を搾る程涙をお流しなすつた。親友の妙樣は、戀の成功者で嫁らつしやるのに、矢張り姉樣と同じ樣にお泣きなすつた。女子一生一度の華やかな婚禮の夜に流す涙、一體まあ何の涙でしよう。

評　『祝儀の鐘の鳴る時、涙を流す花嫁子』ブラウニング夫人既に之を歌へり。

○かはり　和泉　金田　文子

昨日まで、お孃樣とよばれてゐた藤枝さんは、白むくをきて、三三九度の盃をかわしたばかりに、最早お嫁樣と云はれるようになつた。私は何も不思議でならぬ。

評　この不思議は人の上のみか

○市街の裏　山口縣　栁良美奈子

燃えるでもなく、又消えるでもない、只ボッボッと濃い煙の臥せるが如く爪立が如、そして一日だつて絕えた事もない市街の塵燒場、龜山の櫻花をなめた東風の余流が吹くともなく傳はると厭な〳〵香が鼻をつく、妾は思ふ、きつとあの黃いろい聲音の商人等が、いつはりの罪をあつめあつめて燒きつくす香ぢや――ないかと。

評　市の虛僞の臭氣てあらう

○冬の夜　下關　川村きく子

風がなぐと月が出た、散步に出掛る、淋しいと思ふと、風が吹いて來て雲を走らせ、木葉を鳴す、影法師が消えた又出た木葉が音樂を奏す。雲と影とが天と地てダンスを始めた、眞て活動寫眞を獨見る樣な氣がする寒い事は此上ないが、面白い事も此上ない。

評　骨の折れる見物

○彗星　兵庫　紅雀女

椽先へ出ると、西の山の端と久子さんのお庭の松との間に、彗星が見える、彗星が出ると戰爭が初るといふ事を聞いて居る。と門で老人らしい聲で今度は何國と戰爭があるのだらうと、又一人が左樣さ心配ぢやなといふ、やがて一緒に拜んで居るのだらう、南無阿彌陀佛〳〵と聞える。何だか私も氣にかゝる。

評　「今度は何國」となんて當分眞平ですよ

○朝　大阪市　鹿島　綾子

眞白な板橋、霜の深い靜寂な朝、柳が一枝長く冬枯の淋しさを水に畔いて居る。すると向方の河端を、運轉

手臺の鈴を消魂しく鳴らして、電車の駈つて行くのが見える。満載せられたる人は誰も皆、眠むそうな顔を窓から突出して居る。

評　情眠を覺せ、贅六共！

○小犬　廣島市　井上皐月

使に行く道橋の上を通ると小犬が眞中に座つて人待顔の眞面目さ妾はふと「ちん」がくさみをすると云ふ事を思ひ出した時も時小犬がくさみをしたので覺えず吹き出した處通る人々妾の顔を見向きぬ餘りの恥しさに手帕て顔をおほふて我家にはせ歸れり

評　よくまアお誂へ通りに出來たものだ

○寒夜　丹後　伊志子

夜に入つてからは風も凪いて、静かな大路にひゞく夜まわりの拍子木の音もしみ入りさう。雪婆は賢い人で地上をから〱に乾かしといてから雪をよこすのですつて、がた〱と今訪ふた風！姥様の籠から粉が散るらしい。

評　其響鏘鏗

○敬遠　かごしま　みゆき

「温泉へ被居いましたつてね彼泉は鐵泉ですか、硫黄泉ですか」「九州の植物は本土のとは丸で異ますのね」なんて仰る政枝さんに何故か皆様は敬遠主義を取つて打解けてお交際遊ばしません。

評　うつかり言つては叱られるから

○思ひ出　備中　篠原しげ子

去年の秋てした、お隣に花嫁さんが見えた時祝宴の場て振りの袂を膝に重ねてお琴を彈じられたのは誠に美しうございましたが、其あげく宅に挨拶にお出てゝお歸りの時門先の下り坂でドングリにおすべりなさつた其有様、何ともお氣の毒て〱、今も裁縫しながら思ひ出されて思はずふき出しました。

評　まア人の悪い。

○私の虚榮心　金澤市　藤永静子

自分の投書したのが出てると面白くて又出す、それで隔月に投書するといふ風になります、するとお友達が御覧になつてこの工合じや毎月かゝさず出してるのが沒書になる事もあるんだとお思ひかと思つてこゝに小さい心配が起ります之も一つの虚榮心ぢやないかと思つて……。

評　人こそ知られ

○夢　佐賀縣　ふじ子

遠い〱方てズドン〱と大炮の恐しい響がする。驚愕して飛起様とすると、何時の間にか前に牧師が立つて居て、両手を廣げ「お静になさい貴命の命は神様が關つていられます。」と云ひつゝ静々手を下につれて私の頭は重く〱下つた。覺て見たらシッカリ打伏して居た。

評　知らず是れ何の兆？

俳句



○（天賞）草鞋はいて千里の道を雪解風　失名氏

○（地賞）此文に山吹添へて我泣きぬ　神奈川 木村涙花

○（人賞）砂利深き新開町の雪解かな　赤坂 小松みつ子

【秀逸】

春雨や曾我の小家の灯の淡き　信濃 川端澄子
忍び音に何さゝやくぞ春の殿　大阪 草村君子
鶏が首つぼめたり雪の暮　神田 長子

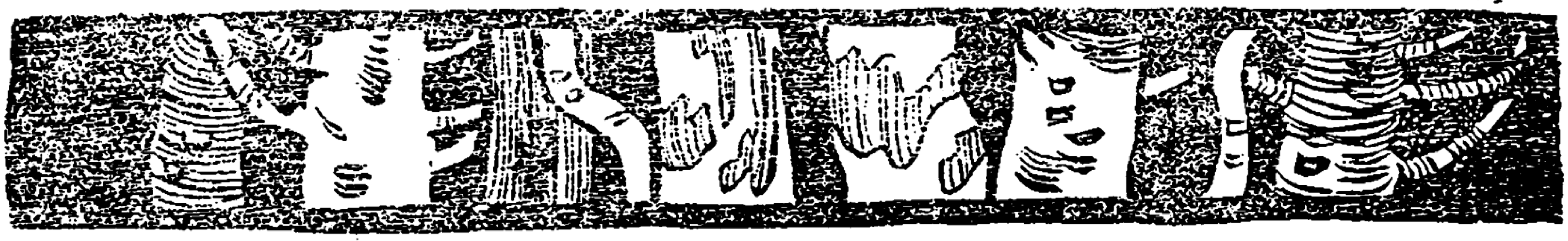
湯上りの顔に冷かに化粧かな　淡路 倉内秀野
日當に糸繰る伯母の歌長閑　大阪 岡村千代子
初雪や惜げなく呼ぶ豆腐賣　備中 田中住枝
妹のまりに戯る小猫かな　大阪 西村完枝
白足袋に染まる紅緒や春の雨　赤坂 橋本ひさ子
白梅や日出の坂に富士見えて　本郷 小島茂子

内藤鳴雪選

元朝や神代に似たる山の村　静岡 石川みき子
大小屋のこゝにもさしぬ初日出　赤坂 小杉くさ子
草山の穴出る蛇の日和哉　岐阜 春野秋子
化粧する湯場の女や青簾　山口縣 河村しじ子
神樂舞ふ少女が袖や梅のちる　京都 要司村福子
杜若切れば滴る水や空　茨城 百合姫
若白髮忍びて拔くや夜半の春　新潟市 水澤筆子
櫻散る下に笛吹く人や誰ぞ　佐渡 本間綠子
なき妹は天使となりぬ春の夢　松本市 哀花
城兵の餘寒の粥をすゝりけり　伊豆 鈴木矢壽子
春雨や庭の小草に蛙なく　濱松 高畑小菊子
渡場の船頭も寢て餘寒かな　富山縣 むらさき
夕霞見返る君をへだてけり　沼津 渡邊とよを
春雨や灯淋しき旅の宿　かすみ子
山櫻石切る人に散りにけり　伯耆 夕葉
美しき小鳥の聲や若葉山　上毛 高柳靜子
寒月や疎林に起る風の音　丹波 涙なき子
萩寺に女人講ある日和哉　鳥取市 安木はる子
行く人の蛇の目の傘や花吹雪　伊勢 瀨木八重子
塀越しに梅の一枝や朧月　美濃 堀ときわ
上人のうしろ姿や花吹雪　奈良縣 中富よしみ

馬子歌ののどかに遠き野道かな　和泉　早川登志子
青柳のうつろ間もなき流れ哉　三重縣　後藤たい子
春雨や灯火細き長廊下　備中　小見山春子
春雨の静かなる夜の物がたり　紀伊　福本蒼生子
春雨やとりひろげたる物の本　千葉縣　吉井光子
蔽ひせし琴のそら音や春惜む　信濃　吉川多美子
春の水二人のかげをうつしけり　美濃　傍島小枝
まだ落ちぬ柿の實赤し今朝の霜　筑前　近藤琴子
青柳や垣をへだてゝ醫師の家　羽後　加藤うん子
陽炎や荷車押して女坂　兵庫　紅雀女
雲たえて月の都や嚴島　すみれ會　野宮みさほ
飯事のお膳の上の若葉哉　すみれ會　町本なほ子
こんもりと暗き青葉に湧く清水　すみれ會　小萩たかほ
朝顔に誰がぬけ髪を捨てゝ居る　すみれ會　秋葉みれ子
初雪や藁葺屋根に鷄の聲　加賀　福田節子
櫻より桃に親しき藁屋かな　小石川　渡邊芳子
寒月や此窓黑き松の影　麻布　渡井さく子
をどり場や花見もどりのうかれ人　京都　萩廼家
風そよぐ奈良の小川の春の水　下關　山本芳子
春の夜をうつら〳〵とねむりけり　下關市　山田くに子
歸省して門の初霜なつかしや　越後　吉田かほる
春風や白き馬あり草を喰ふ　岐阜縣　南下枝
偲ばるゝ小野の小町や春の雨　德島　中村玉野
野も山も皆雪にして冬の月　山形縣　大瀧すみれ子
陸奥殿が微行の駕や草崩ゆる　長野　青木みち子
千金の鶯死して春寒し　水戸　根崎ふみ子
乙女子の本借りに來る春日哉　小石川　田村はつ子
村人の神樂して居る日永哉　遠江　河村咲子
ぶつ〳〵と土の泡ふく春田哉　京都　本郷春野
冴返る指の痛さや古つろべ　宮城縣　眞野圓葉
梅の花咲くや小窓のあけはなし　加賀　葉末

ちむや風黄昏て春の水　島根縣　長崎君子
夕空やからすの聲に秋去りて　京都　川島政尾
朧夜に誰が爪彈ぞ亂れがち　四谷　笹原芳江
しろ酒に醉ひて舞ひけり赫奕姬　四谷　味方こう子
春の夜や琴の音きゝて物かゝん　三河　淺井浪越子
朧夜や杉菜の花の覺束な　青森　美能惠
姉が君夜半の書齋におはしけり　伊勢　田中みれ女
冬牡丹咲くや雨ふる金閣寺　香川　渡邊清子
初午や錢のちらばる人形店　京都　山田靜子
倒れたる石碑に雪の吹雪哉　日暮里村　藤掛つれ子
初日の出拜まぬ里もなかりけり　廣島　河本義子
春の夜の女が守袋かな　越後　藤原泣黑子
主人逝いて寳の玉の冴返る　羽後　三浦文江
かみ結て襟元さむき女かな　香川縣　藤村木の間
春風や廣き座敷に人の舞ふ　紀伊國　三栖鵜江子
長閑さや研師の水に散る櫻　大阪　澪花
欠伸すれば涙出てけり春の風　京都　平井道子
雨降つて炭の匂ひや庵の宵　南信　竹水子
くさ摘や女同士の馴れ易き　小石川　渡邊喬子
暖かに丈一尺の福壽草　大阪　高山米子
小春日や古き言葉の面白き　淸國　藤本美津子
なつかしき戀の日記や花の雨　小樽　淸田芳枝
行燈に羅かけし局かな　八重子
雪とけて水に聲ある柳哉　越中　藤澤種子
花の宴をかしき人の舞ひにけり　府下　國分常子
花散りて人なき家や晝の雨　岩代　笠間松江
夜泣きする雛子のさけびに春寒き　日本橋　松岡千代子
春の旅愁ては笛吹きにけり　上總　黑坂赤笑子
鶯の影描きたり古障子　伊豆　春野彌生子
此磯を月に踏みけり梅の頃　土佐　德弘保猪
顏に散る鯛の鱗や春の宵　土佐　竹島けん子



作家見立

（餘興）

○假名手本忠臣藏役割見立（天賞）

三島　遠山雪子

寺岡平右衛門（石橋思案）
高野師直（森鷗外）
與一兵衛（幸田露伴）
千崎彌五郎（小山内薫）
斧九太夫（村井弦齋）
桃の井若狹之助（河井醉茗）
鷺坂伴内（ちぬの浦浪六）
鹽谷判官（横瀬夜雨）
娘小浪（水野仙子）
大高源吾（泉鏡花）
顔世御前（與謝野晶子）
加古川本藏（上田敏）
天川屋儀兵衛（杉村楚人冠）
原郷右衛門（内藤鳴雪）
早野勘平（窪田空穗）
大星力彌（水野葉舟）
侍女お輕（岡田八千代）
石堂右馬之丞（德田秋聲）
妻お石（長雨川時雨）
大星由良之助（田山花袋）

○和洋草木見立（地賞）

羽前　浪江

鏡花様――ざくろ
漱石様――白梅（八重の）
葉舟様――撫子（野生の淡紅）
藤村様――ぢんちやうげ
蘆花様――白百合
白鳥様――石楠花
青果様――ジギタリス
夜雨様――コスモス
逍遙様――桐
鷗外様――辛夷
花袋様――ひあふぎ
晶子女史――凌宵花
八千代女史――ぼけ
時雨女史――萱草
楠緒子女史――藤

○女ならば（人賞）

秋田　小室信子

夢見るようなまなざしの島田の少女は夜雨先生て、醉茗先生はマガレットの丸顔の女學生

でせう。

田山花袋先生は血色のよい、いてふ返のはき／＼した娘で、切りさげ髪にコートをまとひし未亡人は秋聲先生です柴舟先生は丸髷のすこやかな奥様て、友禪のあでやかなお被布を召した桃割の少女は金子薫園先生、優しいすらりとしたお嫁さんは幸田露伴先生で、氣むづかしい姑は大町桂月先生のようです。

【秀逸】

○花　東京　鈴木すみ子

徳富先生、先生は花にしたならば梅、しつかりした所があつてきれいでせう。小杉天外先生、先生は日まはり、長谷川しぐれ先生、先生は山吹、河井先生は美人草、よく本誌にしらぎく女として御出しになる方は白百合のやうに思はれます、きつと理想像があたつてよ。

○花くらべ　伊勢　露木雅子

私の蔭ながら崇拜して居ります所の小説作家の諸氏をば、四時とりどりに美しい草花に見立てますると、先づ名も緣りの藤村樣は紅葉の錦、花袋樣は牡丹、漱石樣は櫻、風葉樣は藤の花、鏡花樣は白蓮、薫樣は水仙、荷風樣は紅薔薇、白鳥樣は木犀、未明樣は山梔の花、葉舟樣は向日葵、空穗樣は撫子、草平樣は姫百合、湛柿樣は木蓮、泡鳴樣は紫陽花、八千代樣は芙蓉、時雨樣は花菖蒲、なほ最後に逍遙樣、鷗外樣、露伴樣、及び楠緒子樣を四君子に擧げて、禿筆を擱きませう。

○新作家號より　淡路　菊子

私の胸に印象を與へられたる誌友の方を四季の花にたとへてみれば、長曾我部菊子樣菊地柳子樣秋山欣子樣、春の菫、紫の色濃きと淡きは白菫の星に擬ひて、赤きは虹の一色をや借りけん、芳はしき香を洩らしつゝ年毎に色まさりゆくぞめでたけれ、山村龍子樣杉山春翠樣梅本龍子樣、初夏の矢車草、おだやかなる園に育ちて風にも堪ぬ風情有、花の上にも花を飾りて白に淡く赤に可愛ゆく桃色の情有げや、取々にうとましからぬ趣有を歌詠む君ならで誰にかは：三浦ふみえ樣藤原樣、秋の朝顔、佐藤樣、細谷樣、冬の梅、白に目出度紅に床しく咲くもよし、やがてぞ鶯の谷の戸出て君が傍に譜をかなづる。

○本誌の寄稿家の花見立　東京　つゆ草

喜志子様がつはぶきの花、琴子様がさゞんか、萬壽子様がひ桃の花、みゆき様がコスモス、君子様の御妹子がひ扇、愛子様があやめ、華影様が黄菊と是は夏期增刊に姉が鉛筆のすさびて御在升の。私萬壽子様の緋桃と愛子様のあやめが一番ふさはしい様に思はれますの。きし子様なぜつはぶきつてきゝましたら、只さう思つたゞけよ御寫眞みてつて姉は笑つて居ります、どう云ふわけかしら。つはぶき―喜志子様――。

○花

奈良縣　中富よしゑ

桃　田山　花袋
白百合　吉江　孤雁
すみれ　水野　葉舟
山茶花　内藤　鳴雪
野菊　横瀬　夜雨
はぎ　河井　醉茗
櫻　小栗　風葉
桔梗　正宗　白鳥

ばら　與謝野晶子
芒　徳田　秋聲
梅　兒玉　花外
コスモス　三木　露風
撫子　小川　未明
あざみ　泉　鏡花
山吹　金子　薫園

○花見立

大阪　山内　溪子

醉茗先生は、靜な靜な大きいお庭に只一二輪咲いた紅梅の老樹です、最う樂しみと云ふて待つてゐるのも鶯の聲――。鳴雪先生は、あの恐しい針の出たシャボテンです、毎日青い顏をしてお酒を召し上られる、そして秋には白い喇叭の様な花が一つ咲くのみ。夜雨先生は、お寺のお庭に咲く紫陽花です、誠に美しい立派な咲き様です、が陰氣な花のために只老僧様方がお喜びになるのみ。晶子先生は、やさしい美しい香のよい床間に生た白百合の花です、數多の人には愛される、けれどいつかは枯れて河へ流される事も有てせう。

○動物見立

京都　萩　硒家

田山花袋氏、上州の産、その御作を、拜見するに頭味ドッシリ象を聯想す。
嚴谷小波氏、立派なる御風采、何と思ふても兒童の好む猿のやうなり。
夏目漱石氏、猫先生の餘號のあるとほり、長火鉢の傍の三毛猫の如し。
小栗風葉氏、未だ御謦咳には接せれど、さしづめ鸚鵡先生と申奉らん。
與謝野晶子氏、御本名は鳳とやら、尾を擴げたる孔雀としては如何？
岡田八千代氏、芹影と號し玉ふ。雅號からして、窓に飛び交ふ雀の如く覺ゆ。

――――――

餘興新課題

愛誦錄

次の課題は愛誦錄と名づけました、何う云ふことを書くのか、次の説明を見て下さい

▲諸孃の愛讀書から殊に日夕愛誦する名文を拔くのです▲諸孃の中には讀書の間に名文を見出したら其處だけ拔き書して置くこともあるでせう、其拔書の中の一節でもよろしい▲書物の種類も文學書でさへあれば宜いことにしませう、昔の物語類、現代の小説類や、江戸時代の戲曲其他の小説類の中より拔くのです▲四書五經又は聖書、佛典などの修身や宗教に關するものは除きます▲成るべく美文的のもので愛誦する句を拔いて下さい▲長さは十六字詰十行以上二十行まで▲何書の第何回より拔いたと云ふことを文句の終りに書き添へて下さい▲原稿には愛誦錄と記すこと▲其他例の通り、締切本月十五日



読友倶樂部

交際を望む

○交際に就いて　少しく私見を述べさせて頂きます。

現今發行の文學雜誌中で、最交際希望者の多いのは本誌でせう。是れは誌友の皆様が、若い女性であるからかの優しい美しい心から、同情ある友を得ようとする、所謂至當の傾向ですが、それにしては、其交際振りがなんとなく物足りない様な心地が致します。

一時的でなく永久的にとは、交際希望者が皆一様に唱へらるゝ語ですが果して永久に交際していらつしやるか何うか、甚だ疑はしい者です私が八十有餘名の交際申込者中、今日まで一年有餘日、曾つて私が病床に倒れて居た時等も、優しく慰めて下すつたり等して、何時も變らず交つて下さるのは、只八名しかございません。

其他は大抵一二回、或は四五回位で音信不通になつて了ひます何うしてこんな事になるのだろうと私もいろ〳〵研究して見ましたが、全體皆さんのお心が永久的でないのだろうと思ひます初めから餘り喋々しく手紙や葉書の交換をする方は必ず永くつゞきません。先づ月に二回又は三回位に定めて、やりとりをすると、飽も來ず。書く材料にも盡きません。それを餘りしげ〳〵書いて居ると後には書く可き材料がなくなる、書く事が無いからツイ〳〵無沙汰をすると言ふ風になつて來るのだろうと思ひます。

それから何う言ふものか、手紙の文章に眞心がこもつて居ない、若い女の匂ひと言ふものが更にありません。只筆の走るまゝにずら〳〵と書きながして、それでも未だ字なりと丁寧に書いてあれば兎も角、中には字までがいけぞんざいの亂れ書きで、封を切つてまあと、思はず其人の人格をさへうたがうような者がありますと是れでは、立派な女子文壇の誌友として、人に見せられも、話されも致しません。

何うか皆さん、貴女方も文壇に籍を置かるゝ以上、若い文藝家と言ふ資格があるのですから、も少し自重して、文藝家らしく興味ある交際をして頂きたいです（備後神邊紺屋町井上年子）

○お願ひ　妾は旅にさすろう頼りない者ですが誌友の皆様と清い〳〵交際を求めたいです。甚だ勝手がましい申樣ではありますが女子文壇の誌友だと云ふ證據に二月號の妾の名前のあるところを切り取り成可くお早く寫眞に貼り附けお送り願ひます。妾の身として澤山の品を添へてお送り出來ませんが妾の寫眞を添へて御返し致します。何人でもかまひません。（福島縣田村郡三春町北町百十八番地　橋本ふさ子）

○淺間の麓より　賢明博學なる天下の本誌愛讀者諸姉孃様方へ、御願致します妾は何にも、知らぬ、不束者ですが、御姉上様方よ何卒、親しき御交はりを御願致します、そして御玉章給葉書などを、下さいましな、もと〳〵習はぬ筆ですから見苦う御座いますが、御返事は屹度致してよ、又皆様の御望みに、よりますれば私の地方山中の珍物をも送ります、終に一寸、妾は世に聞へし淺間噴火山の麓に住む者ですから、

御姉上様方の中にて淺間登山の御方は妾方へも御寄り下さいませ、妾しほんとに御待申して居りますよ、（上野國長野原局下茂木よしえ子）

○自作物　おなつかしき誌友の姉様方何卒表面だけでない親密なる御交際を、そして自作物の交換を切に御願ひします、お返事は屹度神に誓つて致します、（京都府加佐郡中筋村字引土四九、臼井わかな）

○忘れな草様　御志しの廻狀定めし有益で御座いましよ當地には十名以上の文壇愛讀者が居ますからどんな風にして宜しいか下名に御指導を願ます尙繪畫なども趣味は有りましよと思ひます（秋田縣仙北郡金澤町すみれ會）

○俳句御好みの方に　誌友の姉樣私は此の北の端に淋しく女子文壇を友として居る不束な者ですがどうぞ俳句お好の御方は御交換をして下さいませんか尙ほ玉章繪葉書の御交換も御願ひ致します（北海道根室郡和田村三〇三番地平田富美子）

○髮の結方　流行の髮の結び方御存知の方は御敎へ下さい（北海道虻田區辨邊村下山衆、石井露草）

○韓國より　初めてゞ不束な田舍娘ですが妾は本誌を四年間も愛讀して居るけれど、御交際を願ふのは今度初めてよ、妾は幼少の折實母に先き立たれ家事の都合によつて此の年の一月に渡韓いたし今は父と繼母と弟の三人……語るに友なき異鄕の地に淋しく暮して居るものでございます、願くは御情け深き御姉様方と永久變ろ事なく姉妹として御交際を願ひとふございます（韓國忠淸北道淸州府城内淸州分監宿舍大坪あき子）

○御斷り　誌上の御姉様がた御變りはございませんかあの北海道の長尾トヨ子様下谷車坂の江渡露華様神田淡路町の杉浦かず様赤坂榎坂町の稻宮倭子様信州鷹匠町の佐藤幸子様岡山市富田町矢木武子様大阪の東八穗さま右の御方御玉章難有うございました御返事差上るのでございますが私は兩親に去られ幼き妹と伯父上の世話になり毎日生花と裁縫のみ通ふ不幸者故みなさまから御手紙いたゞいても御返事差上る事がかなわないのでございますからどうぞあしからず以後は此の誌上で永久に御交り下されませお願ひ申ますわみなさま御身御大切に遊せよさらば（淺草、鵜田ちか子十六才）

○手紙と寫眞　皆様私に御手紙下さいな私もきつと御返事差上げますわ先着五名の御方には私の寫眞を送りますかられきつとよ（大分縣大分町峠甲翠辰江）

○忘れな草　誌友御兄姉様の内にて「忘れな草」御存じなればどうぞ葉書へ寫してお送り遊ばして頂戴、屹度お禮致します。（陸前國宮城郡七北田村上谷刈、萱場爾晉子）

○轉居　妾先月十五日便宜の爲め下記の場所へ轉居致しました、皆様に一々御挨拶申すべきが本意で御座いますが御不禮乍ら誌上にてお報知致します、何卒相變らず御玉章を下さいませ尙ほ又御近所の御方は誰も遠慮する人は居ませんから何卒お遊びに被居いませ（名古屋中區西洲崎町七六番戸寺澤方宮田和子）

○北海の果より　御懷かしき御姉上樣方よ私は北海の果の濱邊に住む淺學者ですが御心ある皆様は繪葉書玉章編物寫眞の交換を願ひます男子の方にても本誌愛讀者で淸き方なれば願ひます（北海道後志國磯谷郡島古丹參番地長尾登代子）

○誌友談話會　四月一日當地豐後倶樂部で女子文壇誌友談話會を開きます、皆様御出席を願ひます、會費十錢當日御持參をねがひます（豐後竹田町小泉君子、廣瀨芳子）

○七人　京都の宮原みどり子様、妾あなたを懷かしくてなりませんわ、御所を知らせて頂戴貴女れ、妾御存じでせう。其の他、みな樣に御願いたします。妾の方で友達が七人集まりまして、短歌等の研究をして居ります。みなさんの中で、詩、短歌、俳句等に、趣味を御持ちの方は、投稿して下さいまし。一册の廻覽雜誌として御廻送いたしますかられ。女子文壇、女學世界、少女世界其外多くの古雜誌がありますから新聲、秀才文壇、スペル等と。又小說等も二月と三月とに申上げました外にまだ多くありますから御交換なり、御換讀なりして下さいまし。エハガキ、寫眞、編物等も。（近江神崎郡御園村今田、志賀小なみ子）

○姉妹二人　毎日姉は裁縫妾は學校に通つて居りますが雨の降る晩などは淋しくございますから大きな聲で唱歌を歌ひつゝ編物をして居りますから拙手なのですが澤山ありますから寫眞御玉章下されし御方へは早速送りますわ（山城國乙訓郡久瀨村大橋榮太郎樣方八重子はる子）

○廻狀贊成　忘れな草様よ私も大いに贊成して被下よ不束な者なれども御仲間に入れさして被下な友達にも澤山ありますよ（山城國乙訓郡下久世四十九番地永岡勢伊子）

○俳句同好の方に　文壇御愛讀の姉上様よ妾事は初めて御伺ひ致します、皆様何とぞ御交際を願ひます又俳句同好の方は繪ハガキに二三句位書いて御送り下さい妾も直ぐ御返致します。（下關市西細江町梶田様方松山瀧子）

○初めて　御なつかしき誌友の御姉様方妾は本誌を愛讀すること三ヶ年なれど御交際を願ふのは今度が初めてヨ何卒妹と思召し御玉章なり繪はがきなりを御惠み下さい必ず〳〵御返事は致しますしてネ妾の所は米澤織の名産地ですヨ（羽前國米澤局區内鹽野、佐藤いそ子）

○樂しみに　誌上の姉上様私は美しい繪はがきや寫眞を持てたのしう暮して居ります姉上様の中でゑはがきや御手紙の交換を御のぞみの御方はどうぞ宜しうれがひます男の御方でも氣のよい方はかまいませむ（京都東中筋魚ノ棚上ル今井方川田エツ子）

○おわび　誌友の皆様いろ〳〵とお手紙を頂きましてまことにありがとう存じます早速御返事申上げなければならないのでございますが病人がございまして大好な女子文壇に投書かくひまもなくやつと人にたのんで二つばかり外の雜誌にのせましたが女子文壇は是非と存じまして居りますうちとう〳〵締切り日となつてどうにも出來なくなりましたそれ故皆様への返事もまださし上げる事が出來ませんどうぞおゆるし下さい（牛込佐内坂町平塚白百合）

○裁縫に通學中　なつかしき諸孃よ妾は女子文壇の愛讀者の一人です只今ある裁縫女學館に通學して居る者です、何卒誌友として親密なる清き美しき御交際を御願致します、そして眞の御姉様の様に御交際をして下さる御方は一時的でなく、ごくやさしくて教導的に永く御情のこもつた御文通がいたしたいのです何にとぞ此を御らんの方は玉章下さいおまち申て申ります、忘れな草様三月の誌友倶樂部拜見いたしましたほんとに廻狀は大さんせいよどうぞくわしき御手紙下さいませそして廻狀の友として下さい（福岡市魚の町十九、井上なつ子）

○淋しい境遇　誌友の諸姉様よ私は一昨年十二月に父に死にわかれうらつゞく不幸にも又昨年の二月に母が亡くなり其後は淋しく〳〵日を送つて居りますどうぞ皆様いつまでも變らぬ御交際を願ひます（京都市油小路御池下ル、三宅壽賀子）

○俳句狂　私は非常に俳句が好きて俳句の事なればまるて狂氣の樣です皆樣一句ても宜しう御座いますから御送り下さい御禮として當地名所繪集書一組御送り致しますて又レターの御交換を御願いたします但し男子の御方は固く御ことはり申します（熊本縣鹿本郡山鹿町本田孝太郎方、香村雪枝子）

○頼りない身の上　諸姉樣方私は幼き折り母に別れて父と祖母に育てられました祖母に別れて姉妹もなく淋しき月日を送るものです元より教育とてもなき身てすから皆樣と御交際など出來得るものではありませんがなにとぞ情ある諸姉樣方よ御交際くだされ度願ひ上げます（淺草區山之宿町五十一番地　藤井波津子）

○形紙　皆樣の內にて袋物の形紙御入用の御方は御知らせ下さいまし伺手風琴、ハモニカ御不用の方は雜誌舶來繪葉書リボンシチリ、等と御交換を願ひます（長崎市玉江町吉川愛子）

○暫くのおん別れ　私は或る事情の爲め暫く本誌を愛讀する事を父母に止められましたあゝ朝夕淋しき心をなぐさめ導いてくれた本誌及び皆樣に三月ぎりて御別れ致す事かと思ひますと實に悲しう御ざいますあゝ其は受驗の爲でございます成功の曉は又皆樣と共に白髮になるまで愛讀致します私は教育學や心理學等にあきた時いつもなぐさめはげましてくれましたこの本誌の日に月に榮へ行くを陰ながら祈つて居ります私も三月十五日からは嚥き家庭の人となつて居りますさらば皆樣よ（新潟縣中蒲原郡白井校內、若井みよの）

○姿の寫眞　皆樣の內でシホリ、ハンカチーフ寫眞お持の方は送つて頂戴なお禮には妾の寫眞に繪葉書を送ります（吳市八萬上町一二九安部方　楠木政子）

○洋畫が好き　親愛なる誌友の諸孃樣妾は洋畫が一番好みます私の內はリボンの商法でリボンの事、は澤山ございます愛讀者の御姉上樣中に繪はがき玉章寫眞洋畫肉筆何に限らず御惠の御方には妾も見苦しい寫眞、洋畫の肉筆、リボン種々差上ます一時的の交際男子の御方は御斷り申します（大阪市南區鍛谷東六町三七、岩本

伯方田中榮子)

○特別に　誌上の御姉上様方の内東京の江戸橋郵便局へお務の方に御交際を願ひます他の方も何卒御交際を願ひます(信濃上田鷹匠町佐藤孝子)

○寫眞を以て　京都にたゞ一人淋しう暮らしてゐる妾に、眞の姉様の如く眞の兄様の如くお交り下さる方がございましたら、私も心のうちをお話し申して、ともに末ながくお交りしませうどうかお手紙ください(京都市問屋町出水下ル、宮原様方、妻木はな子)

○俳句　妾は俳句が飯より好きと云ふ女ですどうか俳句の交換を願ひます又諸姉様と御寫眞の交換も願ひたい(名古屋市西區東萬町三、瀧本里子)

○お優しい　諸姉様の淸き御交りを切に御祈りいたします、異性の御方様は失禮ながら御許し下され度候(伊勢河藝郡白塚村下村靜代子)

○寫眞あり　不束な者て御座いますけれど御玉章下さいませ御返事はきつといたしますそれから妾思ひきつて數十葉寫眞しましたから御交換下さいませ見ぐるしけれど笑ひ下さらずに可愛いがつて下さいませ(大分縣大分郡戸次村首藤たみ子)

○心當りの方は　私長年の愛讀者に候が去る廿日午前十一時三十分成田行列車三等室内へ極細度の近眼鏡(金プチ細ワク)置忘れ千葉驛にて下車後直に心付早速問合せしも見當らず誠に不自由致し居り候萬一御拾得の御方も候はゞ甚だ御手數ながら下名迄御届け被下度相當御禮申上べく餘白をかりて御願申上候(深川區越中島町貳番地村林方島田信子)

○廻狀贊成　皆々様何うか玉章及繪はがきの交換をお願ひ致します、それから三月號て忘れな草様の御希望の廻狀妾しも望むところてすから何うかお仲間入りをして頂戴な(京都府天田郡福知山町字職人町加藤安次郎様方田村米子)

○御禮と御願　誌友の姉君様よまいど御なつかしき御レター誠に有りが度う存じます妾永々病氣にて筆もつ事をきんじて居りましたので皆様の中にて御返事おくらし申した御方が御ざいましたなら御ゆるし遊して頂戴ないづれおあとからさし上げ申します何とぞあしからずあの姉君様方ハーモニカ又はひじつき等御不用の御方がございましたら御讓り下さいませ小説もよいのです御禮かならず致します(東京深川東元町一番地鈴木美喜子)、

○明石より　諸姉様私は浪音靜な明石の浦に住む一少女です御交際を願ひます、又あの忘な草様の御説私贊成致しますぜひ御仲間に入れて頂戴(兵庫縣明石町タルヤ町立田益)

○自作の歌　自作和歌の交換は最も好むところて御座います皆様如何ですか(新潟縣立長岡高等女學校寄宿舍内、牧野秀乃)

○朝顔の種子送る　誌友の皆様から書籍又は繪葉書、編物等と朝顔種子と交換して下さるや否やとの御尋ね狀がドシ〳〵參りますが、何分限りなき皆様へ洩れなく御答へも致し兼ますから改めて左に御答へ申上ます、朝顔の種子が御入用なれば(一々御照會下さるに及ばず)女子用の書籍、雜誌或は繪葉書(五枚以上)、編物等何にても宜しい、唯だ御送り下されば私はどなた様に拘らず直に朝顔種子百種交りを御送り致します(大阪市南區天王寺大道三丁目松澤豐子)

○土浦の御方に　私吉野や裁縫所に居ります御出て下さいお目にかゝります御手紙の御交際も、土浦近くのお方に願ます(内西町酒井方吉田李都子)

○移轉　皆々様御障りも御座なく候哉御伺ひ申上候私事今まで金澤市に在住致し居り候ところ都合により三月十五日より他に移轉仕り候間左様御承知被下度候なほ現住所は未だしかと定まり申さず候につき定まり次第御知らせ申上ぐべく候間相かわらず御交際の程願上候(後藤芳子)

○朝顔種子求む　誌友の皆様へ(男子の方へも)お願ひ致します、朝顔種子、おもちのお方が有りましたら何とぞ御めぐみ下さいまし(越後南蒲原郡中野村、岩本芳子)

右の外新たに交際希望の方は左の通りてす

○北海道空知郡歌志内市街地角館方　伊藤公子
○靜岡縣駿東郡沼津宮町金子方　山内彌生
○埼玉縣北足立郡片柳村　吉田一花
○愛媛縣伊豫郡上灘村　江口美都子
○福島縣耶麻郡鹽川町鈴木よつ子　鈴木さい子
○能登中居局區内　瀧井禮子
○廣島縣御調郡吉和村下福地一一六　國近みどり
○大分縣竹田町山川六九〇　廣瀨芳子

○岐阜縣郡上郡八幡町松山方　松山　綾子
○本郷區湯島天神町三ノ二早川方　水谷　義子
○石川縣鳳至郡七浦村皆月二三四　中村きく子
○福島縣耶麻郡鹽川町　大堀きん子
○石狩夕張炭山斜坂上一一〇號　五十嵐しげ子
○同九五號　村木　富子
○肥後高戸局區内二間戸　松崎　澄子
○京都市下長者町土屋町東入　松尾　露子
○福岡縣朝倉郡原局區内　荒川たか子
○宮城縣柴田郡金ケ瀨村　佐藤　芳子
○岩代北會津郡館ノ内村宮袋甲　大竹ちきの
○福井縣坂井郡栗村石橋　宇佐美貞子
○大分縣大分町　山本　春子

繪葉書を好む

敬愛する本誌愛讀者諸賢にしてもし米國の繪葉がき御望みなれば必ず郵券四錢を封じて左記まで一葉送られよ私は何時にても喜んで返信す(B. S. Suttow 1913 Larimer St, DENVER, COLO. U. S. A.)○誌友の皆樣の中福島の方に飯盛山白虎隊の墓會津若松百景、仙臺の方に千代萩政岡の墓林子平芭蕉が辻其他の名勝繪はがき東北地方の日本戰蹟及び名勝繪はがきと常陸戰蹟水戸名勝藤田東湖先生の遺墨繪はがき及栞等をお交換下さいませんか（茨城縣水戸市上市柳小路一番地遠藤方爾佐木たけ子）○俳句同好の御方樂はしき繪葉書に俳句一句御記しくださつて御交換を願ひます（大利根尾局區内竹内伊瀨筏舟子）　繪葉書やあみ物の交換をして下さいませ交際なし下さつたお方には自筆の繪葉書自製の栞を以て御返し致します（東濃加茂郡和知村下牧野日置桃花）○繪葉書の交換が唯一の樂しみです毎日郵便の來るのばかり待つてゐます何うぞ送つて下さい（栃木縣足利町、柳田秋月子）○繪葉書を送つて下さい、岡山名所を送ります（岡山縣久米郡龍山村、鷲尾高子）○感ずる處ありて各地の不殘繪葉書を集めたいと思ひます何うか皆さま送つて下さい私からは淡路島の繪葉書でお返し致します（淡路高等女學校寄宿舍内、西浦せう）○私は老婆と二人切りで淋しく日を過して居るものです御姉樣方に繪葉書の交換をねがひます（京都市室町通萬壽寺下ル、杉山千賀子）○何うぞ繪葉書の御交換を願ひます（京都醒井通松原下ル山崎貫次郎樣方、神谷八重）○仝上（京都室町五條上ル杉山作次郎内、神田松子）

個人消息

○常陸の黑澤とよ子さんへ。あなたは三年前まで水戸高等女學校に御出でになつた久慈郡の黑澤さんではありませんか。どうぞ御交際を願ひます。若し違つたら御免遊ばせ。尙誌友の皆々樣よろしく（茨城縣西茨城郡西那珂村川和田初子）○一月號で衛生問答の欄にて拜見致しましたが雪月花樣心細年樣よ妾もあなた樣と同じてありますのよ色々お話致したいので御座いますから御手紙下さいなすぐ御返事上げますわ（小石川區丸山十七賀川方貝田サノ子）○茨城の黑田眞弓樣先日はレター有難う存じました文壇の誌上でいつもかわりなく御交り下さいまし柳水の里の千艸樣はどなたでしようか幾ら妾が考へてもわかりませんのはて誰方かしら（麻布の蘆久子）○尾島千代子樣に　あなたはたしか菊子樣の御令妹でございませう、かれて御芳名は伺つて居りましたはからずも御うつしえを拜見いたしましてどんなにうれしうございましたらう只今は麴町の電燈會社え御つとめてございますつてね、私知人から聞きましたの、何ですか御なつかしくつて……ふつつかなものですが御交りを（野の花）○諸姉樣の内に播摩サ、舟樣の御住所御存じの方は御しらせ下さいませ兵庫田淵祥子さまもし、貴孃は赤穗町の方ではありませんかちがひましたら御許し遊ばせ（大阪、八穗子）　京都二條平塚玉枝樣。お寫眞に絹ハンカチーフを添てお送りくださいまして。有難く頂戴致しましたて。妾も何か返禮致したき。思ひてありますから。女學校住所くわしく。お知らせ下さいまし。尙諸方の姉上樣方。何卒不束者ですが。溶い〱、御交際お願よ。お玉章下さいれ屹度御返じはいたしますわ。（三重縣河藝郡神戶町、森井房江）○大分の原田澪子樣仰せの通り私は熊本で御座います以後宜敷（熊本とよ子）○平塚白百合樣お懐う御座いますわ、かれん〱女學世界誌上て御芳名を拜見致し御才華の程筑波ふもとの草がくれより、しかすがにお慕ひ申て居ますのよ。（常陸國北條町鈴木花子）○京都のすみ子樣其後はいかゞなさいました、毎月美しい御作を拜見致しましてかげながら御無事なのを御喜び申してますけど、あゝ一年、暖い妾の國はもう梅も散り初めて桃の蕾がふくらむできました、あゝ去年の梅咲く頃は……。あゝ妾は、此一年間の時が日が月が恨めしくなりましたの、でも

二人の姉妹の仲をさいたのは何？何の力!?。あのれあの青い月を見る度に妾は「青白い月光を浴びてあなたを思ふ」。て仰言つたなつかしい御聲を思ひ出しますの、あゝ、あゝすみ子樣 月が月が傾く西の國の友をお思出し下さいますか妾はねどうしても、どうしても夢にのみみる西の都のなつかしいすみ樣は忘られませんわ、此三月は御卒業でせう妾もれ。どうかとこしへに誌上の花と歌はれて下さいまし、さよなら（土佐あざみ咲く里にてよし子）

記者と讀者

島貫琴子。兵庫縣、三宅房子。仙臺市、鎌倉ちよ子。信濃、紅ゆり。會津、桑原ぜん子。加來百代、茨城、土井なおい。古賀花子。名古屋、宮田和子。大阪、春の日。みどり。大阪、紫ぐさ。大和、西辻阿美。京都市、末廣落子。群馬縣、彌生。長岡市、小原光子。豐後、古葉君子地方にて一愛讀者。伊豫、美津子。岡山縣、芳子。丸山榮枝子。妙香。南千住、堀よし子。以上の諸孃から初めて投稿するに就いての御挨拶投稿規則のお尋ね、寫眞を送ることに就いての問合せなど參りましたが、皆さん。仰せの通りて結構ですから、格別異存を申上る必要もないと思ひます、芳名を掲げて一讀の證といたして置きます（記者）

短評

若き婦人　若き婦人はもう其名を聞いただけでわけもなく若き子の小い胸の血潮は喜びに高鳴ります、あゝそれを手にした時の喜びは：幾何の日課にゼロを頂いて少しく意氣銷沈てな姿だつた、私もほんとにとび上りました、袴も取らないで机の前にどつかと座したまゝ。とても批評なんてまあ飛んでもないまだ赤ンぼのくせ、でも幼い者と思召して駄評御ゆるしなすつて!?表紙―大好な夢二式の振ひ附きたい樣な瞳、妾情に富んだあこがれてる樣な瞳！すッかり氣に入つてしまいました、是なら何處に出しても鼻高く。口繪―早春は そんなにもありませんでした、花冠では石渡敬子樣が一番好き活潑なスタイル級友のゆく〳〵への作者と誰だつてうなづくでせう御年は十八？十九？十八？だといゝけれどだつて私も八になつたばかりですから、鈴木春子樣は想像にはづれました もつと小いやせた方と思つてましたので御年は二十!?違ひまして、華水樣は餘程飄きんな方と想つてましたのにおとなしい姉樣ぶつた方ですわね、ホヽヽヽこれは失敬。花環に「此一册を現代の若き婦人に薦む」ジッと眺めて思はず會心の笑を洩しました二十の聲――好き、好きほんとに二十の女の心からの聲！叫び!!しつくりと重みのある聲、私はたゞ繰りかへして悲哀の感に打れました。時代に覺まされたる一人――覺めたる姿の二十の煩悶、尋常の時先生のみ神の影にかくれてたわむれたといふ先生の元に手紙を書いて、あゝ何てなつかしい御心でせう、眞似事ではない痛切なる感じ、私はくりかへして淡い哀愁を覺えました。ひとりごと――お孃樣幸福なるお孃樣と思ひます。成るは嫁なり思ふは成らず――何てか私の將來（と申すと可笑しうございますけど）もこんなになりやしないかと思はれて仕方がありません、妾は今は自由を束縛され切つてる身ですけれど御同情致します、でも男子てこんな方ばかりではありませんわ、ではないでせうか級友の行方――筆の自由な活々してらつしやいますわね、夜の淺草公園、こう何處となく超然とした御筆使、神秘的なそして其中に、讃んで何物かぶつくらとした暖い物の胸にふるゝを覺ゆる、そして人に模倣をゆるさぬといつたやうなきまつた御筆、私は幾度も〳〵繰り返して春子樣は私共よりは幾段も〳〵上を歩んで居られる方の樣に思はれました、デヤレストほんとに可愛らしいヘビーさん!!!。お才さん――さすがは早蕨樣の健實な御筆、私豫告をみて一番待つたのは此お才さんでした、もう少し高ちやんに母樣（お才さん）奥の兄ちやん（夜雨先生）の事が伺ひたかつたけれど。和歌は山村樣のが一番好き「形よく髮の結へたる」といふやふなお作の中に御得意の點が仄見えやせんかと思はれます、若い女――「私は若い女です」何處となく好きです、破りし柵――何だか目茶苦茶、一も破壞、二も破壞けれど、新しい若い強い。小説では優梨樣のまゝ母短くて好きです。皆樣御免あそばせ澤山惡まれ口きゝましたわね、どうか此一册の若い新しい聲を永く葬らないやうにして下さいまし（土佐、寂靜子）

△增刊「若き婦人」をしらべて、私は思ひました我等若き婦人の心の底深くにはある通有の煩悶か悲哀がはつきりといふ事はできません何か

若き愛ひといつたやうなものを持つて居るのだとそして若き婦人をよんであゝこのやうな思ひを抱いて居る者は一人ではなかつたとうれしいやうな感が致しました。

△三月號の繪、若き自然此度のも又大變すきてすある方の靈魂不滅論はおもしろいお說でございますれ然れども私はうなづく事ができませんでした。私の考をのべかけたら長くなりますからをきませう。○同情と題した文章に對して私の考を申したく存じますもし私が悲しんで居つた時私はあたまからお泣きなさるなといはれるよりも同情して共に泣いてもらつた、方がうれしいてす然しそれが僞りの涙ならばいやてすが、笑つて慰めてもらうより共に泣いてもらつた方がどれだけ情でせう、悲しい時はあくまでなくがよろしい然しそれも人々によつて思ひも異ふでせうが（千夜子）

○表紙、青春の氣が溢れてゐる好きな表紙、口繪、若き自然は大好きよ、珍重せらたる日本服惡くはないが兎角洋婦人は洋裝に限る、誌友も皆好きな方だわ、松崎澄子樣は妾の理想の人、本欄、小さな疵、面白くよみました、幼時小學時代よく書かれてある、男女のあらそいから先生が殘して『皆さん晝の時間に、女生徒に對して：　男生が女生徒をいぢめるなんて：　窓は出口じや無いでしやう』まではほんとに胸が下りました。女性の詩と虛榮心、女子は虛榮心の塊だと冷評する人から云われましたがそんなでしやうか皆樣、西洋婦人の短所と日本婦人の長所、ほんとにそうですわ、一特一失短所あり長所ありてすれ。おや〳〵おしやべりお許し遊ばせよ。（福岡縣たか子）

○本誌三月號批評——。天賞ばかり、短文（天）雪の降る日。（平塚白百合子樣）。私は此のお方の作を四五年前から拜見して居ります、女學世界の和歌に每月投書遊ばす、此のお方は詩、短文の方がお得意です、餘り長い作は拜見しません筆致は中々達者です。俳句（天）佐久間樣、私は、一たびきゝたる心地が致します。俳句にも鳴雪先生の短評を付けて頂きたいと思つて居ります、皆さんも同感でせう。

（書簡文）（天）靜江樣、何んと云ふ美しい文でせう。まるで手に取る樣、知らない所まで、あり〳〵と眼の前に浮かんで來る樣です。終りの一節「郵便局のあると聞くのが何よりの樂しみ：：」私も知らぬ、田舍の淋しい所へ旅行しました時、この田舍に、ポスト、が無かつた事を思ひ出しました、友へ通信するにも、せられぬかと思ひますと情なくなりますものです。とにかく立派な筆致を持つて居られるお方です。論文（天）「今の女」を讀む、井上年子樣、此のお方には何をかゝしても中々佳いものばかりです此の作は何處へ出しても立派な者であらう、と私がおせぢを申しましても敢て、無理ではなかろうと存じます、日記文（天）つゆ草樣、私は是れを讀みまして急に厭になつて了いました、厭：：何であろう。皆さんも御承知の通り女の着物を着て人をだます、男子の綽名：：おわかりになりましたか。和歌（天）こがらし樣、是れは船に乘つて航海したお方でないと分らないかも知れません。私は十八才の春、北海へ渡りました事があります、今又是の歌を見まして、私は種々昔の事を考へました。而し佳い歌であると思ひます、（千尋底遠き海ぞと胸のときめくわれは：：」何んと云ふ言ひまはしのいゝ歌でせう、小說町の娘、月靈子樣、正と田中の二人の會話は中々うまく書けました、而し選者の眞似ではありませんが、お高の心を今少し、明細に書いて頂きたかつた、（町の娘）とするより私ならば（苦しき胸）と題します、是れは申すぎまして御免遊ばせ。

特別欄、廢濠——（澤村胡夷樣）昨年京都大學をお卒業遊ばしたお方、私と同國同町のお方です、江州彥根の中學校へお通ひの姿があり〳〵と見えます。黑のコクラ洋服に一本筋の白い筋の入つた帽子私は常にお見かけ申しました今は何處にお出てゝすかお所を承りたいものてす永々と失禮しました。以上（H、T子）

持つてゐる書物　讀みたい書物

○歌集希望　皆樣の御內に、若山牧水氏著歌集海の聲、與謝野晶子氏著佐保姬、御不用の方は何卒至急御ゆずり下さいませんか。下名まで御一報下さいまし。御打ち合せの上御禮を致します（群馬縣高崎市田町一〇二、淸水貞子）

○太閤榮華物語　四五年以前報知新聞紙上に載せられました小說「太閤榮華物語」の切ぬき全部御持の方はおゆづり下さいませんか御禮には左記の書物の中何れなりとも御指定の物を御送りいたします尤も物語中小々は（四五回）ぬけて

居りましてもかまひません挿畫はこと〳〵くあるものを望みます、ユブシ(上中下)乳姉妹(前後)青春(春夏秋)横戀慕、にせ紫(前後)女系圖(前後)樗牛全集(三五)緣不緣、不如歸、ハムレット、ほとゝぎすの歌、ヴァイオリン樂譜(元祿花見おどり熊野奈須野其外澤山)東京本所區森河町壹番地天神山方、萩花子)

○詩集句集　皆樣の內で晶子さんの佐保姫、常夏、明治詩集、お持ちの方は私の最新二萬句新體詩作法、紅綠さんの俳句の作法、歳事記例句選、子規句集、明治俳家句集、三聖俳句選、俳句小史、文法正誤法、晶子選白光、うつぼさんのまひる野、鳴雪先生の俳話と評釋、ハイネの詩、などありますから其內お氣に召したのと交換して下さい(兵庫西宮町杉山春翠)

○福翁　私の手許に名家愛吟集、福翁訓話、不如歸筆子其の他種々の書籍がありますが皆さんの內、肉彈、福翁自傳、福翁百話等御持ちの方は交換して下さいませんか、どうぞ御願申します、(東京、本郷區弓町二ノ二五片倉方加藤眞佐)

○樂譜　み情厚き、諸姉樣の中に左記のオルガン樂譜を、御存じの方がお有りになりましたなら、何卒御知らせ下さいまし、折入つて御願ひ致します決して、やましい事は致しませぬ若し御厚意の御有り遊ばす御方は御手數ながら端書にて、御一報下さいまし。「鶴の巣籠」「根引岩」「ラーゴ」「見よ勝ちし勇士來る」「告別マーチ」以上(越後國乙局區內井上貞子)

○一月の本誌　私は二月から愛讀者の一人になりましたから一月の本誌がありません、非常に殘念でなりません、もし皆樣の中お不用なお方がありましたらお惠み下さいませ、不出來ですが手製の編物で御禮します、(北海道札幌郡篠路兵村一安達けい子)

○編物の栞　誌友の姉樣の中で編物栞お持ちの方は送つて頂戴れ私が少女世界、少女界少女の友少女などを一冊御送りしますから何とぞ御送り下さいよ又たんとお送り下さいますならば幾冊もあげますわ又繪葉書も御送り下されば雜誌お送りします(岡山市富田町二十四番地矢木武子)

○若き婦人　諸姉上樣の御許には第一增刊若き婦人御不用の御方樣はなにとぞ御惠み下さいませめてしよか御禮にはきつと畫ハガキ又は婦人世界どちらなりとも御送り致しますからなにとぞ御願ひ致します姉上樣御ひまには御玉章の御交換も御願ひ致します(大阪市北區西野田十六町、桝屋きく子)

○女子書類　御姉樣方の內に三木とみ子著編物指南及び禮式御ゆづり下さる方がありましたら少女簡用丼に女子文壇增刊の新作家とをお送り致しますからめぐみ下さいなおたのみ申上げます(京都府紀伊郡鳥羽、田中方、井上こう)

○私の手許に婦人くらぶ、ムラサキ、女學世界衛生新報等たくさんありますからおのぞみのお方は御手紙下さい又皆樣のうちに思ひ出の記、ハイカラ令孃、己が罪、伯爵夫人、夏子、等の小說がありましたらぜひおかし下さいまし御禮はきつといたします(東京府下西多摩郡羽村、粕岡縫子)

○諸孃樣のお手許に衣裳かゞみ、美容のしほり、三月の女學世界、婦人倶樂部、婦女界若き婦人、女禮式お持ちのお方は何卒左記の本と御交換下さいませ、女子文壇、女學世界婦人世界、婦人畫報、婦人倶樂部、ハガキ文學文藝倶樂部、新小說、無名通信、サンデー家庭日記、新作家、記念號、秀才文壇、こゝろの秘密、嫁に行く人、都會生活、婦人の仕事東京婦人風俗、皇族畫報、女學校畫報、花の姿　結婚の卷、食物かゞみ、化粧かゞみ、樂しき婦人、婦人の慰藉、太陽　家庭、其の外澤山あります、伺ひじつき、しなり　編物、繪葉書の交換を御願ひ申ます(秋田縣山本郡、淺內村野呂川とみ子)

○書籍の交換を望みます　大國民殘紅蝶などと樗牛全集(三か五か)花つみ日記草枕靑春の卷眞田幸村などゝ換へて下さる方はありませぬかまた紀行文遊俠傳も不用ですから晶子氏の歌集と換へて下さる方はありませぬか願ひます(愛知縣渥美郡老津村彥坂のぶえ)

○失禮ながら皆樣の中で少女又は姉妹御不用の方は下名まで御送り下さい先着二十名册數に應じて御禮申ます(山形縣北村山郡東根町、栗林たか)

○誌友の皆樣私の手許に婦人世界數十册と女學世界少女の友實業之日本數册と英語會話練習書二册と御服初步一册と御座ひます故皆樣の中で小野先生にても岡田先生のにても宜しき故女子手紙の文と云ふ本がありますたら御交換願ひます女服初步と申ますのは白木屋などの女店員がよくおつかひなさるものです(沼津新町金子千代世)

開書

女子文壇誌友會の案内

本誌を愛讀遊ばす皆樣方にお知らせ申します此度ふつゝかながら私共が發起いたしまして女子文壇誌友會を開くことになりました、勿論編輯局の御賛成を得ていろ／＼後援をして頂きます。本誌の誌友會を開くのは初めてございますから、樣子が分りませんけれど、本誌に寄稿なさる方、愛讀なさる方の中には屹度一度集つてみたいと思召す方も多からうと存じまして、愈よ開いてみることに決めたのでございます。格別の設けとては致しませんけれど、時は春のなかば、山王の櫻も盛りでせうから、半日をお遊びになるつもりで、御出席をお待ち申して居ります、なほ委細は左の記事を御覽ねがひます。

▲時　日

四月十日正午半開會（晴雨不拘）

但し閉會は午後五時半

▲場　所

星ヶ丘茶寮（山王社畔）

電車は青山線ならば赤阪見附上にて降り學習院女學部前の坂を下りて一筋道約五丁、外濠線ならば山王下にて降り約三丁

▲會　費

金五拾錢

會費は當日御持參の上、出席者の御姓名（住所とも）と共に受附にお渡し下さい

▲出　席

出席は女子の方に限ります、係員の外男子の入場は一切御斷申上ます

▲來　賓

當日婦人の來賓として御出席の承諾を與へられた方は左の通りでございます。

三宅博士夫人
大塚博士夫人
森　博士夫人
與謝野夫人
岡田夫人

なほ主筆河井醉茗氏は勿論本誌に關係ある内藤鳴雪翁、水野葉舟氏、横瀨夜雨氏、溝口白羊氏の諸氏も出席いたされます、右何れも席上談話をお願ひしてございます。

▲餘　興

創作朗讀、對話、箏、洋樂、琵琶、仕舞、蓄音器、福引等其他

▲申　込

出席希望の方は四月七日までに府下青山原宿百八十番地河井醉茗方女子文壇誌友會幹事宛にハガキで御申込下さい。

但し便宜上、電話で出席御申込みの節は本局六〇七番女子文壇社編輯局に御通話下さいましても宜しうございます。

明治四十三年四月一日

發起者（幹事）

池田君子　早川花子
長曾我部菊子　小川せん子
加藤筆子　山田邦枝子
八代八重子　町田靜江
江森美子　朝井千とせ
佐藤萬壽子　三宅つれ子
平塚白百合

敬白

雜報

各種の婦人會

目下東京に於ける各種の婦人會中、主なる團體と其事業、幹部等の一般を擧げると左の通りである。

愛國婦人會　是は最も世に知られてゐる婦人團体て、全國に會員を有すること實に七十八萬二千七百三十人の多きに及んでゐる、總裁は閑院宮妃殿下、會長は岡部子爵夫人、副會長阿部伯爵夫人、其外名譽會員、理事、監事、評議員などに多數の貴婦人が加はつてゐる、戰時には活動する會て、不斷にも廢兵院、教養所などを設けて、愛國的事業を爲してゐる。

戊申婦人倶樂部　昨年十一月に出來た最も新しい團體です、會長は二條公爵夫人、副會長は秋元子爵夫人て、鳩山、嘉悅、宇山、仁尾などの夫人達が中心になつてゐる、毎月一回集合して、名家の講話を聽いたり、お話をしたりする會費は一ヶ月二十錢、學生は五錢、女學生の入會者が多いさうだ。

大日本婦人教育會　此會は最も古い、今は永田町に婦人會舘を設けて會場に宛て丶居る、隔月に機關雜誌を發行してゐる、會長は毛利公爵母堂、副會長は鍋島侯爵夫人、常務幹事は三輪田、山脇、門野、岸の四女史、毎月一回常集會を開き、毎年一回大會を開く。

大日本婦人衛生會　此會も創立はなかく古い、目下全國に二千の會員を有し、毎月一回「婦人衛生雜誌」を發刊してゐる、講話會も毎月一回開いてゐる、通常會費は一ヶ月十五錢、主として副會長の濱尾男爵夫人が力を盡してゐる。

帝國婦人協會　主として下田歌子女史の經營に成る團體て、實踐女學校とは密接の關係がある、『日本婦人』と云ふ雜誌を毎月發行し、講話會は隔月に開かれる、目下會員約千四百名を有してゐる。

篤志看護婦人會　日本赤十字社に附屬した最も大きな團体て、約一萬二千の會員がある、會長は鍋島侯爵夫人、副會長は毛利公爵母堂、阿部東京府知事夫人、此會も愛國婦人會と對立して戰時には最も敏活に後援をする、平素は毎月一回赤十字社病院に集りて、繃帶の稽古や、救護に關する講話を聞くことになつてゐる。

大日本東洋婦人會　清藤秋子女史の主として力を注いでゐる會て、清國女教員養成を主な事業としてゐる、既に十餘名は派遣されて、功果を擧げてゐる。

陸海軍將校婦人會　名の如く陸海軍將校の夫人達の創設された會て、事業としては附屬教養所がある、將校の遺子を集めて教育を施してゐる。其他毎年四月の總集、毎月の例會、雜誌發行等をしてゐる、會長は大山元帥夫人て、東京に本部を置き、全國衛戍地六十二ヶ所に支部が置かれ、會員は六千二百名を有す。

日本基督教婦人矯風會　矢島楫子女史が獨力て興された團體である、吾邦に於ける最も大きな基督教の婦人團体て、會の目的は社會の風教を改善するに在つて、全國に七十二ヶ所の支部を有し、毎月雜誌「婦人新報」を發刊してゐる、別に慈愛舘と云ふのを設けて、愍むべき婦人を收容してゐる。

手藝慈善會　會員七十餘名と云ふ小さな會てす、毎月婦人達が參集して編物其他手藝を爲し慈善市を開いて其利益を慈善事業に寄附するのである、場所は麴町の聖マリア舘。

櫻會　赤坂區の婦人會て、區内の貧民救助や軍人遺族救護に勤めてゐる。

福田會惠愛部　伏見文秀女王殿下を總裁に頂いてゐる佛教的の婦人團體て、會の事業は凡て頼る處の無い孤兒を養育するのが目的て、目下此福田會育兒院には百二十四名の在院者がある。

西洋 婦人新聞

▲媚術　露骨に云へば媚術を敎へる學校が紐育 Chicago 等にある。Domestic School の名の下に、女生徒に男をたらす術を敎へてゐる。The Parfect Gentlemann の名の下に、男生徒に女を取り扱ふ方法を敎へてゐる。

▲女大學生　ミュンヘン大學の當季の學生は七〇八〇人、内女一九一人てある。

▲後宮の女　Abdul Aamid が後宮の女は、巴里へ行つたのを政府から引き戻したが、倫敦へ行つたのをも引き戻さうとしたが行はれなかつた。英國政府が之に脅迫を加へることを許さないからてある。此女等のうちには、目下立派に

社交をしてゐるのがある。

▲バイロン紀念祭　雅典で Byron 記念祭をするので Byron の詩集にある「雅典の處女」の話が諸新聞に出た。本人は英國副領事の娘 Theresa Makri であつた。一八七五年十月三十日に死んだ。晩年貧困になつたので、Times 通信員が救助金を募集したことがある、容貌も早く衰へたさうだ。

▲振つた演説　頗る振つた食卓演説を Mark Twain したさうだ。「貴婦人諸君。どうぞあなた方が爲さらないやうにと思ふ事件が三つあります。第一は烟草をお飲みなさいますな、無論澤山あがるといふことです。第二は酒をお飲みなさいますな。無論澤山あがるなと云ふのです。第三は結婚をなさいますな。無論澤山なさるなといふのです。」

▲僧と女　Catania(Sizilia) の僧 Giovanni Gitto は Gina の女學校の生徒十四人を汚して懲役十年。

▲獸皮　Skunks は獸の最も臭きものである。其毛皮が目下歐洲貴婦人社會で流行して、ボアなどにせられる。

▲文士の未亡人　Liliencron の未亡人は夫の帝室から受けてゐた賜金を引續いて受けることになつた。

▲禍の指環　十二月十八日に羅馬で Vincenzo Morello (假名 Rastignac) の Anello Maleficio(禍の指環) の初興行があつた。伊太利てはいまだに離婚といふことが出來ないので、指環は禍てある。

▲四行詩　倫敦で出版するクリスマスのカアドロ、四行詩があるのが多い。そして其作は大抵 Helen Marion Burnside といふ女人で遣つてゐる。

▲夫人の呉服屋　Lady Affleck といふ貴族の夫人が、Madame Julie の名で Oxfordstreet の呉服店を經營することになつた。夫 Sir Robert が破産した上句である。一寸評判になつてゐる。

『スバル』椋鳥通信より

婦人界消息

▲目下外國に居る日本人の總數は三十八萬〇三百二十七人だが、その中で女子が十一萬九千〇六十五人あるさうだ▲大阪の夕陽丘高等女學校では毎月一回全校の生徒を講堂に集めて、「宇宙は宏大無邊なり、人生は悠久無限なり、宇宙には必然の理法整然として行はれ、人生には正義と愛の理流れて息まず、愛を右にし正義を左にするに吾等の理想、吾等は此理想に向つて日進月歩しつゝありや」と云ふ句を默想せしめて居る▲歐州の貴婦人社會では、鹽化那篤偬謨の含有物を常食にすると身體の營養にはなるが色が黑くなると云つて、亞爾加里性加偬謨同盟を作つて居る▲お茶の水の女子高等師範では寄宿舍の窓に一切磨硝子を用ゐず、外から中のよく見えるやうに何時も硝子をよく拭ふて透明にして置くさうだ▲これまで佛國圖書館の貴重書類となつて居た佛詩人アルフレッドミュッセーのレットル、ザ、ランコンニューが此一月からフィガロー新聞に載り出した、そして其内容はミュッセーが其戀人エーメー、ダルトンに當てたラブレターを集めたものであるさうだ。

○青琴女史逝く　嘗て本誌に其肖像を掲載したる閨秀畫家馬杉青琴女史は、前月二十三日本郷駒込の自宅にて逝去した、享年三十六歲、惜むべきかな。

○試驗合格　今回文部省の中等敎員英語科檢定試驗に合格した三婦人は、石川靜子（二十五）藤田鶴子（二十三）土生英子（二十）の三人で、石川女史は石川欽一郎氏の令妹で女子英學塾の出身、藤田女史は岡山の人で、矢張同塾出身、立敎女學校の敎員奉職中、土生女史は青山女學院英文專門科の出身である。

○婦人裁縫師　鈴木濱子（二十五）と云ふ一婦人は去る三十四年佛國に渡り、爾來約十年間外國に在りて專ら洋服裁縫の道を學び、過般歸朝して京橋際に婦人及び小兒裁縫店を開業した

白い顔

月夜である、——木戸があいた。

シルヴー色の淡々しい愁が、オンビキの胸のやうに慄へ乍ら隅田川を流れて居た。靜な誘惑に引かれた「吉野」の一ひらが、死せる戀人の體臭を漂はせてクルクルと地に落ちた。

白い顔が黑い闇に浮いた。なまめかしい、えざる色がボールドを辷り落ちる白堊末のやうに仄白い線を引く。その線の端に若い女が立つて居た。私は何となしに懷しかつた。

十一時頃であつた。日が暮れては剽盜が出ると云つて、朧月夜に花の影を踏む人もない。そ

んな頭に何故女の顔が闇の中に浮いて居たらう今でもまだ不思議に思ふ。

今年も又花が咲いたら夜往つて見やうとおもつて居る。

散文詩集『霧』

河井醉茗氏の散文詩約百篇を集めて『霧』と題し、四月中旬に京橋の東雲堂から出版することゝなつた、多くは各雜誌に發表したものだけれど、新しい作も多少は加はるであらう、裝釘は長原止水氏其他、極めて瀟洒たる製本であると。

漢文學の勃興

近頃又頻に漢文が持囃されるやうになつて、大きな全書物は勿論、ポケット大學とか論語講義とか云ふやうな小物までが、盛んに賣れるやうになつた。

之に就て儒者先生や古い頭の人達は、時勢が自然主義的の惡臭に飽いた反動として眞面目に向つて來たのだと云つて欣んで居るが、焉んぞ知らんや、これ急進的時代の新潮流と愚なる舊頭腦の讀者との間隔が餘りに甚だしくなつた結果であつて、小說を讀んでも新體詩を讀んでも難かしくて分らないから、寧ろ漢文でも讀まうと云ふのである。此點に於て漢文學と云ふのは、頭の低い、舊い、目に一丁字もない無學者連中の讀物として誠によく適合して居るのである。

理窟を云ふのは好まないが、餘り世間の人々の言草が分らないから、特にこれだけを注意しておく。

文士の結婚

早稻田出身の文士で評論家として聞えてゐる片上天弦氏(二十七)は、北海道の實業家桂井氏の令妹朝子(二十一)と前月結婚式を擧げた。同じく早稻田出身の小說作家中村星湖氏(二十七)は山梨縣の豪農井出氏の令妹眞佐知子(二十四)と前月鄕里に於て結婚式を擧げた。

歌集出版の氣運

詩歌が盛んになる氣運に向つたものか、散文全盛の反動でもあらうか、詩歌集出版の聲が方々に聞える、與謝野氏の『相聞』を初めとし、前田夕暮氏の『收穫』若山牧水氏の『別離』なども旬日の間に出版さるべく、金子薰園氏の『覺めたる歌』三木露風氏の詩集『寂しき曙』も遠からず出る、土岐哀果氏はローマ字の歌集を『ナキワラヒ』と題して出すさうだ、川路柳虹氏の詩集も遠からず出版の噂がある、自由詩社の加藤介春氏も詩集を出す心積りがあると聞いた、斯く青春詩人の創作が纏めて發表されることは、文壇の空氣を一新するに大いなる力がある、吾等は此の如き氣運の動いて來たことを欣ぶものである。

雜誌界

△詩歌壇の最も自由なる一大曠野を開拓すの主張の下に雜誌『創作』は生れた、主筆は若山牧水氏、初號は三月一日に發行された、尾上、金子、窪田、前田、北原、三谷、土岐、若山諸氏の短歌あり、投書も歌も多く載せ、併せて散文詩、長詩、詩歌論なども掲載してゐる。

△同文館から雜誌『婦女界』が新らしく出た、一般の婦人向と云ふことを目的としてゐる、初號は全く記事豐富で當代の名家揃いである、少し骨折り過ぎて雜誌がかたくるしうなつた嫌ひはあるけれど、貫目のある點に於て同種の他雜誌に勝るとも劣らない、上下を通じて各階級の婦人讀者に歡迎せらるゝであらう。

△『秀才文壇』陽春號は本月發行、青年作家の精鋭を集めて、詩文小說の各欄とも例に依つて材料は非常に豐富らしい。

△『新ホーム』と云ふ新式の家庭雜誌も前月に第一號を發行した。

△福田夕咲氏主幹の下に『世界文藝』と云ふ雜誌が出るさうだ。

△『趣味』『中央公論』『早稻田文學』など四月には皆厚い雜誌を出すさうだ。『無名通信』は秘密號と云ふのを出す。

△東京の『帝國文學』に對抗して、京都文學會から『藝文』と云ふ雜誌が出る、京都文科大學の教授諸氏も執筆する筈で第一號は四月一日發行。

△『三田文學』と云ふ雜誌が出る、主として慶應義塾大學に緣故のある人々が執筆するらしいが、永井荷風氏なども是に力を注ぐさうだ。

編輯通信

○衛生問答の廢止　本誌の衛生問答は人知れぬ痛苦に惱める幾多の婦人と、健康狀態の不安を懷ふ若き女達に適切なる解答を與へて來ましたが、往々同じ問題の重なるやうなこともあるので、一先づ中止することにしました。婦人衛生上の疑問を抱く方は既往の號に遡つて調べられたならば、大抵のことは答へられてあります。

○『若き婦人』贈賞　『若き婦人』に入賞した方には本月上旬に豫定の通りの報酬を送りました尙住所の通知なき方は至急お知らせ下さい。

○『都會の婦人』　投稿は三月末日を以て締切りとしました、多大の囑望を以て發行の日を俟たれつゝある本號は、如何に嶄新なる內容を以て勝るか、次號に略發表することが出來るでせう。

▲紹介欄を置く

本誌愛讀者の便宜を計る爲め、今回本誌に紹介欄を置いて、記者は各種紹介の勞を取らうと思ひます。

紹介欄に載せる事柄は、東京に出て家事見習の餘暇に勉學したいから良家に住込みたいと云ふ方、苦學をしたいから置いてくれる家を求めると云ふ方、貸間を探す方、小間使ひに雇はれたい方、女子に出來る職業を求める方、其他此種の問合せを紙上に發表するのです、又女子を求めて居る方の分も掲出いたします。

▲申込の方法

紹介欄へ出して貰ひたいと思ふ方は、可成ハガキに認めて本社編輯局「紹介係」宛に送つて下さい。

原稿は成る丈け明確に認めて下さい、例へば

生國、年齡、略歷、希望

と云ふやうに分類して、要領だけを能く分る樣に書いて下さい、假に書式を作りますと

○　　はな予

生國　東京
年齡　十八歲
略歷　高等女學校三年まで修む、後は家情の爲に中止
希望　小人數の家に小間使として雇はれたし、夜間三時間だけ獨學の自由を許されたし、思召のある家には本人參上す

ざつと右のやうな體裁で宜しい、勿論紙上へは名を隱して出す方が多いでせうから、原稿の片すみへ住所本名を詳しく書添えて下さい、原稿にも匿名の者は採用しません（本人の都合で紙上に住所本名を出されても差支はないのです）

▲無手數料

紹介欄の掲載は一切手數料は入りません、遠慮なく申込んで下さい、但し不眞面目な原稿や、誠實を缺くと認めたものとは沒書にします、女子を求める方も同然です、問合せは凡て往復ハガキに限ります、記者は問合せのあり次第、其方の住所姓名を通知します、それ以後の掛合は當事者どうしに願ひます、（第一回掲載の分は本月十三日に締切り翌月の紙上に發表いたします）

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小説と詩と短文には振假名をつけること▲小説は二十四字詰八十行以内、散文は同字詰三十行以内、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以内、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大きさにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る▲投稿は毎月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、散文）

天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、新論文、書簡文、詩）

天賞金貳圓。　地賞金八拾錢。　人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）

天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。

㊀各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

㊁賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座 東京第壹七貳九番

服部製本

○定期發行分 ▲毎月一回（一日定期發行）

一冊（一回分）	定價金拾五錢	郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	同前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	同前金八拾四錢	同九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分 ▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一冊（一回分）	定價金貳拾錢	郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	同前金三拾八錢	同三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	同前金七拾貳錢	同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部 ▲十六回

四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	同前金壹圓二拾二錢	同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）	同前金貳圓二拾八錢	同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▼申込注意

振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料増すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割増（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

明治四十三年三月廿五日印刷
明治四十三年四月一日發行

定價金拾五錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十一番地 電話（本局六〇七番） 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】

女子文壇 定價金拾五錢 郵税壹錢五厘

東京秀英舍印刷